岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第498集

新平遺跡（にっぺい）・芦萱遺跡（よしがや）発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業（江釣子第１地区）関連発掘調査

２００７

県南広域振興局北上総合支局
農林部農村整備室

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

新平遺跡・芦萱遺跡発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業（江釣子第１地区）関連発掘調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多くのこされております。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料であります。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し活用を図らねばなりません。

いっぽう、県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要とされます。それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれその土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところであります。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の事前の緊急発掘調査を行ない、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は経営体育成基盤事業に関連して平成17年度に発掘調査された北上市新平遺跡・同市芦萱遺跡の成果をまとめたものであります。新平遺跡は「古代駅家跡擬定地」として県指定にも登録されている遺跡であります。今回の調査では、多くの遺構が削平されていたにも関わらず、指定地である丘陵だけでなく、その下にも遺構が展開していたことがわかっています。このほか古代の土器捨て場を中心に多量の土器が出土しています。芦萱遺跡についても面積が少ないにもかかわらず同様に多くの土器が出土し付近に大きな集落の存在が予想される結果になりました。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時にその保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました県南広域振興局北上総合支局農林部農村整備室をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成19年１月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長　　武　田　牧　雄

例　　言

1　本書は岩手県北上市新平第2地割ほかに所在する新平(にっぺい)遺跡と同市新平第4地割、藤沢第９地割ほかに所在する芦萱(よしがや)遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査はいずれも「経営体育成基盤整備事業江釣子第1地区」に伴って行われた緊急発掘調査である。

3　発掘調査は北上地方振興局農林部農村整備室の委託を受け（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。

4　発掘調査に関わる期間・面積は以下の通りである。

新平遺跡

発掘調査	平成17年４月13日～平成17年７月15日	本調査面積	3,184㎡
		確認調査面積	1,750㎡
整理作業	平成17年11月１日～平成18年３月31日		

芦萱遺跡

発掘調査	平成17年７月１日～平成17年７月22日	本調査面積	200㎡
整理作業	平成18年２月１日～平成18年２月28日		

5　現地調査は新平遺跡については西澤正晴・横井猛志・水上明博が、芦萱遺跡については水上がそれぞれ担当した。整理作業及び本書の執筆は西澤・横井が担当し、編集は西澤が行った。執筆分担は項目ごとに記載している。

6　本書で用いる方位は座標北を示す。レベル高は海抜である。

7　遺物番号は種別にかかわりなく、連番を付した。写真図版に示した番号は本文中の遺物番号に対応する。なお、写真図版中に番号の無いものについては、実測図を掲載していないが参考のため、写真のみ掲載するものである。

8　土層・遺物の色調は『標準土色帖』（農林水産省農林技術会議局監修）に準拠した。

9　基準点測量は㈱キタミ・シーエーディに、出土遺物･試料の鑑定は古代の森研究舎(種子)、株式会社古環境研究所(火山灰)、株式会社加速器分析研究所(炭化物の年代測定)にそれぞれ委託した。

9　調査に関わる諸記録及び出土遺物は、岩手県立埋蔵文化財センターで保管している。

10　調査にあたり以下の機関・方々の協力、教示を得た(敬称略・五十音順)。

小田島知世　君島武史　杉本良　稲野祐介　大渡賢一　岩田貴史　高橋文明　熊谷常正

北上市立埋蔵文化財センター

目　　次

Ⅰ　序　　論 …… 1
1　調査に至る経過 …… 1
2　調査の方法 …… 4
3　調査経過 …… 6
4　遺跡の環境 …… 8

Ⅱ　新平遺跡の調査 …… 12
1　遺跡の概要とこれまでの調査 …… 12
2　基本層序 …… 17
3　調査成果 …… 18

Ⅲ　芦萱遺跡の調査 …… 64
1　概　　要 …… 64
2　基本層序 …… 65
3　調査成果 …… 66

Ⅳ　分　　析 …… 74
1　樹種同定 …… 74
2　火山灰分析 …… 76
3　炭素年代 …… 79

Ⅴ　考　　察 …… 82
1　出土土器について …… 82
2　土鈴について …… 88

Ⅵ　総　　括 …… 94

報告書抄録 …… 148

図版目次

第１図　遺跡位置 …… 1
第２図　新平遺跡　調査区の位置 …… 2
第３図　芦萱遺跡　調査区の位置 …… 3
第４図　グリッド配置図 …… 4
第５図　周辺の地形 …… 10
第６図　周辺の遺跡 …… 11
第７図　新平遺跡　遺構配置図 …… 15・16
第８図　新平遺跡　基本層序模式図 …… 17
第９図　１・２号竪穴住居跡 …… 19
第10図　１・２・３・４号溝跡 …… 20
第11図　５号溝跡 …… 21
第12図　６号溝跡 …… 22
第13図　７・８号溝跡 …… 23
第14図　９号溝跡 …… 23
第15図　10号溝跡 …… 24
第16図　11・12号溝跡 …… 25
第17図　13・14・15号溝跡 …… 26
第18図　16号溝跡 …… 27
第19図　17・18・19号溝跡 …… 28
第20図　１～13号土坑 …… 31
第21図　１号井戸跡 …… 34
第22図　土器廃棄場 …… 36
第23図　確認調査１ …… 38
第24図　確認調査２ …… 39
第25図　確認調査３ …… 40
第26図　確認調査４ …… 41
第27図　出土遺物１（新平）…… 42
第28図　出土遺物２（新平）…… 44
第29図　出土遺物３（新平）…… 45
第30図　出土遺物４（新平）…… 46
第31図　出土遺物５（新平）…… 47
第32図　出土遺物６（新平）…… 48
第33図　出土遺物７（新平）…… 49
第34図　出土遺物８（新平）…… 52
第35図　出土遺物９（新平）…… 53
第36図　出土遺物10（新平）…… 54
第37図　出土遺物11（新平）…… 55
第38図　出土遺物12（新平）…… 58
第39図　出土遺物13（新平）…… 59
第40図　出土遺物14（新平）…… 60
第41図　出土遺物15（新平）…… 60
第42図　出土遺物16（新平）…… 61
第43図　出土遺物17（新平）…… 63
第44図　芦萱遺跡　遺構配置図 …… 64
第45図　芦萱遺跡　基本層序 …… 65
第46図　１号溝跡・１号土坑・１号不明遺構 …… 66
第47図　出土遺物１（芦萱）…… 67
第48図　出土遺物２（芦萱）…… 69
第49図　出土遺物３（芦萱）…… 70
第50図　出土遺物４（芦萱）…… 72
第51図　新平遺跡　出土椀 …… 74
第52図　新平遺跡　出土椀の顕微鏡写真 …… 75
第53図　ＢＰ年代および炭素同位体比 …… 81
第54図　杯の分類 …… 82
第55図　甕の分類 …… 83
第56図　組成比のグラフ …… 84
第57図　新平遺跡　出土土鈴 …… 88
第58図　岩手県　出土土鈴類集成 …… 89
第59図　岩手県　土鈴類出土遺跡 …… 92

表　目　次

第１表　新平遺跡　遺構名新旧対応表 …… 5
第２表　新平遺跡　調査歴 …… 13
第３表　新平遺跡　出土椀の樹種 …… 75
第４表　火山ガラス比分析結果 …… 78
第５表　屈折率測定結果 …… 78
第６表　火山ガラス主成分化学組成分析結果 …… 78
第７表　暦年補正 …… 81
第８表　岩手県　土鈴類出土遺跡 …… 93
第９表　新平遺跡　縄文土器観察表 …… 96
第10表　新平遺跡　古代土器観察表 …… 96
第11表　新平遺跡　陶磁器観察表 …… 99
第12表　新平遺跡　石器観察表 …… 100
第13表　新平遺跡　木製品観察表 …… 101
第14表　新平遺跡　土製品観察表 …… 101
第15表　新平遺跡　石製品観察表 …… 101
第16表　新平遺跡　金属製品観察表 …… 101
第17表　芦萱遺跡　縄文土器観察表 …… 102
第18表　芦萱遺跡　古代土器観察表 …… 102
第19表　芦萱遺跡　磁器観察表 …… 103
第20表　芦萱遺跡　石器観察表 …… 103
第21表　芦萱遺跡　土製品観察表 …… 103
第22表　芦萱遺跡　金属製品観察表 …… 104

写真図版目次

新平遺跡

写真図版１　航空写真１ …… 107
写真図版２　航空写真２ …… 108
写真図版３　遺跡現況・基本層序 …… 109
写真図版４　１・２号竪穴住居跡 …… 110
写真図版５　１・２・３号溝跡 …… 111
写真図版６　４・５・９号溝跡 …… 112
写真図版７　６・７・８号溝跡 …… 113
写真図版８　10・11号溝跡 …… 114
写真図版９　12・13号溝跡 …… 115
写真図版10　14・15・17・18号溝跡 …… 116
写真図版11　16・19号溝跡 …… 117
写真図版12　土坑 …… 118
写真図版13　１号井戸跡・土器廃棄場 …… 119
写真図版14　土器廃棄場 …… 120
写真図版15　Ｂ・Ｃ・Ｆ区全景 …… 121
写真図版16　Ｄ区１ …… 122
写真図版17　Ｄ区２ …… 123
写真図版18　出土土器１ …… 124
写真図版19　出土土器２ …… 125
写真図版20　出土土器３ …… 126
写真図版21　出土土器４ …… 127
写真図版22　出土土器５ …… 128
写真図版23　出土土器６ …… 129
写真図版24　出土陶磁器１ …… 130
写真図版25　出土陶磁器２ …… 131
写真図版26　出土陶磁器３ …… 132
写真図版27　出土陶磁器４ …… 133
写真図版28　出土陶磁器５・縄文土器 …… 134
写真図版29　出土木製品１ …… 135
写真図版30　出土木製品２ …… 136
写真図版31　出土木製品３ …… 137
写真図版32　出土石器１ …… 138
写真図版33　出土石器２ …… 139
写真図版34　出土土・石・金属製品 …… 140

芦萱遺跡

写真図版35　航空写真 …… 141
写真図版36　遺跡現況・基本層序 …… 142
写真図版37　１号溝跡・１号土坑・６区遺物 …… 143
写真図版38　出土土器１ …… 144
写真図版39　出土土器２ …… 145
写真図版40　出土土器３ …… 146
写真図版41　出土縄文土器、陶磁器、石器、土・金属製品、鉄滓 …… 147

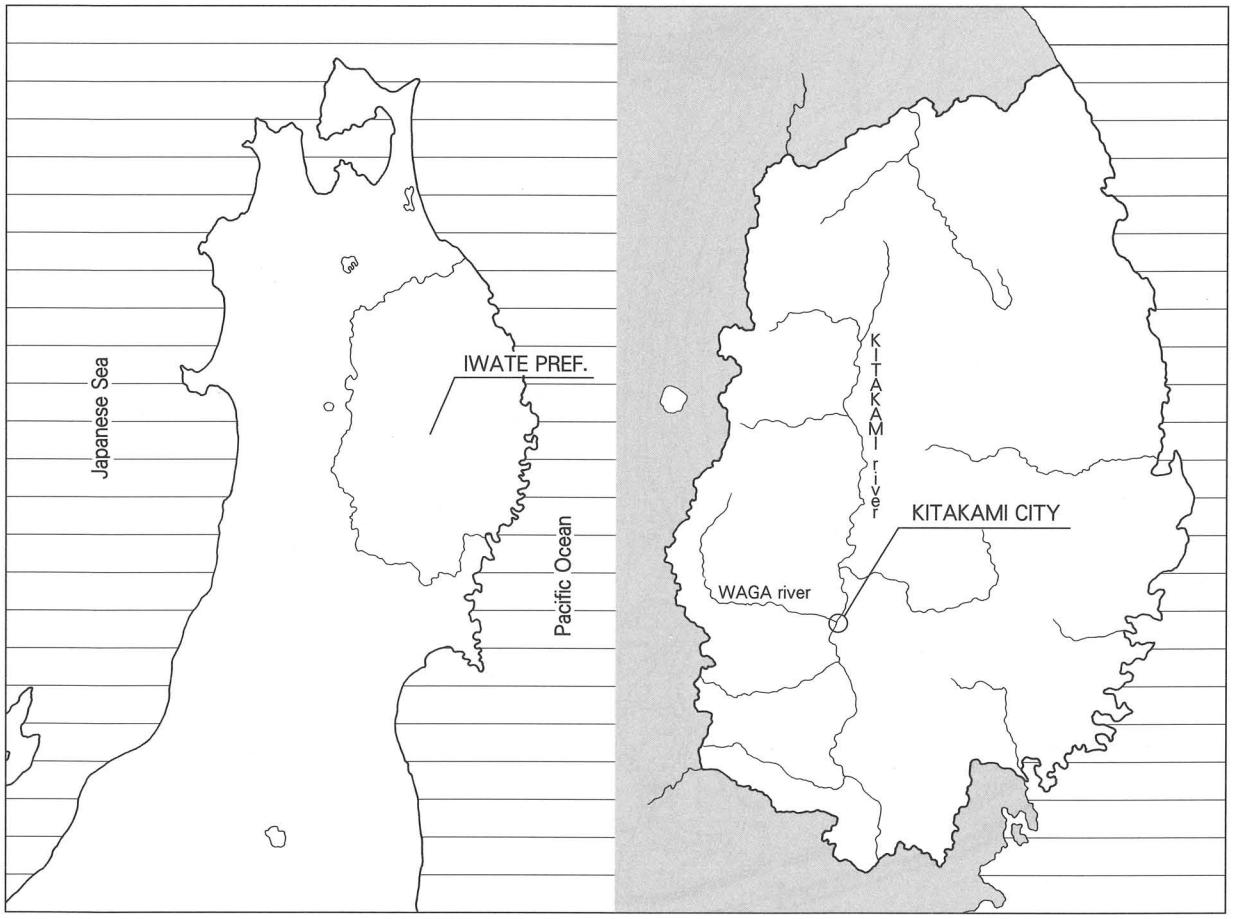
Ⅰ　序　　論

1　調査に至る過程

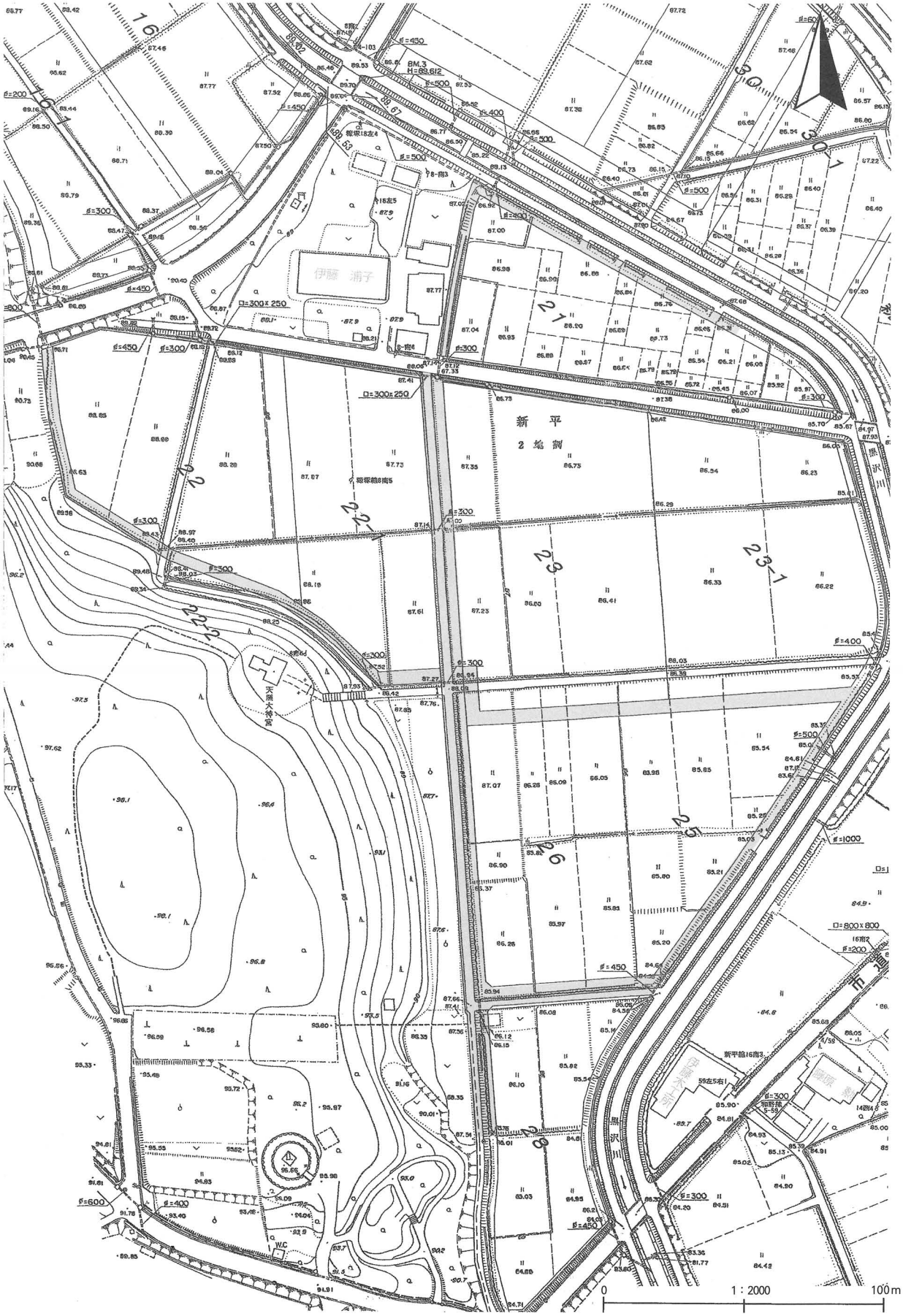
経営体育成基盤整備事業江釣子第一地区は、北上市街地から北西に位置する水田地帯において、区画整理、排水対策等の農業生産基盤の整備とあわせ親水公園等の生活環境基盤の整備を行い、高生産性農業の展開と、農業環境の保全を行われている事業である。事業は平成11年度～12年度に事業調査および計画策定が行われ、平成13年度から事業実施している。

これらに係る埋蔵文化包蔵地の取り扱いについては、北上地方振興局北上農村整備事務所（現・県南広域振興局北上総合支局農林部農村整備室）と岩手県教育委員会事務局文化課（現・同事務局生涯学習文化課）との間で協議がなされた。協議過程は、北上農村整備事務所長より岩手県教育委員会文化課長あて、農業農村整備事業調査計画における埋蔵文化財の分布調査について（平成11年12月８日付北農整備第419号）により依頼があり、岩手県教育委員会事務局文化課(当時)が平成12年５月29日～30日に分布調査を実施した。その結果、当該事業区域内に数箇所の埋蔵文化財包蔵地が確認された。平成15年５月６日～13日および、平成16年10月20日～21日、平成16年12月13日～14日に試掘調査を実施した結果、新平遺跡、芦萱遺跡において、発掘調査が必要である旨の回答があり、協議の結果、発掘調査について財団法人岩手県文化振興事業団の受託事業とした。

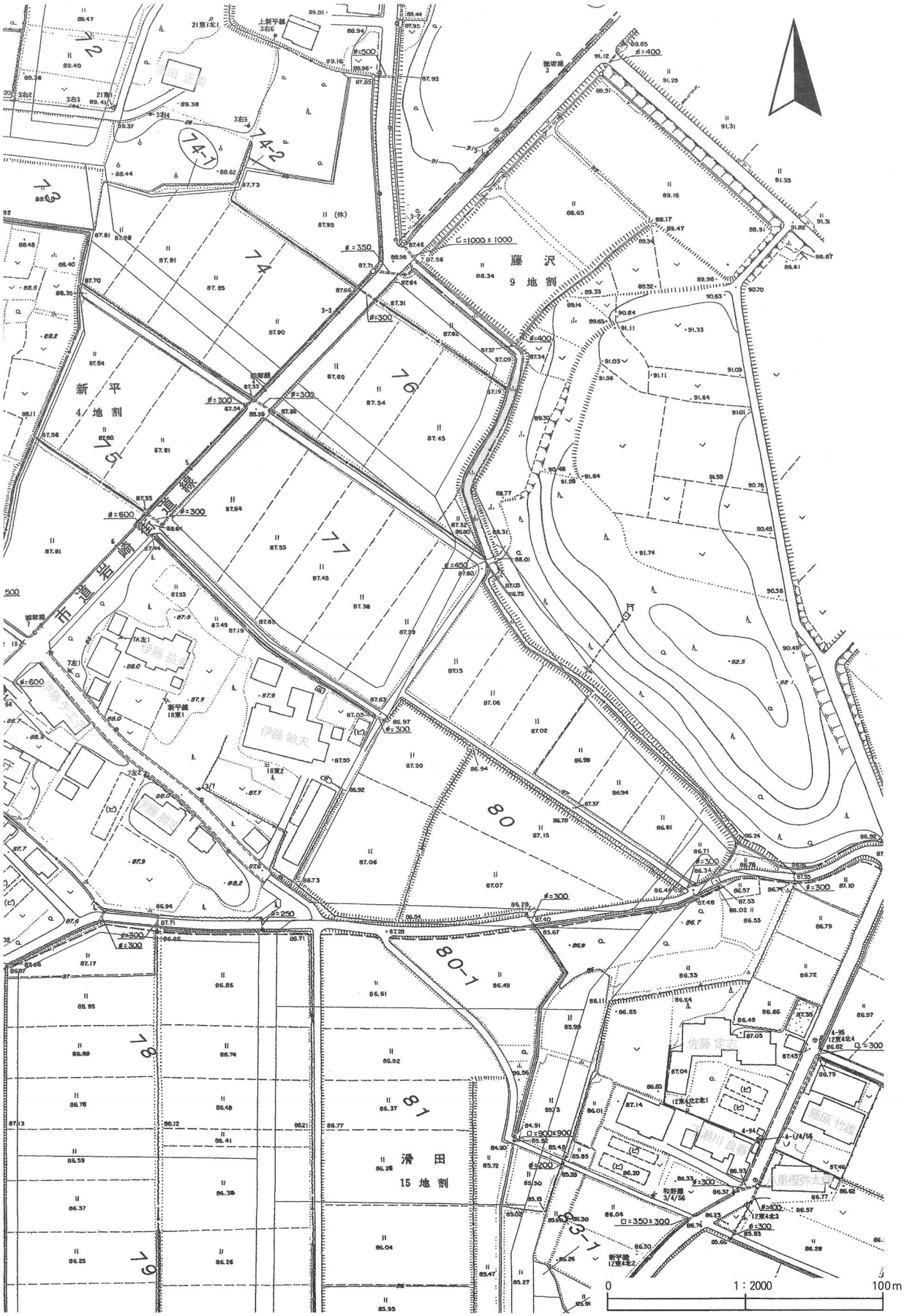
（県南広域振興局北上総合支局農林部農村整備室）



第１図　遺跡位置



第２図　新平遺跡　調査区位置（アミ掛け部分）



第３図　芦萱遺跡　調査区位置（アミ掛け部分）

2　調 査 の 方 法

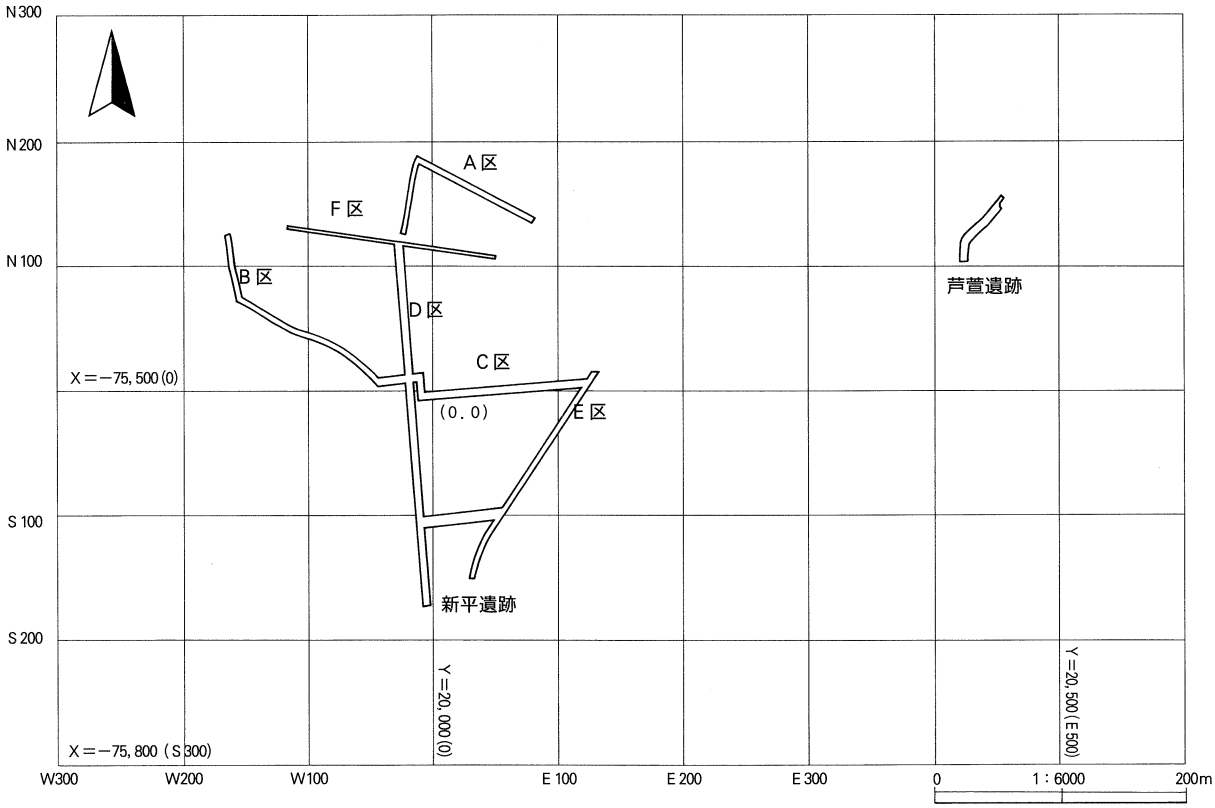
グリッドの設定　調査を開始するに当たって、遺構、遺物の位置を正確に把握するためにグリッドの設定を行った。まず委託業者に新平遺跡調査区周囲の基準点測量を依頼し、10箇所に基準杭を打設した。その基準杭の座標を下に、調査区全体に国家座標を基本とした５×５ｍ枠のメッシュを設定した。グリッド名は新平遺跡調査区中央付近の任意の格子点（－75,500、20,000）を仮の原点（０，０）とし、N30・W20のようにグリッドの南東の格子点における原点からの距離（ｍ）を南北方向（Ｎ，Ｓ）、東西方向（Ｅ，Ｗ）の順に列記して表した。また芦萱遺跡においても同様のグリッドを設定しており、周辺の座標は調査員が新平遺跡の杭（Ａ－１）からトータルステーションを用いて観測し、南北に対応する５箇所に杭を打設している。なお、基準点測量の成果は以下の通りである（世界測地系）。

新平遺跡

A-1	X=－75375.000	Y=19980.000	H=88.093	A-6	X=－75450.000	Y=19900.000	H=88.422
A-2	X=－75495.000	Y=19988.727	H=87.285	A-7	X=－75315.000	Y=19995.000	H=87.115
A-3	X=－75610.000	Y=19997.091	H=86.532	A-8	X=－75355.000	Y=20065.000	H=87.273
A-4	X=－75650.000	Y=20000.000	H=86.320	A-9	X=－75495.000	Y=20120.000	H=85.697
A-5	X=－75375.000	Y=19840.000	H=89.200	A-10	X=－75610.000	Y=20045.000	H=85.391

芦萱遺跡

Y-1	X=－75348.539	Y=20454.784	H=87.226	Y-4	X=－75320.039	Y=20412.154
Y-2	X=－75356.039	Y=20452.154	H=86.871	Y-5	X=－75328.039	Y=20412.154
Y-3	X=－75351.039	Y=20452.154				



第４図　グリッド配置図

調査区の命名　今回の新平遺跡における調査区は、圃場整備に伴う調査の為全体的に細長く、また数多く分岐しており、実質の調査面積に伴わぬ広大な範囲に及んでいる。そのため便宜的に調査区を分割し、Ａ～Ｆの記号を付している。（第４図）また芦萱遺跡においては調査区がグリッド方位に対して斜行しており、各グリッドが狭小になってしまうため、調査区を５ｍごとに区切り、北から順に１～11の番号を付した。

試掘　調査範囲における土層の堆積状況および遺構検出面の確認の為、まずトレンチによる試掘を行った。Ａ区から始め、Ｂ区、Ｃ区、Ｅ区と合計49本を設定し、いずれも人力で行っている。その結果、Ａ・Ｃ・Ｅ区およびＦ区東では水成堆積（土壌のグライ化）がうかがえ、旧河川跡であろうと推測された。またＢ区、Ｄ区北においては表土直下が黄褐色ローム（地山面）となっており、地山および遺構がかなり削平されていることが判明した。

表土掘削　作業の効率化を図り、重機（バックホウ）による掘削を行った。常時調査員が監督し、遺構を破壊しないよう最大限注意している。

遺構検出　専ら人力による作業に頼った。鋤簾および両刃鎌を用い、検出された遺構には遺構種別に１から順に遺構名を付している。なお、遺構番号は整理作業時に新たに通し番号を振りなおしている（溝跡、土坑のみ。下表参照）。また遺構名は利便化を図り、調査時には下記の通りの略称を用いているが、本書においては用いていない。

竪穴住居跡…ＳＩ　土坑…ＳＫ　溝跡…ＳＤ　井戸跡…ＳＥ　不明遺構（包含層、焼土遺構）…ＳＸ

第１表　新平遺跡　遺構名新旧対応表

調査時		本書	調査時		本書
ＳＤ 01	→	非登録	ＳＤ 17	→	非登録
ＳＤ 02	→	３号溝跡	ＳＤ 18	→	19号溝跡
ＳＤ 03	→	非登録	ＳＤ 19	→	非登録
ＳＤ 04	→	１号溝跡	ＳＤ 20	→	非登録
ＳＤ 05	→	非登録	ＳＤ 21	→	11号溝跡
ＳＤ 06	→	非登録	ＳＤ 22	→	12号溝跡
ＳＤ 07	→	８号溝跡	ＳＤ 23	→	非登録
ＳＤ 08	→	７号溝跡	ＳＤ 24	→	17号溝跡
ＳＤ 09	→	10号溝跡	ＳＤ 25	→	18号溝跡
ＳＤ 10	→	６号溝跡	ＳＤ 26	→	15号溝跡
ＳＤ 11	→	９号溝跡	ＳＤ 27	→	16号溝跡
ＳＤ 12	→	５号溝跡	ＳＤ 28	→	２号溝跡
ＳＤ 13	→	非登録			
ＳＤ 14	→	４号溝跡			
ＳＤ 15	→	13号溝跡			
ＳＤ 16	→	14号溝跡			

調査時		本書	調査時		本書
ＳＫ 01	→	１号土坑	ＳＫ 17	→	非登録
ＳＫ 02	→	非登録	ＳＫ 18	→	非登録
ＳＫ 03	→	２号土坑	ＳＫ 19	→	確認
ＳＫ 04	→	非登録	ＳＫ 20	→	確認
ＳＫ 05	→	３号土坑	ＳＫ 21	→	非登録
ＳＫ 06	→	４号土坑	ＳＫ 22	→	非登録
ＳＫ 07	→	５号土坑	ＳＫ 23	→	９号土坑
ＳＫ 08	→	６号土坑	ＳＫ 24	→	10号土坑
ＳＫ 09	→	７号土坑	ＳＫ 25	→	11号土坑
ＳＫ 10	→	８号土坑	ＳＫ 26	→	非登録
ＳＫ 11	→	非登録	ＳＫ 27	→	確認
ＳＫ 12	→	非登録	ＳＫ 28	→	確認
ＳＫ 13	→	確認	ＳＫ 29	→	確認
ＳＫ 14	→	確認	ＳＫ 30	→	確認
ＳＫ 15	→	確認	ＳＫ 31	→	11号土坑
ＳＫ 16	→	13号土坑			

※「確認」は確認調査区範囲内における遺構

遺構の精査　主に竪穴住居跡は４分法、土坑、井戸跡は半截法を用い、溝跡は適宜１、２本のベルトを残し、堆積土層を観察しながら状況に合わせてスコップおよび移植ゴテを使い掘り下げた。遺物が出土した際には竹ベラ、刷毛などを使って遺物を損傷しないよう留意している。

遺物の取り上げ　土器廃棄場および遺構外から出土した遺物は主にグリッド・層位ごとに一括して取り上げている。土器廃棄場以外の遺構内の遺物は堆積土中であれば層位ごとに、床面および底面出土の遺構の時期決定に関わる遺物に関しては詳細な出土位置を記録した後に取り上げている。

記録作成　記録は写真撮影および図面作成を行っている。主に写真は遺構検出、堆積土層断面、遺物出土状況、遺構完掘を撮影しており、カメラは大型の遺構には６×７判モノクロ・カラーを主体として用い、その他の遺構では35㎜リバーサルを用いている。またメモ用としてデジタルカメラを併用し、整理作業の簡便化を図っている。図面は平面図、断面図を作成しており、平面図は全てトータルステーションを用い作成した。土坑、溝跡が全遺構の大半を占めていたので、主に平面図は１／40、断面図は１／20の縮尺を用いているが、竪穴住居跡に関しては平面・断面図とも１／20の縮尺で作成している。

確認調査　今回の調査範囲には検出作業で終了する確認調査区域が存在する。盛土工法、あるいは掘削深度の関係上遺構を破壊する恐れのない箇所が相当する。具体的にいうと、新平遺跡Ｄ区の西および南から５ｍの範囲である。なお確認調査区内の遺構であっても遺構精査の必要な本調査区に遺構が延びる場合には遺構全体を精査している。

整理作業　平成17年11月から徐々に整理作業を進めている。まずは遺物の水洗、注記、接合を行い、接合の終えた遺物は選定後順次図化に移り、その後写真を撮影した。現場で作製した図面は、合成、修正した後に報告書掲載用に浄書している。また写真はカットごとにタイトルを付し、アルバムに整理・保存している。なお、平成18年３月末をもって全ての整理作業は終了している。

３　調　査　経　過

新平遺跡

【概要】

４月中旬、調査開始時はトレンチによる試掘調査を行い、試掘の終了した調査区から順次重機による表土掘削を行った。表土除去後は遺構検出および調査区の壁切りを行っている。調査順序は主にＡ区に始まり、続いてＢ、Ｆ、Ｄ北、Ｃ、Ｅ、Ｄ区南の順に行っている。調査区中央の農道を使用して果樹園の農薬散布が月に二度行われるということで、当該調査区（Ｄ区南）を調査する際には、２週間単位で３分割して表土掘削から埋め戻しを行っている。遺構は溝跡、土坑が大半を占め、遺物の出土量も非常に少量であったが、Ｆ区で古代の遺物を包含する黒色土を検出（土器廃棄場）した。またＤ区北側では古代の竪穴住居跡と見られる方形のプランを半分確認している（１号竪穴住居跡）。この２遺構は現表土からわずかな深さで検出されるため、工事の際に破壊されるおそれがあったため、工事に影響のない範囲で拡張して精査を行った。調査はＡ区12号土坑の精査終了をもって７月15日に

終了した。

【日程】
４月13日　調査開始。機材搬入し終了。翌14日からトレンチ調査を開始。以降19日までトレンチ掘削。
４月18日　重機による表土掘削開始。Ａ区より近世陶磁器が出土。
４月19日　Ａ区より遺構検出開始。
５月10日　Ｆ区において遺物包含層（土器廃棄場）を確認。大量の土師器が出土。
５月20日　Ｂ、Ｆ区より遺構精査開始。
５月24日　発掘作業員増員
５月26日　Ｄ区北において１号竪穴住居跡を確認。
６月２日　１回目の農薬散布が終了。同３日、Ｄ区南半の表土掘削を開始。
６月15日　委託者、県教委生文課、当センターによるＤ区中央の部分終了確認を終え、翌日の農薬散布の為当地区を埋め戻す。また委託者の要請で土器廃棄遺構と１号竪穴住居跡の拡張精査が決定。
６月16日　２回目の農薬散布が終了。Ｄ区南部の調査にかかる。
６月21日　Ｄ区南部の部分終了確認。調査区を埋め戻す。
７月１日　３回目の農薬散布が終了。Ｄ区の最南の調査にかかる。
７月１日　芦萱遺跡の調査が開始し、発掘作業員を分割し異動。
７月12日　全体終了確認。
７月13日　航空写真撮影。
７月15日　調査終了。翌16日より全作業員が芦萱遺跡の調査へ異動。

芦萱遺跡

【概要】
７月１日より新平遺跡の発掘作業員を分割し、調査を開始した。調査区中央を流れる用水の水量が調査に支障を来たすほどであったため、重機により水を堰き止め、バイパスを設定し流路を変更した。その後、新平遺跡同様トレンチによる試掘からはじめ、表土除去、遺構検出、精査、記録を順次行っている。遺構は少なかったが、遺構周辺を中心として遺物が大量に出土している。７月中旬より新平遺跡の発掘作業員が合流し22日に全作業を終了した。

【日程】
７月１日　調査開始。調査区内用水の流路変更。試掘開始。
７月４日　重機による表土掘削。
７月５日　遺構検出開始。
７月６日　遺構精査開始。
７月12日　全体終了確認。調査区の拡張が決定。
７月13日　航空写真撮影。
７月16日　新平遺跡の発掘作業員が合流。
７月22日　調査終了。器材を搬出し、現場を撤収。　（横井）

4　遺 跡 の 環 境

（1）遺跡の位置と周辺の地形

位置

新平遺跡は北上市の北西部にある新平地区に所在している。この地は旧江釣子村内にあり北は花巻市南笹間地区、西は旧和賀町北藤根地区に隣接する。遺跡北から東には隣接して黒沢川が流れている。また、芦萱遺跡は新平遺跡から約500m東にある北上市新平第４地割、藤沢９地割ほかに所在する。黒沢川は遺跡から約500m東に流れている。

地形図上の位置は両遺跡とも国土地理院発行の５万分の１地形図「北上」（ＮＪ－54－14－13）の図幅内にある。遺跡の経度・緯度は北緯39度19分14秒、東経141度03分54秒（世界測地系）である。

地形

新平遺跡・芦萱遺跡の所在する北上市北西部の地形は、河川単位でみると南北を豊沢川・和賀川によって、東を北上川によって画された範囲にある。この地域は他の北上川流域と同様に河成段丘が顕著に発達する地域でもある。この地域の河成段丘面は中位の村崎野面、低位の花巻面（金ヶ崎面）、南条面に区分されている（渡辺1991）。村崎野段丘面は北上川を臨む東部に偏在しているが、これは西側を村崎野面基盤の沈降と花巻面による埋没によるため現地表面下には現れていないと考えられる（小岩2001）ためである。この村崎野面は段丘面の開析が進んでおりいくつかの細長い半島状の地域に区分される。これらのうちもっとも西側には、独立丘陵状を呈した細長い村崎野面が残存している。遺跡はこの村崎野面である細長い丘陵上からいわゆる沖積地である南条面までを含む広い範囲を含んでいる。今回の調査地点はこのうち花巻面～南条面にかけての範囲に相当する。住居跡などが発見されたのは前者であり、溝や旧河道が検出されたのは後者に相当すると想定される。

新平遺跡の標高は東側で87m前後であり、調査区西側で84.4mとなる。今回の調査区内では最大で比高が約３ｍもある。もともと新平遺跡は丘陵である村崎野面上に限定されていたがその後遺跡範囲を拡大している（岩手県教育委員会2006）。新平遺跡の現況は水田がおもであり、一部に果樹園が存在する。現地表をみると、開田作業などによって地形が大きく改変されていることが観察できる。黒沢川も流路を一部変更されるなど改修を受けているため、本来の微地形は不明である。

いっぽう、芦萱遺跡は新平遺跡の約500m東にあり、付近に広がる村崎野面から花巻面上にかけての緩斜面上に立地している。新平遺跡とは黒沢川をはさんで向かい合うように位置している。

今回の調査区は１段下の面である花巻面との境界に相当し、この面との比高は約１ｍである。芦萱遺跡の標高は85.5～86m前後である。

この調査区周辺の一段高い範囲は比較的地形が残存されており、旧地形をある程度想像することができるものの、一段下の面は開田作業によって大規模に地形改変が行われており、旧地形の痕跡はほとんど残存していない。

（2）周辺の遺跡

新平・芦萱遺跡周辺では、上述の村崎野段丘や金ヶ崎段丘上に多くの遺跡が立地している。両遺跡のある和賀川北岸・北上川西岸域で遺跡分布の集中がみられるのは新平遺跡周辺（①）以外には、東北自動車道沿いの地域（②）、和賀川沿いの自然堤防上の地域（③）、飯豊川流域（④）がある。②～④の地域に比べて①新平遺跡周辺は調査頻度が少なく判明している事実も少ない。なお、芦萱遺跡は

位置的には①と②の地域の中間にあたる。

以下では新平遺跡と芦萱遺跡を含む①と②の地域を中心に調査された遺跡を中心に概観しておこう。

①の地域周辺では新平遺跡や持川遺跡などから旧石器時代にさかのぼる資料が採集されている。いずれも発掘調査によって出土した資料ではないが、付近には旧石器時代の痕跡が残されている。また、持川遺跡は低位段丘面上に立地するが、このような地形でも旧石器の痕跡が確認されたことは重要である。

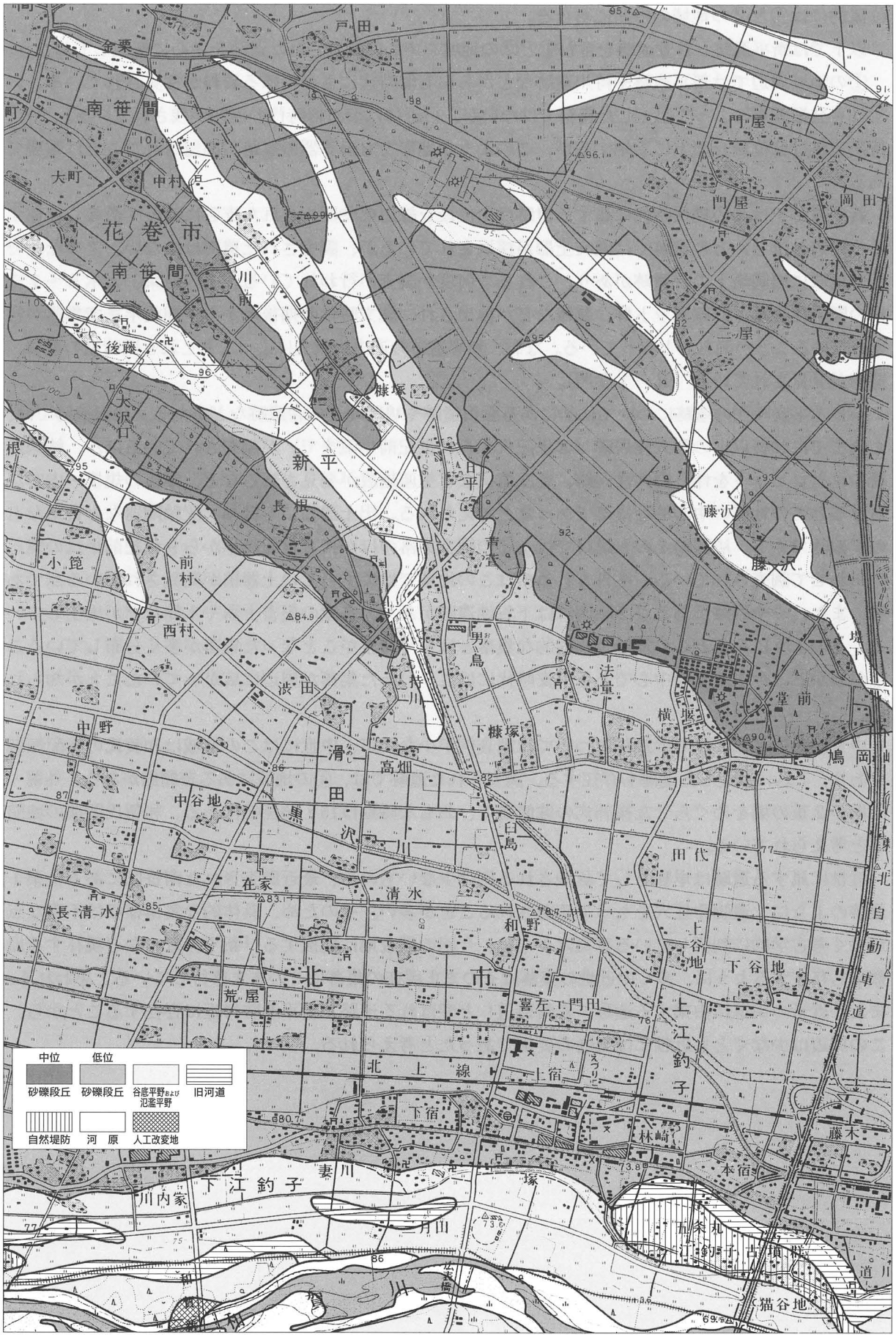
新平遺跡をはじめ縄文時代に属する遺跡は中位段丘縁辺部や開析された支谷に沿って数多く存在する。周辺のほとんどの遺跡では縄文土器が採取されているが、調査された遺跡は少ない。そのなかで②の地域に鳩岡崎上の台遺跡があり、これまで何度か調査が行われている。その結果、大木５～７式期の竪穴住居跡、貯蔵ピット群、墓域などが検出され、縄文時代前期後半から中期前半まで集落が営まれていることが明らかとなっている。なお、新平遺跡の過去の調査によってもこれと同時期の遺構・遺物が発見されている（Ⅱ－１参照）。

奈良・平安時代の遺跡については②にある藤沢遺跡や鳩岡崎上の台遺跡などがある。藤沢遺跡では、これまでに49軒以上の竪穴住居跡（８世紀代から10世紀前半頃まで）が調査されているほか、鋳銅遺構やロクロピットを伴う竪穴住居跡、焼成遺構など生産施設が発見されるなど、集落の規模・内容からみるとこの地域の中心的な集落であったと考えられる。出土遺物にも緑釉・灰釉陶器など貴重なものが確認できる。鳩岡崎上の台遺跡では上述の縄文集落のほかに８世紀後半から９世紀前半代の集落があわせて調査されている。注目されるのはこの地域ではめずらしい土器棺が発見されている点である。また、やや距離があるが２㎞南には下谷地遺跡があり、多量の墨書土器や木簡などが出土している。このようにみるとこの地域は一般的な集落とはやや背景がことなった集落が多く分布していることがわかる。今次調査の中心である平安時代にはこういった集落が周辺に広がっていたことが知られる。

中世から近世にかけての遺跡については調査例が少ないが、中世にはこの地域は和賀氏の支配領域であり、これに関連した遺跡も存在する。調査された遺跡では、④の地域にある笹間館がある。外堀・内堀の２重の堀をめぐらせた複郭式の城館跡で、おもな時期は15・16世紀にある。和賀氏関連の城館跡と考えられている。

近世に属する遺跡は単独として認識される例は少ないものの、最近調査された南笹間にある金栗Ⅰ遺跡のように、遺物や柱穴をもって確認されることが多い。そのため、具体的な集落様相は不明な点が多く考古学的に判明している事実は少ない。今回の調査地に隣接する「新平屋敷」など現存する屋敷地も存在するように、多くの近世の集落はそのまま現在の集落にそのまま移行していると思われる。また、近世の街道に由来する通称「岩崎街道」と呼ばれる道路が新平遺跡付近に存在することから、この周辺は少なくとも近世には交通の要衝であったと考えられる。

（西澤）



1：25000

第５図　周辺の地形

1：25000

第６図　周辺の遺跡

Ⅱ　新平遺跡の調査

1　遺跡の概要とこれまでの調査

遺跡の概要

今回調査を行った新平遺跡は北西から南東にかけて細長く延びる丘陵上を中心に立地しており、和賀川より北上すると最初に視界に入る場所である。

後述のようにこれまで何度か調査が行われてきた。その結果、縄文時代と平安時代に中心のある遺跡であることが明らかとなっており、とくに縄文時代は前期末の大規模な包含層の存在として、平安時代は「古代駅家跡」擬定地として周辺はもとより岩手県内でも著名な遺跡の一つとなっている。後者を根拠として昭和36年に県指定史跡となっており、古くより注目されてきた遺跡でもある。しかしながら「古代駅家跡」と断定するにはまだ異論が多く残っているのも事実である。四周をめぐる堀跡も中世期の可能性もあり、「午」墨書も別の読み方ができるなど認定した根拠も曖昧になりつつある。これまでの調査によってもこれらに対して明確に答えられる根拠は見いだされておらず、いまだその内容に不明の点が多く残る遺跡でもある。最初の調査から50年経過しており、いずれ再検討が必要なのかもしれない。

今回の調査はこれらの遺構がある丘陵上ではなく（指定地外）、その下に広がる平地面である。調査の詳細は次節以降に委ねるが、地形の改変が著しく遺跡全体の性格を決定するような根拠は今回も見出させなかった。ただし、平安期の集落が丘陵下（裾）にも存在し、さらにその範囲が限定できそうなこと、灰白色火山灰より層位的に上位で多量の土器群が出土したことは重要な成果のひとつとしてあげられる。

（西澤）

過去の調査

初めて新平遺跡の本格的な発掘調査が行われたのは昭和32年７月に遡り、田中喜多美、板橋源らによって現地踏査なども含め、同33年10月までに大小７回にわたって調査が行なわれた。調査地区は新平丘陵上のほぼ一面に及び、薬研掘りの環濠（四周隍）とそれに区画された範囲に掘立柱建物跡２棟、竪穴住居跡２棟とそれに付設すると解される竪穴状土坑1基、周囲に柱穴を配する製鉄関連遺構（鍛冶場跡）１基が検出され、また未調査であるが６基のマウンド（丘阜）を確認している。遺物は土師器、須恵器、鉱滓が報告されており、遺物の年代観から遺跡の時期は胆沢城期（９世紀初頭）と示されている。また報告書文中において本遺跡は古代駅家と推定されており、その根拠として以下の８点があげられている。①中近世古記録等から当時新平丘陵に幹線路が存在していたと推定されること。②志波城との距離的な位置関係。③丘陵をめぐる環濠が当該時期の城柵等に見られるそれとは形状が異なるうえ規模も狭小であり、更に濠内に水を引いた痕跡が見られず、むしろ南部氏が経営した九牧の「牧ぶくろ」に酷似していることから、防備を目的とするものでなく、牧場の脱出を防止するためのものとの近似性が強調されること。④掘立柱建物の柱間寸法が文献中に見える厩の寸法とみなしても支障がないこと⑤掘立柱建物の規模から公的な建物である可能性があること⑥鍛冶場跡があること（これについては「傍証の１つとしてあげるのは無意義に近いが…参考までに」と付記されている）。⑦竪穴状土坑底面より墨書のある土師器が出土しており、その読みが「午」と解せられること。⑧地元の伝承で、新平丘陵を「マッコ（馬）のセバ」と呼んでいること。以上の理由により本遺跡は古代

第２表　新平遺跡　調査歴

調査主体	調査期間	検出遺構	出土遺物	遺跡年代	備　　考	文献
江釣子村文化財保存会	S32.7.11	－	－	－	現地巡検踏査	文献１
	S32.7.22～7.24	－	－	－	現地実測調査	
	S32.11.3～11.10	四周隍1、竪穴住居跡1、竪穴状遺構1、柱穴10	土師器	胆沢城時代（古代か）		
	S32.11.16～11.17		獣骨、（墨書）土師器、須恵器			
	S32.12.7～12.8	焼土遺構1	土師器			
	S32.12.14～12.15	鍛冶場跡1	鉱滓、土師器、須恵器			
	S33.9.28～10.5	竪穴住居跡1、柱穴5～	－			
岩手県教育委員会・岩手県和賀郡江釣子村教育委員会	S41.5.4～5.7	経塚？1	－	－	確認された６基中３基を調査。当初古墳と推定されていたが、出土遺物なく「腐食性を有せし木函紙経を埋蔵したる特殊構造の形式を持てる経塚であろう」とみなす。	文献２
	S41.7.20～7.24	経塚？2	縄文土器、土師器、須恵器（封土内）	－		
	S41.7.21～8.30	竪穴住居跡？7、竪穴状遺構64（未精査）	縄文土器（糠塚式～大木7ａ式）	縄文（前期末～中期初頭）	竪穴は住居跡の可能性があるが未精査の為不明。調査した７基は「断面がフラスコ状を呈するものが多く、それが比較的短年月の間に数回住居として使用された痕跡を残している」とされているがその詳細には触れられていない。	文献３
		竪穴住居跡1（未精査）	土師器	古代		
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	S59.7.12～9.7	土坑8、陥し穴状遺構1	縄文土器（大木4～7a式、大洞A～A´式）、石器	縄文（前期末～中期初頭）		文献４
		竪穴住居跡1	土師器、須恵器、金属器、砥石	平安後期		
		旧道跡1	－	近現代		
		土坑2、焼土遺構1、溝跡1、柱穴群	－	時期不明		
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	H15.8.1～10.30	－	縄文土器（大木5a～8a）、石器、けつ状耳飾、石剣、石棒、土偶	縄文（前期～中期）		文献５
		掘立柱建物跡1、土坑7、溝跡4	土師器、須恵器、陶磁器、風字硯	古代以降		

1. 板橋　源　　1959　「岩手県江釣子村新平遺跡発掘概報－古代駅家擬定地－」『岩手大学学芸学部研究年報』
2. 板橋　源　　1967　『岩手県江釣子村新平塚跡遺跡』　江釣子村教育委員会
3. 草間俊一　　1971　『岩手県江釣子村新平遺跡」『日本考古学年報19』　日本考古学協会
4. 近藤宗光・平井　進　1985　『新平遺跡発掘調査報告書-広域農道整備事業北上地区4号関連遺跡発掘調査-』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第91集　（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
5. 丸山浩治・新妻伸也　2004　「新平遺跡」『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成15年度）」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第455集　（財）岩手県振興事業団埋蔵文化財センター

駅家の可能性を示唆されており、昭和38年には丘陵部が県指定史跡に登録されている。

その後、昭和41年５月と７月には板橋源、佐々木博康により先述のマウンド（丘阜）６基のうち３基が調査された。それらのマウンドは方形で周溝とみられる方形の窪みが観察されており、当初古墳と解されていたが、調査の結果そうでないことが判明した。中央から主体部が検出されているが、30～40cmというその規模から被葬者が埋葬されていたとは考えられず、また内部から遺物が出土していないためであり、他にいくつかの同様の例を紹介し、伊納嘉矩の言を用いて、「腐蝕性を有せし木函紙経の類を埋蔵したる特殊構造の形式を持てる経塚であろう」とみなしている。

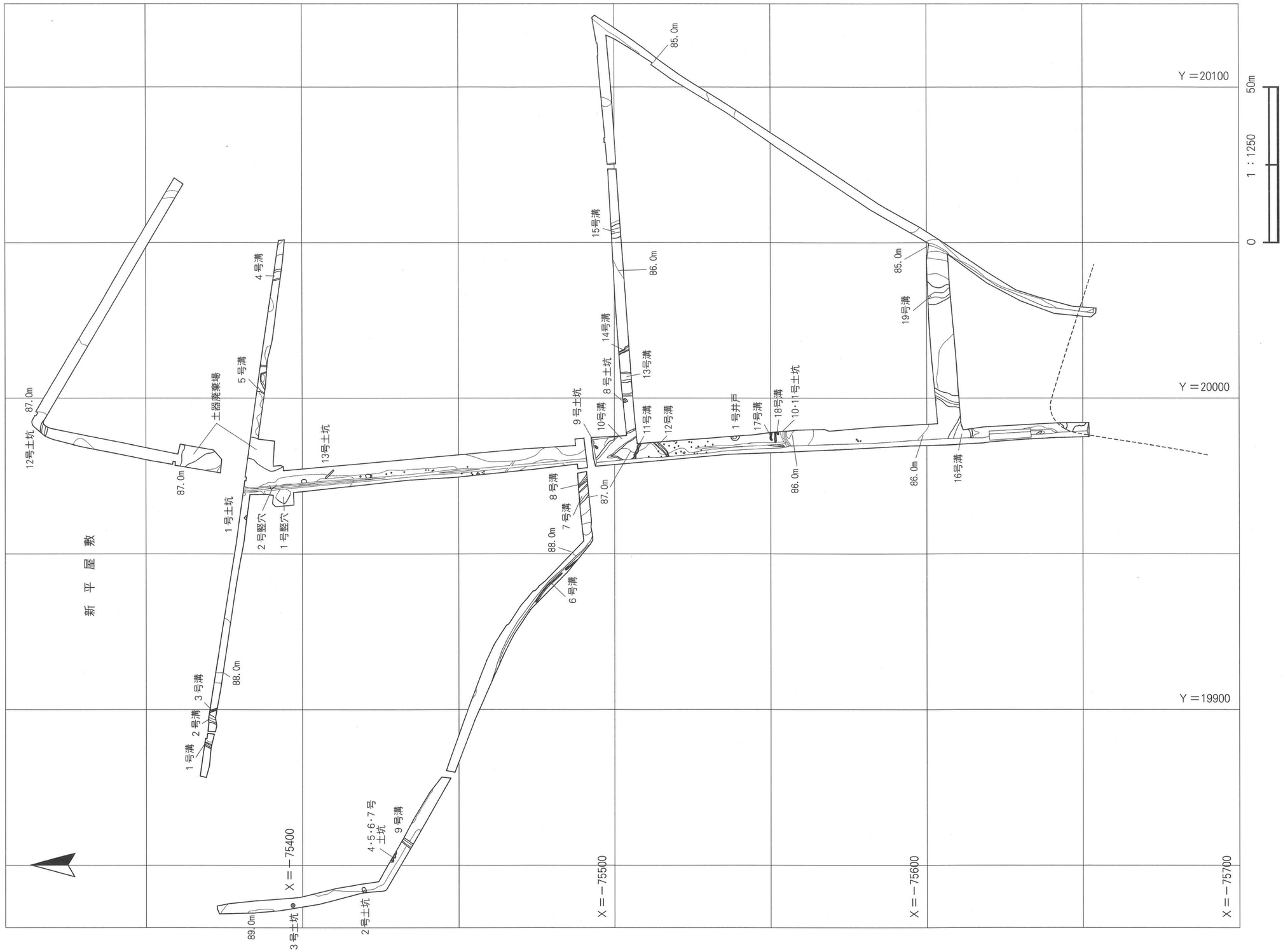
またこれと同じ年には草間俊一による調査が続けて行われている。調査内容を所収された文献には概略を述べられているに過ぎないため、詳細は不明である。丘陵上を開田する際に備え付けられた道路工事において、竪穴の断面が発見され調査にいたったという。50を超える竪穴が検出されたが10日という日数制限の為７基のみ精査されている。精査された竪穴のある1基の時期は出土土器から縄文中期初頭の大木７ａ式期に相当しているとされている。また縄文前期中葉の大木４式から糠塚式（大木６～７式）までの遺物を包含する遺物包含層が確認されている。このほか古代の遺構では竪穴住居跡が確認されている。

昭和59年には当センターによる調査が行われている。調査地区は丘陵の南方斜面下部に位置し、縄文期の土坑８基、落とし穴状遺構1基、平安期の竪穴住居跡1棟、時期不明の土坑2基、焼土遺構２基、溝３条、柱穴43基、現代の旧道跡が検出された。遺物は縄文土器（大木４～７a式、大洞Ａ、Ａ´式）、板状土偶、円盤状土製品、石鏃、石匙、スクレイパー、石斧、磨石、石錘、石箆、土師器、須恵器、砥石、金属製品が出土している。時期は出土遺物から縄文前期末～中期および平安後期とされている。

その後しばらくおいて、平成15年にも再度当センターによる調査が行われた。調査地区は丘陵北方の斜面下部で掘立柱建物跡１棟、土坑７基、柱穴状土坑１基、溝４条が検出されている。遺物は縄文土器（大木５a～８a式）、板状土偶、尖頭器、石鏃、石錐、石匙、石箆、スクレイパー、フレイク、楔形石器、三稜状石器、石核、石鍬、打製石斧、磨製石斧、礫器類、半円状扁平打製石器、石錘、特殊磨石、磨石、凹石、敲石、台石、玦状耳飾り、有孔石製品、石剣、石棒、土師器、須恵器、陶磁器（９世紀の灰釉陶器、12世紀の白磁四耳壺、13～14世紀の龍泉窯系青磁碗）、風字硯と多種におよび出土している。しかし、大半が遺構外出土遺物であり、また遺構は時期決定資料に乏しく古代以降という以外詳細な遺構の年代は不明である。にもかかわらず上記の貴重な遺物の存在はこの遺跡の本体がいずれの時期においても有力な遺跡であることを物語っていると思われる。またこれらの調査以外にも、旧江釣子村教育委員会、北上市教育委員会等により発掘調査が行われているがいずれも未報告のため、ここでは触れない。

以上、新平遺跡は過去に12度以上にわたる調査が行われており、その内容が明らかになりつつある。本遺跡は旧石器、縄文前～中期、古代、中世、近世にわたる複合遺跡であり、縄文前期末には集落が営まれていた可能性が高い。平安期には丘陵上に遺跡の主体部があったであろうことはまず疑う余地はないが、丘陵上部～下部にかけて竪穴住居跡が検出されており、これらの遺構の同時性、あるいは連続性を検証し、各時期における集落構造を検討される必要があろう。

（横井）



第７図　新平遺跡　遺構配置図

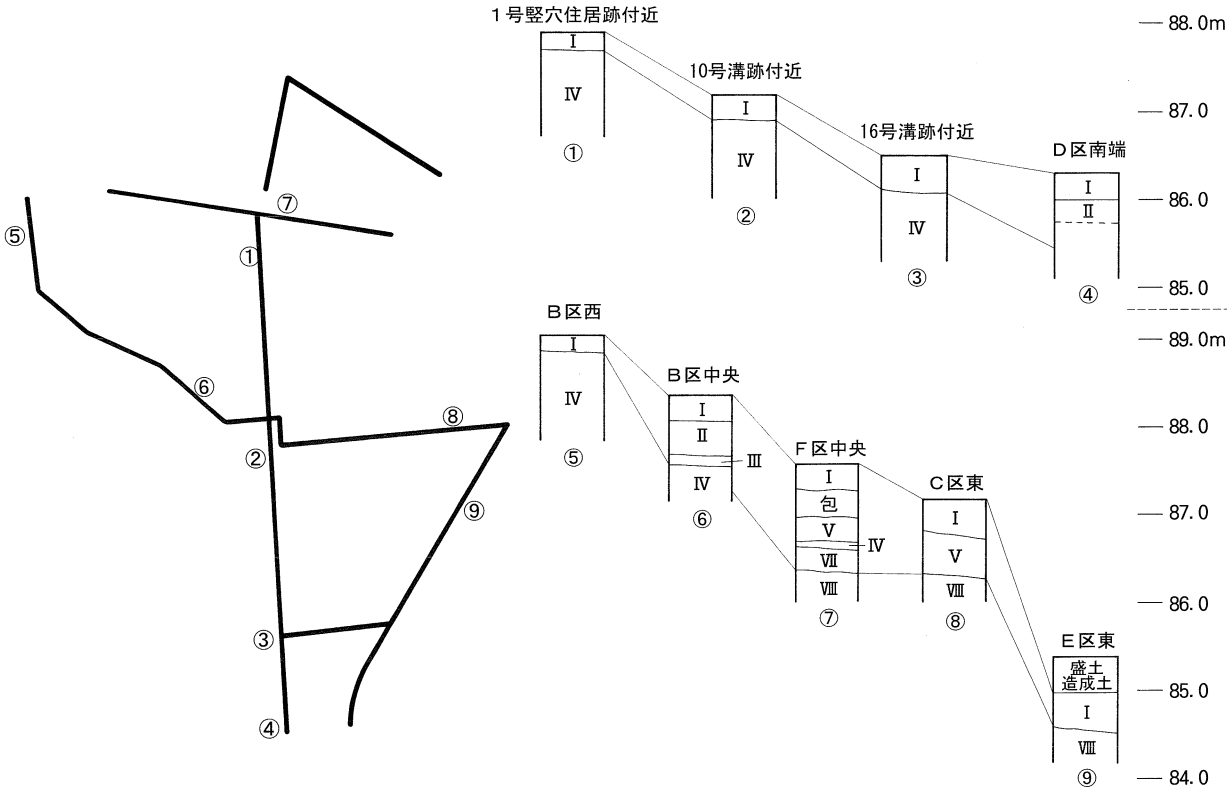
2　基　本　層　序

今回の調査における基本層序は以下の８層に大別することができた。

Ⅰ層	黒褐色粘質土	現耕作土　上部に造成中の盛土が存在する部分がある。
Ⅱ層	黒褐色粘質土	十和田ａテフラブロックを包含する。
Ⅲ層	暗褐色土	ほとんどの地区で削平を受け残存していないが本来は広く存在する。
Ⅳａ層	黄褐色粘土	検出面、遺跡の基盤層になると考えられる。上部は削平されている。
Ⅳｂ層	灰白色粘土	部分的に存在する。
Ⅴ層	黒褐色～青灰色シルト	グライ化したシルト層　調査区東部にある。
Ⅵ層	黒褐色シルト	調査区東側に部分的に存在する。低地における窪み、旧河道の堆積層
Ⅶ層	黒褐色粘土	調査区東側に部分的に存在する。低地における窪み、旧河道の堆積層
Ⅷ層	青灰色砂礫	基盤層、河川堆積によると考えられる。

今回の調査は広大な範囲にわたって行われているため必ずしも層序は一様ではない。Ｂ区・Ｄ区北側・Ｆ区西側はⅠ層の直下がⅣ層となり、この層が検出面となっている。本来はⅡ～Ⅲ層が存在していたと予想されるが、開田事業によって大規模に削平されたと考えられる。

いっぽうでＦ区東側・Ａ区・Ｃ区・Ｅ区ではⅠ層直下には広い範囲でⅤ層が広がっているのが大きく異なる。これは今回の調査区内ではＤ区付近をはさんで西側は丘陵、東側は低地となりそのまま旧河道へと移行するからであると考えられる。すなわち、前者はいわゆる丘陵地あるいは微高地であり、後者は低地となる。したがって、Ⅲ層以下については場所によって異なっていると考えられる。調査の結果、集落はⅣ層が確認できる範囲のみに存在しており、Ⅴ層の範囲には広がっていないと考えられた。なお、Ⅵ・Ⅶ層は旧河川の堆積土であると考えられるが、無遺物層であることや工事による掘削深度との関係から地山と同様に認識した。　（西澤）



第８図　新平遺跡　基本層序模式図

3　調　査　成　果

（1）検　出　遺　構

A　竪穴住居跡

1号竪穴住居跡（第9図、写真図版4）

D区北側に位置する。グリッドはN105W25～30である。本来の調査区内では約半分しか検出されなかったが、調査区を拡張し完掘を行った。他遺構との重複はないが、北東側に水道管が2本埋設されており、それによって破壊されている。また、北1.2mに2号竪穴住居跡が存在する。

検出はⅣ層であり、黒褐色土の広がりをもって確認した。削平が強く行われているため検出は掘りかたのみとなっている。したがって、第9図は本来の形状を表しているわけではない。

平面形は現状では方形を基調とするもので、規模は正確には不明ながら最低でも南北3.4m以上、東西が3.9m以上の規模が確認できる。床面は削平状況から残存していないと考えられ、そのため壁面付近をめぐる周溝は掘りかたであると考えられる。掘りかたは中央部をあまり掘り下げず、周囲に土坑状や溝状に深く掘削する。周溝状の堀込みより東側は検出時には黒褐色の堆積土が広がっていたことや南壁の痕跡が一部に残ることから使用時の床面は東側を含めた範囲であったと推定される。そのため、周溝状の堀込みの位置が中途である点を考慮すると東側に拡張が行われたと考えられる。また、北側についてはピット7を住居に伴うピット（貯蔵穴）と考えたため、この部分についても東側と同様に拡張が行われた可能性を推定している。しかし、ピット7と本遺構が重複関係にある可能性も残る。

堆積土は次の2層が確認できる。1層は黒褐色粘質土で、締まり、粘性ともにやや強く、黄褐色ブロックを含んでいる。2層は明黄褐色粘土で、締まり、粘性ともに強い。比較的大きめの黄褐色土ブロック（径30～40mm）と黒褐色土ブロックを含んでいる。いずれも貼り床となる。

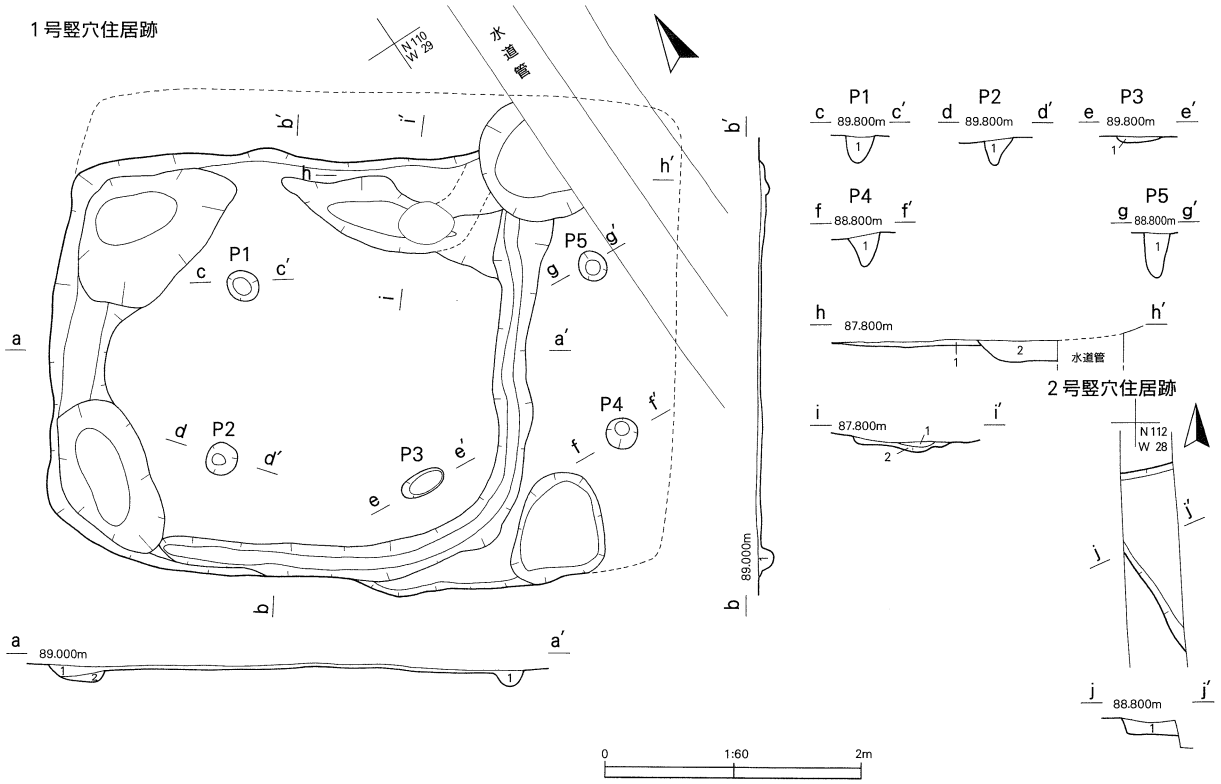
カマドは確認できなかったが、北側に焼土の痕跡が残っていることから、この部分に存在した可能性がある。その他の施設としてピット1～7が床面に構築される。ピット1・2・4・5はその深さから20～30cm程度あることやその位置などから柱穴の可能性がある。ピット3についても深さが浅いものの位置的に柱穴の可能性がある。堆積土はいずれも単層でピット1から6は黒褐色粘質土で締まり・粘性ともに中程度である。黄褐色ブロックを多く含んでいるのが特徴である。ピット7は先に触れたように別遺構の可能性があるが、カマド痕跡との位置や遺物が比較的多く出土する点から住居に伴う貯蔵穴と判断した。堆積土は褐灰色粘質土で締まり・粘性ともに中程度、黄褐色ブロックや焼土粒を含んでいる。

遺物はピット7より出土している。細片が多いが4点図示している（第28・29図）。

この遺構は削平が多く、出土遺物も住居跡に伴うか不明確な点も残りかつ遺物も細片であるため時期を明確にしがたいが、土器の特徴から10世紀代に位置づけられよう。

2号竪穴住居跡（第9図、写真図版4）

D区北側に位置する。グリッドはN110、W25である。他遺構との重複はないが、水道管が2本埋設されていることや、この付近より東側は農道ではなく田面に相当するため一段低くなっており大半が破壊されている。したがって、この状態からは住居跡と判断するには難があるが、床面がほぼ平らな



第９図　１・２号竪穴住居跡

こと、壁の立ち上がりが垂直に近いこと、埋土が１号竪穴住居跡と類似していることなどから、本遺構も竪穴住居跡であると推定した。

現状で判断する限り平面形は方形を基調とすると予想される。また、住居軸方位は１号竪穴住居跡とは異なっているようである。

遺物は土師器細片が１点出土しているのみである。細片のため図示していない。したがって、時期についても不明となる。

（西澤）

B　溝

19条検出されている。今回の調査区は最大７ｍのみの幅しかなく、いくつも交差しているため全体を検出できたものは皆無であった。そのため、いずれも遺構の性格等踏み込んだ解釈は不可能であり、すべてにおいて推定の域を脱し得ないものとなっている。

１号溝跡（第10図・写真図版５）

Ｆ区西のN130･W115グリッドに位置し、Ⅳa層において確認された。他遺構との重複は確認されていない。両端が調査区外に延び、1.98ｍのみが検出されている。幅は0.78ｍで断面形はやや不整の逆台形である。底面はやや東側へ傾斜し、確認面からの深さは24cmである。また底面は南方に向かってゆるやかに傾斜している。堆積土は単層で締まり・粘性ともに中程度の粘土質の黒褐色土が堆積していた。自然堆積と考えている。遺物が出土しておらず全体形も不明の為、時期、性格ともに不明である。

２号溝跡（第10図・写真図版５）

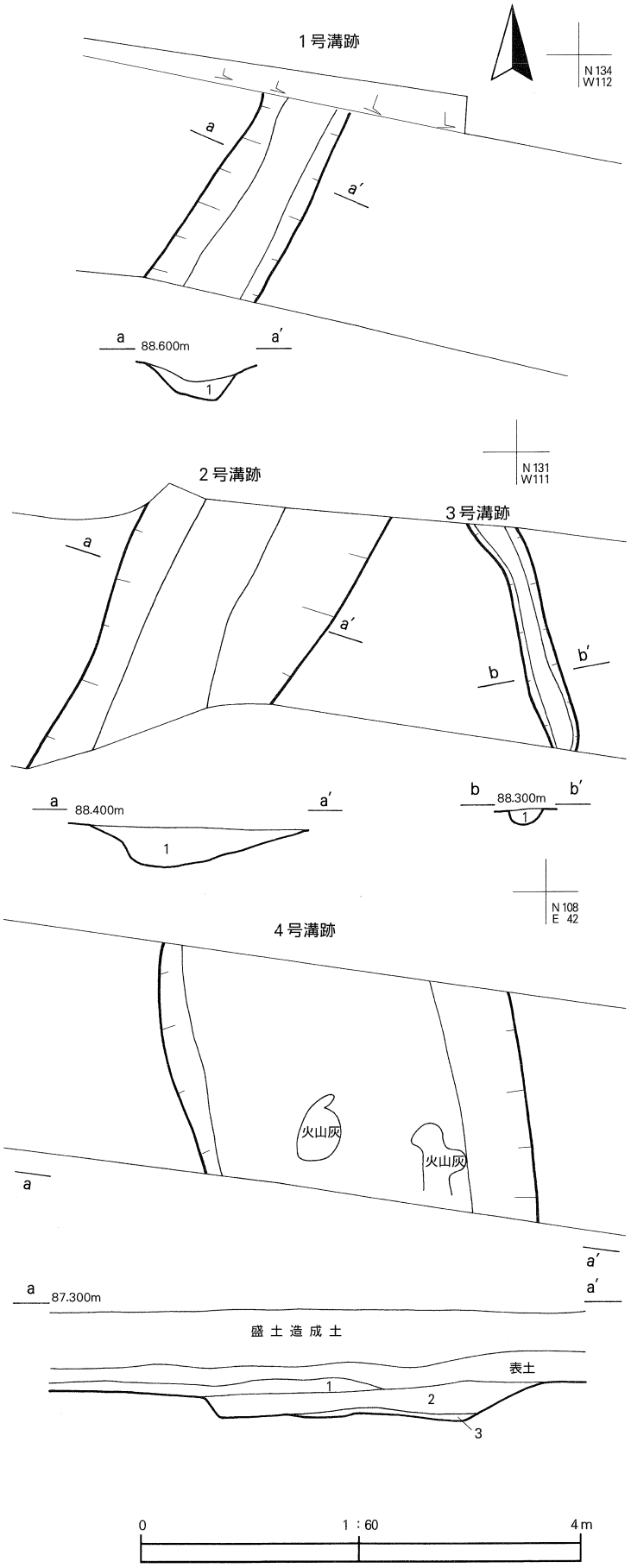
Ｆ区西のＮ130･W105～110グリッドに位置し、Ⅳa層において確認された。他遺構との重複は確認されなかったが、調査区外北方で2号溝跡と重複あるいは合流する可能性がある。両端が調査区外に延び2.64mのみが検出されている。上幅は2.17mである。壁は緩やかに底面まで下っていくが、西側は中段付近で垂直に落ち、確認面からの深さは36cmである。また底面は北方に向かって緩やかに傾斜している。堆積土は単層で黄灰色の粒を混入し、締まりが弱く、粘性が中程度の黒褐色土が堆積していた。自然堆積と考えている。遺物が出土しておらず全体形も不明の為、時期、性格ともに不明である。

３号溝跡（第10図・写真図版５）

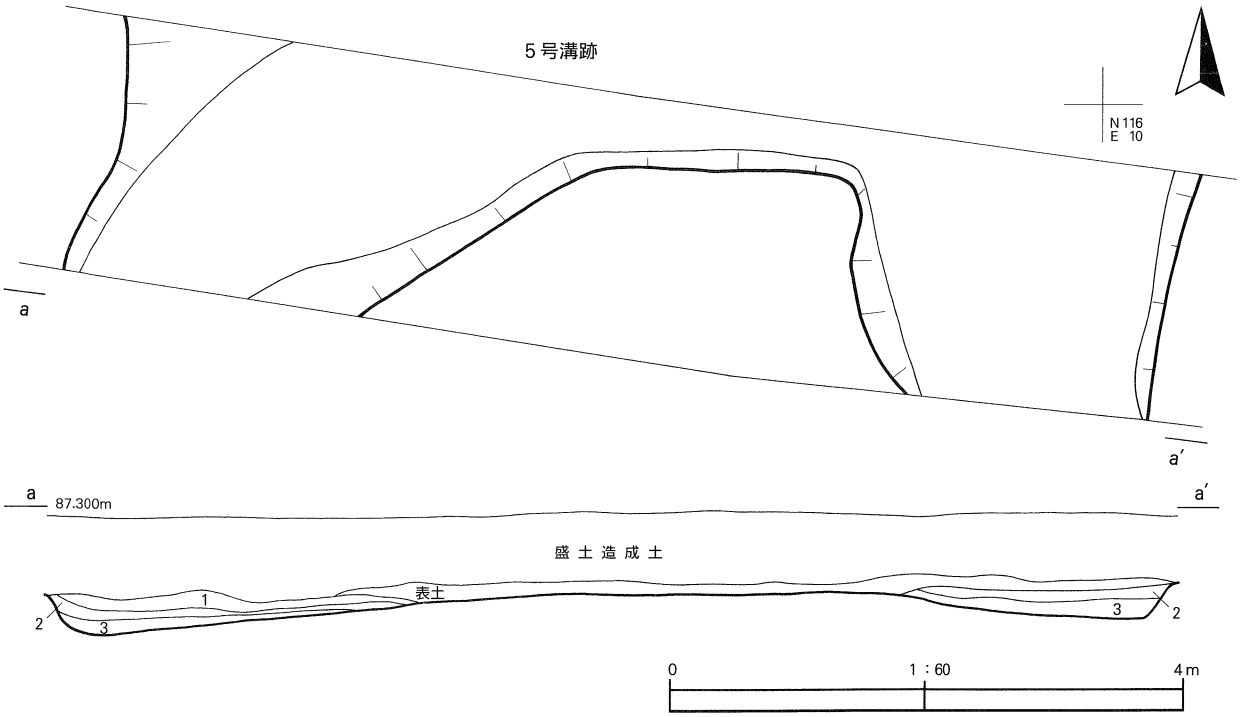
Ｆ区西のＮ130･W105グリッドに位置し、Ⅳa層において確認された。他遺構との重複は確認されなかったが、調査区外北方で２号溝跡と重複している可能性がある。両端が調査区外に延び、2.22mのみの検出で上幅は0.36mである。断面形は半円形で確認面からの深さは12cmである。底面は南方に向かってゆるやかに傾斜している。堆積土は単層で、締まりが強く、粘性が弱い黄褐色の粒を混入する黒色土が堆積しており、自然堆積と考えている。遺物が出土しておらず全体形も不明の為、時期、性格ともに不明である。

４号溝跡（第10図・写真図版６）

Ｆ区東のＮ105、Ｅ40・45グリッドに位置し、Ｖ層面において確認された。他遺構との重複は確認されない。本溝跡は調査区を横断しており、2.1mのみの検出となっている。上幅は3.12m



第10図　１・２・３・４号溝跡



第11図　５号溝跡

である。壁は39cm残存しており断面形は逆台形であった。また底面は南方に向かってゆるやかに傾斜している。底面上に火山灰が分布していたが、分析依頼しておらず詳細は不明である。堆積土は３層に細分された。１層・２層は共に黒褐色で、１層にはⅤ層ブロックが多く含まれる。３層は炭化した植物遺体の層である。いずれも自然堆積と考えている。遺物が出土しておらず時期、性格ともに不明であるが本遺構は旧河道上に位置しており、それに伴う自然溝である可能性がある。

５号溝跡（第11図・写真図版６）

Ｆ区東のＮ110・Ｅ５からＮ110・Ｅ10グリッドに位置し、Ⅴ層において確認された。他遺構との重複は確認されなかった。南北は調査区外に延びており、また中央で一旦底面が上昇する。溝自体が大きく弧を描くのかあるいはこの地点で二股に分岐するものと推定される。上幅は西側で2.28m、東側で1.86mである。確認面からの深さはおよそ37cmで東壁は急角度で底面にいたる。底面は北方に向かってゆるやかに傾斜している。堆積土は３層に細分される。１層は締まりが中程度、粘性が強く、水酸化鉄を混入する黒褐色粘土である。２層は締まりが中程度であり、粘性が強く、炭化物を微量混入する黒色粘土層である。３層は締まりが中程度、粘性が強く、炭化物を大量に混入する暗褐色粘土層である。いずれも自然堆積と考えている。遺物は堆積土下位より土師器片（甕口縁部：2.9ｇ）が出土しており、平安期以降のものと捉えられ、また周辺の土壌等より旧河道に伴う自然溝の可能性がある。

６号溝跡（第12図・写真図版７）

Ｂ区Ｎ20・Ｗ60からＮ10・Ｗ50グリッドに位置し、Ⅳa層上面において確認された。他遺構との重複は確認されていない。両端が調査区外に延びており、16.23mのみ検出され、上幅は36cmである。削平のためか深さは確認面から８cmと浅く、途中で壁が消滅する箇所がある。断面形は逆台形および半円形で、底面は南方に向かってゆるやかに傾斜している。堆積土は単層で黄褐色の粒を混入し、締ま

り粘性ともに中程度の黒色土が堆積している。断面の観察から自然堆積と考えている。遺物が出土しておらず、また全体形も不明なため、時期、性格ともに不明である。

７号溝跡（第13図・写真図版７）

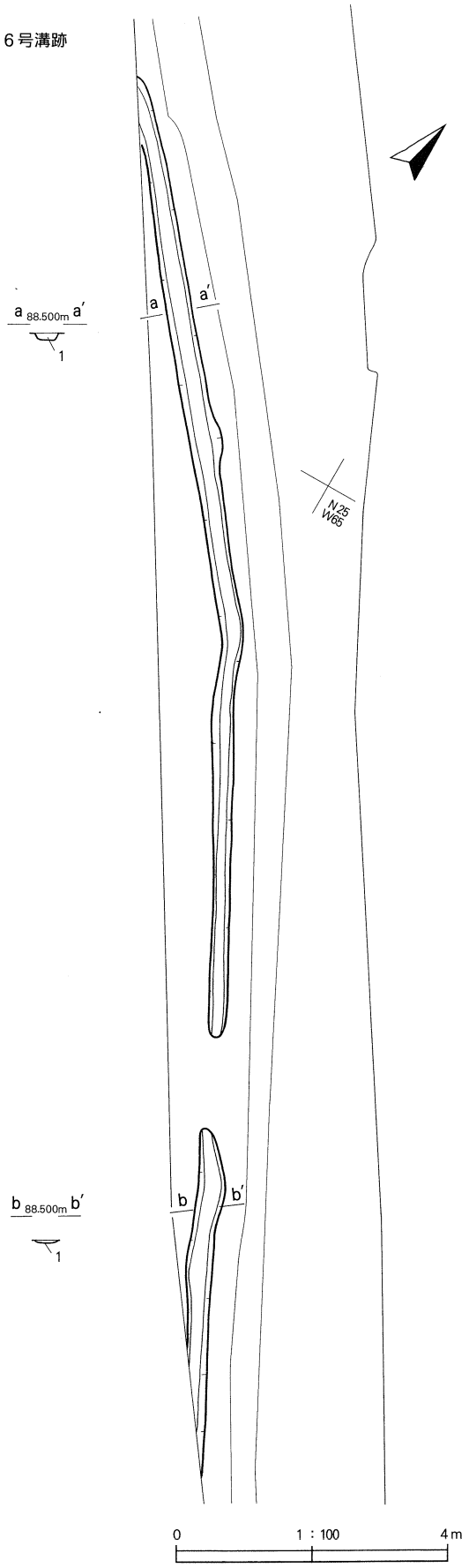
Ｂ区南のＮ15･W30からＮ20･W35グリッドに８号溝跡と並列して位置し、Ⅳb層において確認された。他遺構との重複は確認されない。両端が調査区外に延び、上幅が3.12m、長さが3.63mの範囲で検出された。深さは確認面から21cmで、断面形は逆台形を呈する。また底面はゆるやかに北方へ傾斜している。堆積土は単層で水酸化鉄を混入する黒色の粘土が堆積している。自然堆積と考えている。遺物の出土がなく全体形も不明なため時期、性格ともに不明といわざるを得ないが８号溝跡同様、10号溝跡と同遺構の可能性があり、縄文時代前期に属するものかもしれない。

８号溝跡（第13図・写真図版７）

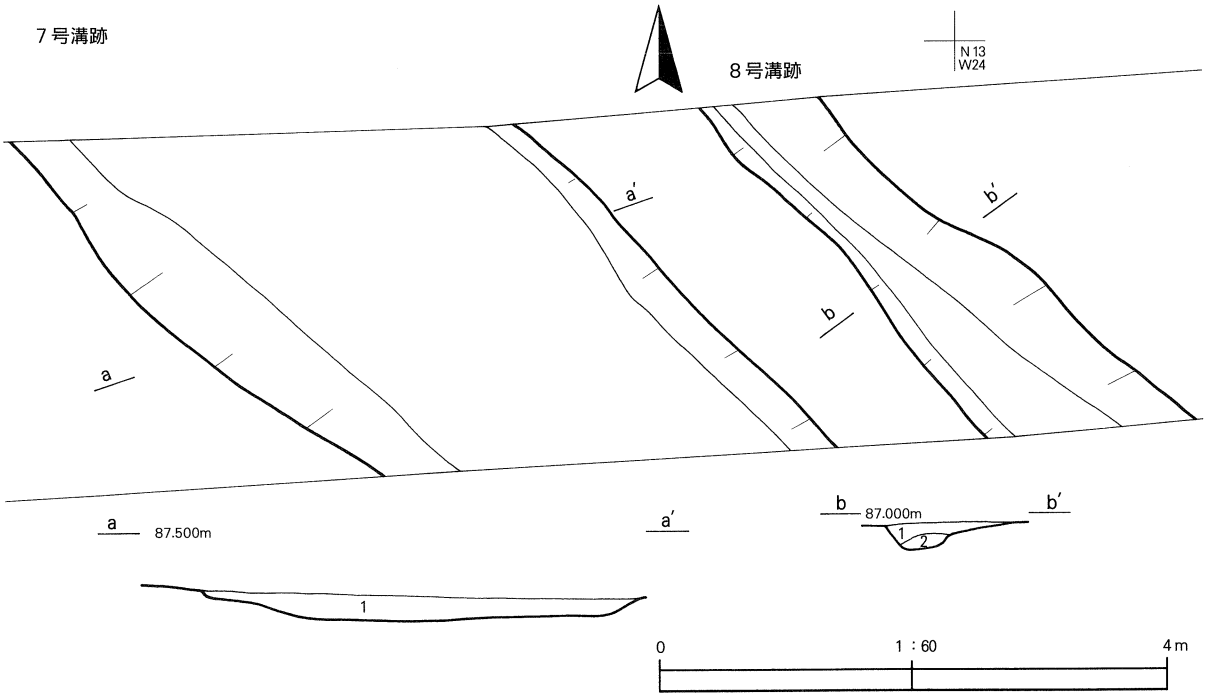
Ｂ区南のＮ５･W25からＮ10･W30グリッドに８号溝跡と並列して位置し、Ⅳb層において確認された。他遺構との重複は確認されない。両端が調査区外に延び、3.54mのみ確認され、上幅は0.81mである。断面形は不整の逆台形で東辺が底面に向かい緩やかに傾斜するのに対し、西辺は一気に底面まで下る。確認面からの深さは21cmである。底面は平坦で傾斜を確認できなかった。堆積土は２層に細分される。１層は締まり、粘性ともにあり、水酸化鉄を混入する黒色の粘質土で２層も締まり、粘性ともに強くあり、炭化物、水酸化鉄を混入する灰黄褐色粘土である。いずれも自然堆積と考えている。遺物が出土しておらず遺構の時期性格ともに不明であるが南方延長上に10号溝跡が位置しており、同遺構になる可能性がある。よって縄文時代前期に属するものかもしれない。

９号溝跡（第14図・写真図版６）

Ｂ区中央のN65･W145グリッドに位置し、Ⅳa層において確認された。他遺構との重複は確認されなかった。両端が調査区外に延び、幅1.26m、長さ3.06ｍのみ検出されている。　確認面からの深さは36cmで断面形

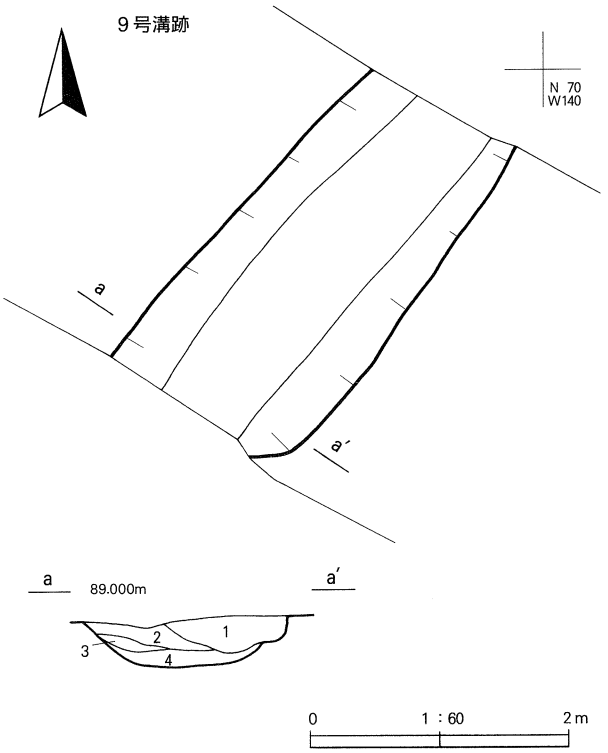


第12図　６号溝跡



第13図　7号・8号溝跡

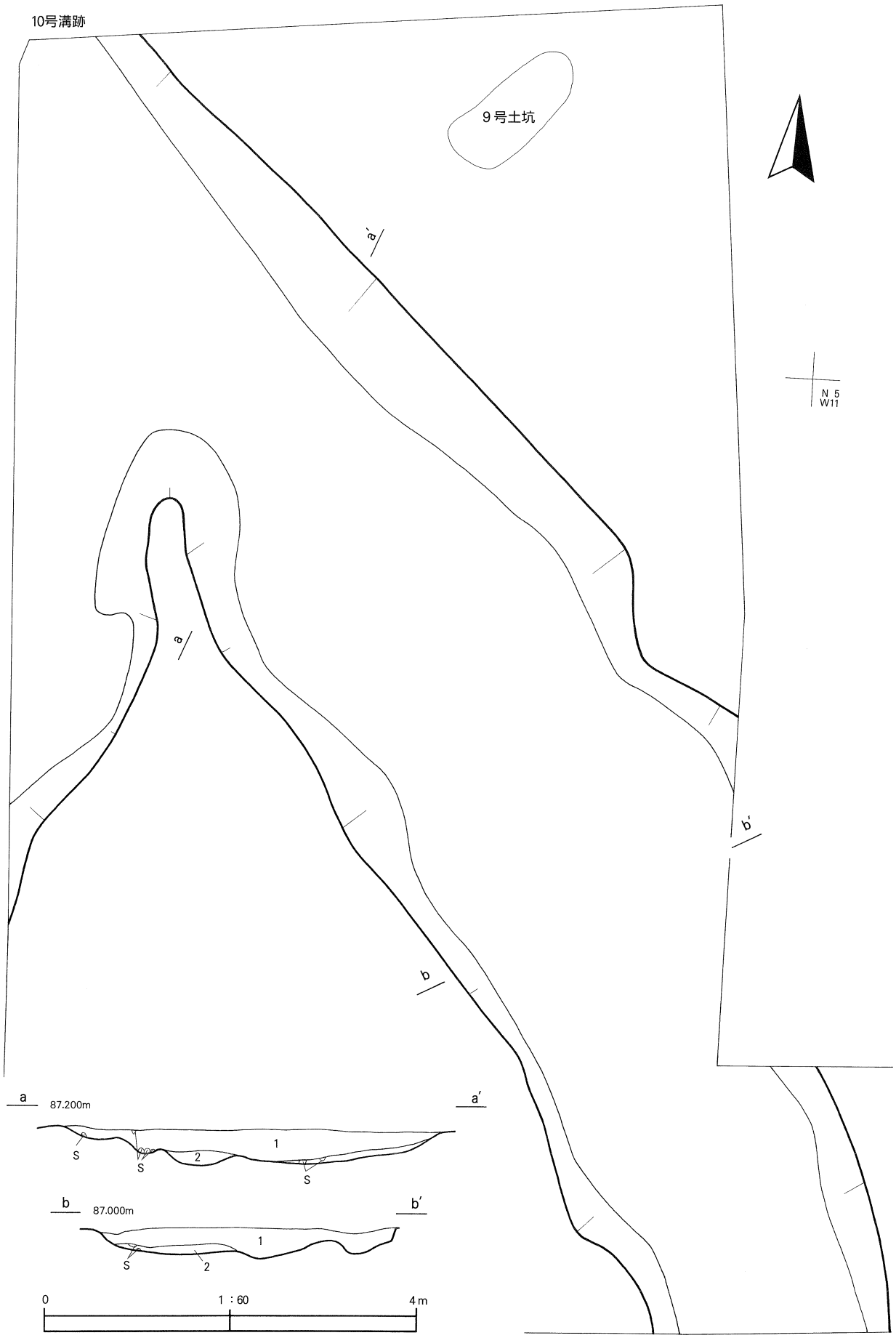
は丸みを帯びた逆台形である。また底面はほぼ平坦で傾斜は確認できなかった。堆積土は自然堆積で4層に細分できる。1層は締まり弱、粘性中で黄褐色のブロックを混入する黒色土である。2層は締まり、粘性強の黄褐色土で基本層Ⅳa層の崩落土層である。3層は締まり中、粘性強の浮石を混入する黒褐色シルトである。4層は締まり中、粘性強の黒褐色粘土であった。いずれも自然堆積と考えている。遺物の出土がなく全体形も不明なため、時期、性格ともに不明と言わざるを得ない。



第14図　9号溝跡

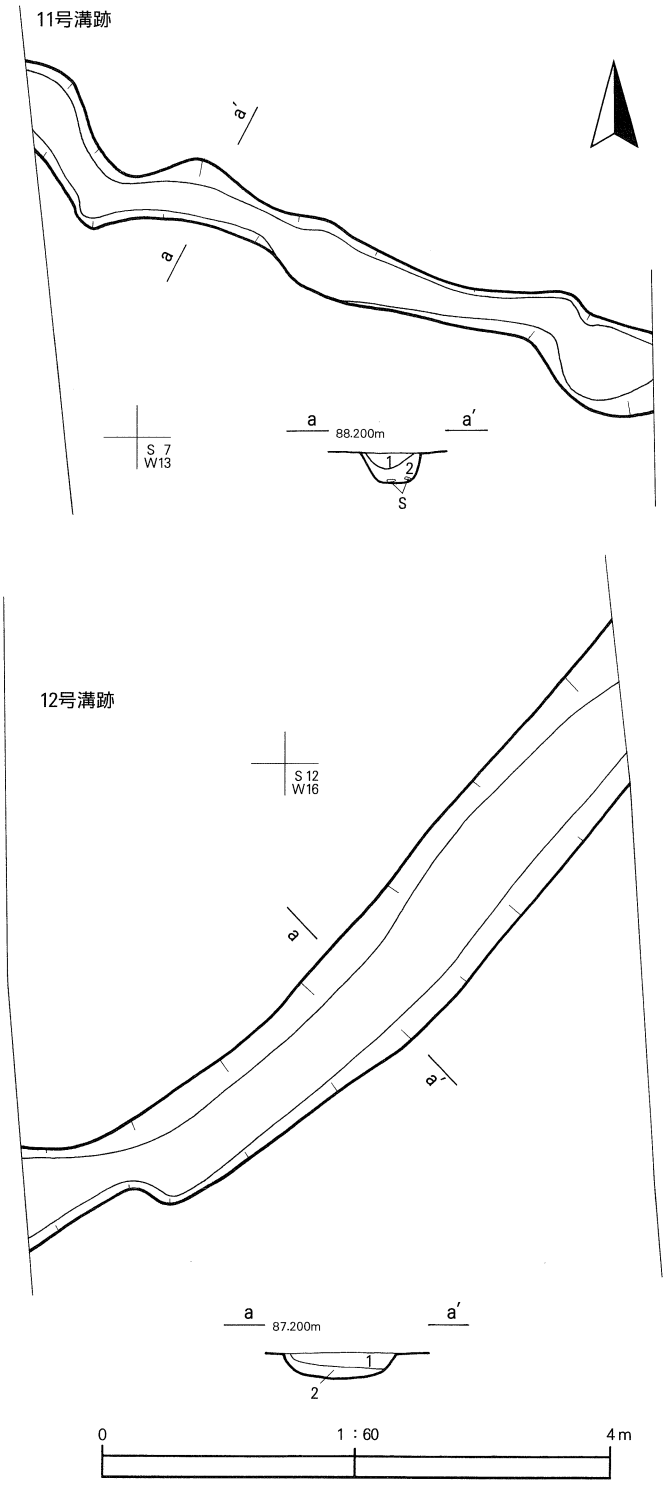
10号溝跡（第15図・写真図版8）

D区中央のN5・W15からS5・W20グリッドに位置し、Ⅳa層において確認された。他遺構との重複は確認されなかった。上幅が4.02mと非常に巨大であるが、そのほとんどが調査区外に含まれる。検出した長さは16.65mで南東方向に延びていくが、途中で南西方向に分岐することが確認されている。底面には起伏があり、確認面からの深さは33cmである。堆積土は単層で、締まりが強く粘性が中程度であり、水酸化鉄を混入する黒褐色粘土が堆積していた。自然堆積と考えている。図上の2層は地山の漸移層である。底面上から縄文土器片（1997.9g）がまとまって出土して



第15図　10号溝跡

いるが、器面が磨耗しており詳細な時期は判定できないが、口縁部の形態、装飾等から前期に属するものと考えている。しかし、先述のように本遺構は底面が大きく起伏し、人工的な遺構の様相を見出すことができない。水流により削られた自然溝と考えていいだろう。比較的頻繁に本遺構に水が流れていたことは出土遺物の磨耗の程度からも裏付けられ、そうすると出土遺物をそのまま遺構の時期判定要因とすることはできない。



第16図　11号・12号溝跡

11号溝跡（第16図・写真図版８）

Ｄ区中央の０･W15からＳ５･W20グリッドに位置し、Ⅳa層において確認された。他遺構との重複は確認されていない。両端が調査区外に延び、調査区内では上幅が0.36～0.75m、長さが5.47ｍの範囲で検出されている。本溝跡は小さく蛇行しながら南東方向へ流れていく。断面形は逆台形で確認面からの深さ24cmである。また底面は東方に向かってゆるやかに傾斜している。堆積土は２層に細分される。１層は締まり、粘性ともに弱く水酸化鉄とブロック状に灰白色の火山灰が混入する黒色土で、２層は締まり、粘性ともに中程度の水酸化鉄および粘土の細粒を混入する黒色粘質土である。いずれも人為堆積と考えている。出土遺物はなかったが、火山灰は外見的特長から十和田aテフラと考えられ、堆積状況から遺構の埋没時期も10世紀前葉以降と推定される。

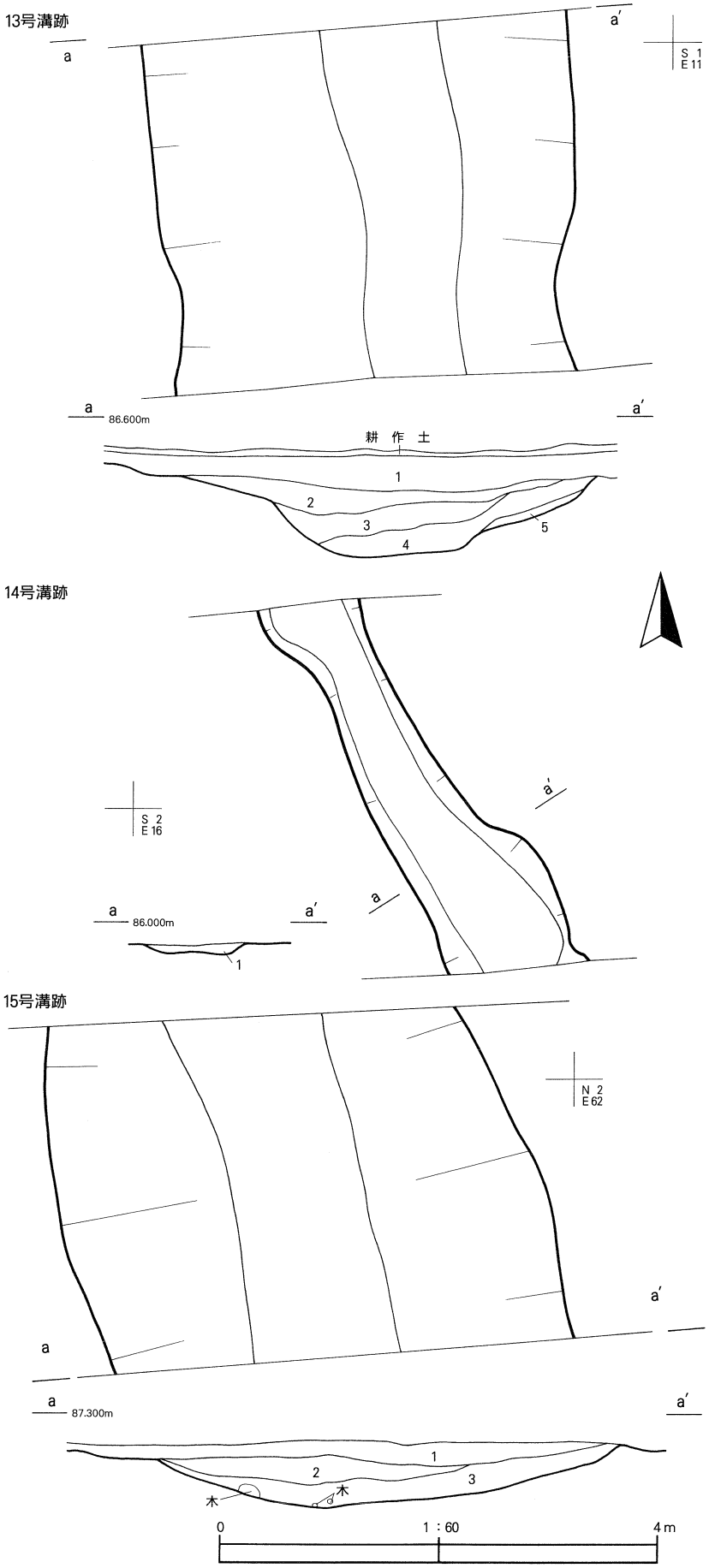
12号溝跡（第16図･写真図版９）

Ｄ区中央のＳ15･W15からＳ20･W20グリッドに位置し、Ⅳ層において確認された。他遺構との重複は確認されていない。両端が調査区外に延び、調査区内では上幅が0.42m、長さが6.3mの範囲で検出されている。断面形は半楕円形で確認面からの深さは24cmである。堆積土2層に細分された。１層は締まりが弱く、粘性が中程度の黄褐色と粘土の細粒と浮石を混入する黒褐色土である。２層は締まり、粘性ともに中程度で１層と同様の混入物を持つ黒色土である。いずれも自然堆

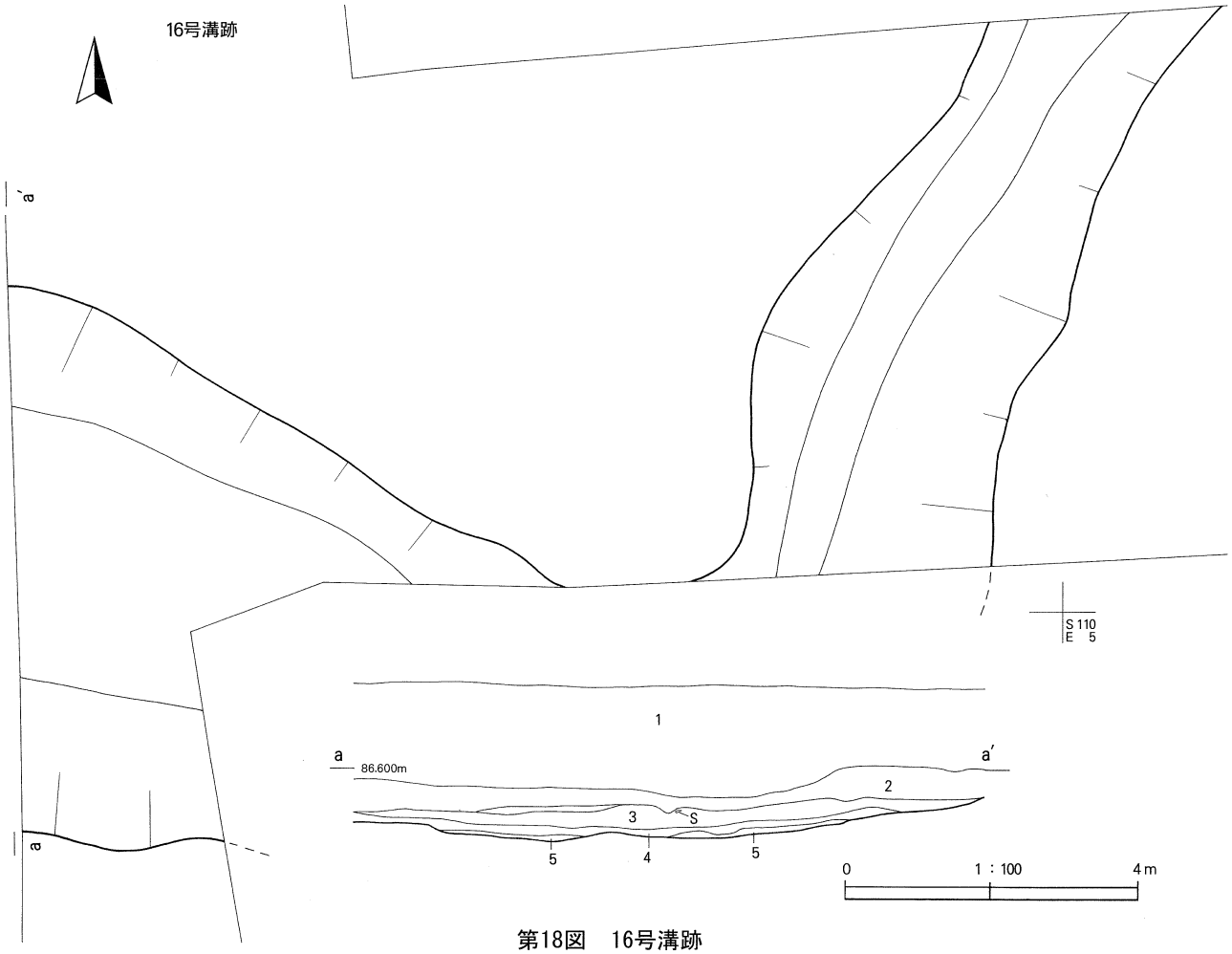
積と考えている。遺物は堆積土中より土師器片(ロクロ杯：147.1ｇ)が出土しており、平安期以前のものと捉えているが、性格は不明である。

13号溝跡(第17図・写真図版９)

Ｃ区西のＳ５・Ｅ５～10グリッドに位置し、Ｖ層において確認された。他遺構との重複は確認されていない。両端は調査区外に延び、長さ3.3mが調査区内にあり、上幅は2.88mである。断面形はやや丸みを帯びた逆台形で確認面からの深さは60cmであった。また底面は北方に向かってゆるやかに傾斜している。堆積土は５層に細分できた。１層は灰白色の火山灰を混入する黒色粘質土、２層は微細な礫を混入する黒色粘質土、３層は炭化物、植物性の繊維を少量混入する黒色粘質土、４層は植物性の繊維を多量に混入する黒色粘質土、５層は炭化物、植物性の繊維を大量に混入する黒色粘質土でいずれも締まりが強く、粘性は弱い性状である。これらはいずれも自然堆積と考えている。遺物は土師器片(ロクロ杯、甕:244ｇ）が出土しており、平安時代がその存続期の一時期を示すものと捉えられる。性格は不明であるが、旧河道に伴う自然溝である可能性がある。



第17図　13号・14号・15号溝跡



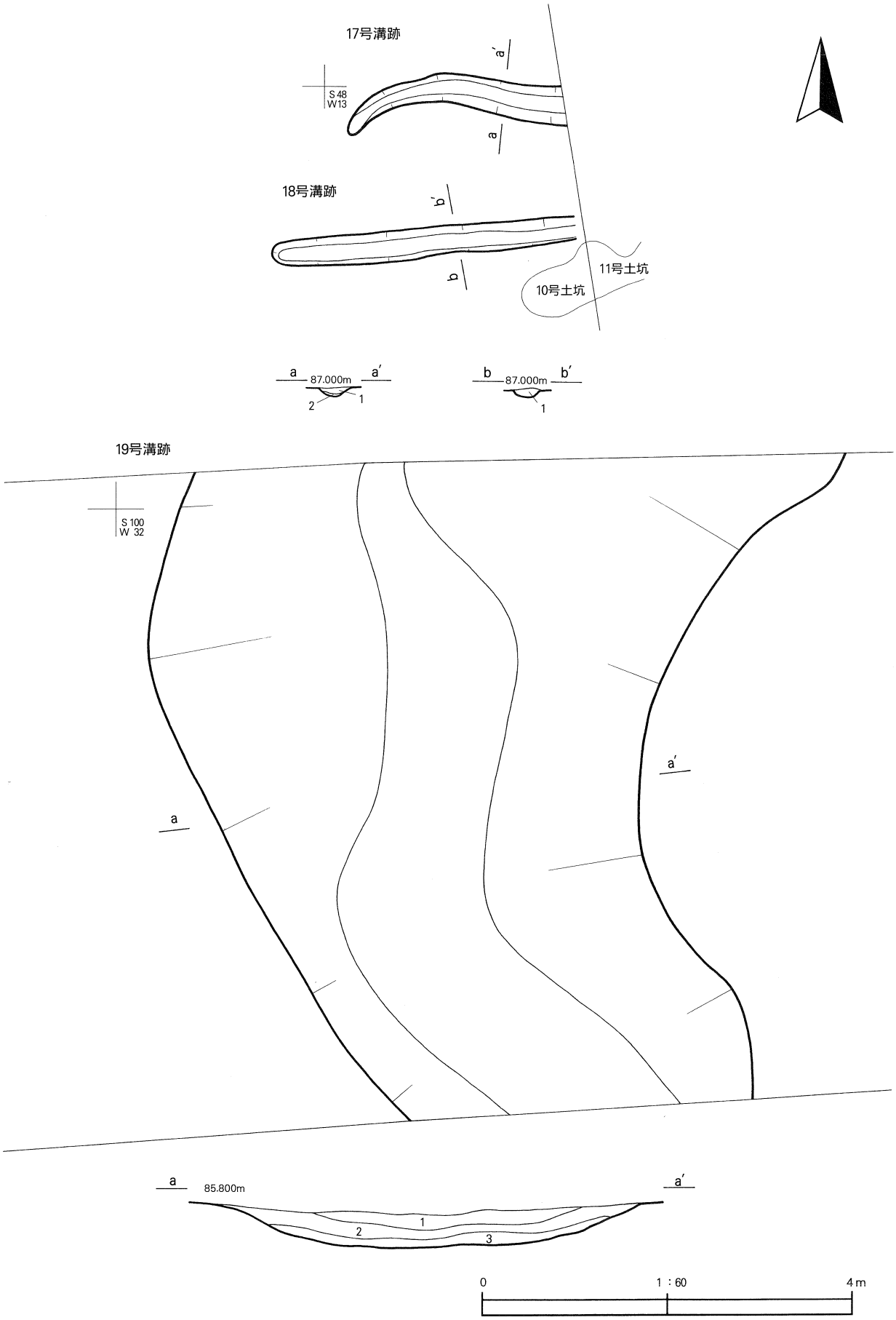
第18図　16号溝跡

14号溝跡（第17図・写真図版10）

Ｃ区西のＳ５・Ｅ15グリッドに位置し、Ｖ層において確認された。他遺構との重複は確認されていない。両端は調査区外に延び、上幅は最小で57cm、最大で81cmであり、長さは4.14mの範囲で確認されている。確認面からの深さは10cmで断面形は逆台形であるが底面にはやや起伏がある。また底面は北方に向かってゆるやかに傾斜している。堆積土は単層で、浮石が混入し、締まりが中程度、粘性が弱い黒色土が堆積している。出土遺物がなく時期・性格ともに不明であるが、旧河道に伴う自然溝である可能性がある。

15号溝跡（第17図・写真図版10）

Ｃ区中央の０・E65からＳ５・Ｅ70グリッドに位置し、Ｖ層において確認された。他遺構との重複は確認されていない。両端が調査区外に延び、上幅が4.16m、長さが3.3mの範囲で検出されている。断面形は緩やかに弧を描き、明確な底面を有しない。確認面からの深さは48cmである。また底面は北方に向かってゆるやかに傾斜している。堆積土は3層に細分される。１層は締まりが強く、粘性が弱い水酸化鉄を混入する黒褐色土で、２層は締まり、粘性とも中程度で下位にシルト質のブロックを混入する黒褐色土、３層は締まりが中程度、粘性が強い黒褐色土で、未炭化の樹木を包含している。いずれも自然堆積と考えている。出土遺物がなく時期・性格ともに不明であるが、旧河道に伴う自然溝である可能性がある。



第19図　17・18・19号溝跡

16号溝跡（第18図・写真図版11）

Ｄ区南と東の交差部のＳ110･Ｅ５からＳ115･W5グリッドに位置し、Ⅳa層において確認された。他遺構との重複は確認されなかった。「Ｌ」字状に屈曲し、底面は西から北に向かってゆるやかに傾斜している。北と西側が調査区外に延びている。調査区内では上幅が西側で6.0m、北側で2.4mであり、長さが15.25mである。壁は緩やかにくだり、底面との明瞭な区別はつかない。確認面からの深さは44cmである。堆積土は３層に細別される。１層は締まりがやや強く、粘性が中程度で黄褐色のブロックを混入する黒色土、２層は締まりが中程度、粘性がやや強い礫を混入する褐灰色粘質土、３層は締まり、粘性ともにやや弱いにぶい黄褐色火山灰、４層は締まりが中程度、粘性が強い黄褐色のブロックを混入する黒褐色粘土、５層は締まりが中程度、粘性が強く黒褐色のブロックを混入する黄灰色粘土、６層は締まり、粘性ともに中程度の黄橙色火山灰である。遺物は３層下より縄文土器片（深鉢口縁、底部：184.0ｇ）が出土しており、縄文期の遺構と考えられる。

17号溝跡（第19図・写真図版10）

Ｄ区中央のＳ50・W15グリッドに25号溝跡と並列して位置し、Ⅳa層において確認された。他遺構との重複は確認されていない。北に弧を描くように屈曲しながら東西に走る。東端は調査区外に延びており、西端は削平されたものとみられ、壁が消滅している。上幅が40cm、長さが2.38mであり、深さは確認面よりおよそ10cmで断面形は半円形を呈する。また底面は東方に向かってゆるやかに傾斜している。堆積土は２層に細分された。１層は黄褐色の粒を少量混入する黒褐色土で、２層は黄褐色の粒が大量に混入していた。ともに締まりが強く、粘性に乏しい。自然堆積と考えている。出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。

18号溝跡（第19図・写真図版10）

Ｄ区中央のＳ50･W15グリッドに17号溝跡と並列して位置し、Ⅳa層において確認された。他遺構との重複は確認されていない。ほぼ東西に方位を向けている東端は調査区外に延びているが、西端は調査区内において確認されている。上幅が30cm、長さが3.28mの範囲で検出されており、確認面からの深さは10cmである。断面形は半円形で、底面は東方に向かってゆるやかに傾斜している。堆積土は単層で、締まりが強く粘性が乏しい浮石を混入する黒色土が堆積している。出土遺物はなく時期・性格ともに不明である

19号溝跡（第19図・写真図版11）

Ｄ区東のＳ100･Ｅ30からＳ110･Ｅ40グリッドに位置し、Ⅳa層において確認された。他遺構との重複は確認されなかった。南北に方位を向け、両端とも調査区外に延びている。調査区内では長さ7.86mが検出されており、最大上幅は7.05mである。断面はゆるやかな弧を描き、確認面からの深さは36cmで底面は南方に向かってゆるやかに傾斜している。堆積土は３層に細分された。１層は締まりが中程度、粘性が強い黒褐色粘質土で、２層は締まりが中程度、粘性が強い水酸化鉄粒と黒褐色のブロックを混入する灰黄褐色粘土、３層は締まりが中程度、粘性が強い黒褐色粘土である。堆積状況より自然堆積と捉えられる。出土遺物はなく、時期・性格とも不明である。　（横井）

C　土　　坑

12基検出されている。**（第20図・写真図版12）**

１号土坑

Ｆ区西のＮ120･W15グリッドに位置し、Ⅳa層において確認された。他遺構との重複は確認されていない。南半が調査区外に延びており全体形は定かでないが概ね円形になるものと思われる。開口部は径1.2mであり、断面形は半円形で深さは確認面から39cmである。堆積土は単層で締まりが強く、粘性が弱い黄褐色粒を微量混入する黒褐色土が堆積していた。自然堆積と考えている。出土遺物はなく、遺構の時期・性格ともに不明である。

２号土坑

Ｂ区北のＮ85･W160グリッドに位置し、Ⅳa層において確認された。他遺構との重複は確認されていない。西端が調査区外に延びており全体形が定かでないが、長方形を呈するものと考えられる。開口部幅96cm、検出した長さは1.76mであり、断面形は逆台形で深さは確認面から36cmである。堆積土は単層で締まりが弱く、粘性が中程度の黄褐色ブロックを微量混入する黒色土が堆積していた。自然堆積と考えている。出土遺物はなかったが堆積土より縄文期の遺構と捉えられる。遺構の性格については不明である。

３号土坑

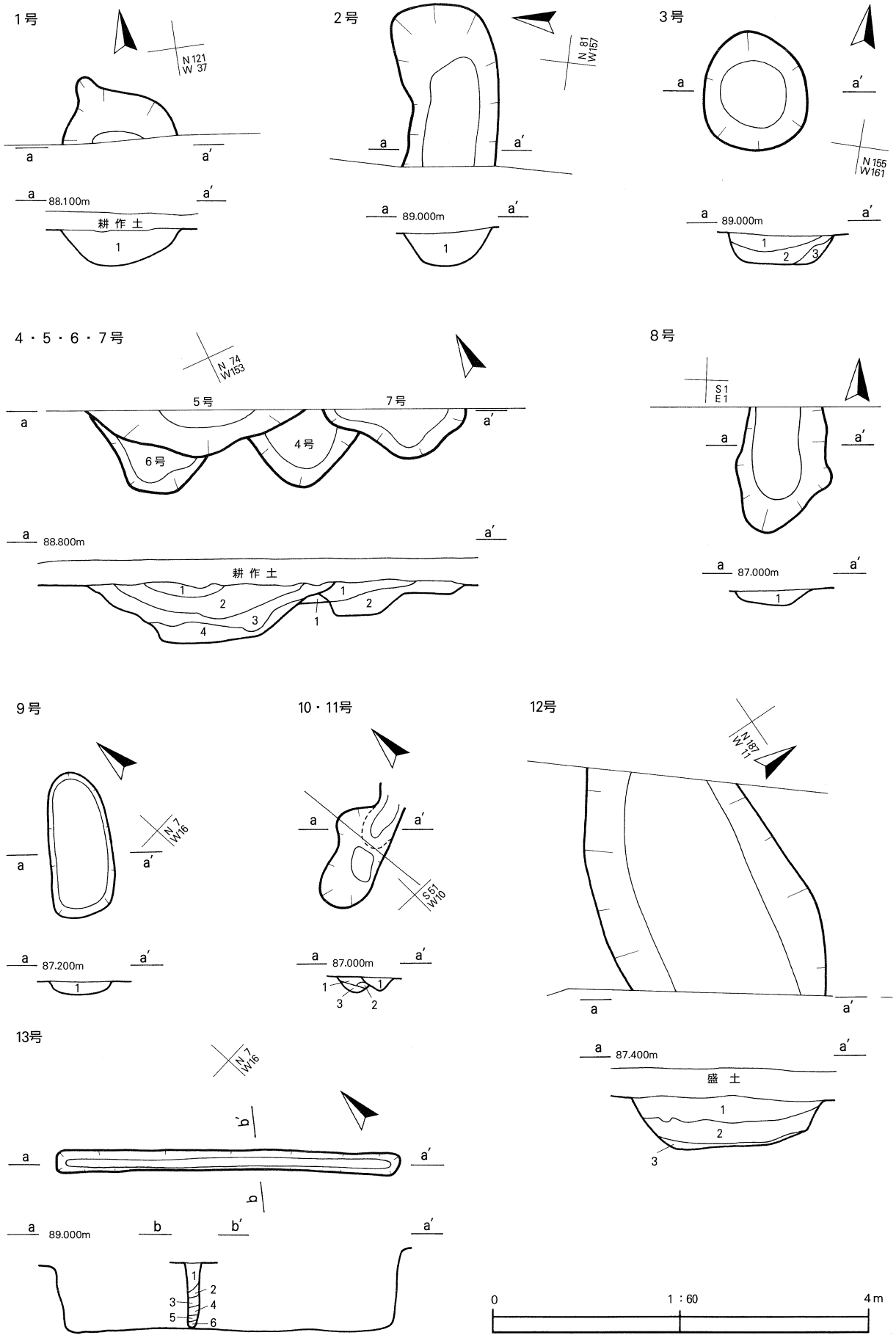
Ｂ区北のＮ160･W155グリッドに位置し、Ⅳa層において確認された。他遺構との重複は確認されていない。平面形はほぼ円形に近い卵形を呈し、開口部は長軸1.26m、短軸1.12mであり、断面形は逆台形を呈する。確認面からの深さは30cmである。堆積土は3層に細分され、いずれも水酸化鉄粒および黄褐色のブロックを含む黒色土で下層にいくほど混入量が多くなっていた。堆積状況から人為堆積と考えている。堆積土中から土師器片（甕底部：194.7ｇ）が出土しているが、本遺構の周囲には撹乱層が分布していることから近代の耕作に伴うものである可能性がある。

４号土坑

Ｂ区中央のＮ75･W150グリッドに位置し、Ⅳa層において確認された。７号土坑と重複しており、これよりも古い。重複によりその大半を破壊され、全体形は定かでない。調査区内においては長さが54cmの範囲で検出されており、断面形は半円形で深さは確認面より12cmである。堆積土は単層で黒色土が堆積していた。出土遺物はないが、５号土坑との重複関係から縄文期の遺構と捉えられる。遺構の性格については不明である。

５号土坑

Ｂ区中央のＮ75･W150グリッドに位置し、Ⅳa層において確認された。４・６号土坑と重複しており、これらのいずれよりも新しい。また検出されたのは北西端の一部に過ぎず、全体形は判然としない。検出された範囲から推定すると開口部は径3.6mと周囲のものより比較的大型である。断面形は逆台形を呈し、深さは確認面から最大で72cmである。堆積土は4層に細分された。１層は締まりが強く、粘性が中程度、黄褐色と明褐色の粒を混入する黒色土である。２層は締まりが強く、粘性が中程度の黒色土で、明褐色の粒を少量混入する。３層は締まり、粘性ともに中程度の黒色土で、明褐色の


1号
N 121
W 37
a
a′
88.100m
耕 作 土
1
2号
N 81
W157
89.000m
3号
N 155
W161
89.000m
4・5・6・7号
N 74
W153
5号
7号
4号
6号
88.800m
耕 作 土
8号
S 1
E 1
87.000m
9号
N 7
W16
87.200m
10・11号
S 51
W10
87.000m
12号
N 187
W 11
87.400m
盛 土
13号
N 7
W16
b
b′
89.000m
0
1：60
4m

第20図　土　坑

粒および浮石を混入する。４層は締まり、粘性ともに中程度の黒褐色土で黄褐色の粒を微量混入する。いずれも自然堆積と考えられる。堆積土中から石器（214）が出土しており、縄文期の遺構と捉えられる。

６号土坑

Ｂ区中央のN75･W155グリッドに位置し、Ⅳa層において確認された。５号土坑と重複しており、そのどちらよりも古い。重複によりその大半を破壊され、開口部は1.2m程度が残存している。断面形は逆台形を呈し、確認面からの深さは30cmである。堆積土は断面図にはあらわれないが、単層で、締まりが中程度だが粘性が強く、浮石を微量に混入する黒褐色土が堆積していた。単層のため自然堆積か否かは不明である。遺物の出土はないが、５号土坑との重複関係から縄文期以前と捉えることができる。遺構の性格については不明である。

７号土坑

Ｂ区中央のN75･W150グリッドに位置し、Ⅳa層において確認された。５・６号土坑と重複しており、６号より新しく、５号よりも古い。遺構は調査区外に続いており、北西端のみの検出となっている。推定規模は長さが1.88m、深さが確認面から46cmである。断面形は階段状になっており、２箇所の平坦面を有している。堆積土は２層に細分される。１層は締まりが強く粘性が中程度の黒褐色土で、黄褐色粒を微量混入する。２層は締まりが弱く粘性が中程度の黒色土であり、水酸化鉄、黄褐色粒を混入する。遺物は出土しなかったが５号土坑との重複関係から縄文期以前とすることができる。遺構の性格については不明である。

８号土坑

Ｃ区西端のＮ５・０グリッドに位置し、Ⅳa層において確認された。北端が調査区外に延びており全体の形状は確認できなかったが、不整な長楕円形になるであろう。検出した長さは1.32m、幅76cm、確認面からの深さは18cmである。断面形はやや不整の逆台形で、底面短軸が東側に緩やかに傾斜している。堆積土は単層で締まりが中程度、粘性が弱く、浮石、黄褐色粒、焼土粒を混入する黒色土が堆積していた。人為堆積の可能性がある。遺構の性格については不明である。

９号土坑

Ｄ区中央のＮ５～W15・20グリッドに位置し、Ⅳa層において確認された。他遺構との重複は確認されていない。平面形は1.56×0.66mの長楕円形を呈し、断面形は丸みを帯びた逆台形で、深さは確認面から16cmである。堆積土は単層で締まりが強く粘性が中程度の黒褐色粘土であり、水酸化鉄を混入する層が堆積していた。単層のため自然堆積か否か判断がつかない。出土遺物がなく、時期、性格ともに不明である。

10号土坑

Ｄ区中央のＳ50～W10からＳ55･W15グリッドに位置し、Ⅳa層において確認された。11号土坑と重複しており、これよりも古い。開口部は1.16×0.56mであり、平面形は中央がくびれる瓢箪形を呈する。断面形は半円形で深さは確認面より20cmである。堆積土は３層に細分される。１層は締まりが強いが粘性が弱い黒色土であり、焼土粒、黄褐色粒を混入する。２層は締まりが強いが粘性が弱い暗褐

色土であり、黄褐色土粒を多量混入する。３層は締まりが強いが粘性が弱い黒褐色土であり、黄褐色粒を少量混入する。堆積の状況からいずれも人為堆積の可能性がある。出土遺物がなく、遺構の時期、性格ともに不明である。

11号土坑

Ｄ区中央のＳ50～55･W10グリッドに位置し、Ⅳa層において確認された。10号土坑と重複しており、これよりも新しい。平面形は幅30cmの溝状で、一部調査区外にのびている。調査区内では長さが60cmの範囲で検出された。断面形は半円形を呈し、深さは確認面から14cmである。堆積土は単層である。１層は締まりが強いが粘性が弱い黒色土であり、黄褐色土粒を混入する。単層のため自然堆積か否かは不明である。出土遺物がなく、時期、性格ともに不明である。

12号土坑

Ａ区北のＮ185･W15グリッドに位置し、Ⅴ層において確認された。他遺構との重複は確認されていない。両端が調査区外へ延び、全容が検出されていないため溝跡の可能性もあるが、遺物の集中的な出土状況等を加味して土坑と推定している。土坑であれば長楕円形を呈するものと推測される。開口部は2.36×2.2mである。断面形は逆台形を呈し底面はやや起伏を持つものの概ね平坦である。深さは確認面から52cmである。堆積土は２層に細分される。１層は締まりが中程度で粘性が強い灰褐色粘質土で水酸化鉄、炭化物を多量混入する。２層は締まりが弱く粘性が中程度の黒褐色粘質土で木片、炭化物を混入する。いずれも水平堆積を呈しており人為堆積と考えている。遺物は近世陶磁器や、木製椀、下駄などの木製品が大量に出土している。また一部を炭化した炭化材なども出土している。出土遺物からみると本遺構は近世以降のものであると捉えられる。なおＡ区の西方には新平屋敷遺跡が隣接しており、これに関連した生活遺物の廃棄坑と考えられる。

13号土坑

Ｄ区北のＮ95･W15グリッドに位置し、Ⅳa層において確認された。他遺構との重複は確認されていない。主軸方位はＮ－47°－Ｅで、長さが3.64m、幅が0.2mの溝状に掘り込まれている。深さは確認面から76cmで、底面の形状はほぼ平坦である。堆積土は６層に細分される。１・２・４・６層は締まり粘性ともに中程度から強い黒褐色粘質土で黄褐色のブロックを混入する。２層にはやや大きめの黄褐色ブロックが混入する。３・５層は基本土層Ⅳ層と近似しており、壁面の崩落土と考えられる。いずれも自然堆積であろう。時期を決定する遺物の出土はないが、その形状より縄文期の陥し穴のと考えられる。（横井）

Ｄ　井戸跡

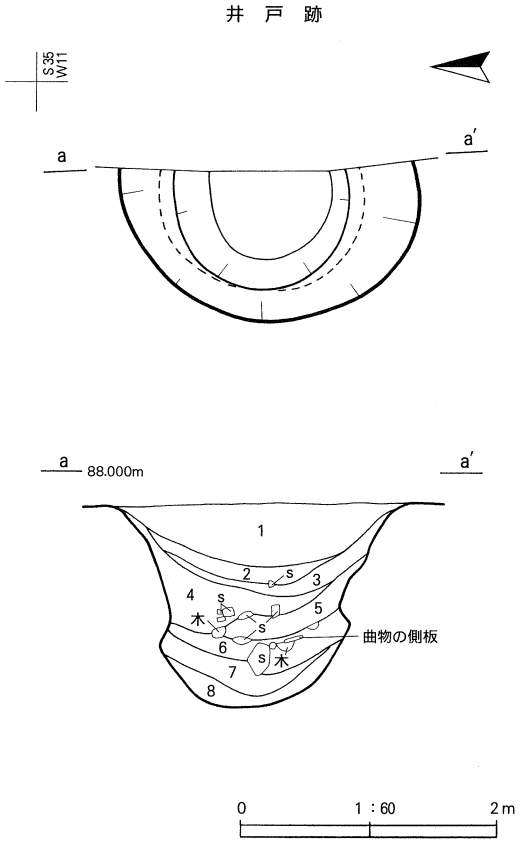
Ｄ区より１基検出されている。

１号井戸跡（第21図・写真図版13）

Ｄ区中央付近のＳ45・W10グリッドに位置し、Ⅳa層において確認された。他遺構との重複は確認されていない。全体のおよそ半分が調査区外にあり、西側のみが検出されている。削平のためか調査範囲では井戸枠および周囲のピットが確認できず、上屋の有無は不明である。形状は開口部径2.32mのほぼ円形と考えられ、深さは確認面から1.6mに及ぶ。底部に向かって徐々にその径は狭まっていくが底部付近で一旦広がり、断面形は碇型の形状を見せる。堆積土は８層に細分でき、底部付近では水

分を多く含んだヘドロ状の土が多く見られる。１層から３層は締まり、粘性ともに弱い黒褐色シルトである。１層には黄褐色ブロックの他に径２～３cmの円礫が混入する。２層には砂を一部に包含し、３層には径１cm程度の円礫を少量混入する。４層は締まりが弱く粘性が中程度の黒褐色粘質土で、５層は締まり粘性ともに弱い黒色のシルトである。６層は締まりが弱いが粘性が中程度の黒褐色シルトであり、青灰色粘土ブロックを含む。７層は締まりが弱く粘性が中程度の青灰色シルトであり、径３～５mm程度の小礫を混入する。８層は締まりが強く粘性が弱い黒色シルトである。これらはいずれもレンズ状に堆積しており、自然堆積によるものと理解される。遺物は漆塗り椀、石臼、曲げ物の側板があり、これらの遺物は礫とともに堆積土中位よりまとまって出土している。５層および６層の堆積段階で一括して廃棄されたものと考えられる。

Ｄ区の調査区をはさんで西側は、新平屋敷が現在の位置に移築される前に建てられていた場所といい、本遺構はおおよそ18～19世紀のものと推定される。これは出土遺物の年代観にも符合するものである。　（横井）



第21図　井戸跡

Ｅ　ピット（小穴）

Ｄ区においてⅣa層よりピット（小穴）が合計43個検出されている。しかし、そのほとんどが確認調査区に位置し、中央より検出された８基のみを調査している（第８図）。調査したものに関しては径13～28cm、深さ４～41cmであり、柱痕の確認されたものも存在した。したがってそのほとんどが柱穴であると考えている。堆積土はほとんどが黒色粘質土の単層で、炭化物や黄褐色のブロックが混入していた。堆積状況からみると人為堆積であろう。調査区内においては、これらの柱穴（確認調査分も含めて）から建物の構造が想定できない。時期は出土遺物もなく不明であるが、周辺に１号井戸跡が検出されていることから近世に属するものかもしれない。

Ｆ　その他

土器廃棄場（ＳＸ01）（第22図・写真図版13）

Ａ区南端からＦ区中央部にかけて位置する。グリッドはN110～130・W10～20である。６ｍ西側には１号竪穴住居跡竪穴住居跡が、５ｍ西には２号竪穴住居跡が位置している。

本遺構の位置はⅣ層が東に向かって落ち込みはじめる地点であり、そこに堆積土である黒褐色の広がりとともに多量の遺物を確認した。後述のように自然地形を利用した土器廃棄場所と捉えている。確認できた範囲は途中間隔を、南北に約29m、東西に８ｍ以上である。平面的にみると北方から三日

月状に屈曲して南方へ広がっているのがわかる。調査区において確認できた範囲はごく一部であり、とくに南北にはさらに延長していくと考えられる。地形的に見ても本遺構は低地（河川も含む）との境界付近に形成されたと考えられることからもそれが判断できる。したがって本遺構は完掘されたものではない。

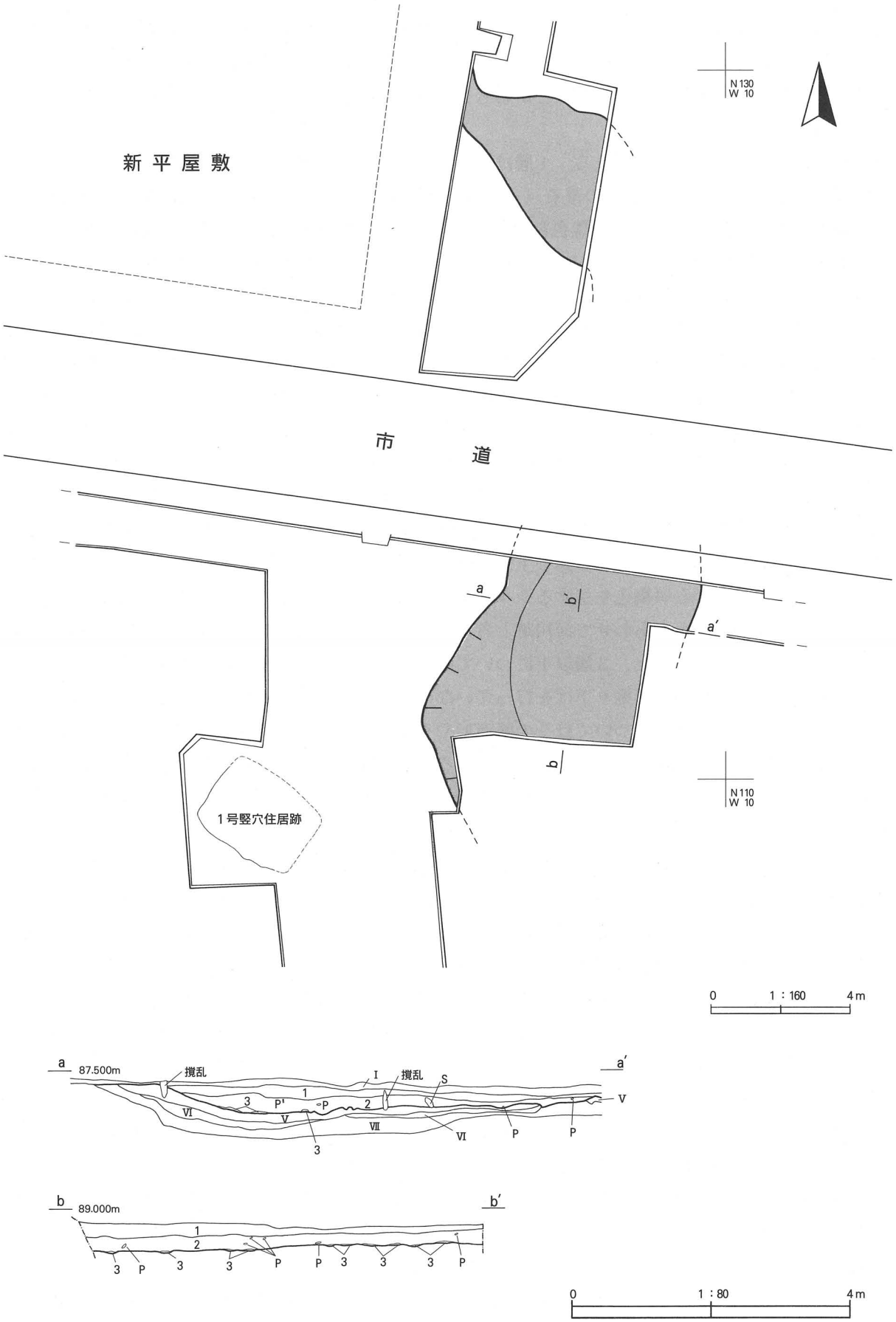
堆積土は以下の３層に分けられる。１層は黒色シルトであり、締まりが強く粘性が弱い。微量の黄褐色粒（φ１～２㎜）、ごく微量の浮石（φ１㎜）、褐鉄の粒を含み、小破片の土器を含んでいる。２層は締まりが中程度で粘性が弱い黒色粘質シルトである。少量の粘土粒（φ５～10㎜）、焼土粒（φ５～10㎜）、多量の炭化物（φ５～10㎜）を含んでいる。また、土師器片も多量に含んでいる。３層は灰白色火山灰で締まり粘性ともに弱い。径２～３㎜程度の粗粒である。これらは十和田ａテフラと判断されている（Ⅳ-２）。層厚は１㎝にも満たず、凹凸のある底面のその両方にうすく堆積している。

このうち１・２層から遺物が多量に出土している。１層は現耕作土であるⅠ層を除去後すぐに表出した層であり、細かな破片土器が多いことや層の特徴が耕作土に似ていることからあるいは攪乱を受けた層かもしれない。したがって、純粋に包含層と確認できるのは２層のみとなる。２層は層厚が最大で30㎝あり、東にゆくに従って徐々に薄くなっていく。検出面（Ⅴ層面）のレベルは87.5～87.6ｍの間にほぼ水平に近いため、この遺構の東側はかなり削平されていることがわかる。また、１層の直上には現耕作土であるⅠ層と、調査時には圃場の整備工事が進行していたため、整備工事による盛土層が存在している。いっぽうで、３層の下位には基盤層であるⅧ層までのあいだに３つの層が確認される。いずれも黒色から黒褐色を呈するシルトから粘土層である。この部分のⅧ層面は溝状にくぼんでおり、堆積土の特徴ともあわせて河川跡と考えられる。したがって、本遺構は河川跡を利用して形成されたと考えられる。また、３層以下についてはトレンチを入れて確認したが遺物が出土せず自然堆積と判断したためⅧ層まで掘り下げを行っていない。そのためこの３層を地山面と仮に捉えて基本土層としている。１・２層についてはその断面形やその性格から人為堆積と考えられる。３層は分析の結果十和田ａテフラであることが確認されている。断面観察の結果、粒径や質感が既調査のそれと類似する点、凹凸のある底面にうすく一様に堆積している点などから１次堆積である可能性が高いと考えている。

１・２層から合計133,499.72ｇの土器が出土している。小破片のものが多く、破片数の割には接合率が悪く、復元できる個体は相対的に少ない。また、破片土器、とくに２層出土のそれには摩耗が認められず、他所から流出した可能性は低いと考えられる。これらの点から出土土器は付近から廃棄されたと考えられる。本遺構のＡ区部分については、Ⅰ層除去後には火山灰のブロックが確認できたことから多くが削平されたと考えている。出土する遺物についてはⅠ層との境に多く、摩耗する破片がほとんどであった。したがって、これらの破片はこの遺構に由来すると思われるが、その後に何らかの（とくに耕作によって）影響を受けていることがわかる。遺物の取り上げは１層を上層、２層を中・下層に分けて取り上げている。遺物出土大半を占める２層が単層を示し、比較的層厚が薄いことから出土遺物はある程度一括性をもっていると考えられる。そのほか縄文土器がわずかではあるが出土している。細片のため詳細は不明である。

形成過程としては、Ⅷ層面を下面とする河川に黒褐色を基本とする層が堆積し、河川としての機能は損なわれる→ある程度埋没後、湿地状となる→火山灰が降下→土器の廃棄→開田による削平、という流れが想定できる。

このような遺構の性格として、土器の出土状況、地形、住居跡との関係から廃棄場所（土器捨て場）と考えることができるが、それに祭祀行為が付加されていた否かは不明である。


新平屋敷
N 130
W 10
市　道
a
a′
b
b′
1号竪穴住居跡
N 110
W 10
0
1：160
4m
a
87.500m
a′
撹乱
I
撹乱
S
1
3
P
P
2
V
VI
V
VII
VI
P
P
3
b
89.000m
b′
1
2
3
P
3
3
P
P
3
3
3
P
0
1：80
4m

第22図　土器廃棄場

時期については、底面に堆積している十和田ａテフラが１次堆積の可能性が高いことと、出土土器の年代から10世紀中葉以降が想定できる。

なお、本来はＦ区幅２ｍのみの調査であったが、調査時において南北に広がることが予想されたため、工事の際に影響を受けそうな範囲について最低限調査区拡張し調査を行った。そのため、拡張部分では土器廃棄層のみを調査したに過ぎず、３層以下の状況は正確には不明でありⅧ層面までは掘り下げを行っていない。

（２）確認調査

今回の調査はＤ区において確認調査もあわせて実施している。この範囲は舗装されない農道部分であり、掘削が検出面まで及ばないことから遺構の確認を行った後に盛土保存となる部分である。なお、Ｄ区のうち東から２ｍ部分がほぼ本調査、残りが確認調査区となっており、隣接して両者が存在している。そのため、確認調査区内であっても本調査区域から延長する遺構についてはそのまま本調査をおこなった。本調査区域を跨がない遺構については検出のみをおこなって記録している。これが今回の確認調査部分となる。また１号竪穴住居跡が検出された区域は確認調査区内であったが削平が著しく、現地表面から検出面までの深さが10～15cmと非常に浅く工事によって壊される可能性があったため確認調査範囲であったが併せて調査をおこなっている（第９図）。

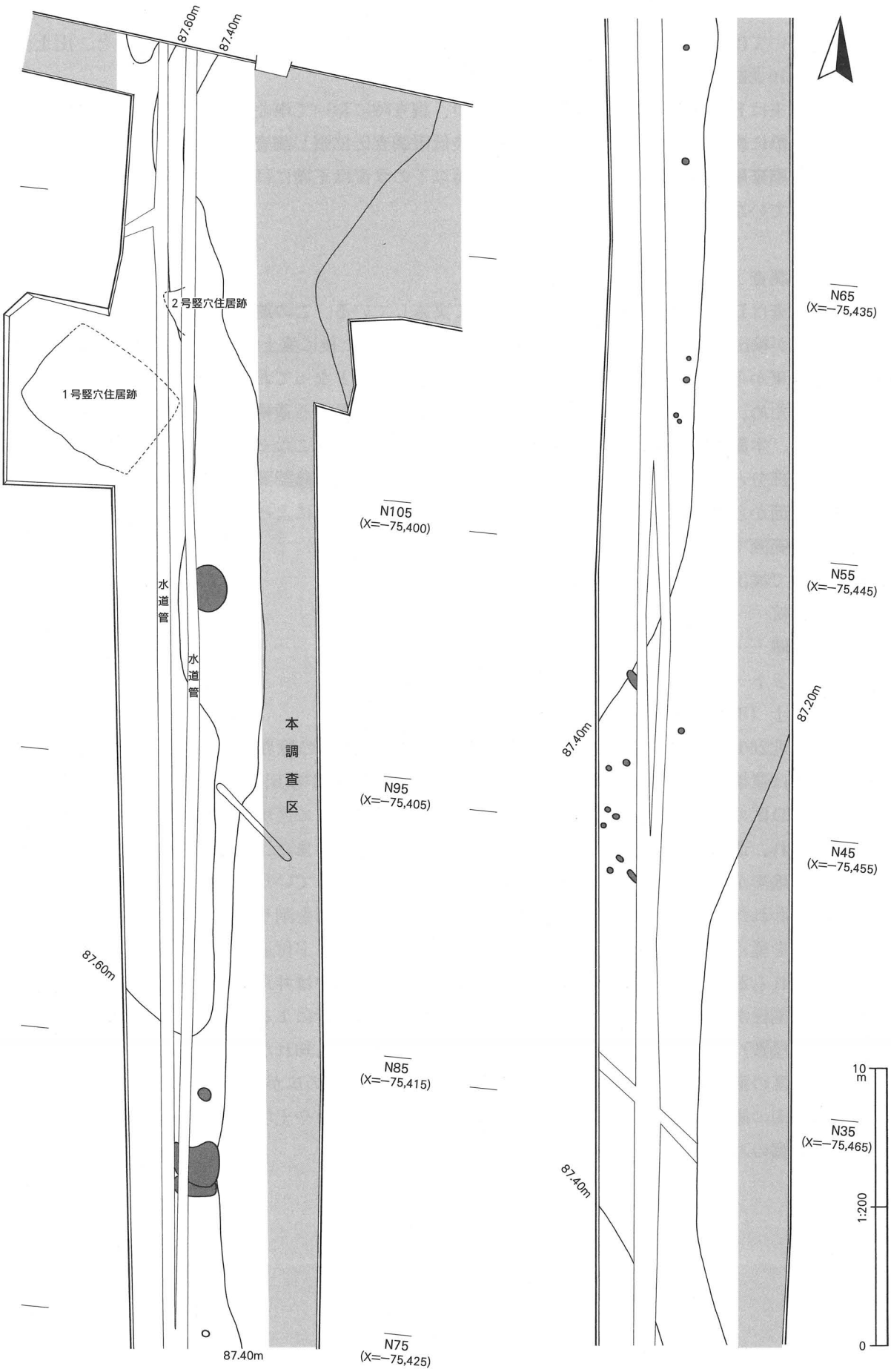
確認調査で検出された遺構は下記の通りである。

土坑……６基
溝跡……１条
ピット……35基
焼土（不明遺構）……２箇所

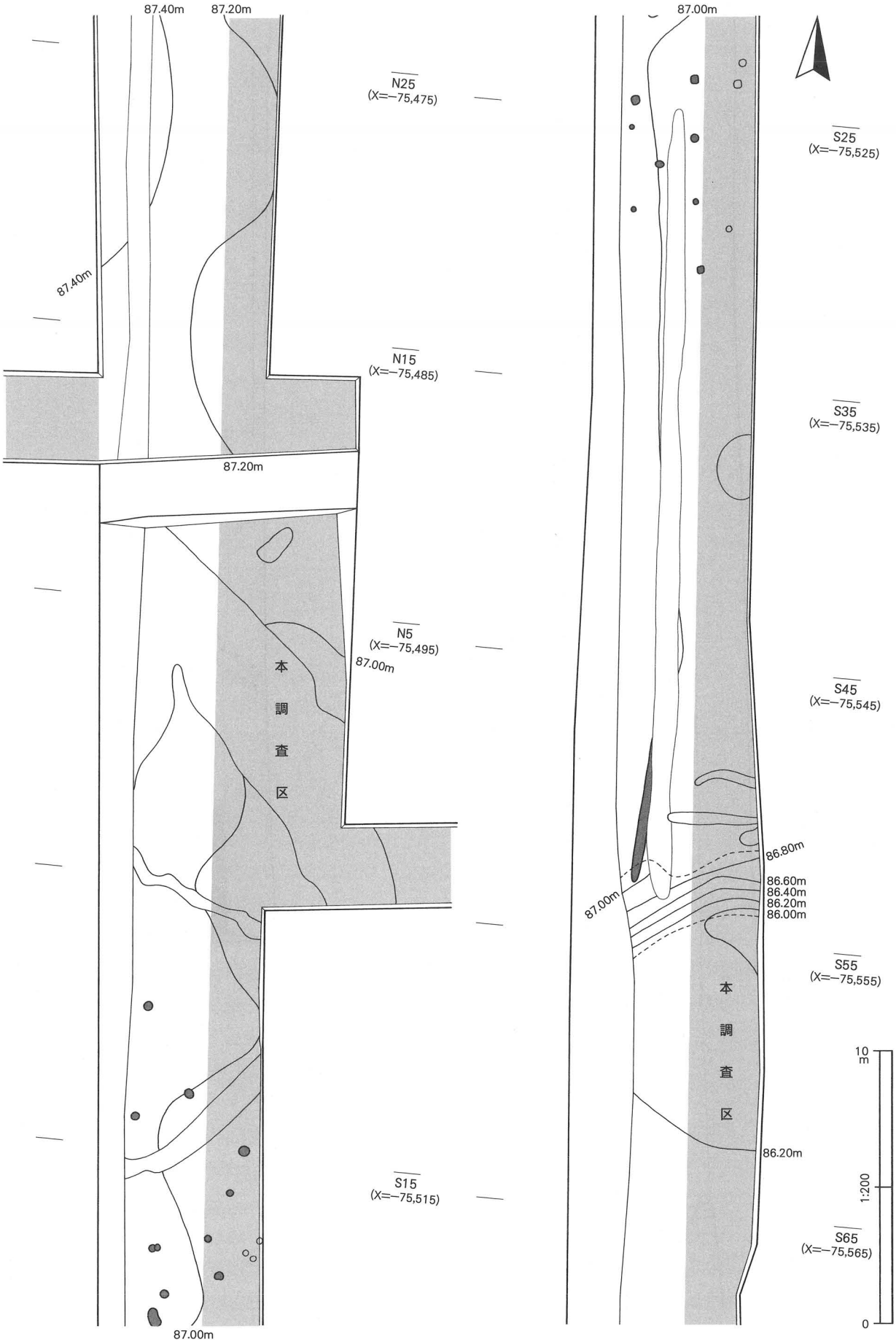
Ｄ区は南北260ｍと東西70ｍの調査区からなり、丘陵と低地との境界にあたる区域でもある。確認調査の結果は遺構密度が非常に低いことが判明した。竪穴住居跡が検出されたＤ区北側は標高が87.60ｍであり、Ｄ区のなかではもっとも高い地点である。そのためこの区域は大規模な削平が行われていると予想され、遺構密度が見かけ上低くなっていると思われる。また、この区域の東側約４ｍ幅の範囲は大きく地形が損なわれており、検出面が約20cm以上も下がっていた。かつて田面の高さに合わせて削平が行われたと推定され、現農道部分は基本的には前の地形を削り残す状態で残存しているが、一部は削平を受けていたことがわかる。ピットはN45W20グリッド付近とＳ55W15グリッド付近に集中する。これらが柱穴か否かは不明であるが、とくに後者の集中は井戸との関係もあり建物を構成する柱穴の可能性が高い。なおこのＳ55W15グリッド付近は地権者によると、かつてこの付近に以前の屋敷（新平屋敷）があったとされる。あるいはこれらの痕跡かも知れない。

焼土はＤ区の南端に2箇所が近接して位置する。それぞれ焼土の広がりが大きく炉とは考えにくい。しかし検出面の観察のみのため詳細は不明である。そのほか溝跡や土坑などは調査区内に点在しており、表面観察のみではその性格等は不明とせざるを得ない。

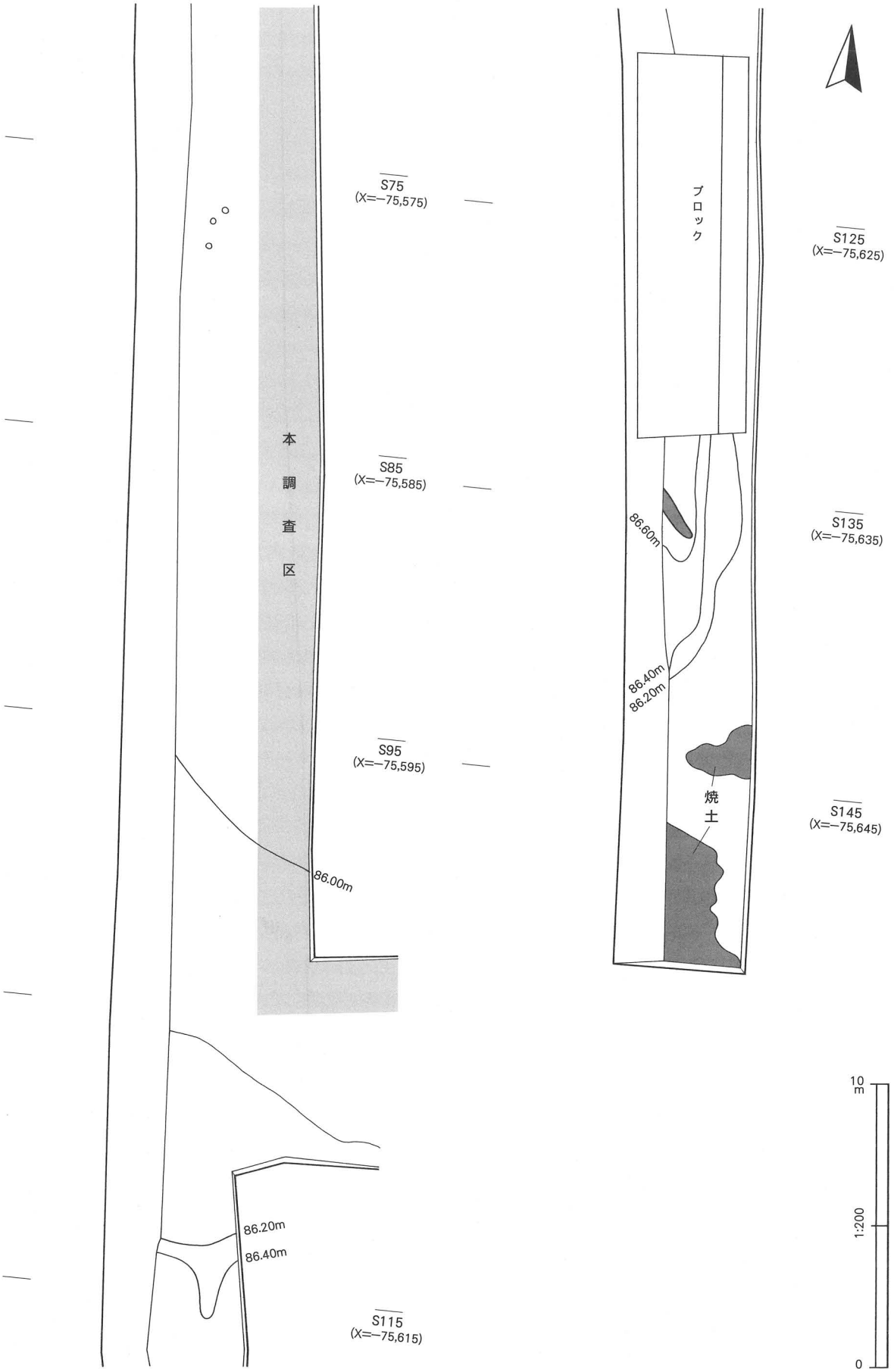
（西澤）


87.60m
87.40m
2号竪穴住居跡
1号竪穴住居跡
水道管
水道管
本調査区
N105
(X=−75,400)
N95
(X=−75,405)
N85
(X=−75,415)
N75
(X=−75,425)
87.60m
87.40m
N65
(X=−75,435)
N55
(X=−75,445)
N45
(X=−75,455)
N35
(X=−75,465)
87.40m
87.20m
87.40m
10
m
1:200
0

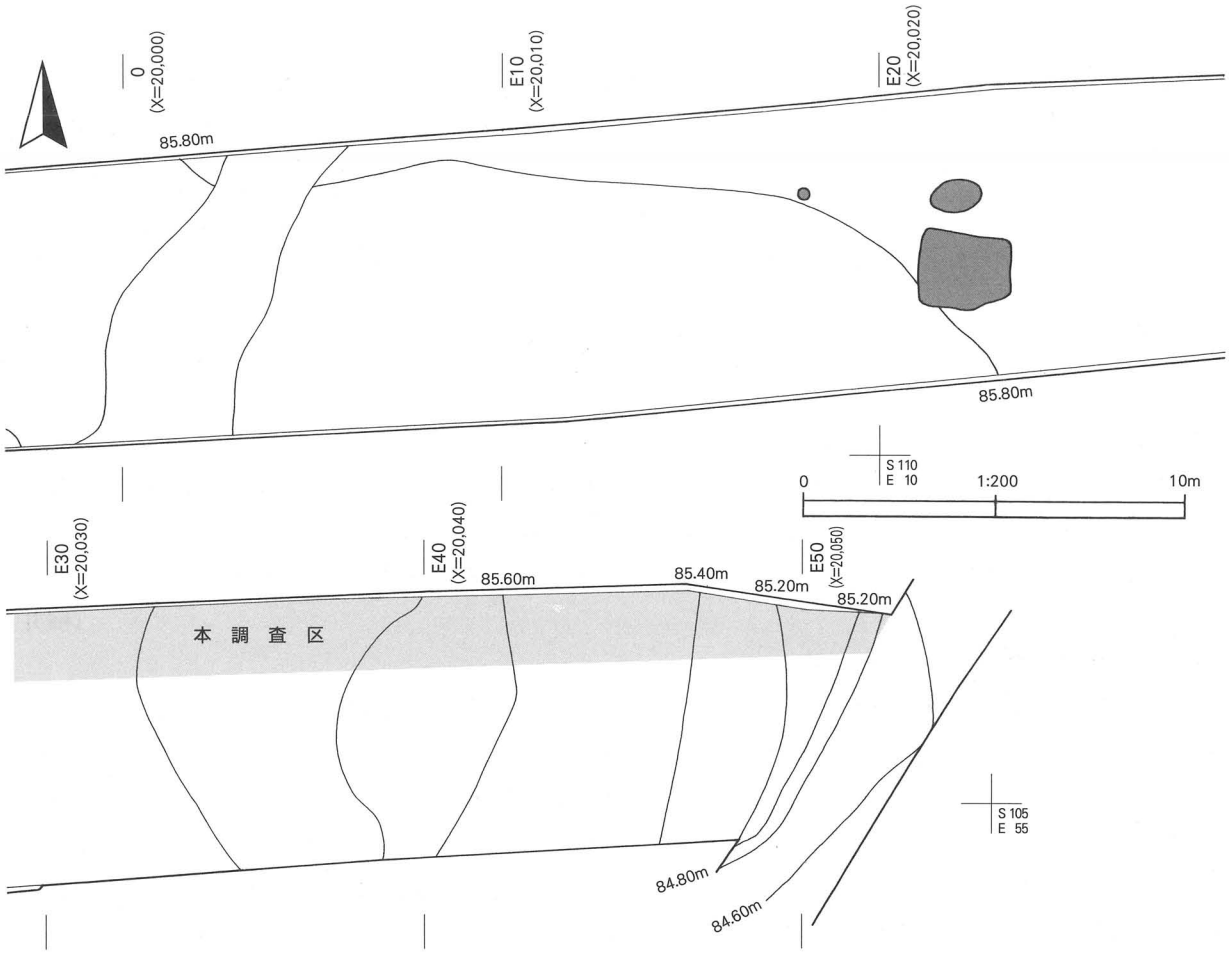
第23図　確認調査１


87.40m
87.20m
87.00m
N25
(X=−75,475)
N15
(X=−75,485)
N5
(X=−75,495)
S15
(X=−75,515)
S25
(X=−75,525)
S35
(X=−75,535)
S45
(X=−75,545)
S55
(X=−75,555)
S65
(X=−75,565)
本調査区
86.80m
86.60m
86.40m
86.20m
86.00m
10 m
1:200
0

第24図　確認調査２


S75
(X=−75,575)
S85
(X=−75,585)
S95
(X=−75,595)
S115
(X=−75,615)
S125
(X=−75,625)
S135
(X=−75,635)
S145
(X=−75,645)
本調査区
ブロック
焼土
86.00m
86.20m
86.40m
86.60m
86.40m
86.20m
10
m
1:200
0

第25図　確認調査３



第26図　確認調査４

（３）出土遺物

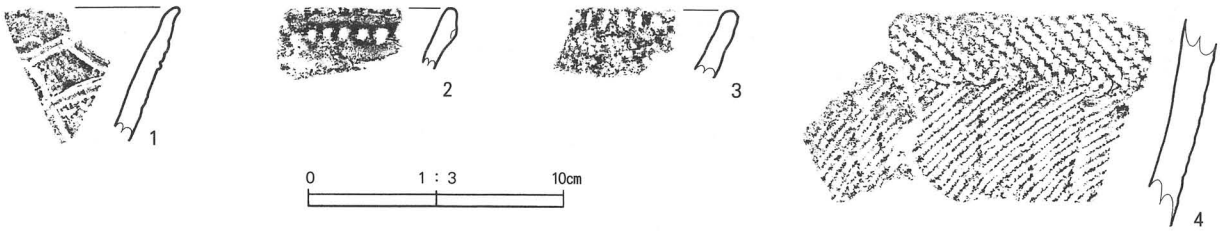
今回の調査では土器廃棄場を除いて、遺構からの遺物の出土はきわめて少ないため、出土遺物についてはここでは一括して説明している。今回の調査では合計178,984.2ｇの遺物が出土した。内訳をみると縄文土器6,360.4ｇ、平安時代の土器143,759.19ｇ、陶磁器16,831.69ｇ、土製品324.3ｇ、石器・石製品9,472.52ｇ、金属製品49ｇ、木製品が1,900.8ｇとなる。

Ａ　縄文時代の土器（第27図）

縄文時代の土器については出土位置がＤ区南半にほぼ限定されており、総出土重量は6,360.4ｇと出土総重量の３％に過ぎなかった。その中から口縁部を中心に文様など特徴ある４点を図化し、掲載している。

１～３はいずれも口縁部破片で16号溝跡から出土している。１は半截竹管状の工具による平行沈線が施される。破片の為全体の文様構成は不明であるが、斜めに施文された各線が斜格子状の文様を構成している。また内面の口縁直下には沈線状の段差が確認される。２は口縁直下に帯状の張り出し部を有し、その上から刺突が施されている。縄文の有無は器面が摩滅しており不明である。３は口唇部に刻目を有する。器面が摩滅しており定かでないが、体部外面にはLR単節斜行縄文が施されていた痕跡が観察される。４は深鉢の体部破片で遺構外からの出土である、結束羽状縄文が施され、胎土内には植物性繊維の混入が見られる。

以上、これらの土器はいずれも破片のため全体の文様、器形にまで言及できず、また一括性のある



第27図　出土遺物１

出土状況が見られなかったため現行の土器型式に当てはめることは困難であった。しかし、３以外は概ね前期大木式土器の特徴の範疇に類するものかもしれない。また補足であるが10号溝跡から比較的まとまって縄文土器が出土していたが、器面の磨耗が激しく図化に耐えられなかった。それらは口縁部の形状などから前期、大木２ｂ式のものと考えられるが、以上の理由のため断定はできない。

（横井）

Ｂ　平安時代の土器（第28～33図）

平安時代に属する遺物のうち土器（土師器）についてこの項で説明する。当該期における総量は重量でみると143,759ｇある。これは今回の出土量のうち80％を占める。内訳は重量比でみると差が著しくなると考えられるため、個体数で比較した。個体数の判定には１／12底部計測法によった。推定総最低個体数は411個体となる。そのうち土師器が409個体、須恵器が３個体と土師器が大多数を占める。図示したのはこれらのうち136点(4,820ｇ)である。なお、平安時代の土器のほとんどは土器廃棄場より出土している。１号竪穴住居跡出土遺物は細片ながら可能な限り図化している。

土師器杯　土師器には杯、杯蓋、高台杯、甕があり、須恵器には杯、壺、甕がある。土師器杯類については内面に黒色処理が施されるものと施されないものの２者がある。便宜的に両者を区別して説明していく。

５～14は器高が３cm以下のものを一括している。これらは便宜的に小型杯としよう。５～８は緩やかに内彎する体部をもつ器形である。これらは８を除いて口径が10cm前後、器高２cm程度である。９はやや器形が他とは異なっており破片でもあるため他の類に属するかも知れない。10～13は口縁部が外反するもので、体部はゆるやかに内彎する形態である。14は底部から口縁部まで大きく外に開く外形である。調整はいずれも内外面ともに回転ナデが施され、底部切り離し技法は糸切りである。

15～19は緩やかに内彎する体部、口縁部をもつものである。口径でみると12～13cm前後のもの（15・16）と14cm～15cm前後のもの（17・18）に分けられる。19は口径が16cm以上もあり、他よりも2周り以上大きい。調整はいずれも内外面ともに回転ナデが施され、底部切り離し技法は糸切りである。15・18・19は比較的細かなロクロ目をもつ。

20～27は体部がやや直線的に開く形態をもつものである。20以外は内外面とも回転ナデが施される。口径をみると、それぞれ12～13cm、14cm～15cmに数値がまとまるようである。20は体部外面に横位にケズリが施され、ロクロ調整が確認できず、やや異質な感がある。底面は再調整が施されており、本来はムシロ痕が存在した可能性が高い。28～35は緩やかに内彎する体部をもつが、底部がやや突出する形態をもつものである。この底部の突出はこの部分強いナデが施されるためであり、器形の変換点ともなる。このうち28～31と32～35は口縁部の形状により２分される。前者は口縁部が内彎し、後者は外反する。口径をみると、11cm前後、12～13cm前後、14～15cm前後にまとまりが認められるが、ほとんどは12～13cmの間におさまる。口径が小さい28は体部上面に墨書が認められるが、字形は不明である。

36～39は底径などから小型の杯類に相当すると推定されるものである。42・52と合わせて１号竪穴住居跡より出土している。

40～41は上述と同様にゆるやかに内彎する体部をもち、底部がやや突出するような形態であるが、底部が口径に比して小さいものとして区別している。口縁部の形態により同様に細分される。調整は内外面ともに回転ナデのみであるが、ロクロ目が比較的なめらかである。

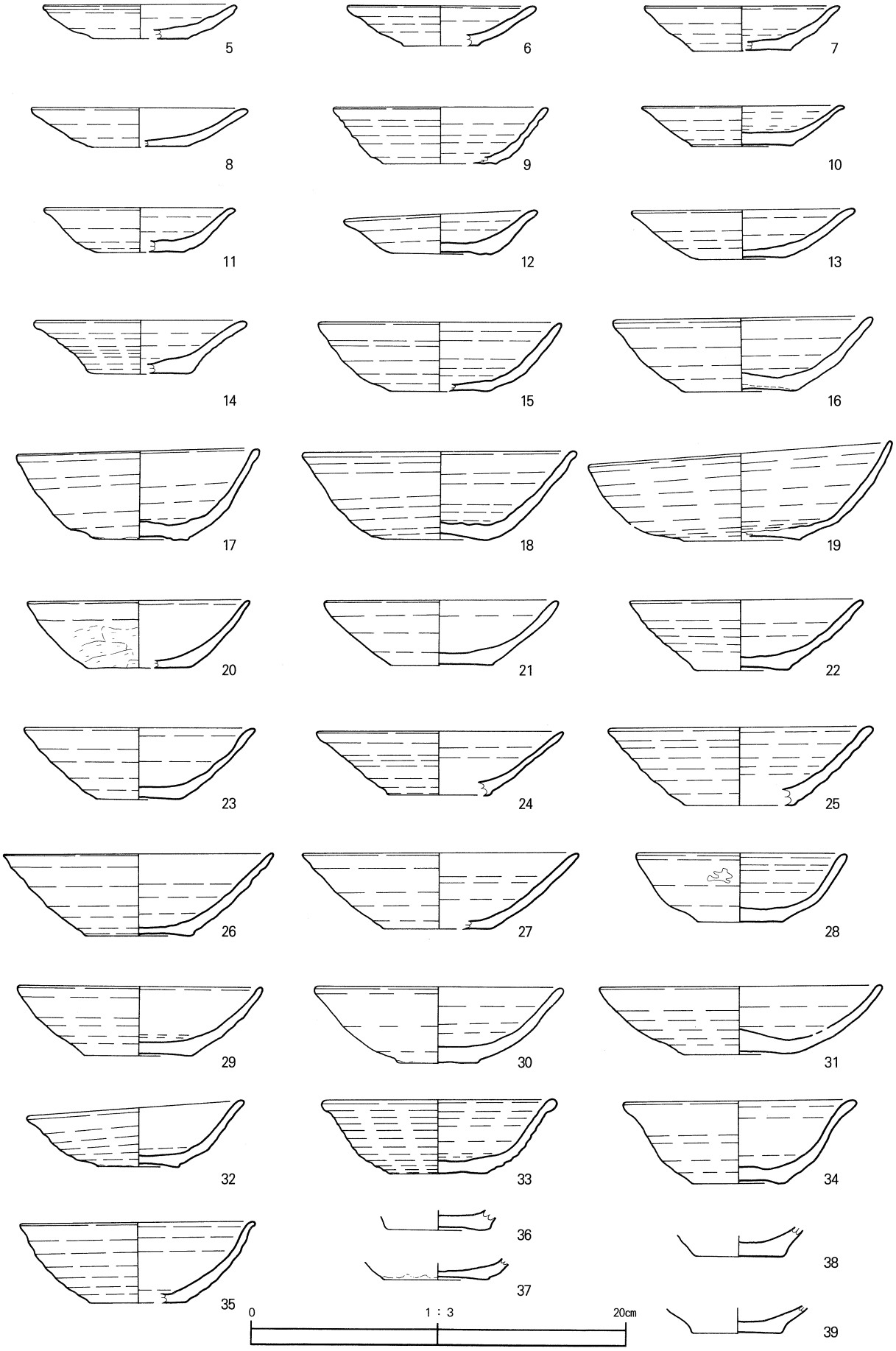
44～52は高台杯である。いずれも口縁部が外反傾向にあり、杯部の身が深いものである。口径でみると13cm前後と15cm前後の2者に分けられる。高台部は残存率が悪く高さも不明なものが多いが、49～51のように脚高が２cm前後と比較的高いものと、47のように1.4cm程の低いものに分けられる。

53～65は内面に黒色処理が施される杯類である。54・55・57・60は底部からゆるやかに内彎する体部をもつ杯類である。口縁部はすべて内彎気味である。ロクロを使用しているかは判断が難しいが、使用していない可能性もある。調整は内外面ともに横位を基本とするミガキが施される。底部はケズリによって調整が施される。器厚が厚く安定感がある。口径をみると小（10cm）、中（13cm前後）、大（15cm前後）の３つに分けられそうである。56・58・61は底部がやや突出したような形態をもつ杯である。53は底部が欠損しており、あるいは別の形態を呈するかも知れない。これらは口縁部の形態でさらに細分される。調整は外面には回転ナデ、内面にはミガキ、黒色処理が施される。底部切り離し技法は糸切りが多いが61はケズリによる再調整が加えられる。

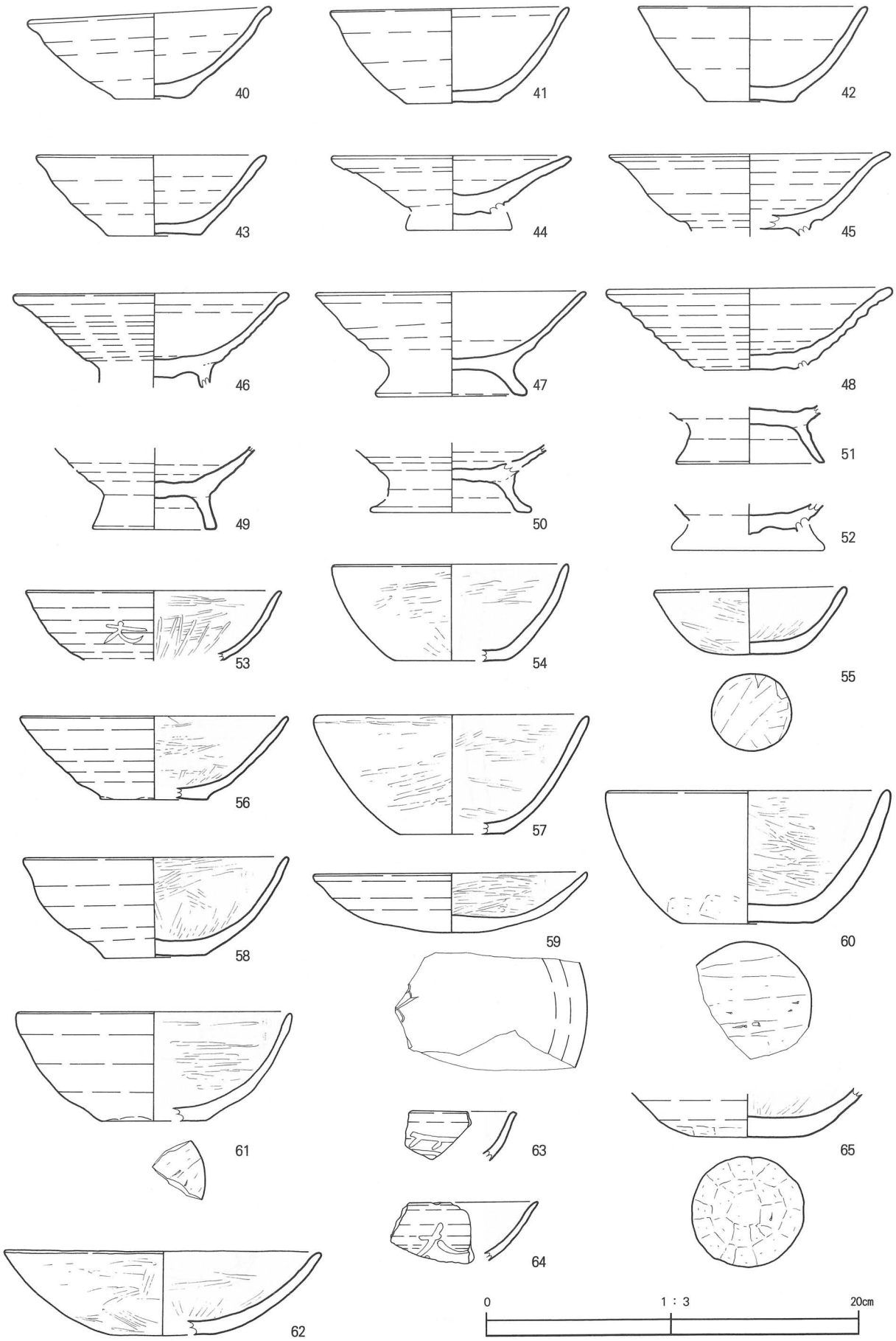
59・62は口径に比して器高が低い皿形を呈するもので、別に（皿として）分類すべきかも知れないが、ここでは杯類に含めている。59は外面に回転ナデの痕跡が残り、内面に横位のミガキが施される。62は外面に回転ナデの痕跡が確認できない。

65は杯類の底部破片と推定される。底部にはケズリによる再調整が同心円状に施されている。63・64は外面に墨書の痕跡が残る破片である。いずれも杯であり、63の字形は不明、64は文字の一部として「大」と読みとれる。

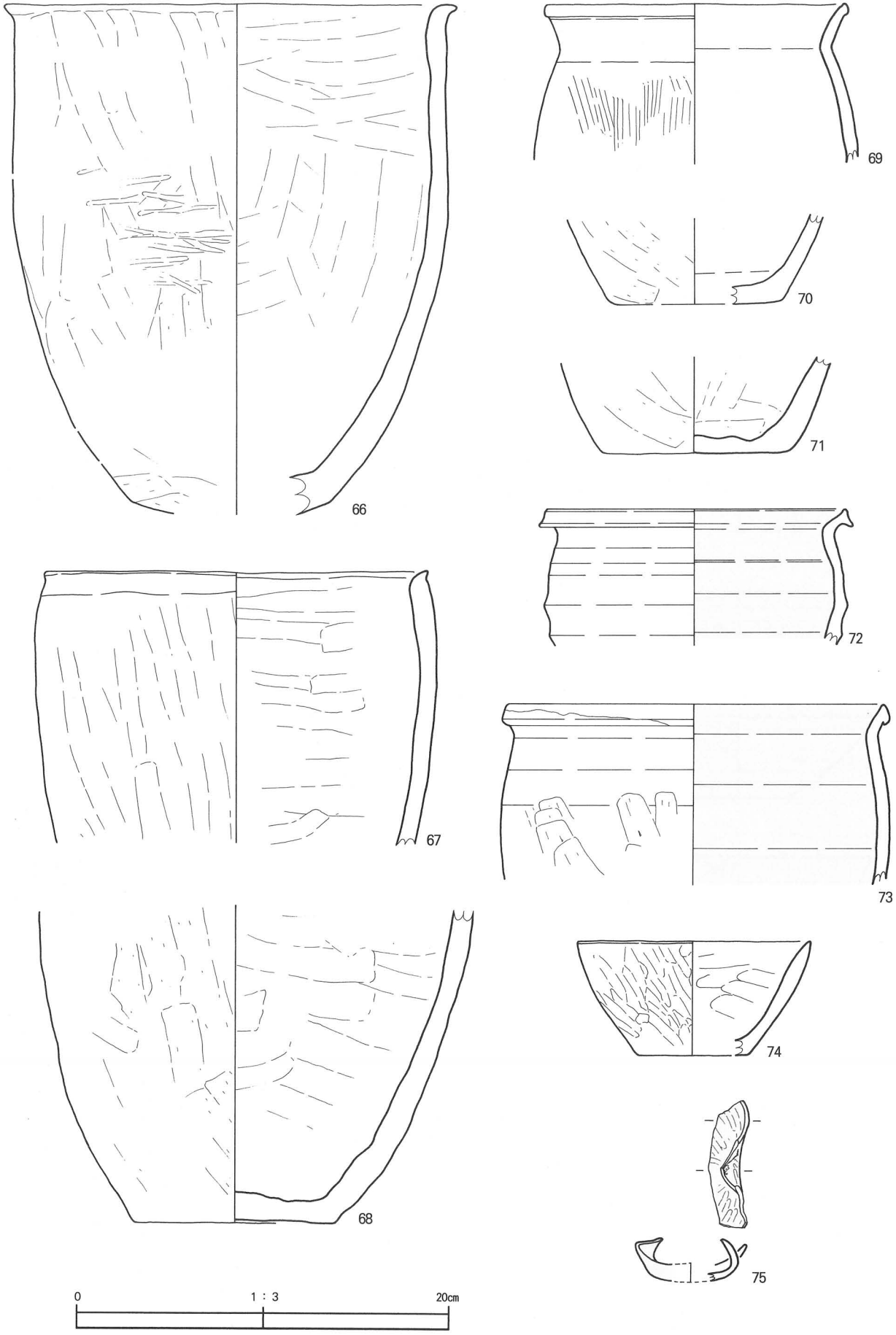
土師器甕　66～71・76～88は土師器甕である。図示可能なものは少なく、底部から口縁部まで図上で復元できる例は皆無であった。唯一66のみがおおよそ全体の様子がわかる。66はわずかに外方へ屈曲する口縁部と太い胴部、丸みを帯びた底部をもつ甕である。調整は外面にはヘラケズリ、ミガキが、内面にはヘラナデが施されている。ロクロは使用していない。67は口縁部から体部までの破片である。底部は欠損しており不明である。口縁部はヨコナデが施されるのみで、わずかに外方に曲げられている。調整は摩滅があるが外面には縦位のヘラナデが、内面には横位のヘラナデが施される。69は口縁部から胴中位までの破片である。口縁部の形状は端部をわずかに肥厚させており、玉縁状にみえる。外面にはハケメが施されている。68・70・71は胴部下位から底部にかけての破片である。いずれも外面にはヘラケズリが、内面にはヘラナデが施される。平底であり器厚が厚く安定感がある。そのため、これらはロクロ調整ではない甕の底部片と推定される。76から88は調整にロクロを使用する甕類である。全容がわかる個体はないが、口縁部の形態により細分されよう。76・77・81・84・85は口縁部がクランク状に屈曲する形状を呈する。屈曲の度合いが多様なため口縁部が内湾するものや外反するもの、直立するものなどがある76のみ胴部下位付近まで残存するためケズリが観察できる。78・79の口縁部の形状は上記に類似するが端部下端が垂下するのが特徴である。この部分は粘土紐を貼付して肥厚させた可能性がある。80は鍋の可能性があるがここでは甕類に一括している。いずれにしても口縁部のみの破片であり詳細は不明である。82・83・86・87は口縁部をわずかに屈曲させただけのいわゆる単純口縁をもつ甕である。82・83は口縁端部を丸くおさめているが、86・87は口縁端部に面が形成されている。88はいわゆる羽釜である。内湾傾向の口縁部に鐔が付される。89から128は底部に砂や


5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
0
1：3
20cm

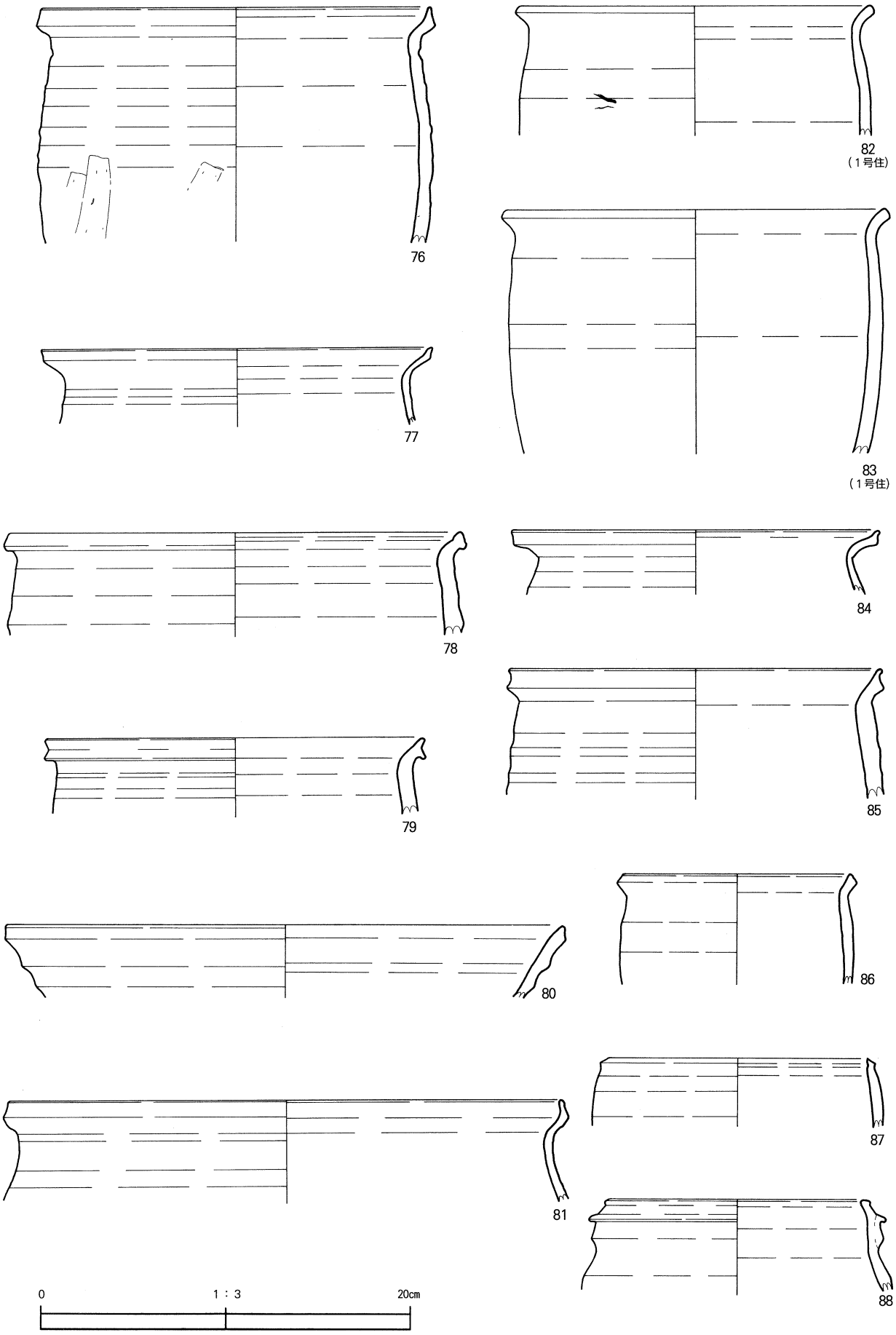
第28図　出土遺物２


40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
0
1：3
20cm

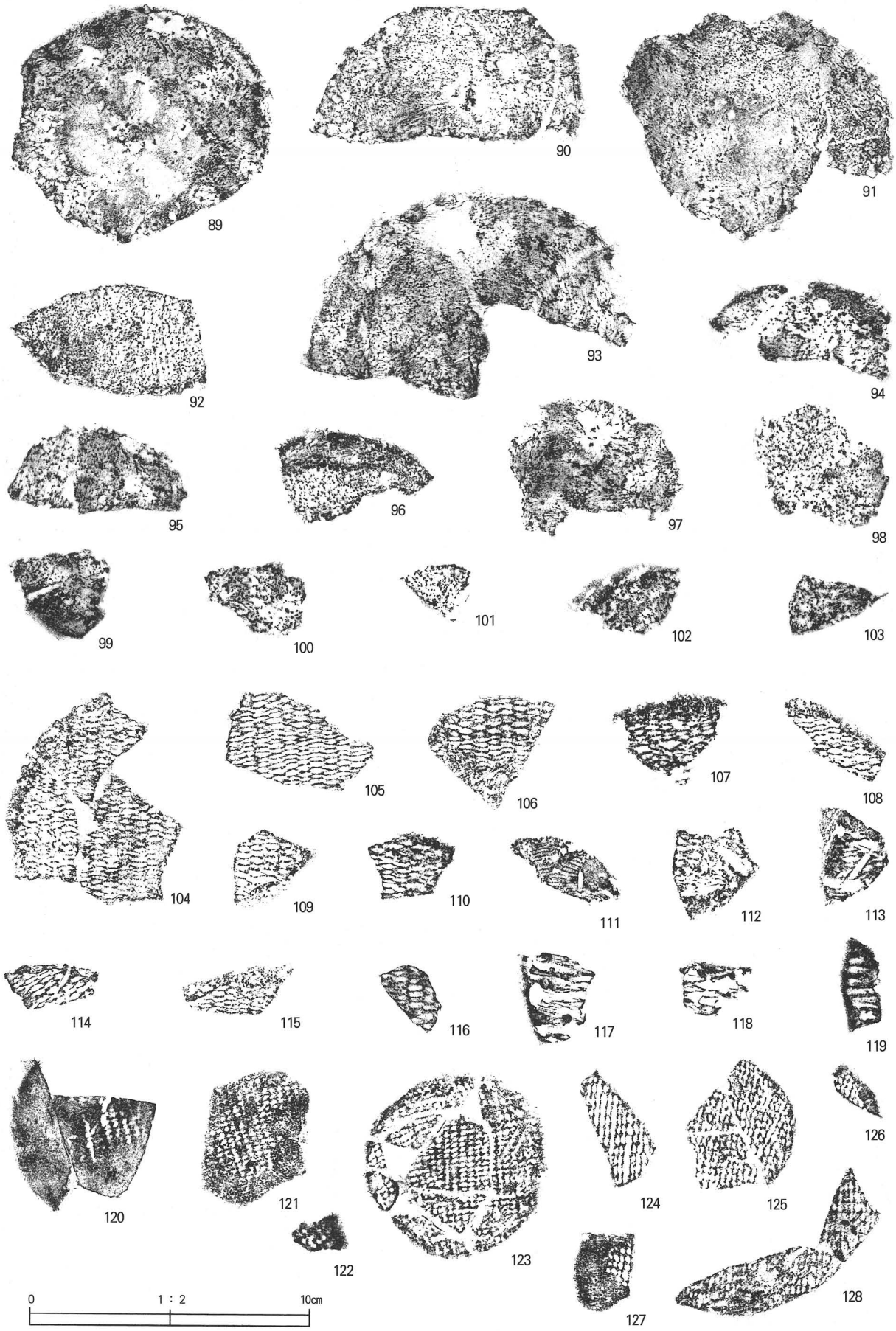
第29図　出土遺物３



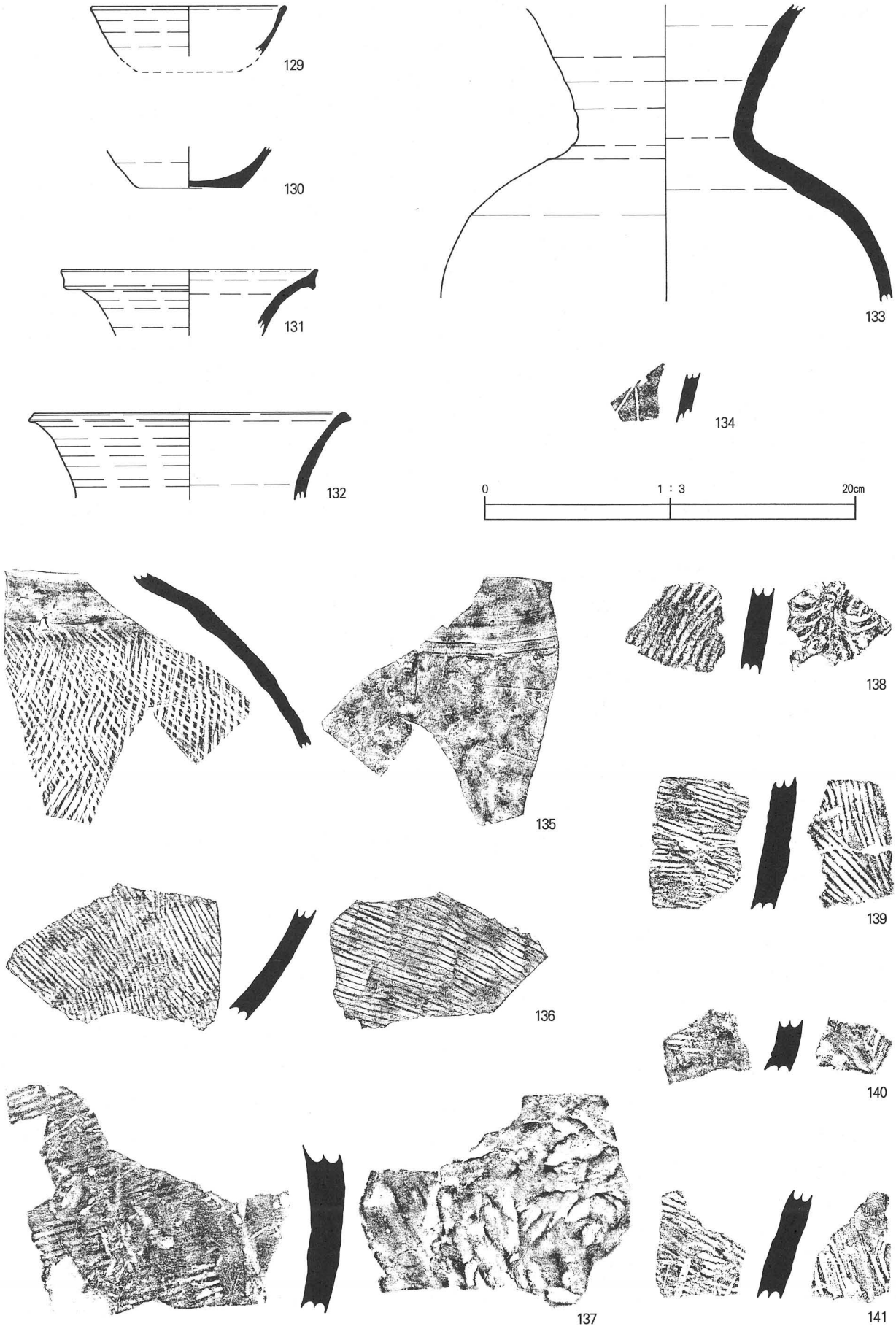
第30図　出土遺物４



第31図　出土遺物５


89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
0
1：2
10cm

第32図　出土遺物６



第33図　出土遺物７

「ムシロ」の痕跡がのこるものを一括している。全て底部破片である。ほかに細片19例（砂底）がある。89から103はいわゆる「砂底」土器である。これらはいずれもロクロを使用しない甕と推定される。全容が判断できる破片がないため砂付着パターンは不明である。104から128はいわゆる「ムシロ」痕跡が残る破片である。120・121・125以外はすべて甕の底部片である。「ムシロ」の痕跡にはいくつかのパターンがある。120は内黒杯、121・125は非内黒杯の底部片である。

その他の器形　72～74は便宜的に鉢と一括したものである。72・73と74では大きく形態が異なる。前者の形状は胴中位まで甕と似るが、内面に黒色処理が施されているため別に分けたものである。後者は大きな口径をもつ鉢形を呈し、外面にヘラナデが、内面にはユビナデが施される。

須恵器　須恵器は少なく13点のみ図示している。器種は壺、甕がほとんどを占めわずかに杯が２点確認できる129・130は杯片であり、前者は底部を、後者は口縁部を欠損する。129は口径が10cm強と小型である。130は小型壺（甕）の底部片の可能性もある。131～133は壺である。131・132は口縁部を、133は口縁部と胴部下位以下を欠損している。133は全体の形状は不明だが、同上位に最大径をもつ器形を呈すると推定される。134はヘラによる文様が施されるが何か不明である。器種も不明だが表面に刻書される。135から141は甕の体部破片である。135は外面にはタタキ目を交差させて文様状に表現している。内面は当て具痕がのこる。138は外面にタタキ、内面に青海波文が施される。 136・139・140・141は内外面とも平行タタキ目がのこる。137は底部付近の破片のため内面は指ナデの痕跡が残る。

C　近世・近代の陶磁器（第34～37図）

近世～近代にかけての陶磁器類については両時期を明確に区別し難いためものが多いため、ここでは一括して表示している。これらすべて12号土坑から出土している。したがって多くは隣接して存在する「新平屋敷」に伴う遺物であると予想されることから可能な限り図化をおこなった。

以下に述べる陶磁器類は総出土量17,117.99ｇである。そのうち97％（16,679ｇ）の陶磁器類を図化している。

図化できない遺物のうち、12号土坑出土分については産地別に集計している。なお、12号土坑については完掘していないため出土量のすべてではない。なお、時期については藤澤編年（瀬戸：瀬戸市（藤沢）1998）、大橋編年（肥前：大橋1993，九州近世陶磁学会2000）、関根編年（大堀相馬：関根1998）などに準拠した。

陶器

陶器には、皿、小杯、土瓶、壺、甕、鉢、擂り鉢などがある。

皿　皿には口径10cm前後の小型と13～14cm前後の中型に分けられる。小型品（142・143・145・146・148・151・153）はいずれも浅黄橙色の胎土であり、釉はほとんどに褐釉が施されている。体部下半から高台には釉がかからない。これらはいずれも在地と推定される。中型品（144・149・152・154）は褐灰色の胎土であり、灰釉が施されている。釉調は深緑色であり、口縁部付近では水色を呈するものがある。小型品と同様体部下半から高台には釉が施されない。口縁部は玉縁状におさめられ、内底面にはトチンのあとが残るものが多い。この両者は胎土が異なり別の産地であると考えられるがいずれにせよ在地産であろう。大型品は１点確認でき（159）、図上で復元したため推定で口径が25cm前後である。胎土は橙色であり、釉は灰釉と思われるが退色して白くなっている。焼成もあまり良好ではない。

そのほか口径が不明な皿が3点ある（155・160・161）。155は底部から推定して大型品に含まれよう。釉は深緑色であり、見込みには蛇の目状に釉剥ぎがおこなわれている。胎土は褐灰色であり、中型皿と同じである。161・160は見込みに文字や絵が施されている。161は橙色の胎土であり白くざらつい

た釉が、160には灰色の胎土であり濃緑色の釉が施されている。なお160には「寿」の文字が記されている。161の胎土は159の大皿に類似している。これら皿類はいずれも在地産と考えられることから年代は決定しがたいが、おおよそ19世紀代と思われる。

そのほか156は小杯、157は皿の可能性がある。158は瀬戸産と推定される陶胎染付であり、そのため18世紀末前後の時期が推定される。

土瓶　土瓶は２個体分出土している（162・163）。把手が２箇所につき、そのうち片側の下に注口が取り付けられる。胴部は中位に最大径をもつ均整な形態であり、下半は露胎しており、煤が付着していうる。両者の胴部には鉄絵が描かれる。162には山水文が、163には帆船文が描かれる。鉄釉のほかに162は銅緑釉が、163には青色の釉が使用される。158は土瓶の蓋である。銅緑釉が施されており、あるいは162と揃いかもしれない。これらは胎土がやや異なるものの産地は大堀相馬産と推定でき、時期は19世紀前半に位置づけられよう。

甕・鉢類　小型甕（167・168・171）、中型甕（172）、大型甕（173・176）の３者がある。167・168・171は褐灰色の胎土であり、鉄釉が施されている。下半には灰釉が施されているものもあり、掛け分けされている。底部まで残存するものは無いが171がその底部を構成するかもしれない。172も胎土が褐灰色あり、薄緑色の釉が施される。胴部中位には螺旋状の刻みがはいる。173は破片であるが胴径から大型甕であろう。外面には「獅子」が貼付されている。胎土は褐灰色で、内外面ともに濃緑色の釉が掛けられる。176も大型甕であり、胴部下半から底部にかけて残存する。胎土は橙色を呈し、内外面に鉄釉が施される。175は鉢であり、口縁部が折り返されて玉縁状を呈する。胎土は灰黄色を呈し、透質性の釉が施される。甕・鉢類についても多くが在地産と考えられる。時期については不明であるが、他の器種と同様の時期（19世紀前半頃か）が想定できる。

擂鉢　177から180は擂鉢である。177は比較的小型品であり、全体的に褐釉が施されている。底部には低い高台がつく。178は口縁部が折り返されて肥厚する。スリ目は２段で構成される。口縁部のみに鉄釉が施されている。この２点の胎土は橙色を呈し、焼成が均一ではない。179・180は胎土が異なり褐灰色を呈する。179は2段に広がり、口縁部のみに灰釉が施される。180は比較的深い体部をもつ。口縁部端のみに灰釉が施される。擂鉢ではこのように胎土が異なる2者があり、施釉方法も異なっているが産地はいずれも在地であろう。時期も高台がつくものが存在することから19世紀以降と想定される。

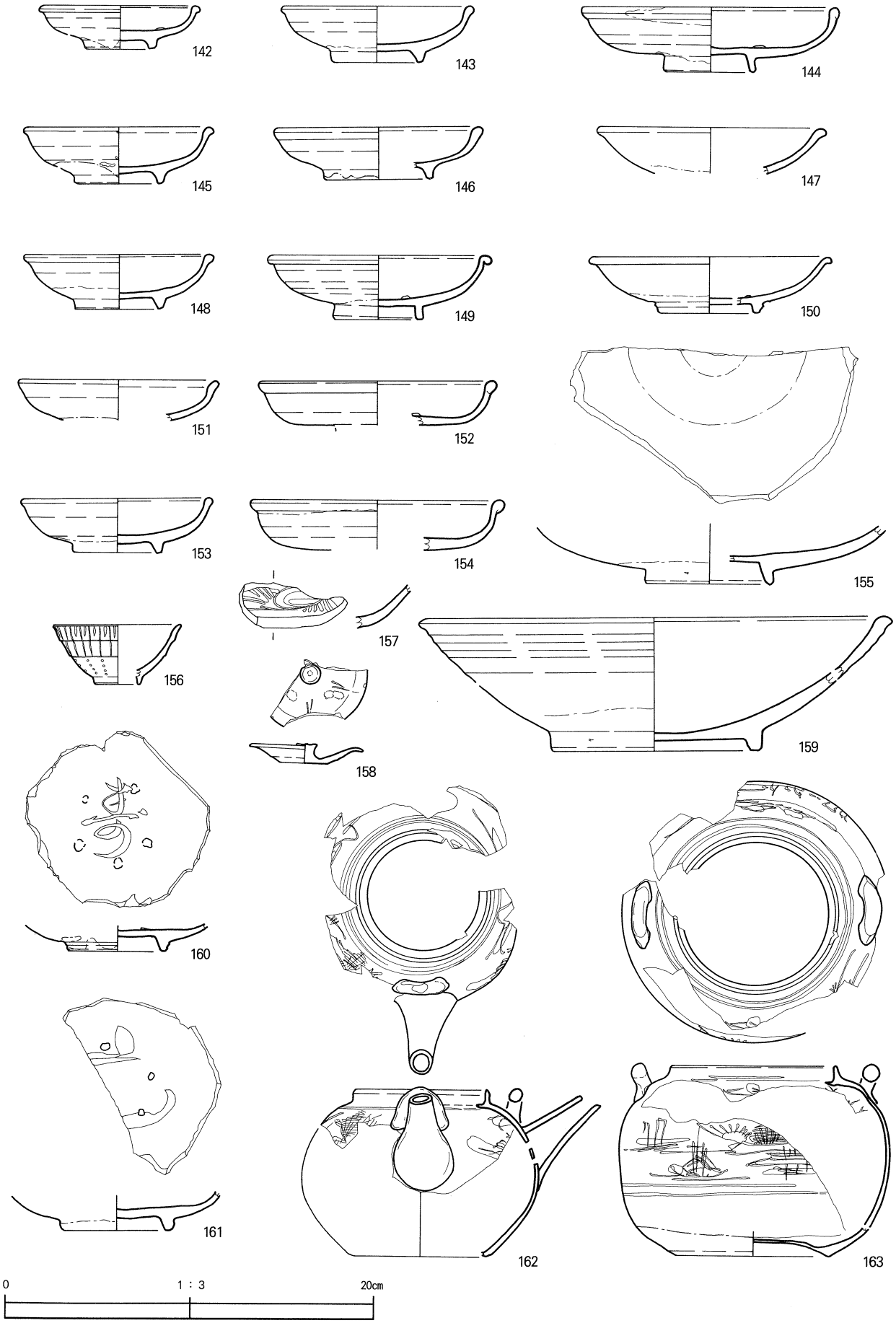
その他　その他の器種として碗類（164～166・169）や花瓶（174）などがあるがいずれも細片であり全容は不明である。碗については肥前産や大堀相馬産があり18世紀代のものが含まれる。徳利も全容をしれるものがないが170のように底部のみ残存するものがある。

磁器

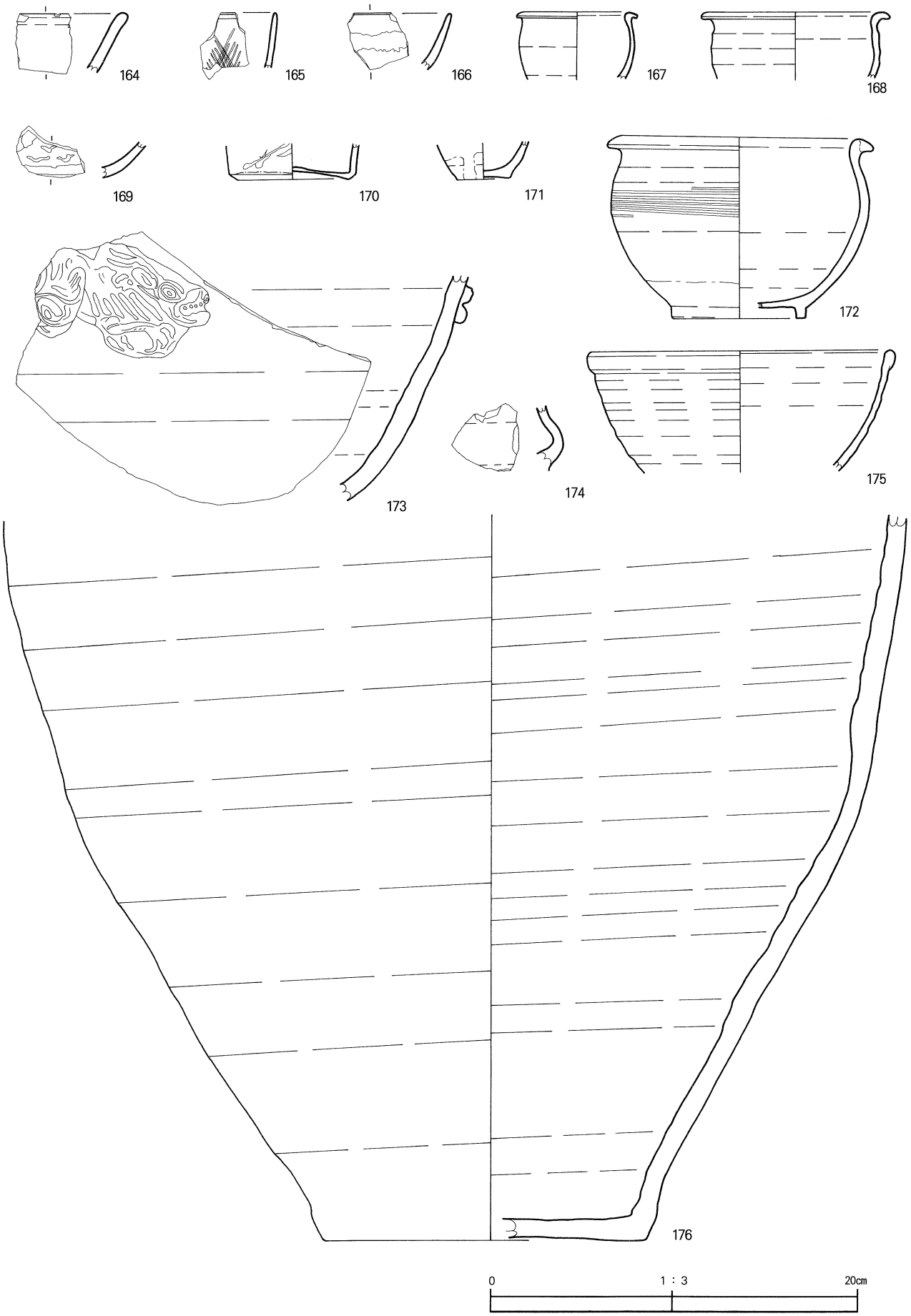
磁器についても陶器と同様に近代の磁器と明確に区別し難いものがある。ほとんどが近世に属すると思われるが、擦り絵文様のある磁器類が1点のみ含まれており一部近代に入っているものが含まれる可能性があるため、ここでは近世～近代にかけてのものを一括して表示している。

磁器には、碗・皿・猪口・紅皿・火入れ・鉢・香炉がある。

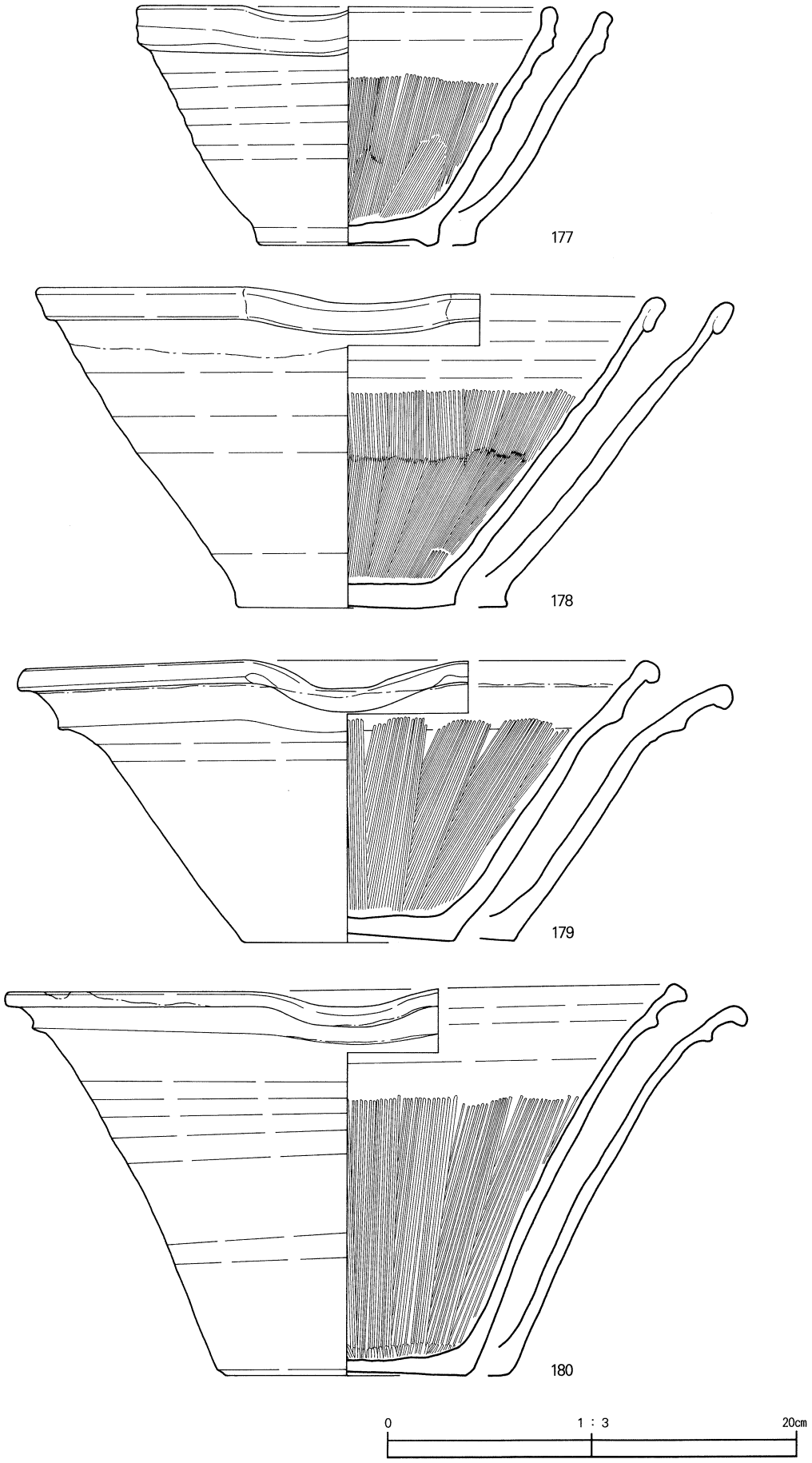
碗類　碗には丸碗（182）と端反碗（188・183・192・186・184・189・187・190）があり、後者がほとんどを占める。端反碗はさらに口径が10cm以内の小型（192・186）と10cm前後の中型（183・184・187～190）に分けられる。182は丸碗であり、181の蓋とあわせて一揃いになる。外面には染付による雪輪文が、口縁部内面には四方襷文が配される。見込み文様は不明である。胎土は陶器質であり、黒色粒子が混じる。産地は胎土や染付の発色などから肥前産と考えられ、磁器は18世紀後半と推定され


142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
0
1：3
20cm

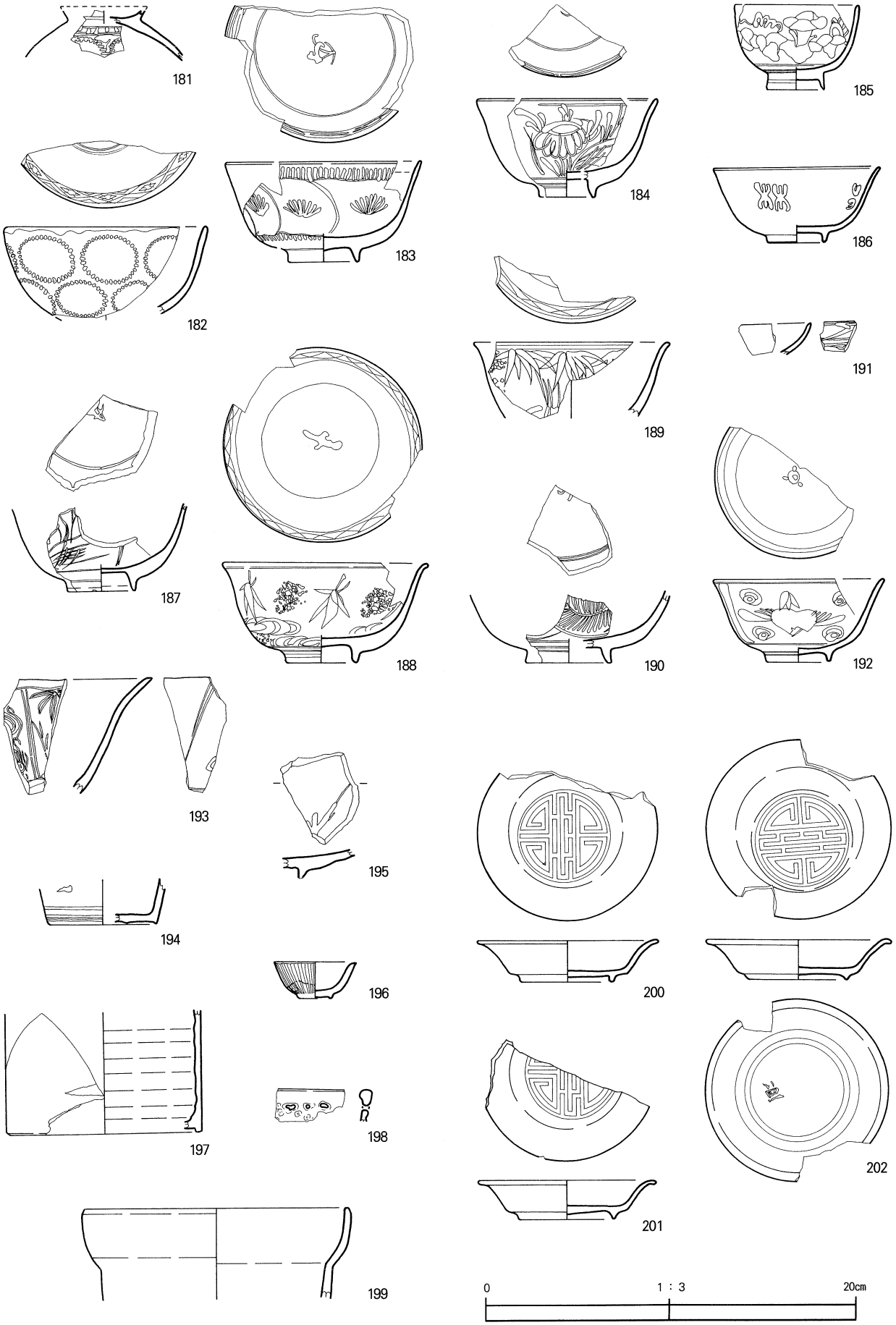
第34図　出土遺物８



第35図　出土遺物９



第36図　出土遺物10


181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
0
1：3
20cm

第37図　出土遺物11

る。端反碗は工業精製コバルトを使用した染付が大部分をしめる。いずれも花や木を描いた文様が施されている。ほとんどが東北産と考えられる。192・187は胎土・染付の特徴から瀬戸産と考えられる。磁器は19世紀前半と考えられる。そのほか小杯（185）がある。時期は近代に入るかもしれない。

皿　195は磁器皿である。胎土は灰白色を呈する。染付は内面のみに認められる。破片ではあるが胴部径に比して底部径が非常に小さい。産地は肥前産と推定され、時期は高台の特徴から17世紀前半代（大橋編年Ⅱ期）にさかのぼるかも知れない。皿はほかにいわゆる「寿文皿」が出土している（200～202）。型起こしで製作されたものであり、磁器は近代と推定できる。胎土はいずれも白色であり、ガラス質である。

その他　その他の器種として、猪口、紅皿、鉢、火入れがある。198は香炉片と思われるが確証はない。194は猪口の底部片である。蛇の目凹型高台を有する。肥前産で磁器は18世紀末～19世紀初頭と考えられる。196は紅皿、197は火入れ、199は鉢であろう。いずれも在地産と推定される。時期については明確ではないが19世紀代であろう。193は肥前産の鉢である。小破片であるが、口縁部が輪花状を呈することなどから角鉢と推定される。胎土は灰白色の陶器質である。輪花で外反りの特徴から18世紀後半代に位置づけられよう。

不掲載陶磁器

細片のため図化しなかった陶器、磁器破片は438.99ｇある。これらを種別産地別に集計したのが下記である。

陶器		磁器	
肥前	３点	肥前	７点
瀬戸・美濃	２点	在地	２１点
在地	１９点	不明	２点
相馬	１６点	合計	７０点

陶器のうちあきらかに近代以降と推定される破片もいくらか存在するが便宜的に在地に含めている。また、磁器のうち１点は型紙摺りの皿が含まれている。

小結

陶器は肥前産・瀬戸産・大堀相馬産が確認できるが、ほとんどが在地産で占められる。在地産としたものには胎土が褐灰色と橙色、浅黄橙色に３大別できる。器種に関わらず前２種のものが主体であるが、産地を特定できない。ついで大堀相馬産、肥前産、瀬戸産とつづく。器種をみると碗類が少なく、皿類が主体であることがわかる。時期は大堀相馬産には18世紀にさかのぼる資料も含まれるが少数であり、多くは大堀相馬産の土瓶や瀬戸産の染付碗から19世紀前半に位置づけられる。

磁器には近代のものも含まれると考えられるため時期を明確にすることができないが、摺り絵が施されるものが１点のみと極端に少ないことから近代以前にその主体はあると考えられる。産地別にみると陶器と同様在地産が多く、次いで肥前、瀬戸産となる。時期は、肥前産の碗類などから18世紀にさかのぼる個体もあるが多くは19世紀代であろう

陶器の時期幅ともあわせて考えると12号土坑出土陶磁器は一部に17世紀にさかのぼる染付も存在するが主体は18世紀後半～19世紀前半頃におさまると考えられる。　（西澤）

D　石器（第38～40図）

今回、石器は81点（1,608ｇ）が出土しており、石鏃（６点、13.44ｇ）、尖頭器状石器（１点、13.98ｇ）、

石匙（２点、9.89ｇ）、スクレイパー（８点、213.32ｇ）、リタッチド・フレイク（１点、102.85ｇ）、楔形石器（１点、26.01ｇ）、磨製石斧（２点、398.03ｇ）、磨石（１点、72.71ｇ）、石錘（２点、167.1ｇ）、剥片（チップを含む。57点、564.7ｇ）に分類した。うち剥片を除く24点を掲載している。

なお、新平遺跡においては過去の調査例から縄文時代には前期末から中期初頭に主要な文化層が形成されていることが分かっており、今回出土した石器は概ねこれらの時期に相当するものと推定されるが、土器などとの共伴関係が確認されなかった上、そのほとんどが近代の人工堆積土および耕作土の周囲から出土しているため時期決定は困難であり、ここでは遺物の該当時期には言及していない。

石鏃（203～208）　縁辺部全体に剥離調整を施され、鋭角な先端部が作り出された薄型の剥片のうち全長が50㎜未満のものを石鏃とした。６点出土している。無茎鏃（203～207）と尖基鏃（208）に分けられ、さらに無茎鏃は基部に抉りの入るもの（凹基式）とほぼ直線的なもの（平基式）に分けられる。206、208を除き完形で残存率は高い。石質は頁岩（203～206、208）、凝灰岩（207）である。

尖頭器状石器（209）　縁辺部全体に剥離調整を施され、鋭角な先端部が作り出された剥片のうち、全長が50㎜以上のものを尖頭器状石器とした。１点出土している。無茎で石鏃に比べやや厚みを持つ。石質は頁岩である。

石匙（210、211）　剥離調整により縁辺部に刃部、また上部につまみ部を作出された遺物を石匙とした。２点出土している。211はほぼ完形で横長剥片を素材としている横型石匙である。210はつまみ部のみで刃部の様相は不明である。石質はいずれも頁岩である。

削器（212～220）　形状が不定形の石器のうち縁辺部に連続剥離調整による刃部を作出された遺物を総称して削器とした。９点出土している。212～214は刃部に抉りをもつ。石質はいずれも頁岩である。

楔形石器（221）　全体がほぼ長方形および台形に近い形で、相対する縁辺部に両極剥離が観察されるものを楔形石器とした。１点出土している。加えて縁辺部にはさらに微細な剥離調整が施される。石質は頁岩である。

リタッチド・フレイク（222）　形状が不定形で刃部に満たない二次加工が観察されるものをリタッチド・フレイクとした。１点出土している。石質は頁岩である。

磨製石斧（223、224）　全面を研磨されており、片辺に刃部を有するものを磨製石斧とした。2点出土している。223は刃部と基部の幅が大きく異なっており、台形状を呈する。基部には敲打痕と見られる凹凸が観察され、敲石として転用された可能性がある。224は小型で、50％ほどが欠損しており全体の形状は分からないが、残存している一側面から刃部と基部の幅がほぼ同じ長方形型を呈しているものと推測できる。石質はいずれも頁岩である。

磨石（225）　自然礫のある一面に連続使用による擦痕の観察されるものを磨石とした。１点出土している。擦痕はやや不明瞭であるが礫の軸に対して斜めに観察される。石質は頁岩である。

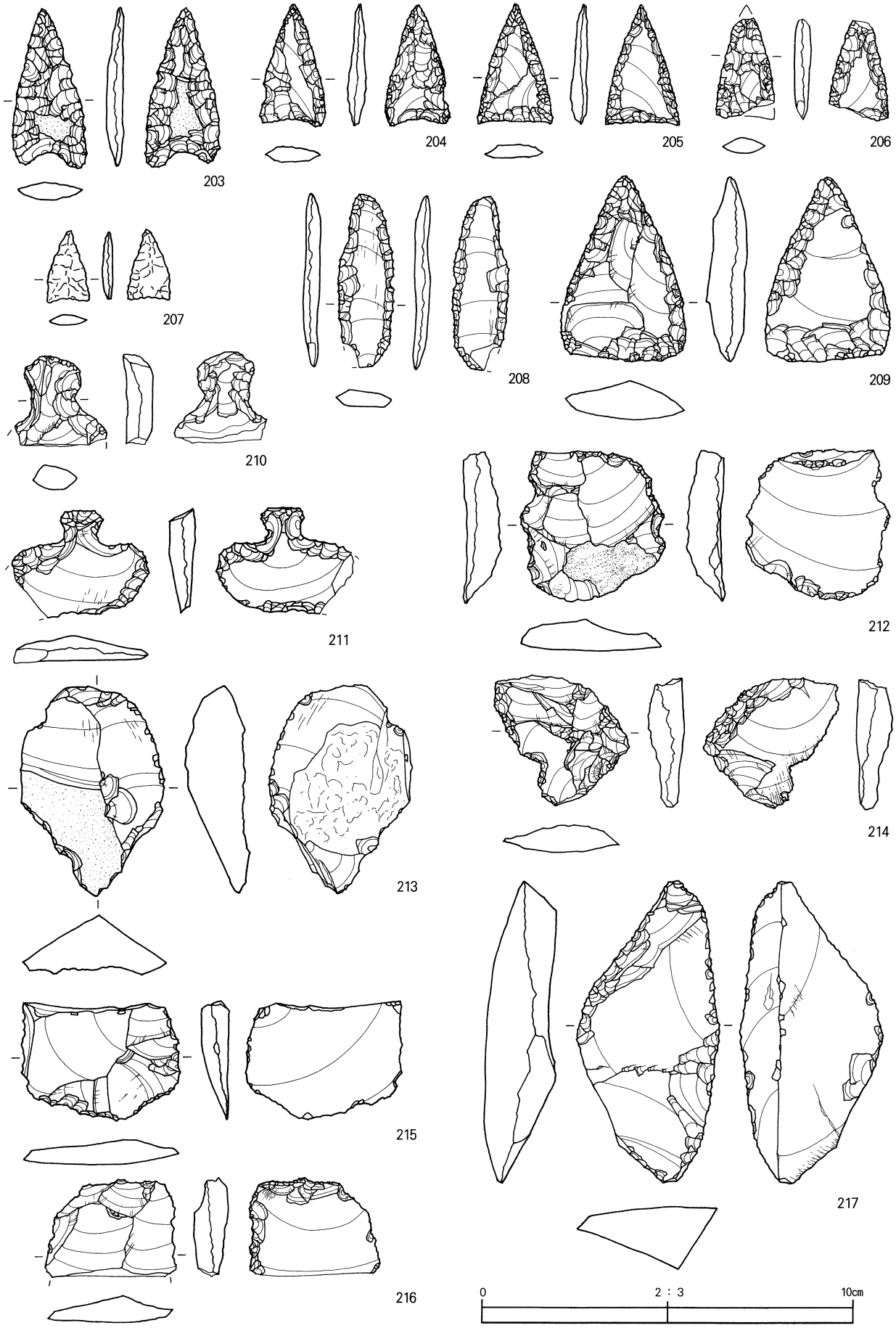
石錘（226、227）　自然礫の両端に、直接打撃による剥離を持って抉りを作出されるものを石錘とした。２点出土している。いずれもほぼ円形で断面形は扁平である。石質は２点とも砂岩で、重量は227が68.26ｇ、226が98.88ｇである。

（横井）

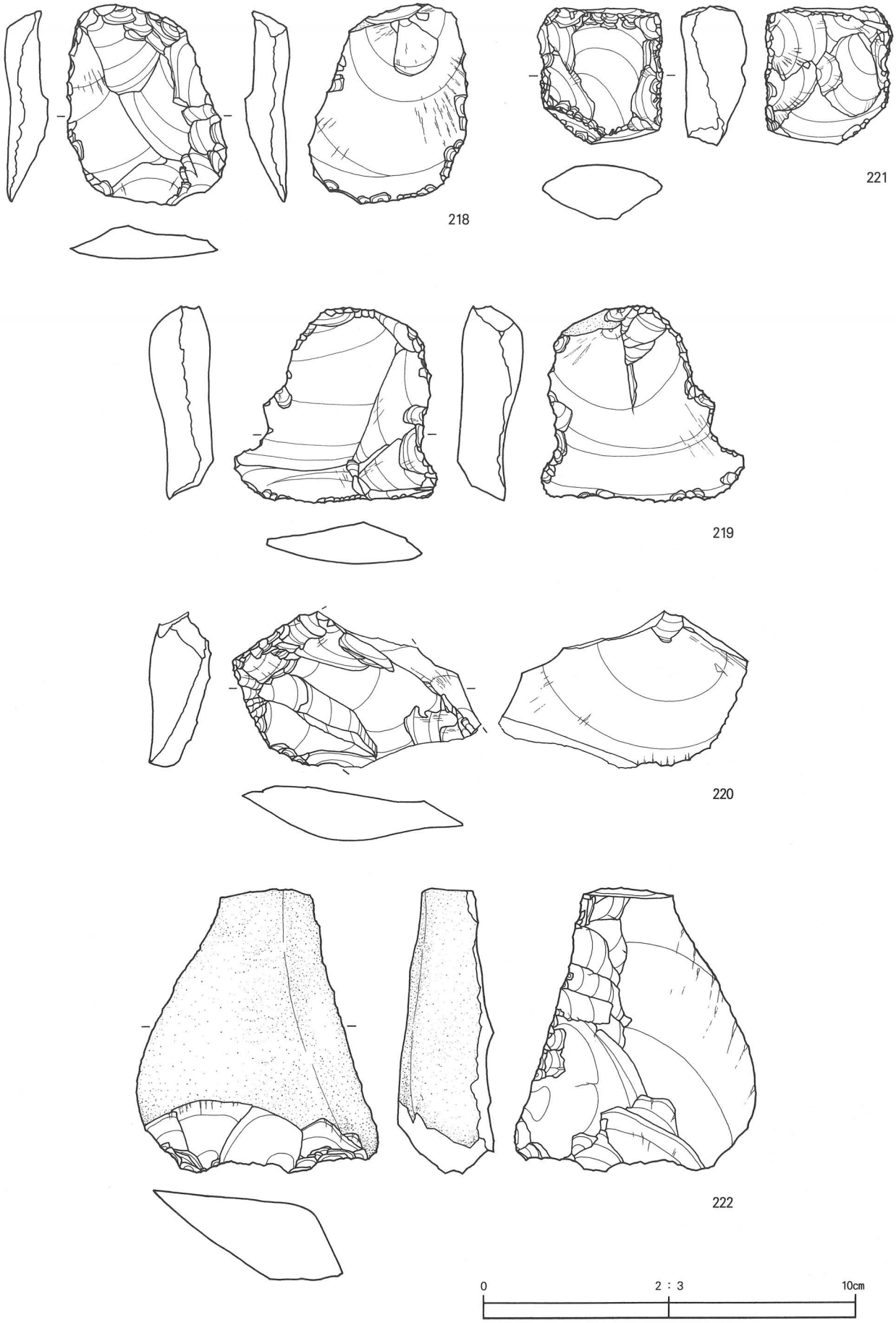
Ｅ　木製品（第41～42図）

木製品は合計10点出土している。そのほとんどが12号土坑であるが、１号井戸跡やＡ区遺構外（新平屋敷隣接）からも１点ずつ出土している。木製品には図示したもの以外には曲げ物の側板の破片が１号井戸跡より出土している。

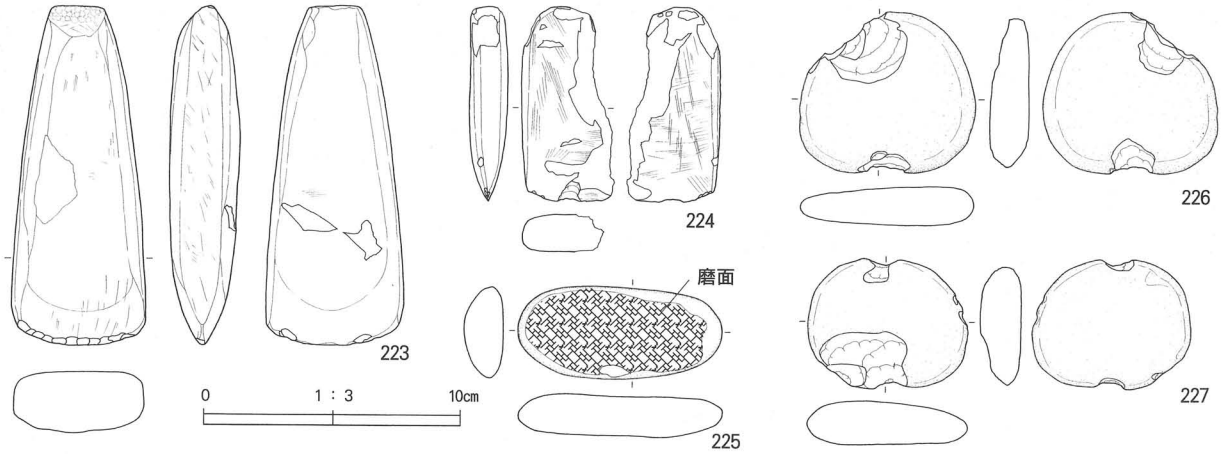
漆器碗類　椀類としたものは３点ある。228・229は漆器碗で内外面とも朱漆が施されている。いずれ


203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
0
2：3
10cm

第38図　出土遺物12



第39図　出土遺物13

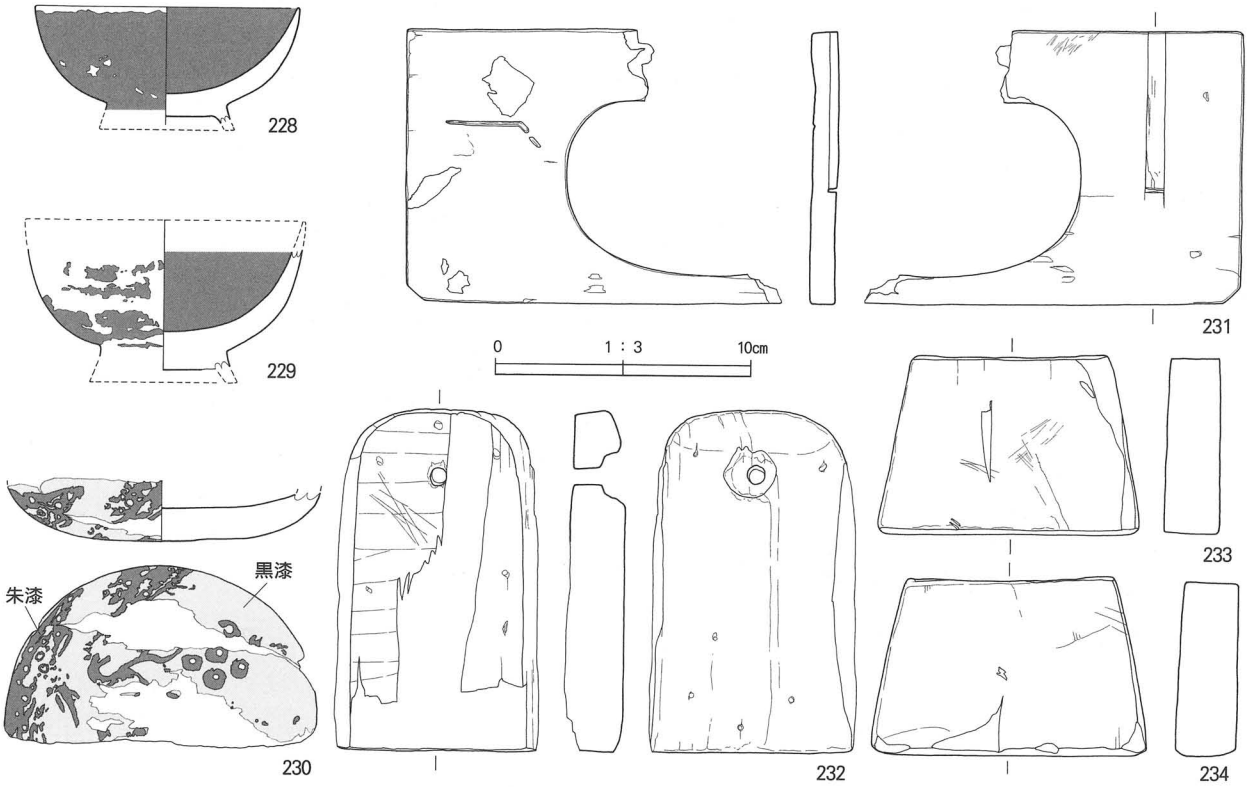


第40図　出土遺物14

も完形ではないがおおよその形状はわかる。228より229の方が深身の椀である。228はＡ区遺構外から出土であるが、「新平屋敷」隣接する地点である。229は12号土坑より出土している。230は１号井戸跡埋土下位より出土している。底部付近のみ残存しているため全容は不明で、ここでは椀と分類したがあるいは別かもしれない。黒漆の下地に朱漆で「梅文」が描かれている。

膳類　12号土坑より１点出土している。231は膳の足部分であり、約半分を欠損している。中央には楕円形の透かしが施される。部分的な破片のため詳細は不明であるが、おそらく両足膳の足の部分であろう。

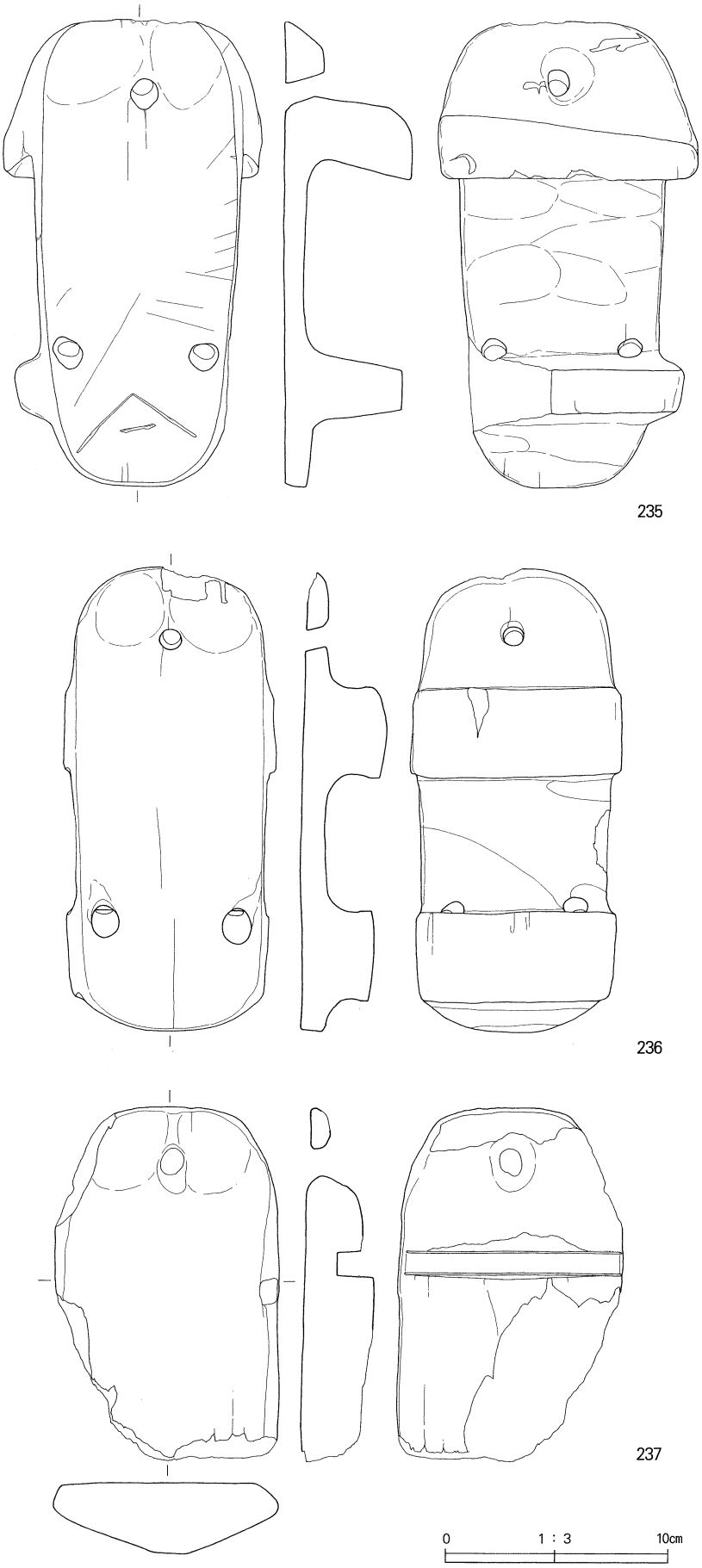
下駄　下駄は差歯も含めて６点が出土している（232～237）。いずれも12号土坑より出土した。下駄は、無歯下駄（232）、差歯下駄の歯、連歯下駄（233・234）、差歯下駄（235～237）の３種が確認できる。



第41図　出土遺物15

232は無歯下駄の台部分であり、おそらく鼻緒の存在から前半分と考えられる。小口部分が切断されていることや、「表」を留めたと考えられる釘穴が穿たれていることから、いわゆる「中折下駄」であろう。233・234は差歯下駄の歯の部分である。同一の台に装着されたかは不明であるが、同一の大きさである。235・236は連歯下駄である。235は台前端からそのまま前歯に移行するため、前歯が独立しない。後歯は独立して存在する。また、前歯は前端方向が斜めに削られており、いわゆる「のめり」がある。台表には鼻緒穴、横緒孔が穿たれている。横緒孔は若干重なるものの後歯よりも前にある。鼻緒の周辺は周囲より一段窪んでおり、足指の痕跡と考えられる。また後端には「山一」の刻みが入る。236は前歯・後歯ともに台から独立しているもので、現状では比較的低い歯の高さである。台には鼻緒孔、横緒孔が穿たれ、235と同様に指の痕跡が残る。横緒孔の位置も235と同様に一部重なるが後歯よりも前にある。237は差歯下駄であるが、半分が欠損している。台表には鼻緒孔が穿たれ、左右は指の痕跡がのこる。台裏には溝があけられ、 233や234のような歯が差し込まれる。この構造から「陰卯差歯下駄」であると考えられる。

木製品のうち下駄については陰卯差歯下駄が存在することから仙台城二の丸跡出土例などを



第42図　出土遺物16

参考にすると18世紀後葉以降であると考えられる。しかし、連歯下駄の横緒孔が後歯の前に穿たれていることはこれまでの年代観と矛盾しているかもしれない。ただし、仙台城出土では19世紀中葉頃の資料の中にもこうしたものが存在することから横緒孔の位置の差は時期関係以外にも別の要因があるのであろう。下駄の構造からは陰卯差歯下駄の存在が重要であり、12号土坑出土の木製品は18世紀後葉以降の年代が推定される。椀類については今のところ時期を判断する根拠がなく不明とするが、「新平屋敷」と関連する資料であり、時期もそれに対応すると考えられる。

（西澤）

F　土製品（第43図）

土製品には、土鈴、土錘、用途不明製品が出土している。出土位置はいずれも土器廃棄場で、これらの遺物は共伴する土器年代から10世紀中葉を前後する時期に属するものと捉えている。

土鈴（238～243）　６点出土しているが、４点は体部破片であり、少なくとも２個体分が出土していることになる。いずれも破損品で、部位は紐および体部に限られ、鈴内部の丸は出土しなかった。238は紐部の上部と体部下半が欠損している。紐孔の下半のみが残存しており孔径は５㎜と推定される。紐部断面は楕円形である。体部の推定径は4、6cmにおよび、破損状況から上部と下部２つの半球を接合して作製されたと見られる。239は紐部のみである。１より小型で上端を指で平たくつまみ出し中央に３㎜の穿孔をしている。全面をユビナデにより調整されている。240～243は体下部でいずれも鈴口の切り口が観察される。また242は内外面が薄黒く変色しており、黒色処理されている可能性がある。これら体部は破片の為、ミニチュア土器などの遺物であった可能性も考えられる。

土錘（245）　１点出土している。両端を欠損している管状土錘で表面はユビナデによる調整が見られる。重量は20.52ｇであった。

用途不明土製品（244）　１点出土している。欠損しており全体形は把握できない。残存部はほぼ三角形で中央に棒状工具を押し付けたような沈線状の溝が先端から降るように斜めに見られる。概して片口の注ぎ口のような形状である。当初管状土錘とも考えたが、245に比べ全体の整形が丁寧であり、また細部の形状に差異がみられたため別種の遺物とした。

G　石製品（第43図）

１号井戸跡より石臼が1点出土している。248は安山岩製で中央に芯棒孔を有する碾臼の下臼である。およそ半分が欠失しているが、目の主溝は八分画とみられる。上臼との接地面はほぼ平坦でふくみを持たない形状である。側面には煤が付着しているが被熱痕は観察されない。なお１号井戸跡は調査区外にかかっており完掘しておらず、未掘範囲に上臼が含まれている可能性がある。

H　金属製品（第43図）

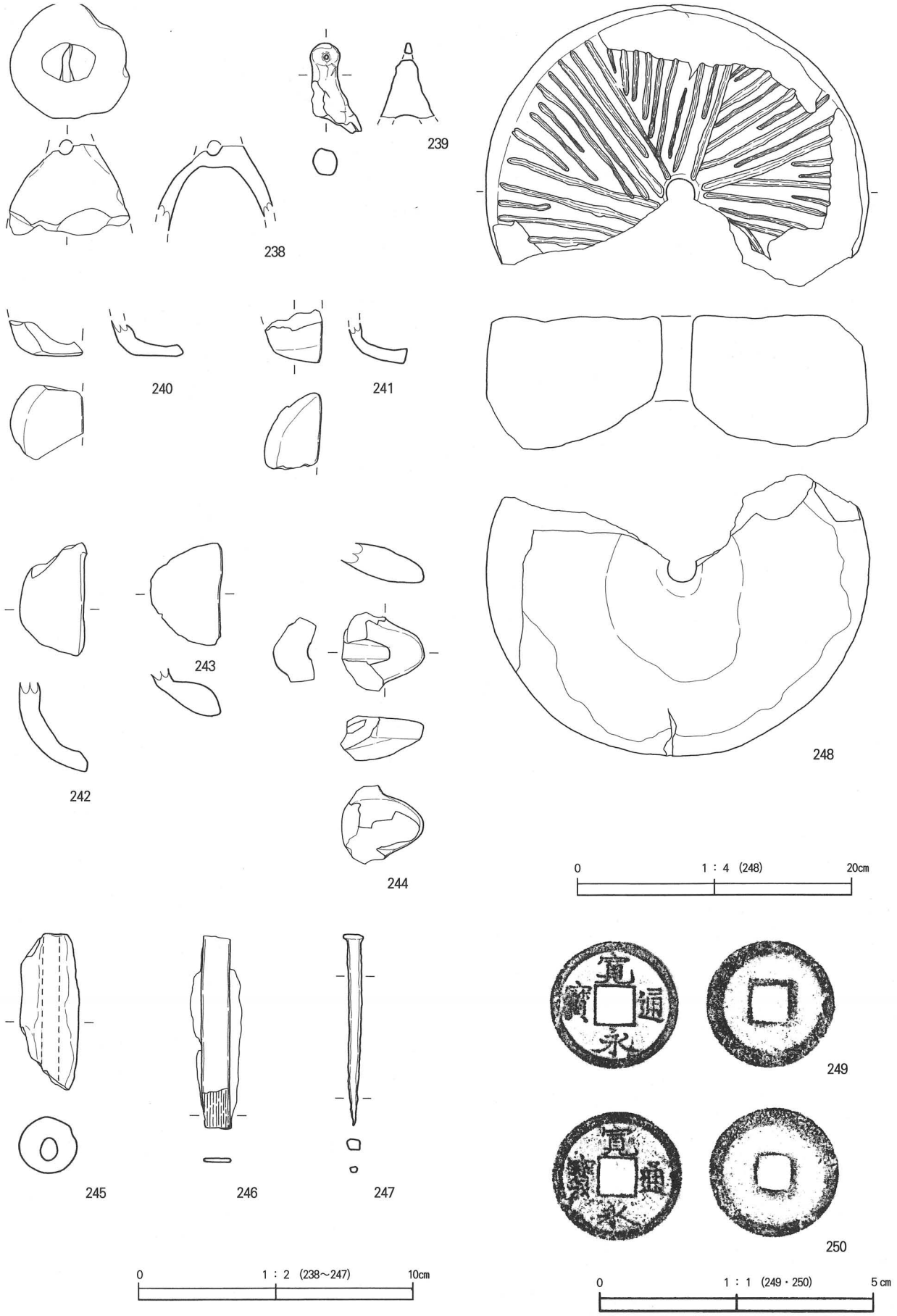
金属製品は釘と刀子が出土している（第43図）。

刀子（246）　Ａ区より１点出土している。刀子としたが別種かもしれない。茎部のみで刃部は欠損している。柄の木質が残存しているが、外形は完全に失われている。

釘（247）　土器廃棄場より１点出土している。平釘で、頭部が一部欠損しているがほぼ完形である。

古銭（249・250）　Ａ区より２点出土している。いずれも寛永通寶（新寛永）で、背文は見られない。

（横井）

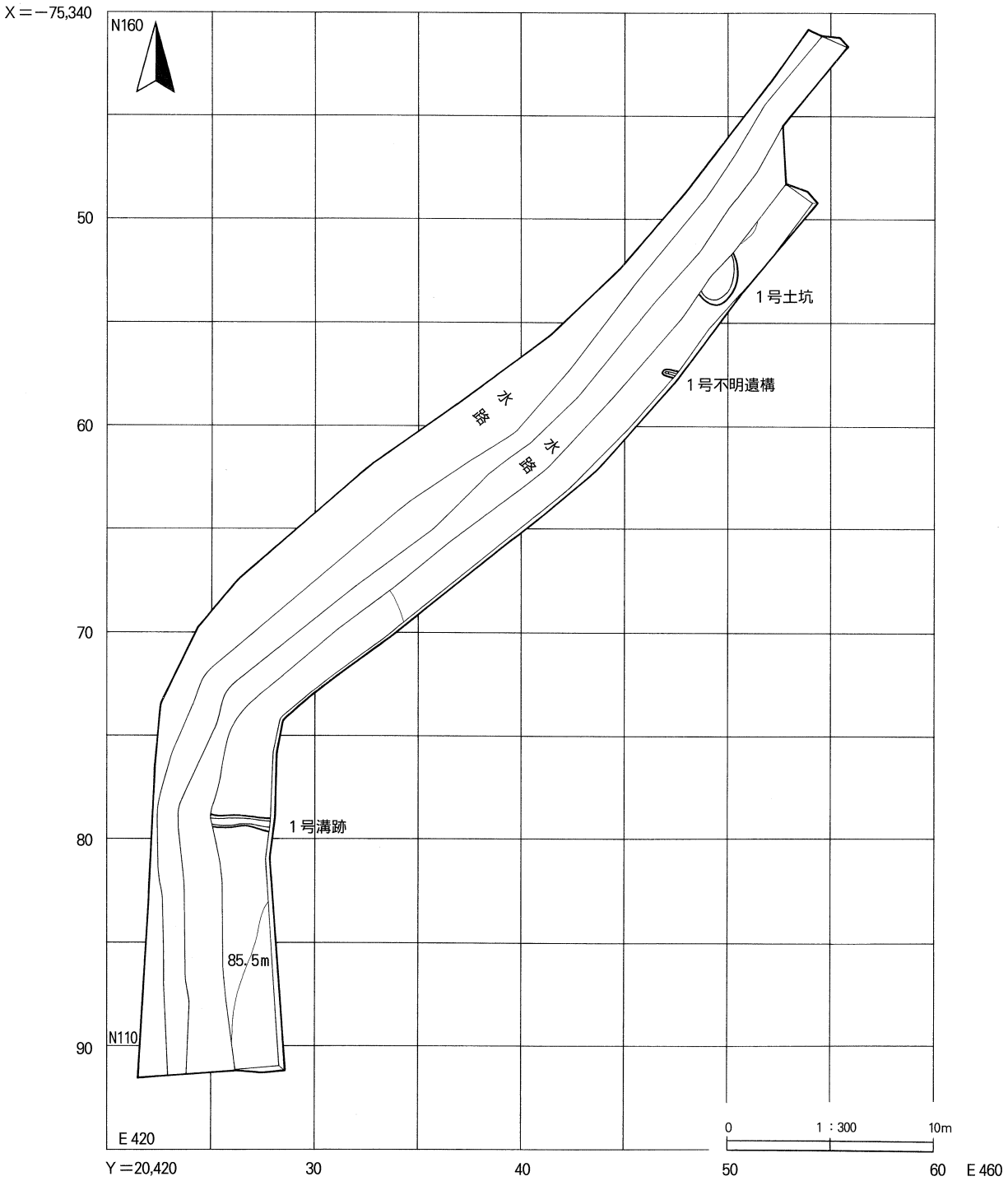

238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
0
1：4 (248)
20cm
0
1：2 (238～247)
10cm
0
1：1 (249・250)
5cm

第43図　出土遺物17

Ⅲ　芦萱遺跡の調査

1　調 査 の 概 要

芦萱遺跡の調査は今回が初めてとなる。調査原因は新平遺跡と同様であり、水路の移設になる。遺跡地図に示されている範囲は周辺の水田面よりも一段高い範囲で東側がそのまま段丘の斜面になる。したがって、段丘縁の緩斜面から低地面にかけての範囲が遺跡として認識されている。今回の調査区



第44図　芦萱遺跡　遺構配置図

はその低地面との境界にあたる。調査範囲は幅が７ｍ、長さが直線距離60ｍ程でしかないが、その中を幅約1.5ｍと２ｍの現水路が平行して２本通っている。そのため水路と水路との間の幅3.5ｍ程の範囲のみが調査対象となる。検出遺構としては土坑など合計３遺構に過ぎず、遺跡の内容など明らかにできる成果はあげられなかった。出土遺物については面積・遺構数に比べて土器の出土量が多く総計54,055.18ｇの遺物が出土している。

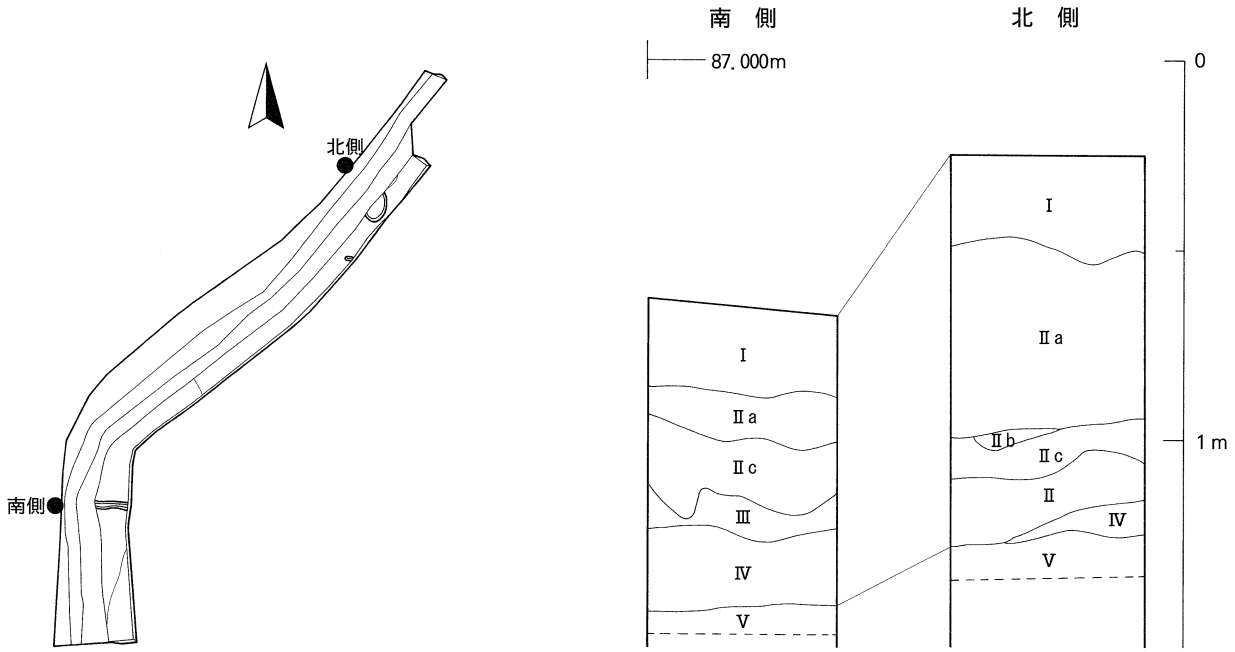
２　基　本　層　序

今回の調査区内では以下の７層が確認されている。

Ⅰ　層　　暗褐色粘質土　　表土
Ⅱａ層　　黒褐色粘質土　　古代遺物包含層
Ⅱｂ層　　黒褐色粘質土　　火山灰（To-a）ブロックを包含する
Ⅱｃ層　　黒褐色粘質土
Ⅲ　層　　黒色粘質土
Ⅳ　層　　黒褐色粘質土
Ⅴ　層　　明黄褐色粘土

このうちⅡからⅣ層が古代遺物包含層であり、遺構はこの層中のいずれかで掘り込まれていると推定されるが、検出は調査区幅が狭いこともありこれらの層を除去後Ⅴ層上面で行っている。なおⅡ層は火山灰の上下で細分している。火山灰は部分的に観察され、ほとんどが断続的なブロック状に堆積しており、分析を経ていないが、肉眼観察からみると十和田ａテフラと推定され、あまり粗粒粒子が含まれなかったこともあり２次堆積の可能性がある。

（西澤）



第45図　芦萱遺跡　基本層序

3　調　査　成　果

（1）検　出　遺　構

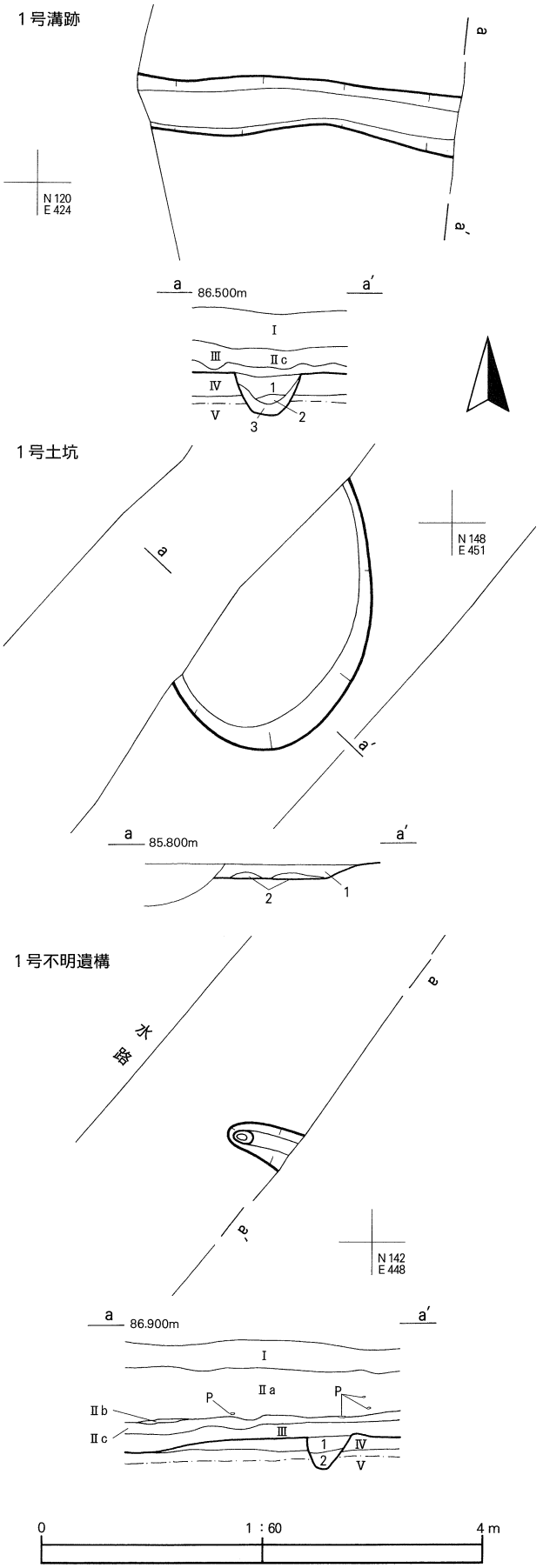
今回検出された遺構は土坑1基、溝跡1条、不明遺構１基、遺物包含層１箇所であった。なお、調査区内には水田耕作に伴う用水路が２条縦走しており、検出面および遺構を著しく破壊している。そのため全体を検出された遺構は皆無であり、時期、性格など推定に頼る部分が大きい。

１号溝跡（第46図・写真図版37）

調査区南側のＮ120、Ｅ425グリッドに位置し、Ｖ層中において確認された。調査区土層断面より遺構面はⅣ層であることが分かっている。他遺構との重複は確認されなかったが、用水路により西側を破壊されている。中洲中に延長部の存在が予想されたが確認はできなかった。加えて東側は調査区外に伸びてゆき全体形は把握できていない。幅57cm、検出された長さは2.88mで、壁面は42cmが残存しており底面は緩やかに真西に下っていく。堆積土は３層に細分できた。１層および３層は暗褐色土、２層が黒色土でいずれも自然堆積と捉えている。遺物は堆積土中より土師器片が出土しており、本遺構は平安期に属するものと捉えられるが、その性格は不明である。

１号土坑（第46図・写真図版37）

調査区北側のＮ145、Ｅ430、435グリッドに位置し、Ｖ層中において確認された。他遺構との重複は確認されなかったが、用水路により北端を破壊されている。ほぼ2.8×1.8mの楕円形を呈するものと推測される。壁面は27cm残存しており、なだらかに底面へと延びる。底面は平坦であった。堆積土は２層に細分できた。１層は黒色土、２層は黄橙色粘土で、いずれも自然堆積と捉えている。遺物は堆積土中より土師器片が出土しており、その年代観より本遺構は平安期に属するものと捉えられるが、その性格は



第46図　１号溝跡・１号土坑・１号不明遺構

不明である。

１号不明遺構（第46図・写真図版37）

調査区北側のＮ140、Ｅ445グリッドに位置し、Ｖ層中において確認された。調査区土層断面より遺構面はⅣ層であることが分かっている。他遺構との重複は確認されなかった。0.6×0.4mの溝状で西端がやや円形に窪んでいる。東端は調査区外に延びているため全体形は把握できなかった。壁面は42cmが残存しており、底面は狭く半楕円形の断面を見せる。堆積土は２層に細分できた。１層は黒褐色土、２層が暗褐色土でいずれも自然堆積と捉えている。出土遺物がなく、遺構の時期、性格ともに不明である。

遺物包含層

遺構の検出段階で１、２、３区を中心として基本層Ⅲ層中より土師器をはじめとした遺物が大量に出土した。遺物の分布が局所的であったため掘り込み式の遺構の堆積土である可能性も考えたが、明確なプランが確認できなかったため遺物包含層と認定した。とはいえ、遺構堆積土の可能性が皆無というわけではなく、ここではあくまで遺物包含層と仮定した上で進めてゆく。出土した遺物の大半を占める土師器、須恵器など古代遺物の調査区別出土遺物重量は最北の１区に最も集中し、南に向かうに従ってその重量は減少する傾向にある。用水路は北から南に向かって流れており、上流に遺物が集中していることから見てもこれらの遺物は元位置を保っているものと考えてよいであろう。１、２、３区には出土全重量の78%が集中しており、一見この付近あるいは調査区外のさらに北側にこれらの遺物散布の中心があると見ることができる。ところが、１区北側の調査区拡張範囲においては遺物の出土は皆無であり、実態が見えない状態にある。本調査区は東側に広がる微高地の縁辺部に位置し、その微高地に遺跡の本体、つまり居住区画の存在が考えられ、今回の出土遺物はその本体から廃棄されたものと捉えるのが妥当であろう。なお、出土遺物は概ね10世紀後半のものと見られ、本遺構の構成時期も概ねこの時期にあたるといえよう。（横井）

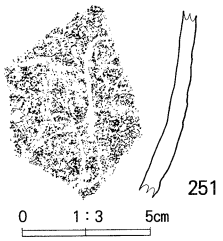
（２）出　土　遺　物

芦萱遺跡から合計54,055.18ｇの遺物が出土している。そのうち土器が52,726.45ｇと大半を占める。縄文土器が104.22ｇ、平安時代の土器52,378.04ｇ、その他244.19ｇとなる。そのほか石器は740.23ｇ、金属製品は2.49ｇと少ない。

ここではこれらの遺物について順を追って説明する。

Ａ　縄文時代の土器（第47図）

総出土量は104.22ｇと非常に少量で小破片も多く、４区出土の深鉢体部破片のみ掲載した。破片中央に「く」字状に屈曲する沈線が観察されるが、器面が摩滅しており縄文の有無はうかがえない。詳細な時期は不明であるが、前期および中期に属するものと考えている。（横井）



第47図　出土遺物１

Ｂ　平安時代の土器（第48～50図）

平安時代の土器には土師器45,227.08ｇ、須恵器7,140.96ｇがあり、前者

がほとんどを占める。土師器には杯、高台杯、甕がある。

杯類　252～256は器高が３cm以下の小型杯である。体部の形態をみると緩やかに内彎しながら立ち上がるもの、内彎しながら立ち上がる体部と外反する口縁部をもつものがある。口径はいずれも11cm～12cmの間におさまっている。これらは別の器種（小型杯や皿）とすることも可能であるが本書では便宜的に杯に含めて考えている。形態的には以下で説明する杯類とは相似形である。

257～264は体部がゆるやかに内彎して立ち上がる形態である。口径をみると、12～13cmと13～14cm、15cm以上に分けられる。これはそれぞれ小・中・大となり、視覚的にも異なってみえる。芦萱遺跡では264のように口径が15cmを超える大型のものはきわめて少ない。調整は内外面ともに回転ナデ、底部切り離し技法は糸切りのみである。

265～272はゆるやかに内彎する体部をもつが口縁部が外反する。265は器高が3cm以上あるものの口径は11.2cmと小さい。そのほか中型（先述の基準）の270・272以外の６点全ては小型である。調整は内外面ともに回転ナデが施され、底部切り離し技法は糸切りである。

273～278は直線気味に開く体部をもつものである。他に比べて体部形態直線的なものを一応別にしている。口径別の小型品が多くを占めるが、大型品も存在する。

279～282はやや突出する底部（高台状の底部）をもつ。279～281は大きさ的にもまとまりがあるが、282は器高が高く別に分けられるかも知れない。

283～290はやや突出する底部をもちつつ口縁部が外反する器形をもつ。器表の状態は細かなロクロ目の痕跡が残るものやなめらかに仕上げが施されるものなどがある。大きさは口径がおおむね12cm～13cmの間におさまる小型品が多い。291は口縁部が欠損しているため全体形は不明であるが、ゆるやかに内彎する体部を有している。

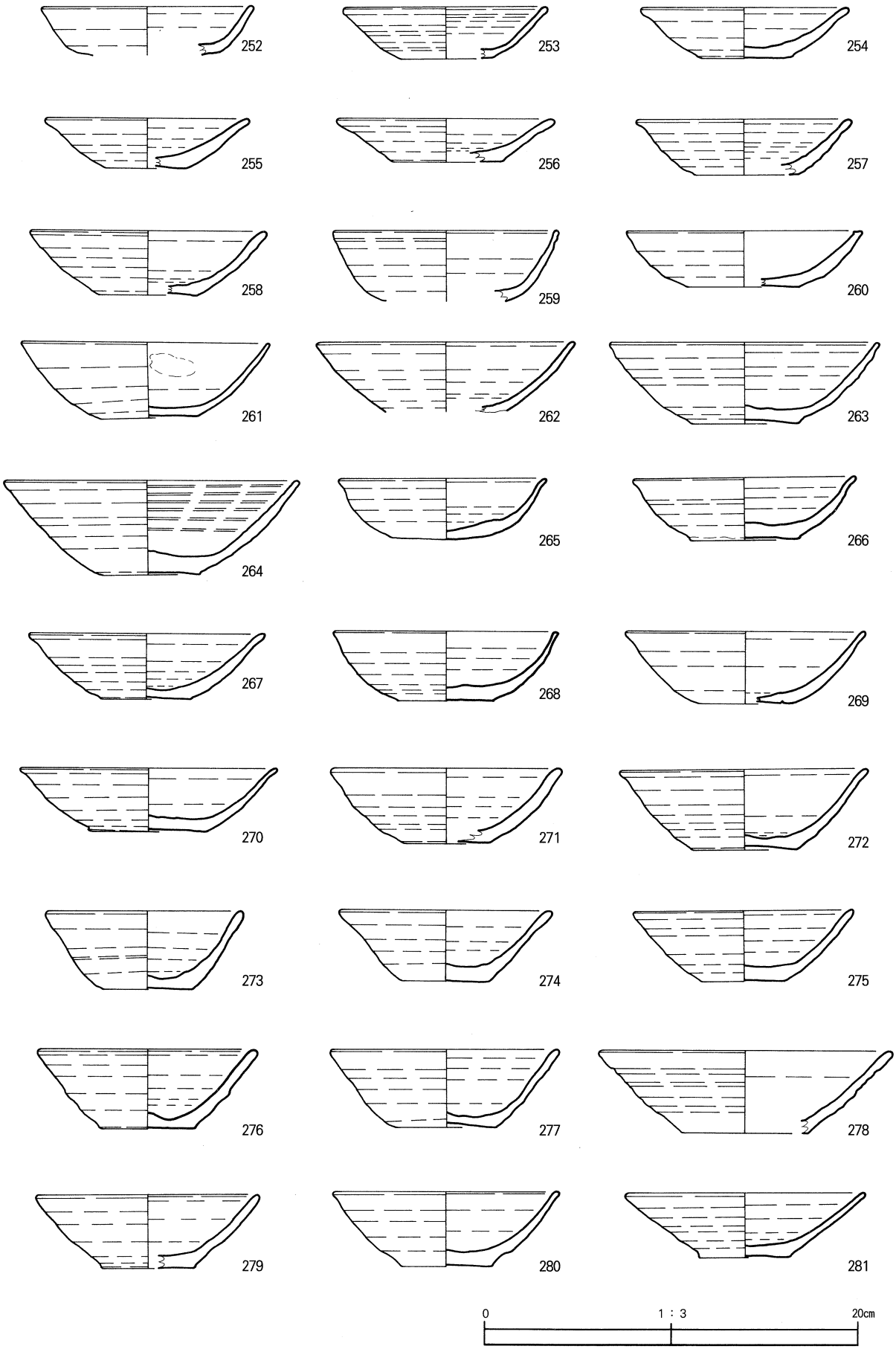
292～295は高台杯である292以外は杯部が欠損しており全体形は不明である。292は直線気味に大きく広がる体部をもつ。高台高は不明である。293～295は高台部のみ破片である。いずれも形状は異なるものの高さが２cm前後と高い。それに対し295は１cm前後の高台高と低い。なおこれは内面に黒色処理が施されている。

296～302は内面に黒色処理が施されている杯である。外形をみるとゆるやかに内彎するもの（296～298）、底部がやや突出するもの（299・300）に分けられ、さらに口縁部の形態で細分されそうである。調整は外面に回転ナデが、内面にミガキが施されるが、296のみは外面にもミガキが施されている。口径は12cm前後と13～14cm前後のものに２分され、後者の方が主体である。全体の出土量でもわかるように非黒色処理杯に比べると量的に少ない。

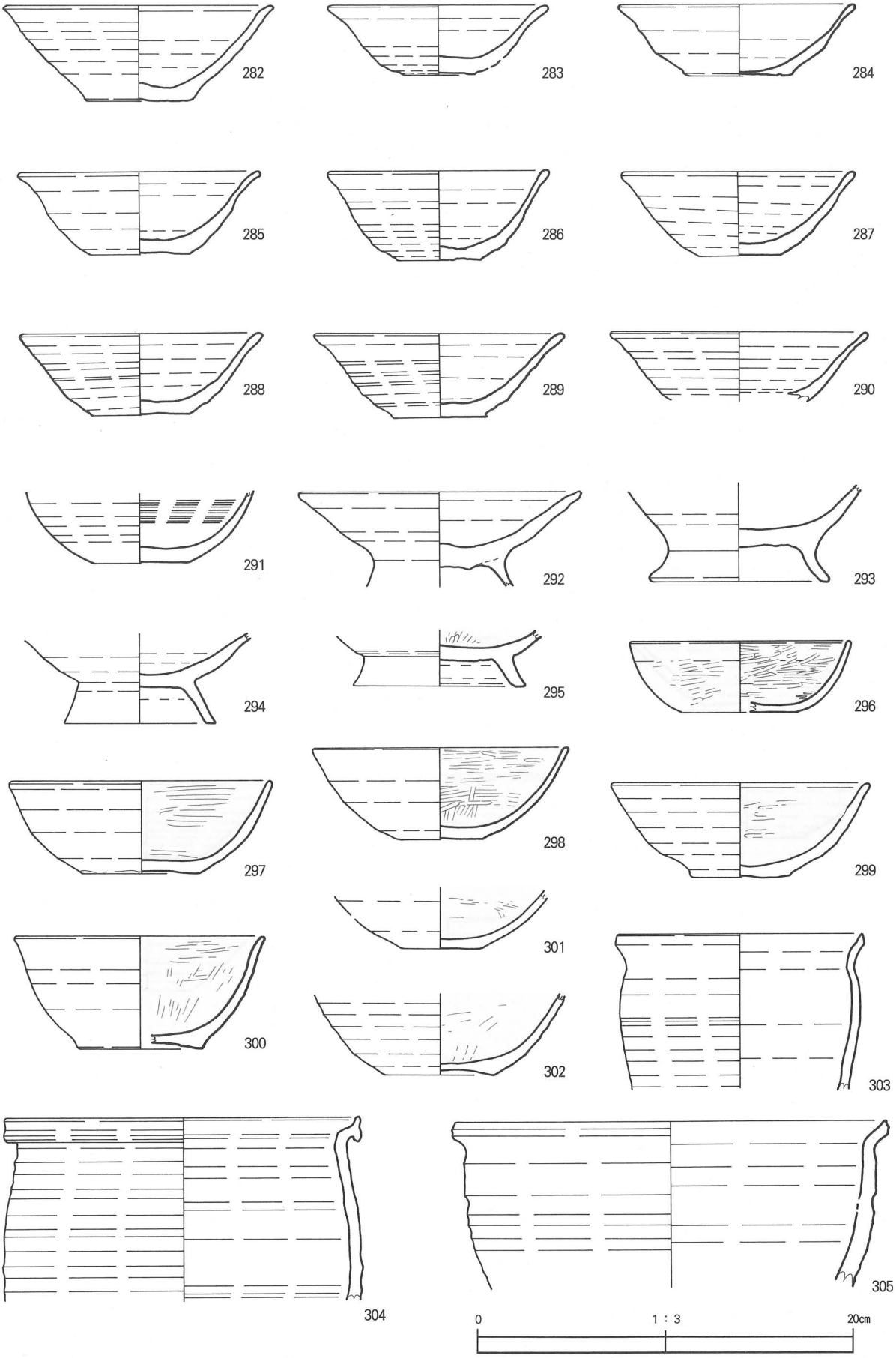
甕類　甕類は破片も含めてその出土量が少ない。図化できたのは３点のみである。

303は口径が13cmの小型に属する。口縁部の形態は緩やかに外反したのちに、端部が上方に引き出される形態を呈する。304は口径が20cm前後の中型品である。口縁部の形態は頸部から強く屈曲した口縁部をもち、端部は上下に肥厚する。体部の形状は不明であるが中位付近に最大径をもつ筒形を呈すると推測される。305は形態的に鉢と分類すべきかもしれない。これらはいずれも内外面ともに回転ナデが施される。

須恵器　甕片を４点図化している。306・307は刻書や墨書が認められる。306は口縁部片であり外面にヘラ描きが、307は胴部片であり墨書がそれぞれ確認される。いずれもその内容は不明である。308は口縁部片で外反する頸部と上下に肥厚する口縁端部をもつ。309は体部から底部にかけての破片である。胴中位に最大径をもつ器形で、調整は体部下半をヘラケズリする。


252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
0
1：3
20cm

第48図　出土遺物２


282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
0
1：3
20cm

第49図　出土遺物３

C　近世・近代の陶磁器（第50図）

310は筒形碗の口縁部破片である。外面に描かれる染付文様は帆船文としたが細片のため詳細は不明である。311も細片のため不明な点が多いが、碗類の一部であろう。外面には染付で草花文が描かれる。胎土は灰横色でありやや濁っている。肥前産と推定される。そのほか図示していないが型紙摺りの徳利と皿が各１点、産地不明の白磁片が１点出土している。

（西澤）

D　石器（第50図）

総重量740.23ｇが出土し、そのうちトゥールは４区と９区より石匙２点、２区より磨石１点が出土している。それぞれが調査区に散在しており、特異な出土状況は見られなかった。なお器種の分類に関しては新平遺跡の石器の項を参照されたい。

石匙　いずれも刃部がつまみ部と平行する縦型石匙であるが、313は先端部が直線的で全体的に台形を呈するのに対して、312は尖った先端部をもち、形態的に２種に分類される。また312は腹面ほぼ全面にアスファルトとみられる黒色の付着物が観察される。313は完形品であり、312は後世のものとみられる破損が刃部にみられる。石質はいずれも頁岩である。

磨石　314は棒状礫の1辺を主に使用しており、擦痕は不明瞭であるが縦方向に観察される。また使用面の真裏にあたる面において数箇所溝状に抉れる部位があり、更なる用途が想定されるが詳細は不明である。石質はデイサイトである。

（横井）

E　鉄生産関連遺物（第50図）

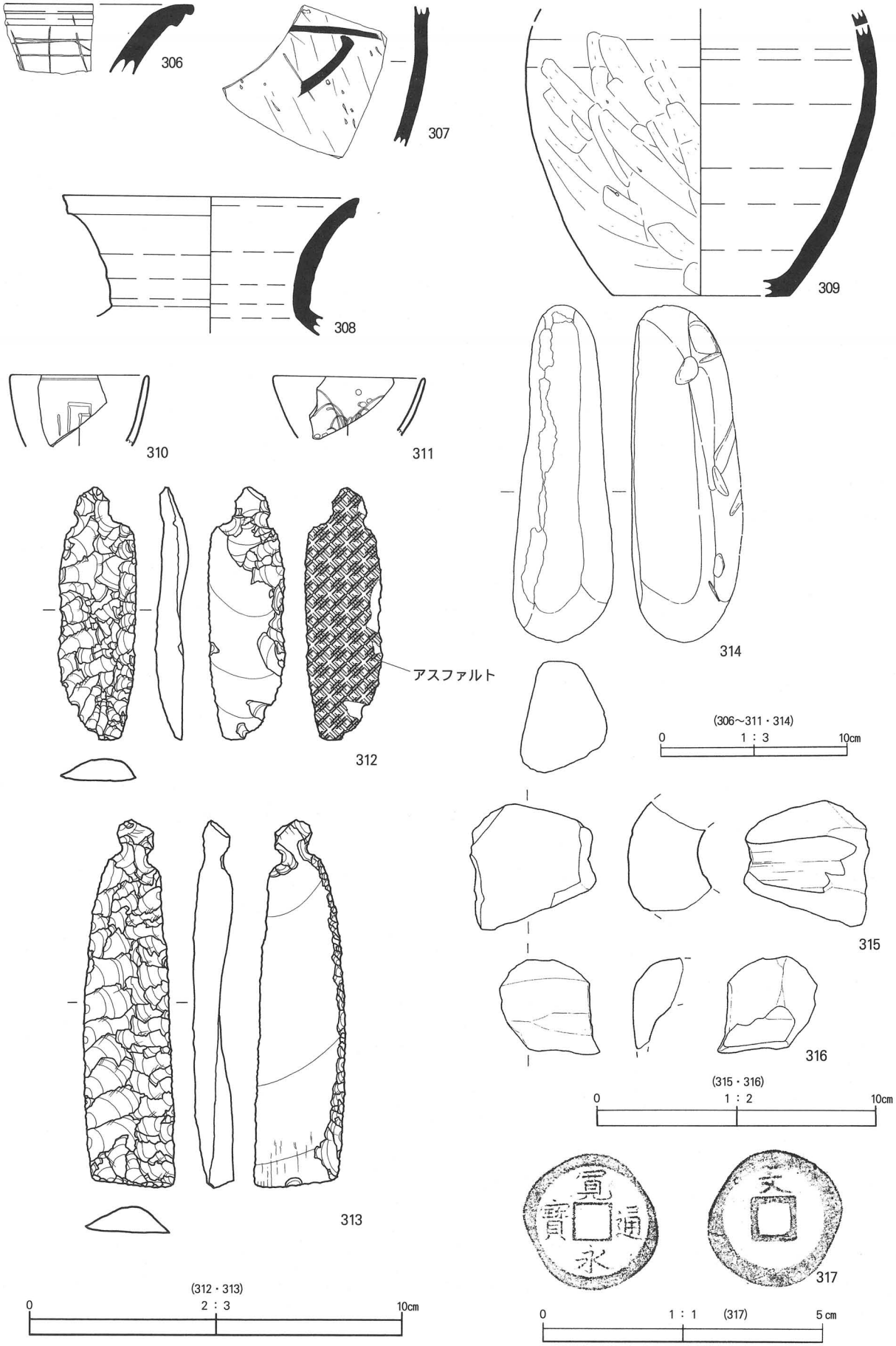
１区より羽口と鉄滓が出土している。これらは遺物包含層において土師器とともに出土していることから古代のものとみて問題ないであろう。

羽口　細片のみ222.75ｇ出土しており、その中から特徴ある２点を図化している。315は残存部よりおおよそ断面円形になるものと捉えられる。外面はヘラナデ調整がみられ、内面には縦方向に幾本もの条線がみられ、成形時に中心に芯棒を用いて焼成前に引き抜いたものと考えられる。また外面には使用時の還元面が観察され、先端部に近い部位と捉えられる。胎土には混和材としてスサが混入されている。いっぽう316は平坦な面を持ち、断面が方形またはカマボコ状になるものと考えられる。内外面ともに摩滅しており整形方法は不明である。外面には還元面が観察され先端部破片とみられる。胎土中の混和材は確認されなかった。

以上のように今回出土した羽口はその形態から２分類でき、これらはほぼ同位置において出土していることから時期差とは考えにくく、あるいはこれは用途別と捉えられるのかもしれない。

鉄滓　１点（373.26ｇ）出土している（写真掲載のみ）。断面が椀形を呈し、全体的に長楕円形である。底部には炉底のものとみられる土が付着している。また先端部には融解した羽口および炉壁とみられる融解物が付着していた。以上のことから本遺物は炉底に残留した椀形滓と考えられる。なお小割りして内部に含まれる鉄分を採集した痕跡はうかがえず、生成時の形状を保っている。なお、自然科学分析は行っていない。

今回の調査では炉跡は確認されていないが、これらの遺物の出土は本遺跡において鉄生産が行われていた可能性を示唆している。先述の通り、本遺跡の本体は東の微高地にあると考えられ、ここに炉および工房が築かれていたのかも知れないが、絶対的に遺物量が少なくここでは推測に留めておきたい。


306
307
308
309
310
311
312
アスファルト
313
314
315
316
317
(306～311・314)
0　1：3　10cm
(315・316)
0　1：2　10cm
(312・313)
0　2：3　10cm
0　1：1　(317)　5cm

第50図　出土遺物４

F　金属製品（第50図）

２区より１点出土している。317は寛永通寳（新寛永：鋳造年1697～1747、1767～1781）で背文は「文」である。外輪がゆがみ、全体形が隅丸方形の粗悪銭である。

（横井）

Ⅳ 分　　析

1 樹 種 同 定

吉川純子 （古代の森研究舎）

新平遺跡は北上市の江戸時代18世紀とみられる屋敷跡である。ここから出土した朱漆塗り椀2点の樹種を調査した。椀からはステンレス剃刀で横断面、接線断面、放射断面の切片を切り、ガムクロラールでプレパラートを作製した。

同定の結果、№.１はナナカマド属、№.２はブナ属であった。以下に同定された樹種の木材解剖学的記載を行う。

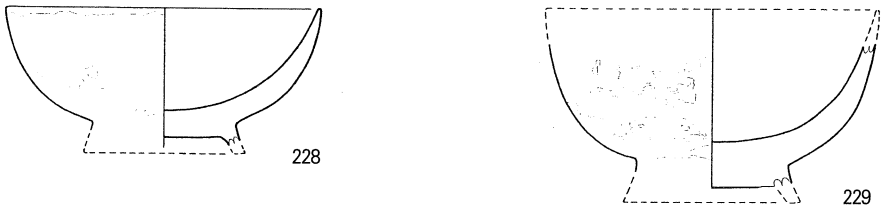
ブナ属(Fagus)：単独ないし２、３個連結した小さな道管が年輪内にやや密に分布し、晩材部でやや径が減ずる、散孔材。横断面に頻繁に広放射組織があり、年輪界と直交する部分で年輪界が外に突出する傾向がある。放射組織は１～３、４細胞幅の紡錘形と、幅の広く長い広放射組織があり、同性である。道管内の穿孔板は単一である。

ナナカマド属(Sorbus)：年輪内に単独ないし２、３個放射方向から斜めに複合した管孔がややまばらに年輪内に分布する散孔材。放射組織は５、６細胞幅くらいでやや幅の広い紡錘形。道管内の穿孔板は単一で、内壁には細くやや幅の狭いらせん肥厚がある。放射組織はほぼ同性だが、縁辺の細胞の形が不規則である。

東北地方では椀にブナ属が利用される例が多く、江戸の仙台城三の丸遺跡では漆器15点にブナが用いられている(山田1993)。また、バラ科材は、戦国時代の群馬県県立文書館遺跡(サクラ類)や江戸から明治にかけての東京都港区No.19遺跡(サクラ)などで漆器素地として用いられており（山田1993)、サクラ属のような比較的堅い材も椀に用いられている。東北の山地に普通にあるバラ科のナナカマド属はサクラ属と材質が似ており、漆器の素地として利用していたと考えられる。

引用文献

山田昌久　1993「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材から見た人間・植物関係史」植生史研究特別第１号 植生史研究会．１-244.

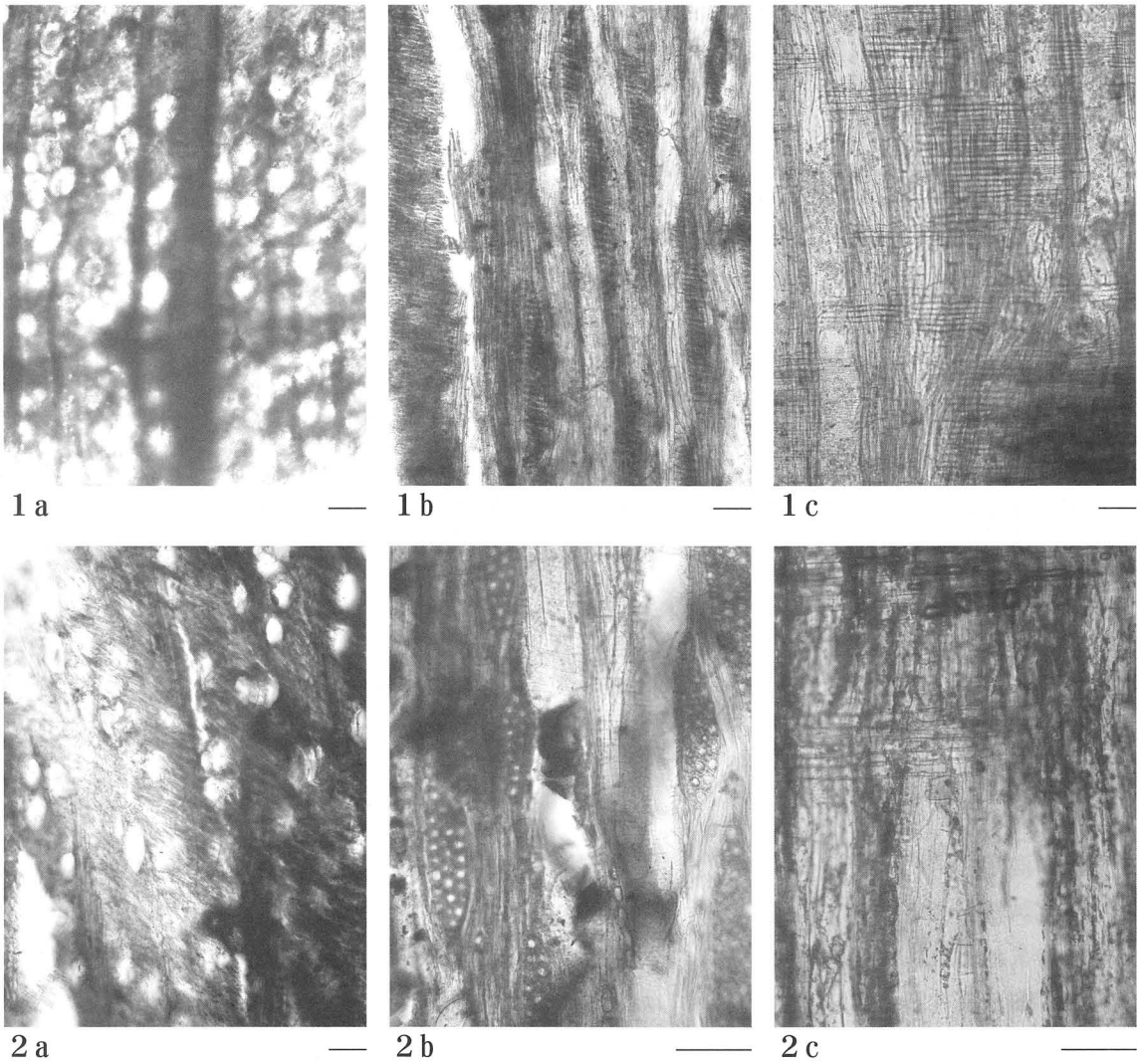


S＝2：5

第51図　新平遺跡出土椀

第３表　新平遺跡　出土椀の樹種

No.	種　　類	樹　　種
1	朱漆塗り椀	サクラ属
2	朱漆塗り椀破片	ブナ属



１．ブナ属（No.２）　２．ナナカマド属（No.１）
ａ：横断面　ｂ：接線断面　ｃ：放射断面　　スケール＝0.1mm

第52図　新平遺跡　出土椀の顕微鏡写真

2　火山灰分析

株式会社　古環境研究所

1．はじめに

岩手県中部とその周辺には、焼石、栗駒、鳴子、鬼首、肘折、十和田など東北地方に位置する火山のほか、北海道や中国地方さらには九州地方などに分布する火山に由来するテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が降灰している。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、年代の不明な火山灰層が検出された北上市新平遺跡においても、発掘調査担当者により採取されたテフラ試料を対象として、火山ガラス比分析、屈折率測定さらにEPMAによる火山ガラスの主成分化学組成分析を行って、指標テフラとの同定を行うことになった。調査分析の対象となった試料、土器廃棄場の３層から採取されたものである。

2．火山ガラス比分析

（1）分析試料と分析方法

土器廃棄場の３層に含まれる火山ガラスの量比や特徴を明らかにするために、火山ガラス比分析を行った。火山ガラス比分析の手順は次の通りである。

1）試料15gを秤量。
2）超音波洗浄により泥分を除去。
3）80°Cで恒温乾燥。
4）分析篩により、１／４－１／８㎜の粒子を篩別。
5）偏光顕微鏡下で250粒子を観察し、火山ガラスの色調・形態別組成を求める。

（2）分析結果

火山ガラス比分析の結果をダイヤグラムにして図１に、その内訳を表１に示す。３層には、5.6%の火山ガラスが含まれている。火山ガラスは比率が高い順に、繊維束状に発泡した軽石型ガラス(3.2%)、スポンジ状に発泡した軽石型ガラス（1.6%)、透明のバブル型および分厚い中間型（各0.4%）である。

3．屈折率測定

（1）測定試料と測定方法

３層に含まれる火山ガラスを対象として、屈折率の測定を行った。測定には、温度変化型屈折率測定装置（古澤地質社製、MAIOT）を利用した。

（2）測定結果

屈折率測定の結果を表２に示す。３層に含まれる火山ガラスの屈折率（n）は1.502-1.508で、ごくわずかに1.498のものが認められた。

４．火山ガラスの主成分化学組成分析

（１）分析試料と分析方法

３層に含まれる火山ガラスと指標テフラとの同定精度を向上させるために、波長分散型エレクトロンプローブＸ線マイクロアナライザー（以下、WDS型EPMAとする）により、火山ガラスの主成分化学組成分析を行った。分析に使用した分析機器は、山形大学理学部の日本電子JXA8600MWDS型EPMAである。加速電圧15kV、照射電流0.01μA、ビーム径5μmの条件で行った。補正法はOxide ZAF法を用いた。

（２）分析結果

火山ガラスの主成分化学組成分析結果を表３に示す。この表には、本遺跡とその周辺に分布する代表的な後期更新世広域テフラと、それに伴って噴出した火砕流堆積物に含まれる火山ガラスの主成分化学組成も示した。

５．考察－指標テフラとの同定

土器廃棄場の３層に含まれる火山ガラスは、量は少ないものの、火山ガラスの形態、屈折率、さらに主成分化学組成から、915年ＡＤに十和田火山から噴出したと考えられている十和田ａテフラ（To-a、大池、1972、町田ほか、1981、町田・新井、1992、2003など）に由来すると考えられる。なお今回火山ガラスの比率が低かった原因の一つとしては、限られた試料の中で純度の良い試料が得られにくかった可能性が考えられる。できるだけ分析者による現地の観察と試料採取を期待したい。

６．まとめ

新平遺跡で検出された土器廃棄場の３層について、火山ガラス比分析、屈折率測定、EPMAによる火山ガラスの主成分化学組成分析を行った。その結果、十和田ａ火山灰（To-a、915年ＡＤ）に由来する火山ガラスを検出することができた。

文献

青木かおり・新井房夫（2000）　三陸沖海底コアＫＨ94-3、ＬＭ-8の後期更新世テフラ層序．第四紀研究、39、p. 107-120.

古田俊夫・森脇　広・町田　洋（1983）　火山ガラスの主成分組成に基づく広域テフラの同定．文部省科研費　報告書「日本列島周辺の深海底堆積物の分析を中心とした第四紀火山活動と気候変動の研究」（研究代表　者　町田　洋）、p. 35-38.

町田　洋・新井房夫（1992）　火山灰アトラス．東京大学出版会、276p.

町田　洋・新井房夫（2003）　新編火山灰アトラス．東京大学出版会、336p.

町田　洋・新井房夫・森脇　広（1981）　日本海を渡ってきたテフラ．科学、51、p. 562-569.

大池昭二（1972）　十和田火山東麓における完新世テフラの編年．第四紀研究、11、p. 232-233.

第４表　火山ガラス比分析結果

地　　点	土層	bw(cl)	bw(pb)	bw(br)	md	pm(sp)	pm(fb)	その他	合計
ＳＸ01土器廃棄遺構	３層	1	0	0	1	4	8	236	250

数字は粒子数．bw：バブル型，md：中間型，pm：軽石型，cl：無色透明，　pb：淡褐色，　br：褐色，
sp：スポンジ状，fb：繊維束状．

第５表　屈折率測定結果

地点・土層・テフラ	火山ガラス（ｎ）
ＳＸ01土器廃棄遺構・３層	1.498，1.502-1.508
十和田a（To-a）*1	1.496-1.508
十和田中掫（To-Cu）*1	1.510-1.514

屈折率の測定は、温度変化型屈折率測定装置（MAIOT）による。
屈折率の（　）は、modal rangeを示す。　*1：町田・新井（2003）。

第６表　火山ガラス主成分化学組成分析結果

地点・土層・テフラ	SiO_2	TiO_2	Al_2O_3	FeO	MnO	MgO	CaO	Na_2O	K_2O	P_2O_5	n
ＳＸ01土器廃棄遺構・３層	77.18	0.36	12.57	1.76	0.10	0.41	2.04	4.07	1.47	0.05	11
	0.37	0.04	0.11	0.13	0.07	0.03	0.09	0.24	0.09	0.03	
十和田a（To-a）*1	77.87	0.37	12.81	1.75	0.10	0.42	2.00	3.29	1.34	0.06	—
十和田中掫（To-Cu）*1	75.08	0.44	13.28	2.46	0.08	0.63	2.63	4.04	1.29	0.09	—
姶良Tn（AT）*1	78.20	0.12	12.30	1.22	0.02	0.11	1.10	3.37	3.60	0.00	—
姶良Tn（AT）*2	77.88	0.13	12.26	1.27	0.04	0.13	1.10	3.63	3.53	—	46
阿蘇4　（Aso-4）*3	73.69	0.39	14.36	1.50	0.09	0.27	0.95	4.17	4.57	—	21
御岳1　（On-Pm1）*2	76.30	0.15	13.91	0.99	0.09	0.26	1.61	3.65	3.04	—	10

山形大学理学部のWDS型EPMAによる。無水に換算。n：分析ポイント数。上段が平均値、下段は標準偏差。　*1：八木浩司山形大学教育学部教授の未公表資料。　*2：町田・新井（1992）のデータから抜粋。基礎データは、古田ほか（1983）。
*3：青木・新井（2000）。

3　年代測定結果報告書

株式会社　加速器分析研究所

1）年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用している。
2）ＢＰ年代値は、1950年からさかのぼること何年前かを表している。
3）付記した誤差は、次のように算出している。
　複数回（通常は４回）の測定値についてx^2検定を行い、通常報告する誤差は測定値の統計誤差から求めた値を用い、測定値が１つの母集団とみなせない場合には標準誤差を用いる。
4）δ^{13}Ｃの値は、通常は質量分析計を用いて測量するが、ＡＭＳ測定の場合に同時に測定されるδ^{13}Ｃの値を用いることもある。
　δ^{13}Ｃ補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載しておく。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰：パーミル）で表したものである。

$$\delta^{14}C = [(^{14}A_S - {}^{14}A_R) / {}^{14}A_R] \times 1000 \qquad (1)$$

$$\delta^{13}C = [(^{13}A_S - {}^{13}A_{PDB}) / {}^{13}A_{PDB}] \times 1000 \qquad (2)$$

ここで、$^{14}A_S$：試料炭素の^{14}Ｃ濃度：（$^{14}C/^{12}C)_S$ または（$^{14}C/^{13}C)_S$
　　$^{14}A_R$：標準現代炭素の^{14}Ｃ濃度：（$^{14}C/^{12}C)_R$ または（$^{14}C/^{13}C)_R$

δ^{13}Ｃは、質量分析計を用いて試料炭素の^{13}Ｃ濃度（$^{13}A_S = {}^{13}C/^{12}C$）を測定し、ＰＤＢ（白亜紀のベレムナイト（矢石）類の化石）の値を基準として、それからのずれを計算する。

但し、ＩＡＡでは加速器により測定中に同時に^{13}Ｃ／^{12}Ｃも測定しているので、標準試料の測定値との比較から算出したδ^{13}Ｃを用いることもある。この場合には表中に〔加速器〕と注記する。

また、Δ^{14}Ｃは、試料炭素が$\delta^{13}C = -25.0$（‰）であるとしたときの^{14}Ｃ濃度（$^{14}A_N$）に換算した上で計算した値である。（１）式の^{14}Ｃ濃度を、δ^{13}Ｃの測定値をもとに次式のように換算する。

$$^{14}A_N = {}^{14}A_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}C/1000))^2 \qquad (^{14}A_S\text{として}^{14}C/^{12}C\text{を使用するとき})$$

または

$$= {}^{14}A_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}C/1000)) \qquad (^{14}A_S\text{として}^{14}C/^{13}C\text{を使用するとき})$$

$$\Delta^{14}C = [(^{14}A_N - {}^{14}A_R) / {}^{14}A_R] \times 1000 \qquad (‰)$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代値との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしないδ^{14}Ｃに相当するＢＰ年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

^{14}Ｃ濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、ｐＭＣ（percent Modern Carbon）がよく使われており、Δ^{14}Ｃとの関係は次のようになる。

$$\Delta^{14}C = (pMC/100 - 1) \times 1000 \qquad (‰)$$

$$pMC = \Delta^{14}C/10 + 100 \qquad (\%)$$

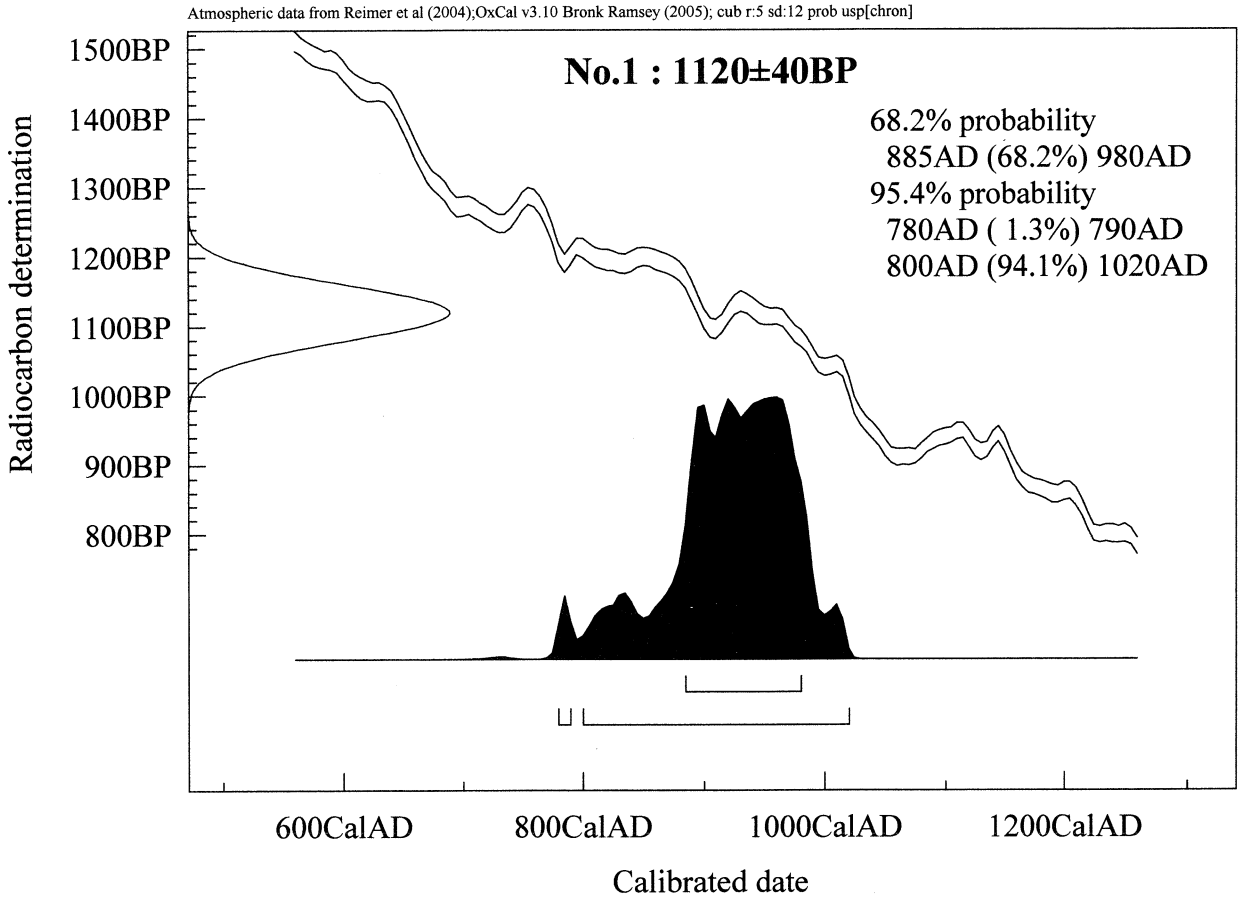
国際的な取り決めにより、このΔ^{14}CあるいはｐＭＣにより、放射性炭素年代（Conventional Radiocarbon Age；yrＢＰ）が次のように計算される。

$$T = -8033 \times \ln\left[\left(\Delta^{14}C / 1000\right) + 1\right]$$
$$= -8033 \times \ln\left[\left(pMC / 100\right)\right]$$

第７表　暦年補正

ＩＡＡ Code No.	試　　料	ＢＰ年代および炭素の同位体比
ＩＡＡＡ-51933	試料採取場所　：　新平遺跡ＳＸ01 試料形態　：　炭化物 試料名（番号）　：　No１	Libby Age（ｙｒＢＰ）　：　1,120±　40 δ^{13}Ｃ（‰）、（加速器）　＝　−22.44±　0.75 Δ^{14}Ｃ（‰）　＝　−130.6±　3.8 ｐＭＣ（%）　＝　86.94±　0.38
＃1155	（参考）　δ^{13}Ｃの補正なし	δ^{14}Ｃ（‰）　＝　−126.1±　3.6 ｐＭＣ（%）　＝　87.39±　0.36 Age（ｙｒＢＰ）　：　1,080±　30

【参考値：暦年補正　Radiocarbon determination】



使用プログラム・OxCal　v3.10

第53図　ＢＰ年代および炭素同位体比

V　考　　察

1　出土土器について

（1）はじめに

新平・芦萱遺跡からは総計143,759.2ｇの古代土器が出土している。新平遺跡土器廃棄場（ＳＸ01）出土土器については十和田ａテフラとの関係とその遺構の性格から一括性の高いことから、時期的にまとまった様相を呈する。そのため、今後重要な年代決定資料となり得ることからここで再度その特徴をまとめておきたい。

（2）分　　類

ここでは、出土した古代の土器のうち量が多い杯（非内黒）と甕を中心に分類を行う。そしてそれらを周辺の遺跡と比較後、先行の研究成果に対比させていきたい。

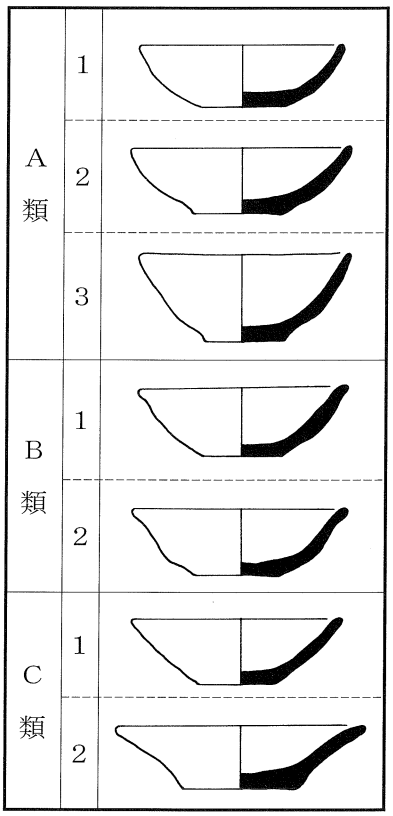
杯の分類[1]

口縁部および体部の形態を指標にして大きく３大別する。さらにこれらを底部形態、器高などを基準に細分すると以下のように７種に分類する。

Ａ類　体部、口縁部ともに内彎するものを一括している。底部の形態的特徴や器高によって３つに細分される。１類は底部（側縁）が窪まないもの、２類は底部（側縁）が窪むもの、３類は２類と同様の形態であるが器高が高いもの、に３分される。

Ｂ類　体部は内彎しながら立ち上がるが、口縁部が外反するもの。底部の形態的特徴によって２分される。１類は底部（側縁）が窪まないもの、２類は底部（側縁）が窪むものになる。

Ｃ類　体部が直線的に立ち上がるが、大きく外反するものを一括している（体部が内彎しないもの）。体部の形態で細分している。１類は体部が直線的に立ち上がるもの。２類は体部が外反するものを分けている。



第54図　杯の分類

これまでの研究においてはこの時期の杯類には法量分化が確認されることから（伊藤1996）、これらをさらに小型から大型までの４つに分けて、小さい方からⅠ……Ⅳとした。同時期における相対的な差をもって分ける場合もあるが、今回は口径を基準に、Ⅰは口径10～11cm以下、Ⅱは11以上～13cm以下、Ⅲは13～15cm前後、Ⅳが15cm以上と仮に設定しておく。この数値は目安であり新平遺跡を中心に設定したものであるため、広範囲に利用する場合多少数値が変わる可能性がある。

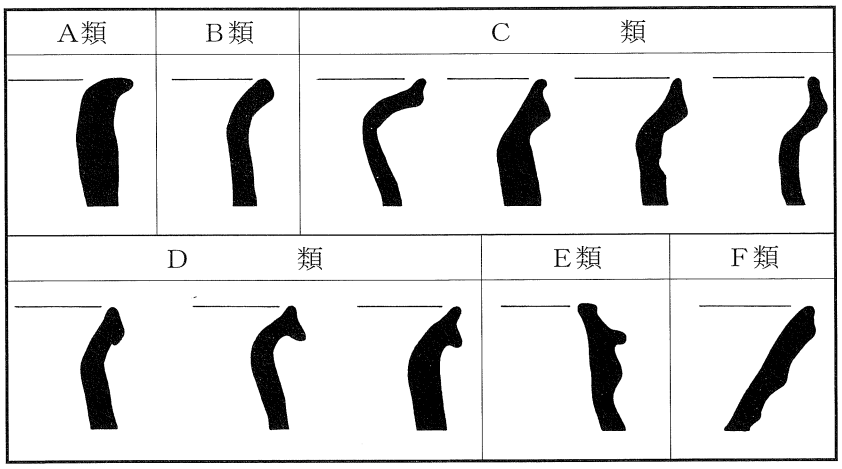
甕の分類

甕は口縁部から底部まで完存するもの、完形に復元できるものが少ないため口縁部のみによる分類を行う。

Ａ類　口縁部が外反するいわゆる単純口縁の形態をとり、調整にロクロを使用しない。口縁端部がわずかに肥厚するものもある。

B類　口縁部が外反するいわゆる単純口縁の形態をとり、調整にロクロを使用する。

C類　口縁部は外反しながら立ち上がり、端部が上方に引き出されるもの。立ち上がる角度によって細分されるが、ここでは一括している。



第55図　甕の分類

D類　口縁部が外反しながら立ち上がり、端部が上下に肥厚するもの。

E類　口縁部が内彎しながら立ち上がり、短部を平らに仕上げるもの。外面に鍔状の粘土紐を添付させる。

F類　口縁部が外方へ大きく広がりながら立ち上がるもの。外面に幅広のナデが加えられるもの。

その他の器形

そのほか土師器には鉢や耳皿が、須恵器には甕類があるが数が少ないためここでは分類を行わない。

（3）出土土器の特徴について

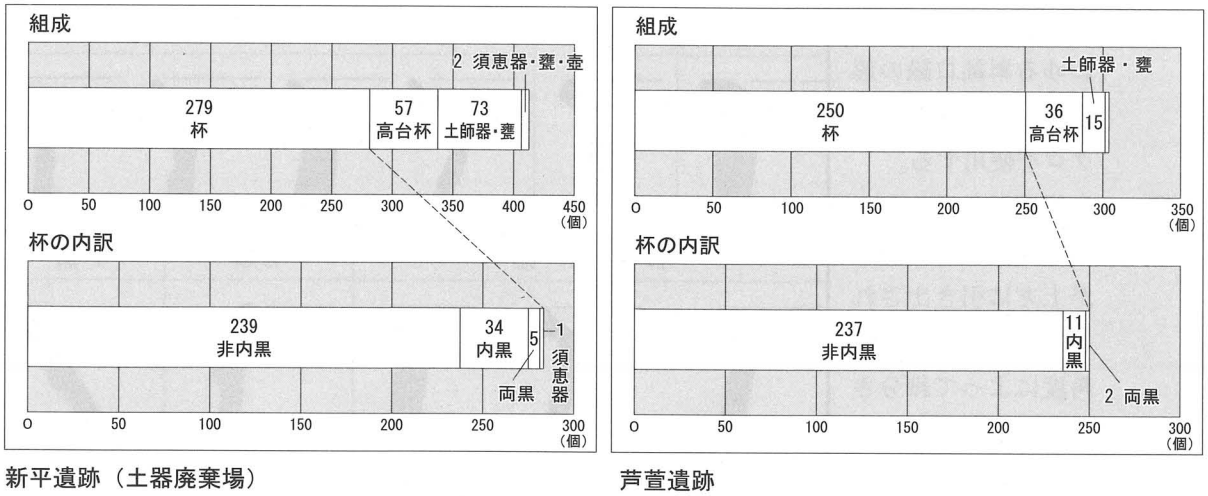
個体数について

まず新平遺跡土器廃棄場（ＳＸ01）における組成率をみておこう。器種には土師器杯（皿）、土師器高台杯、土師器甕、須恵器杯、須恵器甕・壺がある。出土した個体数を推定するため１／12計測法（切り上げ法・森本1994など）を用いて計測をおこなっている。口縁部ではとくに杯口縁部が１／12以下のものが多く、計測に誤差が生じかねないおそれがあったため底部計測法によった。また、甕についても安定的な量が確認できたことから底部計測法によっている。

それによると、全個体数は411点となる。この遺構は部分的な範囲を調査したに過ぎず、完掘していないため土器廃棄場全体では個体数はさらに増加する。他遺跡と比較できうる資料は今のところ無いが通常の竪穴住居跡出土量と比べても圧倒的に個体数が多いことが予想される。ＳＸ01が廃棄場所であった可能性を裏付けるかもしれない。

さて器種別でこれらを見ると杯が279点・68％を占める。次いで土師器甕（大小型を含む）73点・18％である。高台杯が57点・14％であり、これで100％となる。そのほか須恵器壺・甕が２点・0.4％があるが、百分率では百を超えており、割合的には０％に限りなく近い。したがって、組成比としては土師器のみで杯：甕：高台杯＝７：２：１となる。この割合が他の遺跡と比べてどうなのかは今のところ不明である。同様の計測法（図示以外の遺物も含めて）による比較が重要であるためであり、今後資料の集積を待って比較したい。

杯の細分で見ると全279点のうち、内外面ともに黒色処理をしないもの（以下、非内黒）239点・85.6％、内面のみに黒色処理を施すもの（以下、内黒）が34点・12％、両黒が５点・２％、須恵器が１点・0.4％となる。構成比は、非内黒：内黒＝９：１となり、大多数を非内黒で占める。少数ではあるが一定量の内黒が残り、両黒と須恵器はほとんど割合がないことになる。高台杯でも同様の割合で、非内黒：



新平遺跡（土器廃棄場）　　芦萱遺跡

第56図　組成比のグラフ

内黒の割合が９：１となっている。この時期の傾向として一般化できるかわからないが、本遺構の傾向としては上記のようになる。

いっぽうで芦萱遺跡の場合は包含層出土遺物が一括性をもつという保証はないが仮にまとめておく。個体数を見ると総計301個体の土器が出土している。器種別にみると杯250点、高台杯36点、甕15点、須恵器甕１点である。供膳具：煮炊具：貯蔵具の割合は、10：１：0.5となり、杯類が圧倒的な量を占めることがわかる。供膳具のなかをくわしくみると、杯では非内黒が237点、内黒が11点、内外面黒色処理が２点が確認され、杯の中でも非内黒土器が圧倒的多数を占めている。このような状況は新平遺跡ＳＸ01と類似している点である。したがって個々の遺構の特徴というよりは時期的な傾向を示しているかもしれない。

杯の特徴

器形をみると掲載したなかでは口縁部が内彎する杯Ａ類が18点ともっとも多く、ＢとＣ類は同数となっている。杯Ａ類をさらに詳しくみると、２や３類の底部が窪む器形のものが主体（７割程度）を示す傾向にある。かつて奥州市水沢区中半入遺跡での検討例（西澤2004）でみるとこの器形は時期的に新しい傾向である。計測値をみると、口径が１５㎝を超えるⅣ類については非常に少なく３例が確認できるのみである。主体はⅠとⅡの大きさとなるのが新平遺跡ＳＸ01出土土器の大きな特徴である。また、出土例が少ないものの、杯Ａ類やＣ類に多くみられるように同一器形においても大小の大きさが認められることからある程度の法量分化が存在していたと考えられる。

芦萱遺跡の器形では、杯Ａ類12点、Ｂ類19点、Ｃ類7点となり、Ａ・Ｂ類が主体を占めていることがわかる。このうち、ＡとＢには２類の底部が突き出るような形態のものが一定量（３割から４割）出土するが、新平遺跡よりは割合が少ない。口縁部の計測値をみるとⅠの大きさが８点、Ⅱが23点、Ⅲが５点、Ⅳが２点となり、Ⅱの大きさが主体的である。Ⅰの大きさも一定の割合を占めること、Ⅳがほとんど出土しないことなどが芦萱遺跡出土杯の特徴となる。

甕の特徴について

甕類については、杯に比べて圧倒的に数が少ないものの一定量が確認できる。先の分類別に見ると[2]Ａ類11点、Ｂ類７点、Ｃ類22点、Ｄ類６点、Ｅ類１点、Ｆ類１点となり、Ｃ類が46％と約半数を占めるのが大きな特徴である。次いでＡ類が23％、Ｂ、Ｄ各15％が続く。また、Ｅ・Ｆ類など他遺跡でも類例が少ない土器についてもわずかながら出土する点が重要であろう。主体となる器形のＣ類につい

ては口縁端部の角度についてみるといくつかの形態に細分される可能性があり、あるいはこれが時期差を示しているかも知れない。

Ｅ類は羽釜と呼ばれるものである。この形態はこれまでの時期にはあまり例が無いものであり、この土器群を特徴づけるひとつの器種であるといえる。Ｆ類は他の器種に含まれる可能性が残るが一応ここでは甕類に含めた。これらＥ・Ｆ類については口縁部のみの破片であるため全体の形態は不明であり、類例の増加を待ちたい。また芦萱遺跡については破片数が少ないこともあり１／12口縁部計測法による細分計測は行っていない。分類別の破片数でみるとＡ５点、Ｂ６点、Ｃ48点、Ｄ７点、Ｅ１点、Ｆ０点となり、Ｃ類が主体となる点は新平遺跡と同様である。

そのほか、大きな特徴に底部痕跡がある。ＳＸ01出土の土師器甕底部には砂が付着する「砂底」土器や「ムシロ」痕跡が残るものがまとまって確認された。底部での通常との比率を見ると全個体73点のうち、ナデ調整が残るもの25点・34％、糸切り調整が残るもの37点・51％、いわゆる砂底が７点・10％、ムシロ痕跡が残るもの4点・５％となる。砂底、ムシロ痕が一定量確認できるのは他の遺跡にない特徴となる。

いわゆる砂底土器については、櫻田によると土師器甕に確認される例が多く、東北地方北部においては普遍的な土器の特徴とされ、東北北部から北海道にかけて分布が集中しているという（櫻田1993）。岩手県内では安比川沿いに分布が集中することが知られている。また、八幡平市安代町上の山Ⅶ遺跡ではこのいわゆる砂底土器と後述する簾状の圧痕をもつ土器が出土しているのが注目される。

ムシロ痕跡については集成をおこなった稲野（稲野1995）や丸山（丸山直2006）をみると、岩手県域では、盛岡市域に１点のみ確認できるが、花巻・旧石鳥谷から北上市域にかけての北上川流域に集中する傾向がある。東北南部に出土が確認される点でいわゆる砂底土器の分布域よりも広いことがわかる。９世紀前半代までは宮城や山形県に、９世紀後半から10世紀前半は岩手や秋田県に、10世紀から11世紀にかけては津軽地方に分布域が移動する傾向があることが指摘されている（稲野1995）。器種についても甕だけではなく杯においても確認される。杯底部（外底面）にムシロ痕跡が確認されたのは３点のみであるが、図示した第28図20のような杯もこの種の土器と思われる。このような土器についてはこれまでの出土例をみると、ある特定の地域に偏りがある。また高木中館遺跡例では出土する遺構にも偏りがみられる。この種の土器については様々な捉え方があるが[3]未だ明確ではない。いずれにせよ、この種の土器群が一定量確認できるものの、主体的ではない点は指摘しておく。

なお、図示しなかったが芦萱遺跡においても甕15点のうち「砂底」が２点確認されている。

（４）比　　較

次に、ある程度の年代を想定するためにこれらの特徴を持つ土器群と周辺の遺跡の土器群とを比較してみる。内面に黒色処理が施されない無処理の杯類（非内黒杯）が主体となる時期はこれまで10世紀以降と考えられている（伊籐1998、井上1996、八木1993など）。ＳＸ01出土の杯では総個体数279例のうちこの種の土器は86％、芦萱遺跡では95％をしめることから両遺跡出土土器は総じて10世紀以降の時期と考えられる。ここでは両遺跡の出土土器のうち杯類を中心としてこの時期に位置づけられる胆沢城の資料と比較しつつさらに時期を限定していきたい[4]。

胆沢城には年代推定のための重要な遺構がいくつかある。そのなかで４時期の遺構が重複している箇所（ＳＫ158・155・152・ＳＸ126）と十和田ａテフラを介在とした良好な層位関係のあるＳＥ1050を取り上げて本遺跡資料と比較してみたい。

重複関係のうち古いものから順にみていこう[5]。

胆沢城ＳＫ158（10世紀前葉）　非内黒土師器では杯にはＡ類とＢ類が認められ、Ａ類には１類と２類がＢ類には１・２・３類がそれぞれ認められる。大きさはＡ１とＢ１類にⅡの大きさが少数確認されるが、主体はⅢの大きさとなる。法量分化を認めるとするならば、ⅡとⅢとに分化していたかもしれない。

胆沢城ＳＫ155（10世紀中葉）　杯類ではＡ、Ｂ類のほかにＣ類が確認されるようになる。Ａ、Ｂ類でも２類の細別形態が確認できるようになる。大きさはほとんどがⅡの大きさとなり、ＩがＢ２類にわずかに確認できるようになる。Ⅲが確認できず、総じて小型化している。杯以外では高台杯がある。

胆沢城ＳＫ152　土師器杯ではＡ２Ⅱ類、Ｂ２Ⅱ類が主体となる点とＡ２類にＩの大きさが確認される点はＳＫ155と同様である。いっぽうでＡ３類にはⅢの大形品も残る。この出土土器がある一時期の組成のすべてと仮定すると、あまり明確な法量分化は認めにくいと思われる。杯以外では高台杯がある。

胆沢城ＳＸ126　ＡⅡ類が主体であるが、ＩやⅢの小・大型の大きさも確認される。杯以外には高台杯(Ⅲ)、柱状高台杯(Ⅲ)がある。杯の組成的にはＳＫ152に類似するが、柱状高台杯(Ⅲ)が加わるのが特徴かも知れない。

以上の４遺構の重複関係からみると、器形は杯Ａがいずれの遺構にも存在すること、Ａ２、Ｂ２類の器形は後出的であることがわかる。大きさでみると、ＳＫ158の段階ではⅢの大型が確認されているが、次第にⅡの割合が増え、Ｉの小型が組成に加わるといったことがわかるかもしれない。ＳＫ155・ＳＫ152・ＳＸ126は杯でみるとその内容にはあまり明確な違いは認められず、大別するとＳＫ158→ＳＫ155という流れが想定されると思われる。

胆沢城ＳＥ1050　各層出土土器を古い順にみると、５層は杯Ａ・Ｂ・ＤのⅢの大きさのみである。４層はＤ・ＥⅢに、Ｂ・Ｃ・ＤⅡが加わる。３層は杯の各類にⅡ・Ⅲ・Ⅳの大きさがそろう。器形もＧなど多くの器形がそろう。２層は大きさがⅡとⅢで大部分を占め、器形もＤ・Ｅが多くなる。Ⅳの大きさも一定量は残る。１層はＥⅢ・ＣⅢ・ＡⅢとＡⅡ・ＢⅡ・ＣⅡ・ＥⅡ・ＧⅡがある。Ⅱの大きさが多くを占める。ⅡとⅢで組成が構成される。なお、甕については共伴する例が少ないため様相は不明としておく。

このようにみると大きく２つの時期に区別できるかも知れない。

最初の段階（１期とする）では、杯ＡとＢ類があり、Ｃ類は確認できないことが多く、比較した遺跡が少ないこともあり定かではないが、Ｃ類はＡ、Ｂ類より後出的かも知れない。Ａ、Ｂ類の細別分類でも２類や３類は少ない。法量ではⅡ、Ⅲの大きさが確認できる。この段階では法量分化が認められるがそれは口径の大きな器種間、すなわちⅡ-Ⅲで構成される傾向がある。量的に多いのはⅢの大きさとなる。次の段階（２期とする）ではⅢの大きさが減少し、Ⅱが大部分を占めるようになる。このなかでＩの大きさのものが登場しはじめるが、これとⅡの大きさで法量分化を構成しはじめる。Ｉの大きさが２期のなかで漸次増加傾向にあるかも知れない。器形はＡ、Ｂ類には２類の形態が増える傾向にある。いずれにせよ総じて口径が前段階よりも小型化し、Ⅱのみで占められる。そしてＩの大きさが少数ではあるが出現することに大きな特徴がある。ただし、依然としてⅢの大きさもわずかながら存在している点は重要である。

先にふれた新平遺跡出土土器の特徴と比べてみると、杯Ａ・Ｂに２類が多い点、大きさにはＩとⅡで構成される点などから２期に相当すると考えられる。なお、新平遺跡に少数ながら出土の見られたⅣの大きさのものは多賀城出土資料などをみると９世紀代に多い大きさと思われる。上にあげた胆沢城跡資料には出土が確認できないものの、本遺跡例を考慮するとこの大きさのものが少数ながらこの

段階まで残っていることは付け加えておきたい。

つぎに井上編年との対応をみると、井上は小型杯（口径10cm前後）の出現を10世紀中葉の、小皿（口径９cm前後、器高2.5cm以下）の出現を10世紀後葉の指標としている（井上1997）。先に想定した段階に対応させると、１期は小型杯が確認できないので10世紀前葉、２期は小型杯が確認できる段階として10世紀中葉の年代がそれぞれ想定できよう。一部に小型皿（ここでは杯Ⅰの範疇に含めている）の存在が確認できるため後葉にも一部かかると推定される。新平遺跡ＳＸ01では十和田ａテフラの上層にこれらの土器群が出土することからもこの年代観には矛盾が少ないと思われる。

伊藤編年との対応でみると、まず高台杯の共伴例からⅡ期後半以降に限定できる。この段階は杯に分化していた法量がⅡ（中型）に統一されるものの、器種の分化もっともすすむ段階とされる（伊藤1998）。この特徴は先に設定した２段階に相当するかもしれない。杯の大きさはⅡに統一されるようになり、さらには杯ＡからＣまでそろうなど新平遺跡出土土器と類似する特徴かも知れない。

芦萱遺跡では新平遺跡土器廃棄場（ＳＸ01）出土土器と総じて類似する傾向にあるが、Ⅰの大きさの割合が少ない点が大きな違いとなる。ただし、これまでの研究ではこのような傾向がどのように位置づけられるかは不明であるため、芦萱遺跡出土土器については小型杯が一定量確認できる点のみを重視して井上編年に準拠させると10世紀中葉の年代を想定しておきたい。

なお、これまでのところ周辺の地域において10世紀後葉以降の年代が想定される出土土器についてはあまり知られていない。対象を広げて宮城県多賀城周辺地域出土土器についてみると、これらの出土土器を検討している井上によれば、10世紀後葉の土器の特徴は口径が９cm前後、器高の低い小型皿とⅢの大きさの非内黒杯類のみで組成が構成されている。杯（皿）類の主体はⅠやそれ以下の大きさとなり、Ⅲの大きさは少数ながら依然として残っていることになる[6]。

このようにみると、新平遺跡や芦萱遺跡出土土器については杯ではⅠの大きさの割合が少ない点でこれらの土器群とは大きく異なることから、10世紀後葉には降ることはないと推定される。

このように新平遺跡出土土器の特徴を他遺跡や先行研究と対比させるとおおよそ10世紀中葉を中心とする年代が想定できるかも知れない。ただし現時点では絶対年代を決定する根拠は明確には乏しく、型式編年に想定される年代幅を振り分けている点に主体がある。今後はより明確に絶対年代が付与されている施釉陶器や貿易陶磁などとの共伴例から検証する必要があろう。

（５）おわりに

以上、新平遺跡、芦萱遺跡出土土器について、若干の検討と年代的な目安を想定した。両遺跡とも時期的にはほぼ同時期に位置づけられたが、この時期の土器については、周辺では出土例が少なくさらに検討する余地が十分にある。今回の出土を例のひとつとして提供できればと思う。　（西澤）

註

1　本来は杯と皿を区別しなければならないが、基準については研究者によってことなり、今のところ明確な基準はない。ここでの目的は出土土器の特徴とおおまかな年代を付与することにあるため、あえてこれらを一括して検討することにしている。いずれ区別して検討しなければならない。

2　口縁部分類のため、この場合は１／12口縁部計測法によって個体数を算出している。

3　菅原祥夫はこれらを蝦夷系土器とし、東北地方北部からの移住を考えている（菅原2000）。

4　以前にも同様の遺構を利用して比較を行ったことがあるが（西澤2004）、分類を若干変更したため再度比較を試みるものである。

5　あくまでも掲載遺物を中心に比較を行おうとしているため、根本的な誤りをおかしているかも知れない。

6　こういった特徴をしめす土器群は先に想定した2段階に後続する特徴となろう。これを３段階と想定しておく。

2　土鈴について

（1）は　じ　め　に

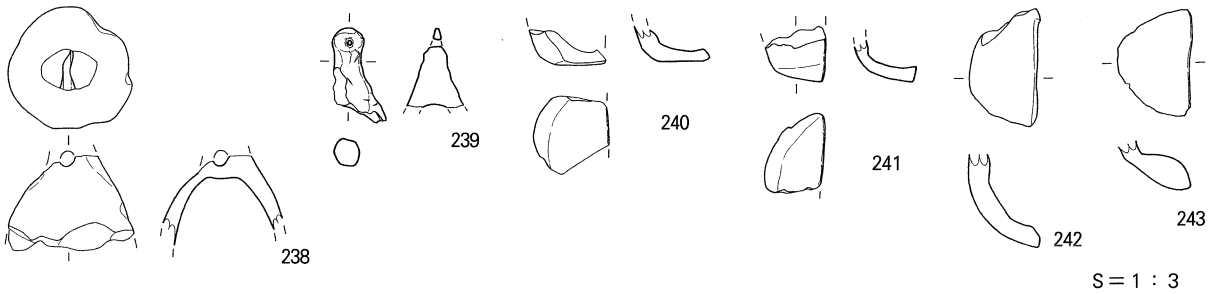
今回の調査において、新平遺跡Ｆ区の土器廃棄場より、古代に属すると考えられる土鈴が出土した。土鈴は一般に祭祀用具として位置づけられているが、用途など不明な点の多い遺物でもある。ここでは県内の土鈴出土例を集成し、分布や形態を把握することで土鈴の性格に近づこうと試みた。なお、本県における古代の土鈴については国生尚、下山信昭の各氏がすでに集成、分類しているところであり（国生 1992、下山1995）、ここではその内容を踏まえながら、更に新たな出土例を加えて述べていきたい。

（2）新平遺跡出土の土鈴（第59図）

はじめに今回の出土遺物について概観してみる。

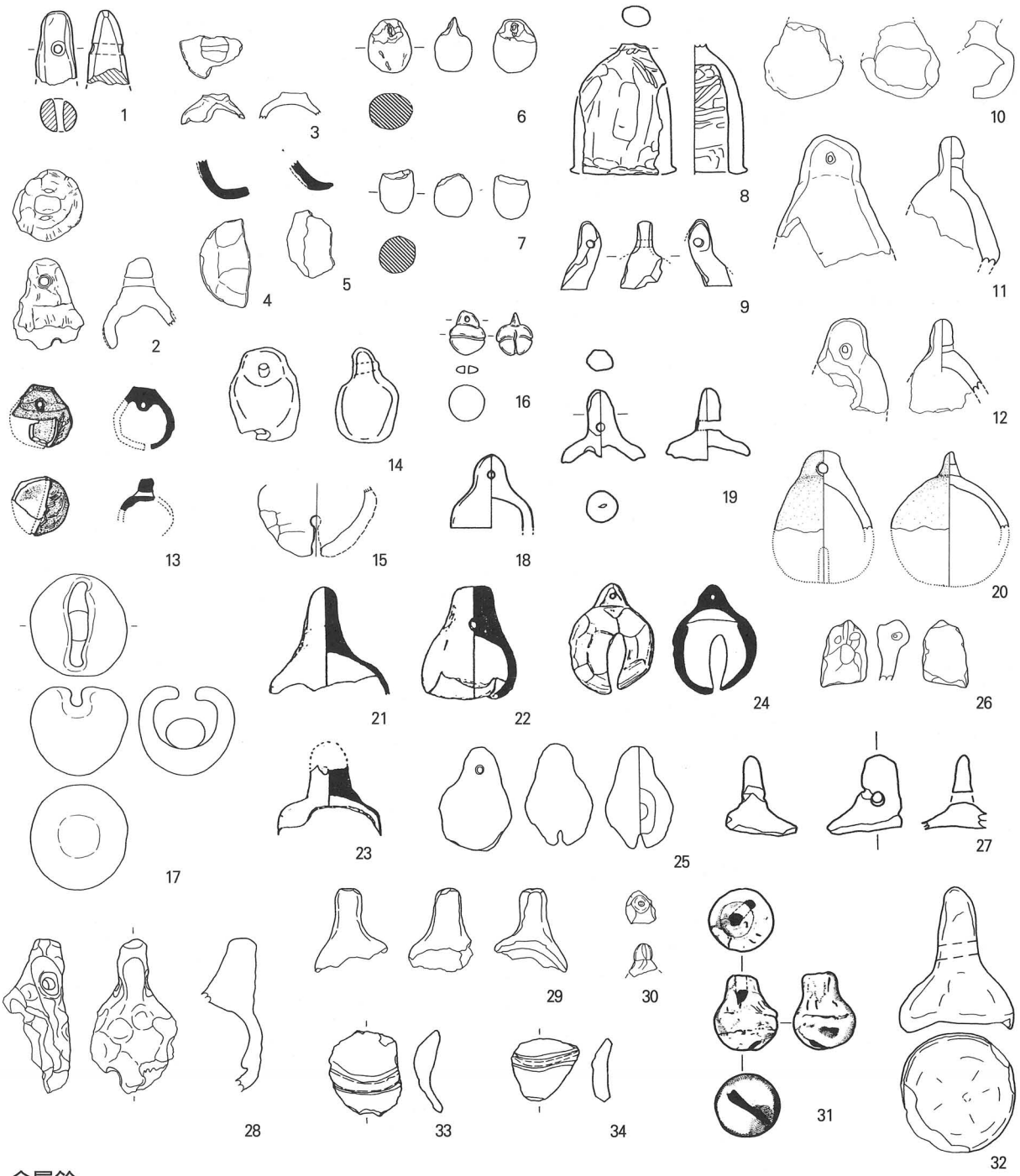
出土状況と時期　いずれも古代の土器廃棄場から大量の土器とともに出土している。当遺構は調査区の北側、新平丘陵から黒沢川に延びるＦ区のほぼ中央に位置しており、水田開墾時による地形改変を受けているが、現況でも東に向かって緩やかに傾斜している。遺構を境として地山が黄褐色（Ⅳa層）から青灰色（Ｖ層）の水成堆積層に変化しており、当遺構は旧河川の河岸部に形成されたものと理解している。また、遺物には磨耗が見られないことから廃棄時の元位置を動いていないものと判断できる。遺構底面（遺物包含層直下）からは十和田aテフラ（To-a）と見られる灰白色火山灰が検出されており、ブロック状に分布しているところから二次堆積のものと捉えられる。遺構内からは縄文土器、石器も出土しているが極少量で、土師器、須恵器の古代土器が出土遺物の中心であり、その年代観（Ｖ－１参照）および火山灰の堆積状況から遺構の構成時期は10世紀中葉から後葉に当たるものと見ている。なお、これらの土鈴も胎土・焼成が土師器のそれに酷似しており、同様の時期のものと考えている。共伴遺物の中には墨書土師器坏の破片２点（「大」、１点は墨書不明）、刻書須恵器壺１点（刻書不明）、と文字資料も見られ、また両面黒色処理の耳皿が出土している。

外見的特長　今回出土した土鈴はいずれも破片であり、紐部２点、体部４点の計６点であった。紐部は棒状で、そのまま穿孔するもの（238）と先端を指でつまみ出し扁平にした上から穿孔されるもの（239）とがある。またこれらは穿孔の位置も異なり、前者は紐部の中央に、後者は頂部の扁平部に見られる。体部片にはいずれも鈴口と見られる平坦な面があり、また242は表面が薄黒く変色しており黒色処理が施された可能性がある。なお、これら体部片はミニチュア土器など別種の遺物であるかもしれない。成形方法は破片の為不明といわざるを得ないが、239に限定して言えばその破損状況より上部と下部を接合する二分割成形であろうと考えられる。表面にはいずれもナデ調整が観察される。

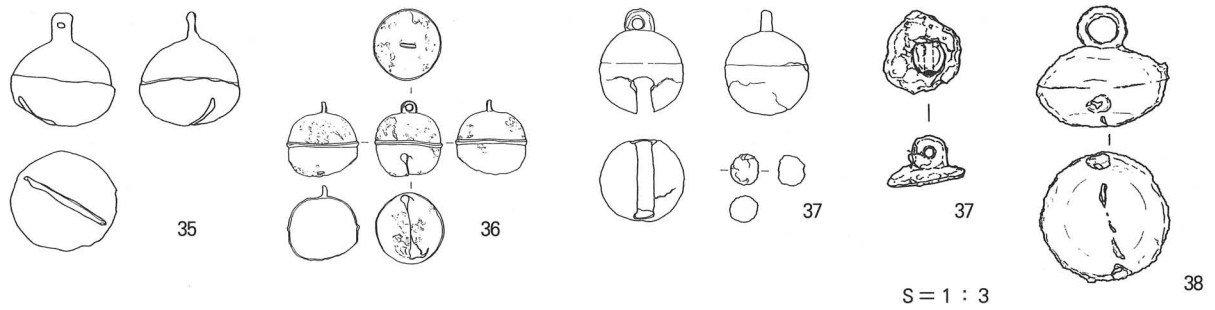


第57図　新平遺跡　出土土鈴

土　鈴



金属鈴



第58図　岩手県　出土土鈴類集成

（3）県内の出土例

次に本県の出土例について触れたい。第60、61図および第８表は岩手県内における古代土鈴および類似製品とその出土遺跡位置を示したものである。土鈴は完形の状態で出土することが少なく、各部位の破片であった場合当該遺物として認識、断定されることは非常に困難であり、またそれゆえ整理作業時に掲載遺物から除外される危険性も少なくないと思われる。その中で今回は報告書掲載遺物の中から土鈴、あるいは鈴形土製品として報告されているものに加え、形状からその可能性があると判断したものを各資料から転載している。今回集成した古代土鈴および鈴形土製品は26遺跡、43点に及び、そのうち完形のものは５点、破損品の中でも紐部の残存しているものは20点であった。出土遺跡の分布を見ると内陸部主要河川沿いに大多数が位置し、その中でも青森県境付近の県北部、矢巾および紫波の県央部、北上以南の県南部にまとまったグループを見出すことができ、それぞれの領域間には若干の空白域をうかがい知ることができる。遺物の時期は８世紀から12世紀初頭と奈良・平安時代のほぼ全域にわたっているが、それら時代間の分布や空間的な分布における形態の共通性はとりたててうかがえなかった。

出土状況　今回確認した土鈴類の出土状況の割合を見てみると圧倒的に住居跡からの出土が多く（16点）、出土例全体の実に35.7％に及んでいる。次いで今回の土器廃棄場（６点、14.3％）溝跡（３点、7.1％）、工房跡（２点、4.8％）、竪穴状遺構（２点、４.8％）、井戸跡（１点、2.4％）と続き、残りは不明、あるいは遺構外からの出土（13点、30.9％）である。また、住居内の出土位置をさらに詳しく見てみると堆積土中12点、床面１点、土坑など付帯施設中２点、貼床内１点となっている。

成形・焼成方法　土師質のものと須恵質のものがある。だが、全ての遺物を実際に確認していないため、焼成方法に関してはその傾向は知りえなかった。同様の理由で成形方法についても記述は避けておくが、国生氏によると上部と下部を接合する「二分割成形型」と底部の方から紐部に向かって搾り出すように成形する「一体成形型」に分けられるという（国生 1992）。二分割成形型は体部の中央に継ぎ目があるため、そこから破損しやすく、体部中央から上下を欠く例はまさにその状況を示しているといえよう。

形状　大きく中実のものと中空のものに分けられ、そのおおよそを中空のものが占める。中実のものは県内では３遺跡４点が確認されており、えてして中空のものより小型である。これらは更に、紐部を有するのみで体部には装飾の見られないもの（６，７）と、沈線を用いることによって鈴を模して作製されたと見られるもの（16,31）の２つに分けられる。前者は土錘とも考えられており、青森県六ヶ所村発茶沢遺跡において類似品を確認している。ちなみに発茶沢遺跡出土遺物も住居跡から出土している。また後者には鈴口を意図したとみられる沈線が下部に入り、また体部中央に金属鈴作製時の接合面を意識したような沈線も見られる。まさしく鈴の模造品として捉えられるものである。中空のものは内部に丸と呼ばれる玉を持ち、振ると音がする。しかし、残存状態が悪く内部の丸が確認されているものは３例に過ぎない。紐部の形状に着目すると棒状のものと、先端をつぶして平たくしたものがある。紐部には穿孔のあるものとないものがあるが、先端を平らにされたものには必ず穿孔がなされている。また紐部のないものもある。紐部はその名の通り、穿孔部に紐状のものを通し、土鈴を吊り下げて使用したと考えられることからついた名称であろうが、穿孔の有無が存在したということには土鈴の使用法が単純に吊り下げて使用したものでない可能性がある。手で持って使用したのか。紐部のないものに関しては手の平で握って鳴らされたものと考えられる。体下部には鈴口と呼ばれる切れ目が入れられており、おおよそ真一文字に入れられることが多いが、両端が円状に肥大しているものもある（15）。

土鈴と鐸型土製品　８は二戸市門松遺跡から出土した鐸型土製品とされる遺物である。釣鐘型の形状で、欠損しているが上方には土鈴同様に紐部と見られる痕跡がうかがえる。当遺物は古代に属するものと報告されているが、縄文時代にも同様の製品があり、土鈴とされているものの下部を欠損した破損品にはあるいはこの種の遺物に類するものがあるかもしれない。参考までに掲載したものである。

（４）金属鈴の出土状況

仮に土鈴を金属鈴（鉄鈴、銅鈴）の模造代用品として捉えた場合、金属鈴の使用例および遺物の出土状況からその使用法に近づける可能性があり、参考までに取り上げてみた。岩手県内で確認できたものは以下の５例であった。

鉄鈴の出土例　駒焼場遺跡（二戸市）ではⅢＡ－８住居跡床面より１点出土している。遺構の堆積土には十和田aテフラを混入する人為堆積層が見られ、10世紀以降のものと見られる。遺物は完形品で体部中央に接合痕が見られる。また泉屋遺跡（平泉町）では６号土坑堆積土中よりかわらけ、北宋銭などとともに出土している。体部、丸は欠損しており、紐部のみの出土である。共伴遺物などから14世紀中頃のものと考えられている。同じく平泉町の柳之御所跡では23ＳＫ83下層埋土中から出土している。当遺構はチュウ木、ウリ科種子が大量に出土しており、便所遺構の可能性がある。遺物は比較的大きな紐部を持ち、やや上からつぶされたような扁平な形をしている。体部中央付近には接合痕も見られ、鈴口両端には銹化がすすんでいるものの円形に肥大していた名残が見受けられる。遺構は12世紀後半には埋められており、遺物もそれ以前のものと考えられる。

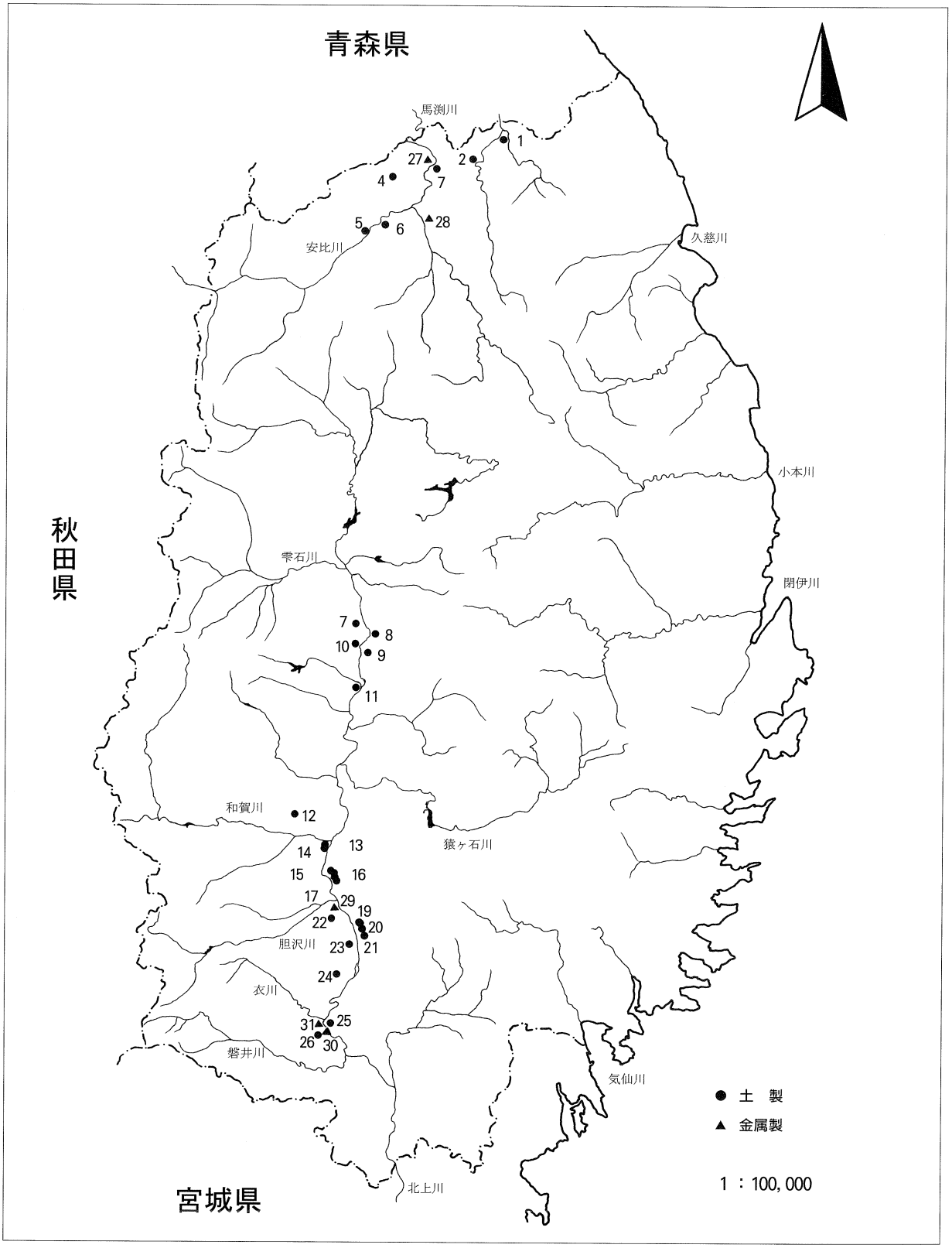
銅鈴の出土例　上野遺跡（二戸市）ではＡＦ54竪穴住居跡のカマド脇に付設された土坑中より出土している。堆積土は上層に十和田aテフラの一次堆積が見られ、またロクロ使用土師器、須恵器が伴っており、９世紀代の時期が与えられている。また遺構内には放射状に炭化物および焼土が検出されており、本住居跡は焼失したものと解される。鈴は完形で体部中央に接合痕が盛り上がった状態で観察される。鈴口先端は円形に肥大している。また胆沢城（奥州市水沢区）ではＳＢ3147建物跡を構成する柱穴⑤掘り方埋土から出土している。完形で中央に接合痕が見られ、共伴遺物には形代（刀形）などがあり、地鎮などの祭祀的行為が想定される。なおこれら２例の銅鈴は丸が残存しているがいずれも鉄製であるという。

以上、竪穴住居跡から２例、掘立柱建物跡から１例、土坑から２例が出土している。５例と少例ではあるが、その中でも土製鈴同様に竪穴住居跡からの出土が大半を占めていることは興味深い。また、胆沢城での形代との共伴例、駒焼場遺跡での人為に埋め戻された住居からの出土例は鈴の地鎮め、魂鎮めなどの祭司的行為に伴う性格を改めて想起されよう。「埋納」という用途に言及した場合、鈴を模倣された土鈴には音というものが必要なく、音を発しない中実の鈴型土製品が少数であれ存在することもうなずけるのではないだろうか。

（５）お　わ　り　に

古代土鈴について出土状況および形態について概観してみた。しかし岩手県内に限定したこともあり、単なる資料紹介に従事してしまった。県外に例外は有れども土鈴はその出土数の少なさより一般的には量産性を有しない遺物であると考えられる。製作者個々人の感性に基づいて表現されたそれらの遺物には一見共通性を持つようでいて持っていない、あくまで模倣という行為において見られる共通性でしかなく、今回見られた出土例が集中する地域ごとにはそれらが反映されることはなかった。その中で形態の共通性や差異を論じることはほとんど意味をなさないことかもしれない。しかしその一方で今回地域を限定したことにより、その共通項あるいは違いが明白には浮き出なかっただけであ

る可能性も否定できず、今後さらに視野を広げて見てゆく必要性を痛感した。また、今回おもに形態という観点に終始してしまった感があるが、土鈴の性格を知る上でもっとも有効な情報は言うまでも無く出土状況であり、あくまでもこれを主軸に据え、形態との両面から検討しなければならないということを今後の反省としたい。　（横井）



第59図　岩手県　土鈴類出土遺跡

第８表　岩手県内における土製・金属製鈴および類似土製品出土遺跡

※　それぞれ○：完存、△：一部残存、×：欠損、－：部位が存在しない、をあらわしている。

土鈴

地図番号	挿図番号	市町村名	遺跡名	報告遺物名	出土位置	残存部※ 紐	体	丸	時期	備考	文献
1	1	軽米町	大日向Ⅱ	不明土製品	ＳⅡ01住居跡	○	×	×	10世紀後半～11世紀前半		文献１
2	2		皀角子久保Ⅵ	土鈴	遺構外	○	△	×	10世紀中葉（集落年代）		文献２
	3			土鈴		△	△	×			
	4			土鈴		×	△	×		須恵質	
	5			土鈴		×	△	×		須恵質	
3	6	二戸市	長瀬Ｃ	鈴形土製品	Ａ－３住居跡　埋土下層	○	○	－	９世紀初頭（集落年代）	中実の模造鈴？	文献３
	7			鈴形土製品	Ａ－３住居跡　貼床内	×	△	－			
4	8		門松	鐸型土製品	Ｂ２ｈ６住居跡	△	△	－	奈良時代	鐸型土師質土製品	文献４
5	9	二戸市浄法寺町	浄法寺城	土鈴	遺構外　表土	○	△	×	古代		文献５
6	10		飛鳥台地Ⅰ	土鈴	ＦⅡ－１住居跡　埋土	△	△	×	平安時代		文献６
	11			不明土製品	遺構外	○	△	×			
	12			不明土製品	遺構外	○	△	×		縄文期の鐸型土製品か？	
	13			不明土製品	遺構外	△	×	×			
7	14	矢巾町	徳丹城	土鈴	ＳＤ133溝跡　２層	○	△	×	９世紀		文献７
8	15		渋川		ＳＩ41住居跡	○	△	×	８世紀代		文献８
9	16	紫波町	杉ノ上Ⅱ	土鈴	ＢＪ56住居跡 3c層(焼失時堆積層)	×	△	×	９世紀前半	ロクロピット付設住居	文献９
10	17		西田東	土鈴	ⅡＧ－１住居跡　住居内土坑	－	○	○	９世紀第４四半期～10世紀前葉	紐部なし	文献10
11	18		稲村Ⅱ	鈴形土製品	第23号住居跡（ⅡＦ１ｊ住）床面	○	○	－	８世紀前半	中実の模造鈴？	文献11
12	19	北上市	新平	土鈴	土器廃棄場　包含層	△	△	×	10世紀中葉～後葉		本書
	20			土鈴		○	△	×			
	21			土鈴		×	△	×			
	22			土鈴		×	△	×			
	23			土鈴		×	△	×			
	24			土鈴		×	△	×			
13	25		高前田		不明	？	？	？	９世紀後半～10世紀前半	ロクロピット付設住居	文献12
14	26		相去		不明	？	？	？	10世紀後半～11世紀前半	ロクロピット付設住居	文献13
15	27	奥州市江刺区	谷地	土鈴	ＢＨ03住居跡　Ｐｉｔ２	○	△	×	９世紀後半～10世紀初頭		文献14
16	28		蔦ノ木		ＨＢ71住居跡	○	○	×	平安時代	ロクロピット付設	
17	29		瀬谷子		３号工房	△	△	×	平安時代		文献15
	30				４号工房	○	△	×	平安時代		
	31				６号住居跡	○	△	×	平安時代		
18	32		鶴羽衣	土鈴	ＤＣ50住居跡	○	△	○	11～12世紀頃	土玉と共伴	文献14
19	33		鴻ノ巣館	土鈴	遺構外	○	△	×	平安時代		文献16
20	34		下惣田	土製品	ＳＩ105住居跡	○	△	×	９世紀前葉～10世紀前葉		文献17
21	35		松川下	土鈴	ＳＤ202溝跡	○	○	○	９世紀後半～10世紀後半		文献18
22	36	奥州市水沢区	明後沢遺跡群	土鈴	ＳＫＩ01竪穴状遺構	○	△	×	平安時代		文献19
	37			土鈴		○	△	×			
	38			土鈴？	ＳＩ01竪穴住居　埋土	○	△	×	平安時代	紐部　穿孔なし	文献20
23	39		石田	袖珍土器	Ｄｄ03竪穴住居跡	○	○	－	奈良時代後半	中実の模造鈴？土錘として報告	文献21
24	40		林前南館	土鈴	ＳＸ0153井戸跡　埋土	○	△	×	平安時代		文献22
25	41	平泉町	矢崎Ⅰ	土鈴	溝跡　底面	○	△	×	９世紀前半～半ば		文献23
26	42		志羅山	土鈴？	遺構外	×	△	×	不明		文献24
	43			土鈴？		×	△	×	不明		

金属鈴

地図番号	挿図番号	市町村名	遺跡名	報告遺物名	出土位置	残存部※ 紐	体	丸	時期	備考	文献
27	44	二戸市	駒焼場	鉄鈴	ⅢＡ－８住居跡　床面	○	○	？	平安時代中期～後期		文献25
28	45	一戸町	上野	銅鈴	ＡＦ54竪穴住居跡 カマド脇土坑中	○	○	○	平安時代前半		文献26
29	46	奥州市水沢区	胆沢城	銅鈴	ＳＢ3147　柱穴⑤　掘り方埋土	○	○	○			文献27
30	47	平泉町	泉屋	鉄製品	６号土坑	○	×	×	14世紀中頃？		文献28
31	48		柳之御所	鉄鈴	23次ＳＫ83（便所遺構？）	○	○	？	～12世紀後半	チュウ木、ウリ科種子出土	文献29

文献１　㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1999 「大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書 第273集
文献２　㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1988 「皀角子久保Ⅵ遺跡発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書 第129集
文献３　㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1988 「長瀬Ｃ遺跡発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書 第51集
文献４　㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2002 「門松遺跡発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書 第413集
文献５　浄法寺町教育委員会 1998 「浄法寺城跡」 平成９年度町内遺跡詳細分布調査概報」
文献６　㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1988 「飛鳥台地Ⅰ遺跡発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書 第120集
文献７　矢巾町教育委員会 1984 「徳丹城跡　昭和58年度発掘調査概報」
文献８　矢巾町教育委員会 1986 「渋川遺跡現地説明会資料」
文献９　岩手県教育委員会 1979 「東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ」 岩手県文化財調査報告書 第35集
文献10　㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1995 「西田東遺跡発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書 第221集
文献11　㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2001 「稲村Ⅱ遺跡発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書 第348集
文献12　北上市教育委員会 1974 「高前田遺跡現地説明会資料」
文献13　北上市教育委員会 1973 「相去遺跡現地説明会資料」
文献14　岩手県教育委員会 1979 「東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」 岩手県文化財調査報告書 第33集
文献15　江刺市教育委員会 1971 「瀬谷子遺跡 第3次発掘調査報告書」
文献16　岩手県教育委員会 1980 「東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅴ」 岩手県文化財調査報告書 第49集
文献17　江刺市教育委員会 2001 「下惣田遺跡発掘調査報告書」 岩手県江刺市埋蔵文化財発掘調査報告書 第29集
文献18　江刺市教育委員会 2000 「松川下遺跡発掘調査報告書」 岩手県江刺市埋蔵文化財発掘調査報告書 第22集
文献19　㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2004 「明後沢遺跡群第16次発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書 第442集
文献20　㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2003 「明後沢遺跡群発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書 第411集
文献21　岩手県教育委員会 1981 「東北自動車縦貫道関係埋蔵文化財調査報告書ⅩⅡ」 岩手県文化財調査報告書 第61集
文献22　㈶水沢市文化振興財団 水沢市埋蔵文化財調査センター 2003 「林前南館跡」 水沢市埋蔵文化財調査センター調査報告書 第16集
文献23　㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2001 「矢崎Ⅰ遺跡発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書 第372集
文献24　㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2001 「志羅山遺跡発掘調査報告書(第47・56・67・73・80次調査)」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書 第352集
文献25　㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 「駒焼場遺跡発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書 第133集
文献26　一戸町教育委員会 1987 「上野遺跡・一戸城跡」 一戸町文化財調査報告書 第18集
文献27　水沢市教育委員会 1998 「胆沢城跡－平成９年度発掘調査概報－」
文献28　平泉町教育委員会 1994 「平泉遺跡群発掘調査報告書」岩手県平泉町文化財調査報告書 第23集
文献29　㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター1995 「柳之御所跡発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書 第228集

Ⅵ 総　　括

これまで新平・芦萱遺跡の発掘調査の内容を中心触れてきたが、最後にこれらを再度まとめつつ総括としたい。

1　新平遺跡の調査

今回の調査は、ほ場整備事業に伴う発掘調査であるため狭小で長大な調査範囲であった。そのため遺構密度はあまり多くなかったが、これまで平安時代の遺構の分布が不明であった区域において遺構・遺物が発見された点は貴重な成果と言えよう。遺構では本調査・確認調査あわせて、竪穴住居跡２軒、溝跡19条、土坑12基、井戸跡１基、ピット43個が検出された。平安時代の竪穴住居跡は、大部分が削平され痕跡をとどめるのみであったが本来は周辺にも竪穴住居跡が分布しておりひとつの集落を構成していたと推定される。

今回の調査において特筆される成果として土器廃棄場であるＳＸ１の調査があげられる。生活域に近接して自然の窪地を利用して多量の土器が廃棄されていたものであった。調査した範囲では133kgの出土量である。この廃棄場はさらに南北に広がることが予想されるため包含している土器の総量は膨大なものとなろう。また、この土器廃棄場には底面に十和田aテフラと想定されるテフラが起伏のある底面に沿うように堆積していた。このため廃棄場出土の土器はこの十和田aテフラよりも新しいことがわかる。したがって、これらの土器は相対年代（あるいは絶対年代）の決定過程においては重要な指標となるべきものと考えられる。

そのほかの遺構としては多数の溝跡の発見がある。これらは遺跡の東部に集中し、地形的にも低い部分に相当する。この東部には黒沢川が近接して存在することから、一帯は古くから湿地状を呈した環境にあったと推定され、居住域としては利用されていなかったと考えられる。したがって、今回調査された竪穴住居跡は集落の東辺に相当すると考えられる。

調査区に近接して「新平屋敷」が存在する。そのことから近世に属する遺構の発見も期待された。建物跡などは明確に判別できなかったが、それを構成すると考えられる柱穴などが発見された。そのほか井戸跡、土坑などがこの時期に所属する。土坑からは大量の陶磁器が出土した。一部近代に入る磁器も存在するが大部分は18世紀から19世紀に前半にかけてのものである。近代に属する遺物が数点混在する点を考慮すると、近代になってまとめて捨てられた可能性がある。

このように今回の調査では、数少ないながらも貴重な成果を提供できるものと思う。

2　芦萱遺跡の調査

この遺跡における本格的な発掘調査は今回が初めてとなる。調査面積は非常に小さく、調査位置も段丘の裾部にあたるため遺構・遺物の出土もあまりないものと予想された。しかし、調査の結果遺構数は少ないものの多量の遺物が出土した。多くは遺物包含層に含まれるもので平安時代の土師器を中心とする。この土器の特徴からみると新平遺跡と同様の形態的特長を示すことからほぼ同時期であることがわかった。したがって、調査範囲よりも東側の段丘上には出土土器に由来する集落が広がっていたことが予想される。また、少なくとも調査範囲付近においては表土直下には黒褐色土が良好に残存することから遺構の残存は比較的良好であることが予想される。今後の調査に期待したい。

（西澤）

引用・参考文献

浅田知世　1993　「北上市新平遺跡出土の尖頭器」　『岩手考古学』５

伊藤博幸　1996　「岩手県の10世紀の土器」　『日本土器事典』雄山閣

伊藤博幸　1998　「後半期の集落」　『岩手考古学』第10号

伊藤博幸　1987　『胆沢城－昭和61年度 発掘調査概報－』 水沢市教育委員会

伊藤博幸　1977　『胆沢城－昭和51年度 発掘調査概報－』 水沢市教育委員会

稲野彰子　1995　「いわゆるムシロ底について」『北上市立博物館紀要』第10号

井上雅孝　1996　「岩手県における古代末期から中世前期の土器様相（素描）」　『中近世土器の基礎研究』ＸＩ

井上雅孝　1997　「陸奥における10・11世紀の土器様相」　『北陸古代土器研究』第７号

岩手県教育委員会 2006　「ほ場整備事業　江釣子第一地区　新平遺跡（ＭＥ55 - 0081）」
『岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成16年度）』岩手県文化財調査報告書　第120集

宇野隆夫　1985　「古代的食器の変化と特質」　『日本史研究』280

熊谷常正　2005　「持川遺跡とその周辺」　『盛岡大学紀要』第22号

小岩直人　2001　「花巻市および宿内遺跡周辺の地形」　『宿内遺跡　平成7年度発掘調査報告書』花巻市埋蔵文化財調査報告書第26集

古泉　弘　1979　「江戸の出土下駄」　『物質文化』32

市田京子　2000　「江戸時代の下駄」『江戸文化の考古学』 吉川弘文館

九州近世陶磁学会 2000　『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会10周年記念－』

国生　尚　1992　「土鈴集成」『岩手考古学』　第４号

櫻田　隆　1993　「『砂底』土器考」　『翔古論聚-久保哲三先生追悼論文集』

下山信昭　1996　「東北地方における土鈴集成」『研究紀要』第1号　青森県埋蔵文化財調査センター

菅原祥夫　1998　「住居構造と土師器にみられる非在地系要素について」『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告書２』福島県文化財調査報告書第353号

菅原祥夫　2000　「平安時代における北方系土器の南下－律令政権下の蝦夷をめぐって－」『阿部正光君追悼集』

瀬戸市史編纂委員会 1998　『瀬戸市史　陶磁史篇六』

東北大学埋蔵文化財調査研究センター 1997　『東北大学埋蔵文化財調査年報８』

東北大学埋蔵文化財調査研究センター 1998　『東北大学埋蔵文化財調査年報９』

関根達人　1998　「相馬藩における近世窯業生産の展開」　『東北大学埋蔵文化財調査年報10』東北大学埋蔵文化財調査研究センター

高橋　学　2000　「米代川下流域にも擦文土器あり－能代市小友Ⅲ遺跡にみる古代集落の一様相－」『阿部正光君追悼集』

西澤正晴　2004　『中半入遺跡第２次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

沼山源喜治　1969　「胆沢城址出土の糸切轆轤土師器とその編年的考察」『北奥古代文化』第２号

羽柴直人　2004　『下構遺跡第２次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第446集

丸山直美　2006　「４考察（２）遺物」『高木中館遺跡・下通遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第471集

村田晃一　1995　「宮城郡における10世紀前後の土器」『福島考古』第36号

八木光則　1993　「陸奥中部における古代末期の土器群」『歴史時代土器研究』第８号

渡辺満久　1991　「北上低地帯における河成段丘面編年および後期更新世における岩屑供給」『第四紀研究』30

山田光洋　1998　『楽器の考古学』ものが語る歴史１　同成社

観　察　表

第９表　新平遺跡　縄文土器観察表

挿図No.	器種	出土位置	色調	文様・調整	胎土	時期	備考	登録No.
1	鉢	16号溝跡　上層	褐	外面：半載竹管文		前期？		拓１
2	鉢	16号溝跡　黄色火山灰下	にぶい黄褐	外面：刺突		前期？		拓３
3	鉢	16号溝跡　上層	灰黄褐	外面：口縁部刻目		晩期？		拓２
4	深鉢	S55,W15　土師器集中区　検出面	橙	外面：羽状縄文、内面：ナデ		前期		拓４

第10表　新平遺跡　古代土器観察表

挿図No.	器種	種別	出土位置	残存率(%)	色調	計測値(cm)			調整			備考	登録No.
						口径	器高	底径	外面	内面	底部		
5	杯	土師器	土器廃棄場（N115,W15中下層・N120,W15上中位層、中層）	40	淡橙	(10.2)	1.9	(5.0)	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り		47
6	杯	土師器	土器廃棄場（N115,W15上層・N120,W15下層）	10	にぶい橙	(9.8)	2.1	(4.0)	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り		68
7	杯	土師器	土器廃棄場（N120,W15上～中位層）	10	にぶい橙	(10.4)	2.5	(5.3)	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り		36
8	杯	土師器	土器廃棄場（N115,W15中下層）	10	浅橙	(12.0)	2.1	(5.6)	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り		27
9	杯	土師器	土器廃棄場（N115,W15中層）	15	灰白	(11.4)	3.0	(6.0)	回転ナデ	回転ナデ	糸切り		34
10	杯	土師器	土器廃棄場（N120,W15サブトレンチ）	10	にぶい橙	(10.6)	2.3	5.5	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り		41
11	杯	土師器	土器廃棄場（N120,W20サブトレンチ）	30	橙	(10.0)	2.4	(4.3)	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り		35
12	杯	土師器	土器廃棄場（N120,W15下層）	30	にぶい橙	(10.2)	2.4	5.0	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り		26
13	杯	土師器	土器廃棄場（N115,W15中～下層）	5	にぶい橙	(12.4)	2.6	(5.0)	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り		31
14	杯	土師器	土器廃棄場（N120,W15上中位層）	50	にぶい橙	(11.8)	2.6	(5.2)	回転ナデ	回転ナデ	（静止？）糸切り		23
15	杯	土師器	土器廃棄場（N115,W15中～下層）	20	橙	(12.8)	3.7	(5.0)	回転ナデ	回転ナデ	－		29
16	杯	土師器	土器廃棄場（N120,W15上～中位層、中下層）	5	にぶい橙	(13.4)	6.2	3.9	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	内面底部剥落面に糸切り痕	33
17	杯	土師器	土器廃棄場（N115,W15下層、N115,W15中～下層、N120W15下層）	95	にぶい橙	12.6	4.9	5.0	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り		10
18	杯	土師器	土器廃棄場（N115,W15サブトレ一括、N115,W15中層・下層、N120,W15下層）	60	にぶい橙	(14.5)	4.8	(5.5)	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り		12
19	杯	土師器	N120,W15,上～中位層・N120,W15中～下位層）	60	浅黄橙	(16.0)	5.2	(5.2)	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り		22
20	杯	土師器	土器廃棄場（N120,W20中～下位層）	15	にぶい黄橙	(11.8)	3.6	(5.5)	上部ユビナデ・下部ヘラケズリ	ナデ	ヘラナデ		46
21	杯	土師器	土器廃棄場（N110,W15中下層・N120,W15上～中位層・N120,W20上中位層）	50	明褐灰	(12.3)	3.6	(5.7)	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り		67
22	杯	土師器	土器廃棄場（一括下層（火山灰下）・N115,W15下層・N120,W15中・下層）	10	灰白	(12.3)	3.8	(5.0)	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り		39
23	杯	土師器	土器廃棄場（N115,W10中層、N115,W15上層、N120,W15下層）	20	灰白	(12.2)	3.8	(4.6)	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り		32
24	杯	土師器	土器廃棄場（N120,W15上～中位層）	20	橙	(13.0)	3.4	(5.2)	回転ナデ	回転ナデ	－		43
25	杯	土師器	土器廃棄場（N115,W15下層）	15	明褐灰	(14.0)	4.2	5.8	回転ナデ	回転ナデ	（静止？）糸切り		30
26	杯	土師器	土器廃棄場（N115,W15下層・N120,W15中層、下層）	25	にぶい橙	(14.5)	4.4	5.4	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り		25
27	杯	土師器	土器廃棄場（N120,W20上～中位層）	15	浅黄橙	(14.7)	4.1	(5.3)	回転ナデ	回転ナデ	（静止？）糸切り		42
28	杯	土師器	Ｆ区土師器出土ポイントＡ	50	にぶい黄橙	(11.0)	3.7	(4.5)	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	外面墨書	15

挿図No.	器種	種別	出土位置	残存率(%)	色調	計測値(cm)			調整			備考	登録No.
						口径	器高	底径	外面	内面	底部		
29	杯	土師器	土器廃棄場（N110,W10～15中下層・N115,W10中層・N120,W15中層）	30	にぶい黄橙	(12.7)	3.7	5.7	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り		20
30	杯	土師器	土器廃棄場（N115,W15中・下層、中・下層、下層）	40	にぶい橙	(13.2)	4.2	4.4	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り		17
31	杯	土師器	土器廃棄場（N120,W10中層、下層・N120,W15下層）	10	にぶい黄橙	(14.7)	3.6	6.0	回転ナデ	回転ナデ	静止糸切り		21
32	杯	土師器	Ｆ区土師器出土ポイントＡ	100	浅黄橙	11.5	3.6	4.3	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り		48
33	杯	土師器	土器廃棄場（N115,W10中層、N115,W15上層、N120W15）	50	浅黄橙	(12.5)	4.0	(5.4)	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り		18
34	杯	土師器	土器廃棄場（N120,W15上～中位層、中層）	5	橙	(12.4)	4.4	5.0	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り		40
35	杯	土師器	土器廃棄場（N115,W10下層、N115,W15下層）	5	淡橙	(12.5)	4.3	(5.0)	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り		28
36	杯	土師器	１号竪穴住居跡床面二次検出面	底部のみ	浅黄橙	－	－	(5.4)	－	回転ナデ	マメツ（回転糸切り）		54
37	杯	土師器	１号竪穴住居跡貯蔵穴内一括	底部のみ	浅黄橙	－	－	(5.6)	－	回転ナデ	回転糸切り		55
38	杯	土師器	１号竪穴住居跡床面二次検出面	底部のみ	浅黄橙	－	－	(4.8)	－	マメツ（回転ナデ）	回転糸切り		51
39	杯	土師器	２号竪穴住居跡一括	底部のみ	浅黄橙	－	－	(4.8)	－	－	－		53
40	杯	土師器	土器廃棄場（N115,W15中・下層、N120,W15下層）	90	浅黄橙	(13.1)	4.9	4.1	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り		13
41	杯	土師器	土器廃棄場（N120,W15下層）	75	にぶい黄橙	(12.8)	5.1	5.0	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り		11
42	杯	土師器	１号竪穴住居跡貯蔵穴内一括	30	明褐灰	(12.1)	5.3	4.7	マメツ（回転ナデ）	回転ナデ	マメツ（回転糸切り）		49
43	杯	土師器	土器廃棄場（N120,W15下層）	80	浅黄橙	(12.2)	4.4	5.0	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り		14
44	高台杯	土師器	土器廃棄場（N115,W15中～下層）	60	灰白	12.9	(3.2)	4.5	回転ナデ	回転ナデ	－	内面スス付着	38
45	高台杯	土師器	土器廃棄場（中～下位層）	60	浅黄橙	(15.0)	(4.3)	6.5	回転ナデ	回転ナデ	台部貼り付け後回転ナデ	貼り付け高台	19
46	高台杯	土師器	土器廃棄場（一括、N120,W15上中位層、中層、N120,W20）	10	浅黄橙	(14.8)	(5.2)	6.0	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	貼り付け高台	16
47	高台杯	土師器	土器廃棄場（一括下層（火山灰下）・N120,W15上～中位層・N120,W20上～中位層、中～下位層）	50	浅黄橙	(14.6)	5.7	(8.2)	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	貼り付け高台	37
48	杯	土師器	土器廃棄場（N115,W10下層・N115,W15下層・N120,W15サブトレンチ、上中位層、中層・N120,W20中～下位層）	85	浅黄橙	8.3	4.4	4.8	回転ナデ	回転ナデ	静止糸切り・ナデ		24
49	高台杯	土師器	土器廃棄場（N115,W15中層）	体部以下	にぶい黄橙	－	(6.7)	(4.4)	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	台部貼り付け	163
50	高台杯	土師器	土器廃棄場（N115,W15下層、N120,W15下層）	体部以下	浅黄橙	－	(8.6)	(3.4)	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	台部貼り付け	164
51	高台杯	土師器	土器廃棄場（N115,W15下層）	体部以下	浅黄橙	－	7.9	(2.8)	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	台部貼り付け	165
52	高台杯	土師器	１号竪穴住居跡床面二次検出面	底部のみ	浅黄橙	－	－	(6.4)	－	－	菊花状ヘラケズリ	貼り付け高台	50
53	杯	土師器	土器廃棄場（N115,W10上層、下層、N115,W15中・下層）	30	にぶい黄橙	(13.8)	(3.8)	－	回転ナデ	回転ナデ・ミガキ	－	内黒・外面墨書「大」	9
54	杯	土師器	土器廃棄場（N115,W10上層、下層、N120,W10下層）	25	にぶい黄橙	(12.6)	5.2	(6.0)	ミガキ	ミガキ	ミガキ		45
55	杯	土師器	土器廃棄場（N115,W10上層、下層、N115,W15中層、下層）	40	黒	(10.3)	3.6	4.0	ミガキ	ミガキ	ヘラケズリ	内外黒	5
56	杯	土師器	土器廃棄場（N120,W15～20上～中位層、N120,W20中～下層）	40	にぶい黄橙	(14.2)	4.5	5.8	回転ナデ	ミガキ	静止糸切り	内黒	3
57	杯	土師器	土器廃棄場（N115,W10下層・N115,W15中層・下層、N120W10中層、中～下位層）	30	橙	(19.8)	6.4	(5.5)	ミガキ	ミガキ	ヘラナデ	内黒	7
58	杯	土師器	１号竪穴住居跡貯蔵穴内一括	80	橙	(14.2)	5.5	5.2	回転ナデ	ミガキ	回転糸切り	内黒	4
59	杯	土師器	土器廃棄場（一括・N120,W15上～中位層）	10	橙	(15.0)	2.8	4.0	回転ナデ	回転ナデ・ミガキ	回転糸切り・ナデ	内黒・底部刻線	6
60	杯	土師器	土器廃棄場（N115,W10／15下層、N120,W15上層、中層、中～下層）	20	にぶい黄橙	(15.0)	7.2	(7.0)	ミガキ・下部ケズリ	ミガキ	ヘラケズリ	内黒	1

挿図No.	器種	種別	出土位置	残存率(%)	色調	計測値(cm)			調整			備考	登録No.
						口径	器高	底径	外面	内面	底部		
61	杯	土師器	土器廃棄場（N120,W15中層）	20	にぶい黄橙	(14.8)	5.9	(5.5)	回転ナデ	回転ナデ・ミガキ	ヘラケズリ	内黒	8
62	杯	土師器	土器廃棄場（N120,W15上～中位層、中層、N120,W20上中位層）	5	にぶい橙	(16.9)	4.6	(6.0)	ミガキ	ミガキ	ミガキ		44
63	坏	土師器	土器廃棄場（N115,W15中～下層）	5		－	－	－	回転ナデ	回転ナデ	－	内黒、外面墨書	171
64	坏	土師器	土器廃棄場（N115,W15中～下層）	5		－	－	－	回転ナデ	回転ナデ	－	内黒、外面墨書	170
65	杯	土師器	土器廃棄場（N110,W15下層）	10	灰黄褐	－	(2.4)	6.7	回転ナデ・下部ヘラケズリ	ミガキ	ヘラケズリ	内黒	2
66	甕	土師器	土器廃棄場（N115,W10下層・N115,W15上層、下層・N120,W15上～中位層、下層）	40	灰黄褐	(24.0)	(27.6)	－	上位ヘラナデ・中位ミガキ・下位ヘラケズリ	ヘラ（ユビ）ナデ	－		64
67	甕	土師器	土器廃棄場（N120,W10中層・N120,W15上層、上～中位層、中～下層、下層・N120,W20サブトレンチ）	50	にぶい橙	(20.4)	(15.1)	－	縦位ヘラナデ	横位ヘラナデ	－		65
68	甕	土師器	土器廃棄場（N115,W10下層・N115,W15上層）	体部以下	灰黄褐	－	(17.3)	10.7	ヘラケズリ	ヘラナデ	ナデ		63
69	甕	土師器	土器廃棄場（N120,W15サブトレンチ、上～中層）	25	浅黄橙	(16.0)	－	(8.6)	回転ナデ・ハケメ	回転ナデ・ヘラナデ	－		169
70	甕	土師器	１号竪穴住居跡貯蔵穴内一括	体部以下	明褐灰	－	(4.7)	(9.4)	ヘラケズリ	マメツ	マメツ		61
71	甕	土師器	土器廃棄場（N115,W15上層・N120,W10中層）	体部以下	にぶい橙	－	(5.2)	(10.0)	ヘラケズリ	ヘラナデ	ナデ？		66
72	甕	土師器	土器廃棄場（N115,W15下層）	10	にぶい黄橙	(16.0)	－	(7.4)	回転ナデ	回転ナデ	－	内黒	167
73	甕	土師器	土器廃棄場（N120,W15サブトレンチ、N120,W15上～中層）	25	浅黄橙	(20.0)	－	(9.8)	回転ナデ	回転ナデ・ヘラケズリ	－	内黒	168
74	鉢	土師器	土器廃棄場（N120,W15上～中位層、N120,W20中～下位層）	30	浅黄橙	(12.6)	(6.0)	6.2	ヘラナデ	ユビナデ	－		147
75	耳皿	土師器	土器廃棄場（N115,W10下層）	30	黒	－	－	－	ヘラミガキ	ヘラミガキ	－	内外黒	149
76	甕	土師器	土器廃棄場（N120,W20サブトレンチ、上～中位層、中～下層、グリッド一括下層）	15	浅黄橙	(20.8)	－	(13.0)	回転ナデ・ヘラケズリ	回転ナデ	－		159
77	甕	土師器	土器廃棄場（N110,W15中～下層）	5	浅黄橙	(21.2)	－	(4.0)	回転ナデ	回転ナデ	－		155
78	甕	土師器	土器廃棄場（N115,W15下層）	25	浅黄橙	(24.4)	－	5.6	回転ナデ	回転ナデ	－		150
79	甕	土師器	土器廃棄場（N120,W10下層）	20	浅黄橙	(20.6)	－	4.2	回転ナデ	回転ナデ	－		151
80	甕	土師器	土器廃棄場（N115,W15上層、N115,W20上層）	20	浅黄橙	(30.0)	－	(4.0)	回転ナデ	回転ナデ	－		156
81	甕	土師器	土器廃棄場（N115,W15下層）	20	浅黄橙	(30.0)	－	5.5	回転ナデ	回転ナデ	－		153
82	甕	土師器	１号竪穴住居跡貯蔵穴内一括	10	浅黄橙	(19.0)	(7.1)	－	回転ナデ	回転ナデ	－	外面刻線？	59
83	甕	土師器	１号竪穴住居跡貯蔵穴内一括	20	灰白	(20.4)	(13.2)	－	回転ナデ	回転ナデ	－		60
84	甕	土師器	土器廃棄場（N120,W20中～下層）	20	浅黄橙	(20.0)	－	(3.5)	回転ナデ	回転ナデ	－		158
85	甕	土師器	土器廃棄場（N115,W15上層）	10	にぶい黄橙	(20.2)	－	7.1	回転ナデ	回転ナデ	－		152
86	甕	土師器	土器廃棄場（N115,W15下層）	20	にぶい黄橙	(12.2)	－	(6.0)	回転ナデ	回転ナデ	－	内外スス付着	157
87	甕	土師器	土器廃棄場（N120,W10下層、N120,W15中層）	10	浅黄橙	(14.0)	－	2.5	回転ナデ	回転ナデ	－		148
88	甕	土師器	土器廃棄場（N120,W20サブトレンチ）	15	にぶい黄橙	(13.6)	－	(5.1)	回転ナデ	回転ナデ	－		154
129	坏	須恵器	土器廃棄場（N120,W20中～下層）	15	灰	(10.4)	－	(2.7)	回転ナデ	回転ナデ	－		160
130	杯	須恵器	土器廃棄場（N120,W10下層）	底部のみ	灰白	－	(2.1)	(5.6)	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り		145
131	壺	須恵器	土器廃棄場（N115,W15下層）	5	灰	(13.8)	－	(3.6)	回転ナデ	回転ナデ・自然釉	－		161
132	壺	須恵器	SD15底面下　灰色シルト層	5	灰	(16.6)	－	(4.7)	回転ナデ	回転ナデ	－		162
133	長頸壺	須恵器	土器廃棄場(N115,W15上中位層、中層、中下層・N120,W15上層、中層・N120,W20中～下位層・F区土師器出土ポイントA）	頸部以下	灰黄褐	－	(16.1)	－	回転ナデ	回転ナデ	－		144

挿図No.	器種	種別	出土位置	残存率(%)	色調	計測値(cm)			調整			備考	登録No.
						口径	器高	底径	外面	内面	底部		
134	壺	土師器	土器廃棄場（N110,W15上～中位層）	胴部のみ	にぶい黄橙	－	－	－	ナデ	ナデ	－	外面刻線	拓8
135	壺	須恵器	土器廃棄場(N115,W15上中位層・中層、中下層、下層・N120,W20中～下層)	胴部のみ	灰	－	－	－	格子状タタキ	横位ヘラナデ	－		拓10
136	壺	須恵器	土器廃棄場（N110,W15中下層）	胴部のみ	灰	－	－	－	平行タタキ	平行当て具	－		拓11
137	壺	土師器	土器廃棄場（N120,W10下層）	胴部のみ	にぶい黄橙	－	－	－	マメツ(ハケメ)	ユビナデ	－		拓9
138	壺	須恵器	土器廃棄場（N110,W20～N000,W15）	胴部のみ	灰	－	－	－	平行タタキ具	同心円当て具?	－		拓13
139	壺	土師器	土器廃棄場（N110,W15サブトレンチ）	胴部のみ	浅黄橙	－	－	－	ハケメ	ハケメ	－		拓5
140	壺	土師器	土器廃棄場（N115,W10上層）	胴部のみ	にぶい黄橙	－	－	－	ハケメ	ナデ	－		拓6
141	壺	土師器	土器廃棄場（N110,W15下層）	胴部のみ	にぶい黄橙	－	－	－	マメツ(ハケメ)	マメツ(ハケメ)	－		拓7

第11表　新平遺跡　陶磁器観察表

挿図No.	器種	種別	出土位置	法量(cm)			文様	胎土	釉薬・絵付	産地	時期	備考	登録No.
				口径	器高	底径							
142	小皿	陶器	12号土坑　埋土	(8.6)	2.4	3.9		浅黄橙色、長石、黒色粒子	灰釉	在地	19世紀代		88
143	小皿	陶器	12号土坑　埋土	(10.4)	3.1	4.9		浅黄橙色、長石、黒色粒子	褐釉	在地	19世紀代		89
144	皿	陶器	12号土坑　埋土	13.7	3.6	4.9		褐灰色、緻密	灰釉	在地	19世紀代		83
145	小皿	陶器	12号土坑　埋土	(10.2)	3.1	(4.9)		浅黄橙色、長石、黒色粒子	褐釉	在地	19世紀代		91
146	小皿	陶器	12号土坑　埋土	(11.0)	2.9	(5.8)		浅黄橙色、長石、黒色粒子	褐釉	在地	19世紀代		92
147	皿	陶器	12号土坑　埋土	(12.4)	－	－		灰白色	灰釉	大堀相馬	19世紀前半		127
148	小皿	陶器	12号土坑　埋土	10.1	3.0	4.7		浅黄橙色、長石、黒色粒子	褐釉	在地	19世紀代		90
149	皿	陶器	12号土坑　埋土	(11.8)	3.5	4.9		灰白色、緻密	灰釉	在地	19世紀代		85
150	皿	陶器	12号土坑　埋土	(13.2)	3.1	(5.4)		灰白色	灰釉	大堀相馬	19世紀前半		113
151	小皿	陶器	12号土坑　埋土	(10.9)	－	－		浅黄橙色、長石、黒色粒子	褐釉	在地	19世紀代		93
152	皿	陶器	12号土坑　埋土	(12.4)	－	－		褐灰色、緻密	灰釉	在地	19世紀代		86
153	小皿	陶器	12号土坑　埋土	(10.2)	3.1	4.8		浅黄橙色、長石、黒色粒子	褐釉	在地	19世紀代		87
154	皿	陶器	12号土坑　埋土	(13.5)	－	－		褐灰色、緻密	灰釉	在地	19世紀代		84
155	皿	陶器	12号土坑　埋土	－	－	(6.8)		褐灰色	灰釉	在地		蛇の目釉剥ぎ	79
156	小杯	陶器	12号土坑　埋土	(6.8)	3.3	(2.4)	釣鐘文様	灰色	褐釉・灰釉	在地	近代		118
157	?	陶器	12号土坑　埋土	－	－	－		浅黄橙色	染付	瀬戸・美濃	18世紀末	陶胎染付	105
158	土瓶蓋	陶器	12号土坑　埋土	6.2	1.1	－		灰白色	鉄絵	大堀相馬	19世紀前半	銅緑釉	76
159	皿	陶器	12号土坑　埋土	(24.6)	－	11.4		褐灰	白色の釉	在地			78
160	皿	陶器	12号土坑　埋土	－	－	(5.4)	寿	褐灰色	薄緑色の釉	在地			112
161	皿	陶器	12号土坑　埋土	－	－	5.7	?	橙色	白色の釉	在地			110
162	土瓶	陶器	12号土坑　埋土	7.0	－	7.0		灰色	鉄絵	大堀相馬	19世紀前半	銅緑釉	77
163	土瓶	陶器	12号土坑　埋土	9.0	10.5	8.2		灰白色	鉄絵	大堀相馬	19世紀前半	青色の釉	75
164	碗	陶器	12号土坑　埋土	－	－	－		灰白色	灰釉	大堀相馬	19世紀前半		125
165	碗	陶器	12号土坑　埋土	－	－	－	草文	灰色	染付	肥前	18世紀代		135
166	丸碗	陶器	12号土坑　埋土	－	－	－	灰釉地に鉄釉（	灰白色	灰釉・鉄釉	大堀相馬	18世紀後半		126
167	小甕	陶器	12号土坑　埋土	(6.0)	－	－		褐白色	鉄釉	在地			81
168	小甕	陶器	12号土坑　埋土	(10.4)	－	－		褐灰色	鉄釉・灰釉	在地			82
169	碗	陶器	12号土坑　埋土	－	－	－		灰色	染付	肥前	18世紀前半	こんにゃく印判	124
170	徳利	陶器	12号土坑　埋土	－	－	(6.1)		灰白色	?	大堀相馬	19世紀前半		111
171	小甕	陶器	12号土坑　埋土	－	－	(2.8)		褐灰色	灰釉	在地			117
172	甕	陶器	12号土坑　埋土	13.2	10.1	7.2	外面：カキメ	褐灰色	褐釉・灰釉	在地			74
173	甕	陶器	12号土坑　埋土	－	－	－		褐灰色	獅子	在地			109
174	花瓶	陶器	12号土坑　埋土	－	－	－		灰白色	灰釉	大堀相馬?			114

挿図No.	器種	種別	出土位置	法量(cm) 口径	器高	底径	文様	胎土	釉薬・絵付	産地	時期	備考	登録No.
175	鉢	陶器	12号土坑　埋土	(16.0)	—	—		灰黄色	透明な釉	在地	19世紀以降		80
176	甕	陶器	12号土坑　埋土	—	—	(17.7)		橙色	鉄釉	在地			69
177	擂鉢	陶器	12号土坑　埋土	10.1	11.9	8.8		橙色	鉄釉	在地			71
178	擂鉢	陶器	12号土坑　埋土	30.2	16.9	10.7		橙色	鉄釉	在地	19世紀代		70
179	擂鉢	陶器	12号土坑　埋土	30.2	14.0	10.4		褐灰色	褐釉・灰釉	在地			72
180	擂鉢	陶器	12号土坑　埋土	32.4	19.4	11.8		褐灰色	褐釉・灰釉	在地			73
181	碗蓋	磁器	12号土坑　埋土	—	—	—	外：雪輪文	白色	染付	肥前	18世紀後半	二次焼成	119
182	丸碗	磁器	12号土坑　埋土	—	—	—	外：雪輪文 内：四方襷文	白色、黒色粒子	染付	肥前	18世紀後半	焼き継ぎ	100
183	端反碗	磁器	12号土坑　埋土	—	—	—	繋花文	白色、ガラス質、黒色粒子	染付	在地	19世紀	工業コバルト	95
184	端反碗	磁器	12号土坑　埋土	—	—	—		白色、ガラス質、黒色粒子	染付	瀬戸？	19世紀前半	102と同一個体	98
185	丸腐(小杯)	磁器	12号土坑　埋土	—	—	—	花文	白色、ガラス質	染付	在地	19世紀	工業コバルト	101
186	端反碗	磁器	12号土坑　埋土	—	—	—	稲束文？	白色、ガラス質、黒色粒子	染付	在地	19世紀	工業コバルト	97
187	端反碗	磁器	12号土坑　埋土	—	—	—		白色、ガラス質、黒色粒子	染付	瀬戸？	19世紀前半	98と同一個体	102
188	端反碗	磁器	12号土坑　埋土	—	—	—		白色、ガラス質、黒色粒子	染付	在地	19世紀	工業コバルト	94
189	端反碗	磁器	12号土坑　埋土	—	—	—	笹文	白色、ガラス質	染付	在地	19世紀	工業コバルト	99
190	碗	磁器	12号土坑　埋土	—	—	—	松文	白色、ガラス質	染付	在地	19世紀	工業コバルト	120
191	皿	磁器	12号土坑　埋土	—	—	—	？	灰色	染付	肥前	18世紀		142
192	端反碗	磁器	12号土坑　埋土	—	—	—		白色、ガラス質、黒色粒子	染付	瀬戸	19世紀前半		96
193	鉢	磁器	12号土坑　埋土	—	—	—	内面：草花文	灰白色	染付	肥前	18世紀後半		166
194	猪口	磁器	12号土坑　埋土	—	—	—		白色	染付	肥前	18世紀末	蛇の目凹形高台	115
195	皿	磁器	12号土坑　埋土	—	—	—	？	白色	染付	肥前			122
196	紅皿	磁器?	12号土坑　埋土	(4.4)	2.0	(1.8)		灰白色		在地			138
197	火入れ	磁器	12号土坑　埋土	—	—	—	？	白色	染付	在地			104
198	香炉？	磁器	12号土坑　埋土	—	—	—	透かし	灰白色	青磁風	在地			131
199	鉢	磁器?	12号土坑　埋土	(14.2)	—	—		白色、黒色粒子	灰釉	在地			103
200	皿	磁器	12号土坑　埋土	—	—	—	「寿」文	白色、ガラス質	型おこし	在地	19世紀		107
201	皿	磁器	12号土坑　埋土	—	—	—	「寿」文	白色、ガラス質	型おこし	在地	19世紀		108
202	皿	磁器	12号土坑　埋土	—	—	—	「寿」文	白色、ガラス質	型おこし	在地	19世紀	い四一の朱書き、焼継ぎ	106

第12表　新平遺跡　石器観察表

挿図No.	器種	出土位置	計測値(mm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	石質	産地	備考	登録No.
203	鏃	N40,W105　耕作土	44	20	5	3.71	頁岩	奥羽山脈（新生代新第三紀）		石11
204	鏃	D区南　検出面	33	18	5	1.91	頁岩	奥羽山脈（新生代新第三紀）		石26
205	鏃	9号溝跡	33	20	4	2.10	頁岩	奥羽山脈（新生代新第三紀）		石21
206	鏃	不明	(28)	16	5	1.83	頁岩	奥羽山脈（新生代新第三紀）		石29
207	鏃	—	19	12	3	0.38	凝灰岩	奥羽山脈（新生代新第三紀）		石19
208	鏃	N130,W25　盛土直下	47	15	4	3.51	頁岩	奥羽山脈（新生代新第三紀）		石４
209	尖頭器状石器	9号溝跡	50	34	11	13.98	頁岩	奥羽山脈（新生代新第三紀）		石22
210	石匙	A区	(25)	25	8	3.93	頁岩	奥羽山脈（新生代新第三紀）		石28
211	石匙	排土中	29	36	6	5.96	頁岩	奥羽山脈（新生代新第三紀）		石２
212	スクレイパー	不明遺構	41	39	11	15.13	頁岩	奥羽山脈（新生代新第三紀）		石18
214	スクレイパー	６・７・８号土坑埋土	36	36	10	8.38	頁岩	奥羽山脈（新生代新第三紀）		石14
215	スクレイパー	N18,W55	32	42	7	10.87	頁岩	奥羽山脈（新生代新第三紀）		石12
216	スクレイパー	9号溝跡	(27)	35	10	8.19	頁岩	奥羽山脈（新生代新第三紀）		石25
217	スクレイパー	N155,W20　盛土直下	83	38	19	46.55	頁岩	奥羽山脈（新生代新第三紀）		石９
218	スクレイパー	N20,W55	55	43	10	20.85	頁岩	奥羽山脈（新生代新第三紀）		石13
219	スクレイパー	—	54	54	16	36.09	頁岩	奥羽山脈（新生代新第三紀）		石１
220	スクレイパー	9号溝跡	53	53	14	38.00	頁岩	奥羽山脈（新生代新第三紀）		石24

挿図No.	器種	出土位置	計測値（mm）			重量（g）	石質	産地	備考	登録No.
			長さ	幅	厚さ					
221	楔形石器	N155,W20　盛土直下	38	34	18	26.01	頁岩	奥羽山脈（新生代新第三紀）		石７
222	Ｒフレイク	８号溝跡　埋土上層	78	66	26	102.85	頁岩	奥羽山脈（新生代新第三紀）		石15
223	磨製石斧	N15,W15	136	54	27	331.50	頁岩	奥羽山脈（新生代新第三紀）		石３
224	磨製石斧	N170,W20　盛土直下	78	36	15	66.53	頁岩	奥羽山脈（新生代新第三紀）		石10
225	磨石	不明遺構	80	37	16	72.71	頁岩	奥羽山脈（新生代新第三紀）		石17
226	石錘	Ｃ区　黄色火山灰下	64	68	16	98.88	砂岩	奥羽山脈（新生代新第三紀）		石27
227	石錘	N135,W25　盛土直下	63	52	13	68.26	砂岩	奥羽山脈（新生代新第三紀）		石６
	剥片	N130,W20　盛土直下	27	27	9	3.66	頁岩	奥羽山脈（新生代新第三紀）		石５
	剥片	N155,W20　盛土直下	58	38	16	28.56	頁岩	奥羽山脈（新生代新第三紀）		石８
	剥片	N70,W25	58	55	11	22.89	頁岩	奥羽山脈（新生代新第三紀）		石16

第13表　新平遺跡　木製品観察表

挿図No.	器種	出土位置	計測値（cm）			重量（g）	材質	備考	登録No.
			横幅(口径)	縦幅(器高)	厚さ				
228	椀	Ａ区	10.3	4.6	－	94.0	ナナカマド属	内外面朱漆	1
229	椀	12号土坑　埋土	10.7	4.7	－	99.7	ブナ属	内外面朱漆	2
230	椀	１号井戸跡　埋土	12.2	2.5	－	88.0		黒漆地に朱漆で文様	3
231	膳類	12号土坑　埋土	15.7	9.1	0.9	75.4			9
232	下駄	12号土坑　埋土	7.6	13.3	2.3	193.5		無歯下駄	4
233	下駄差歯	12号土坑　埋土	10.6	5.1	2.3	124.8			7
234	下駄差歯	12号土坑　埋土	10.6	5.1	2.3	143.5			8
235	下駄	12号土坑　埋土	9.2	21.7	1.1	462.1		連歯下駄　山一刻印	10
236	下駄	12号土坑　埋土	8.5	21.4	1.1	366.4		連歯下駄	6
237	下駄	12号土坑　埋土	10.2	16.3	3	234.4		差歯下駄（陰卯差歯下駄）	5
不掲載	曲物側板	１号井戸跡　埋土	51.0	12.0	0.1	19.0			11

第14表　新平遺跡　土製品観察表

挿図No.	器種	出土位置	計測値（cm）	重量（g）	備考	登録No.
238	土鈴	土器廃棄場（上～中位層）	残存長3.4、最大径4.3、体部厚0.7、紐通し孔径(0.5)	21.83		3
239	土鈴	土器廃棄場（N115,W15中層）	残存長3.4、紐通し孔径0.3	4.87	紐部破片	1
240	土鈴	土器廃棄場（N120,W15中層）	－	4.59	体部破片	4
241	土鈴	土器廃棄場（N120,W15中層）	－	4.64	体部破片	5
242	土鈴	土器廃棄場	－	8.60	体部破片	7
234	土鈴	土器廃棄場（N115,W15中層）	－	9.80	体部破片	8
244	用途不明土製品	土器廃棄場（N155,W20～N160,W15盛土直下一回目検出時）	－	12.20		6
245	土鈴	土器廃棄場（N115,W15中下層）	残存長5.8、最大径2.2、孔径0.8	20.52		2

第15表　新平遺跡　石製品観察表

挿図No.	器種	出土位置	計測値(mm)			重量	石質	産地	備考	登録No.
			長さ	幅	厚さ					
248	石臼	１号井戸跡　埋土	280	(209)	98	7863.80	安山岩	奥羽山脈（新生代新第三紀）		石20

第16表　新平遺跡金属製品

挿図No.	器種	出土位置	計測値（cm）	重量（g）	備考	登録No.
246	刀子	Ａ区　トレンチ４一括	残存長7.0、幅1.0、厚さ0.2	16.60		鉄３
247	釘	土器廃棄場（N140,W15）	全長7.1、幅0.7、厚さ0.5	5.17		鉄１
249	古銭	Ａ区	外径2.4、穿径7.0、銭厚0.1	2.40	銭文：面「寛永通寶」、無背	鉄４
250	古銭	Ａ区	外径2.4、穿径6.5、銭厚0.1	2.50	銭文：面「寛永通寶」、無背	鉄５

第17表　芦萱遺跡　縄文土器観察表

挿図No.	器種	出土位置	色調	文様・調整	時期	備考	登録No.
251	深鉢	４区下層	褐	外面：沈線文	中期　大木10式？	器面摩滅	

第18表　芦萱遺跡　古代土器観察表

挿図No.	器種	種別	出土位置	残存率(%)	色調	計測値(cm)			調整			備考	登録No.
						口径	器高	底径	外面	内面	底部		
252	坏	土師器	４区中層（上から10cm）	10	淡橙	(11.2)	(2.6)	(7.8)	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り		±47
253	坏	土師器	２区下層	10	にぶい橙	(11.1)	3.4	(5.0)	回転ナデ	回転ナデ	回転？糸切り		±26
254	坏	土師器	７区下層	40	浅黄色	(11.2)	(4.8)	2.7	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り		233
255	坏	土師器	２区中層	25	浅黄橙	(11.0)	2.7	(4.2)	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り		±29
256	坏	土師器	１区下層	15	にぶい黄橙	(11.8)	2.3	(5.0)	回転ナデ	回転ナデ	糸切り		±30
257	坏	土師器	７区中層	60	浅黄橙	11.6	3.0	(5.5)	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り		±21
258	坏	土師器	２区中層（上から20cm）・下層	45	橙	(12.7)	3.5	(5.2)	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り		±20
259	坏	土師器	１区中層	30	橙	(12.0)	(3.8)	－	回転ナデ	回転ナデ	－		±27
260	坏	土師器	３区中層（上から20cm）	10	橙	(12.6)	3.0	(6.0)	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	口唇部沈線状に作出	±28
261	坏	土師器	２区中層、下層	60	にぶい橙	(13.2)	4.3	5.1	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	内面スス付着	±10
262	高台？坏	土師器	２区中洲下層	20	浅黄橙	(14.0)	(3.8)	－	回転ナデ	回転ナデ	－		±42
263	坏	土師器	１区下層、２区下層	20	にぶい赤褐	(14.5)	4.4	5.8	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	外面スス付着	±11
264	坏	土師器	１区上層・２区中層	60	浅黄橙	15.8	5.2	5.3	回転ナデ	回転ヘラナデ	回転糸切り		±36
265	坏	土師器	３区下層	40	にぶい黄橙	(11.2)	3.3	5.0	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り		±６
266	坏	土師器	６区下層	20	橙	(12.0)	3.4	5.7	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り		±23
267	坏	土師器	２区中洲下層	10	浅黄橙	(12.6)	3.5	4.8	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り		±15
268	坏	土師器	４区上中層、中層（上から10cm）	10	浅黄橙	(12.1)	3.7	(5.1)	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り		±40
269	坏	土師器	２区中洲下層	15	浅黄橙	(12.8)	3.9	(5.0)	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り		±25
270	坏	土師器	１区上層、下層	40	にぶい黄橙	(13.7)	3.4	6.4	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	外面スス付着	±37
271	坏	土師器	４区上中層、中層	10	にぶい褐	(12.3)	4.1	(4.3)	回転ナデ	回転ナデ	糸切り		±46
272	坏	土師器	２区中洲下層・土坑？埋土下層	25	にぶい黄橙	(13.3)	4.3	5.6	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り		±８
273	坏	土師器	２区中層（黒）	100	淡橙	10.6	4.2	4.8	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り		±12
274	坏	土師器	１区下層、中洲下層、	20	淡橙	(11.4)	3.8	4.7	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り		±18
275	坏	土師器	２区中洲下層	45	にぶい褐	(11.7)	3.8	(4.3)	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	外面黒斑	±14
276	坏	土師器	７区中層	20	橙	(11.8)	4.3	(5.2)	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り		±24
277	坏	土師器	２区下層	50	にぶい橙	(12.2)	4.2	5.4	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	外面スス付着	±13
278	坏	土師器	７区下層	10	にぶい黄橙	(15.8)	4.5	(6.8)	回転ナデ	回転ナデ	糸切り		±44
279	坏	土師器	２区中洲下層	60	淡橙	12.0	3.9	(5.0)	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り		±22
280	坏	土師器	６区上層トレンチ部、中層（上から20cm）	10	橙	(12.2)	4.0	4.8	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り		±32
281	坏	土師器	１区下層・２区中層（黒）	50	にぶい黄橙	(12.9)	3.5	4.8	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	外面スス付着	±31
282	坏	土師器	２区中層（上から20cm）・下層	70	淡橙	14.5	5.1	5.8	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り		±７
283	坏	土師器	４区中層、５区下層	25	にぶい橙	(11.8)	3.8	3.8	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り		±17
284	坏	土師器	１区下層	50	浅黄橙	(12.7)	3.8	5.8	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り		±33
285	坏	土師器	２区中層（黒）	15	橙	(12.9)	4.4	(5.4)	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	内面スス付着	±19
286	坏	土師器	２区中洲下層	60	淡橙	11.9	4.8	4.6	回転ナデ	回転ナデ	マメツ（回転糸切り）		±16
287	坏	土師器	２区中層、下層	100	橙	12.3	4.6	(4.3)	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り		±９
288	坏	土師器	１区中洲下層	60	浅黄橙	(12.8)	4.4	5.2	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り		±35
289	坏	土師器	１区下層	50	浅黄橙	13.4	4.1	5.1	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り		±34

挿図No.	器種	種別	出土位置	残存率(%)	色調	計測値(cm)			調整			備考	登録No.
						口径	器高	底径	外面	内面	底部		
290	坏	土師器	2区下層	5	にぶい黄橙	(13.8)	(3.8)	—	回転ナデ	回転ナデ	—		土43
291	坏	土師器	1区中洲中層（黒）	体部以下	にぶい黄橙	—	(3.8)	5.1	回転ナデ	回転ヘラナデ	回転糸切り		土39
292	高台坏	土師器	1区中洲下層	40	にぶい黄橙	(15.0)	(5.0)	(7.0)	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	貼り付け高台	土38
293	高台坏	土師器	1区中洲中層（黒）	体部以下	にぶい橙	—	(4.8)	7.9	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り・回転ナデ	貼り付け高台	土41
294	高台坏	土師器	1区中洲中層（黒）・2区下層	体部以下	明褐灰	—	(4.4)	6.2	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り・回転ナデ	貼り付け高台	土48
295	高台坏	土師器	2区下層	底部以下	浅黄橙	—	(3.0)	8.0	回転ナデ	回転ナデ・ミガキ	糸切り・回転ナデ	内黒、貼り付け高台、底部に爪跡？周回	土45
296	坏	土師器	1区中層（上から20cm）・2区中層（黒）、下層	50	黒	(11.7)	3.8	(6.2)	回転ナデ・ミガキ	回転ナデ・ミガキ	回転糸切り	両面黒色処理	土3
297	坏	土師器	2区土坑そば3層下	50	にぶい黄橙	(14.0)	5.0	(6.2)	回転ナデ	回転ナデ・ミガキ	回転糸切り	内黒	土5
298	坏	土師器	1区上層・2区下層	30	にぶい黄橙	(13.6)	4.9	4.6	回転ナデ	回転ナデ・ミガキ	回転糸切り	内黒	土4
299	坏	土師器	トレンチ4・1区中層（上から20cm）	10	灰白	(13.8)	5.1	5.3	回転ナデ	回転ナデ・ミガキ	回転糸切り	内黒	土2
300	坏	土師器	1区下層	40	にぶい橙	(13.4)	6.1	(6.7)	回転ナデ	回転ナデ・ミガキ	回転糸切り	内黒、外面籾痕？	土1
301	坏	土師器	3区中層（上から10cm）	体部以下	にぶい橙	—	(2.8)	4.3	回転ナデ	回転ナデ・ミガキ	回転糸切り	内黒	土49
302	坏	土師器	3区中層、中層（上から00cm）	体部以下	にぶい黄橙	—	(4.3)	5.9	回転ナデ	回転ナデ・ミガキ	静止？糸切り	内黒	土50
303	甕	土師器	2区下層	20	橙	(13.2)	(8.3)	—	回転ナデ	回転ナデ	—	内外面スス付着	土53
304	甕	土師器	5区中層	10	にぶい黄橙	(19.0)	(9.8)	—	回転ナデ	回転ナデ	—		土51
305	甕	土師器	1区中層	20	浅黄橙	(23.0)	(8.8)	—	回転ナデ	回転ナデ	—	内外面スス付着	土52
306	甕	須恵器	1区中層（上から10cm）	10	黒	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	—	外面格子状刻線・外面釉塗布	須3
307	甕	須恵器	3区上層	体部	灰	—	—	—	回転ナデ・斜位ケズリ	回転ナデ	—	外面墨書	須4
308	長頸壺	須恵器	1区中層（上から20cm）・2区中層（黒）、下層11区中層	25	浅黄橙	(16.0)	(6.5)	—	回転ナデ	回転ナデ	—		須1
309	甕	須恵器	2区中洲中層	体部以下	褐灰	—	(15.5)	(9.6)	回転ナデ・斜位ケズリ	回転ナデ	再調整（ケズリ？）		須2

第19表　芦萱遺跡　陶磁器観察表

挿図No.	器種	種別	出土位置	法量(cm)			文様	胎土	産地	時期	備考	登録No.
				口径	器高	底径						
310	椀	磁器	トレンチ4	(3.8)	(3.7)	—		灰白色　染付	肥前	18世紀		陶1
311	椀	磁器	9区中層	(3.4)	(4.5)	—	外面：草花文	灰白色　染付	肥前	18世紀		陶2

第20表　芦萱遺跡　石器観察表

挿図No.	器種	出土位置	計測値(cm)			重量(g)	石質	産地	備考	登録No.
			長さ	幅	厚さ					
312	石匙	9区中層	68.0	21.0	9.0	11.13	頁岩	奥羽山脈（新生代新第三紀）		1
313	石匙	4区下層	99.5	24.5	11.0	20.75	頁岩	奥羽山脈（新生代新第三紀）		2
314	磨石	2区下層	181.5	54.5	60.0	700.85	デイサイト	奥羽山脈（新生代新第三紀）		3

第21表　芦萱遺跡　土製品観察表

挿図No.	器種	出土位置	計測値(cm)	重量(g)	備考	登録No.
315	羽口	1区下層		44.82		土1
316	羽口	1区下層		2.56		土2

第22表　芦萱遺跡　金属製品観察表

挿図No.	器種	出土位置	計測値（cm）	重量（g）	備考	登録No.
317	古銭	２区土坑そば	外径24.5、穿径6.0、銭厚1.5	2.49	銭文：面「寛永通寶」、背「文」	

写　真　図　版

1．遺跡遠景(1)（西から）

2．遺跡遠景(2)（南から）

写真図版１　航空写真１

1．遺跡直上（1）

1．遺跡直上（2）

写真図版２　航空写真２

1．遺跡現況（1）

2．遺跡現況（2）

3．基本層序

写真図版３　遺跡現況・基本層序

1．１号竪穴住居跡検出状況

2．１号竪穴住居跡完掘状況

3．２号竪穴住居跡

写真図版４　１・２号竪穴住居跡

1．１号溝跡

2．２号溝跡

3．３号溝跡

写真図版５　１・２・３号溝跡

1．４号溝跡

2．５号溝跡

3．９号溝跡

写真図版６　４・５・９号溝跡

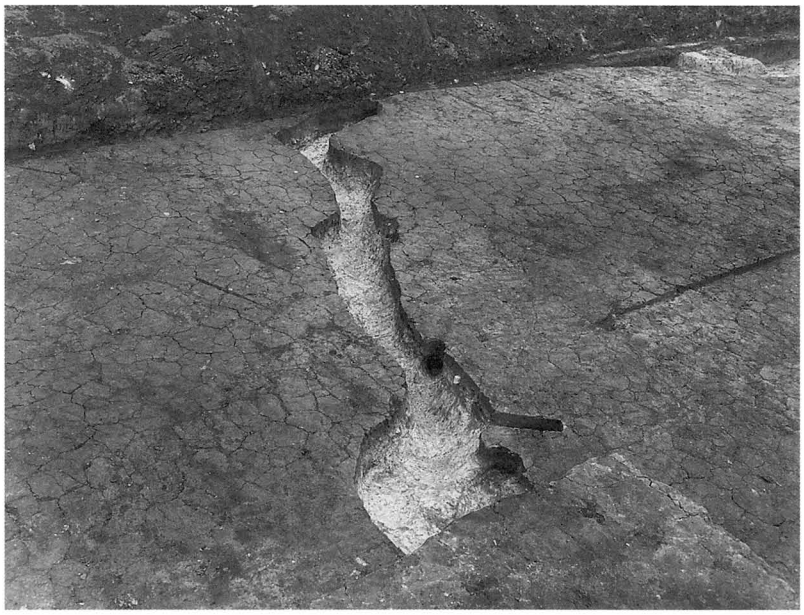
1．６号溝跡

2．７号溝跡

3．８号溝跡

写真図版７　６・７・８号溝跡

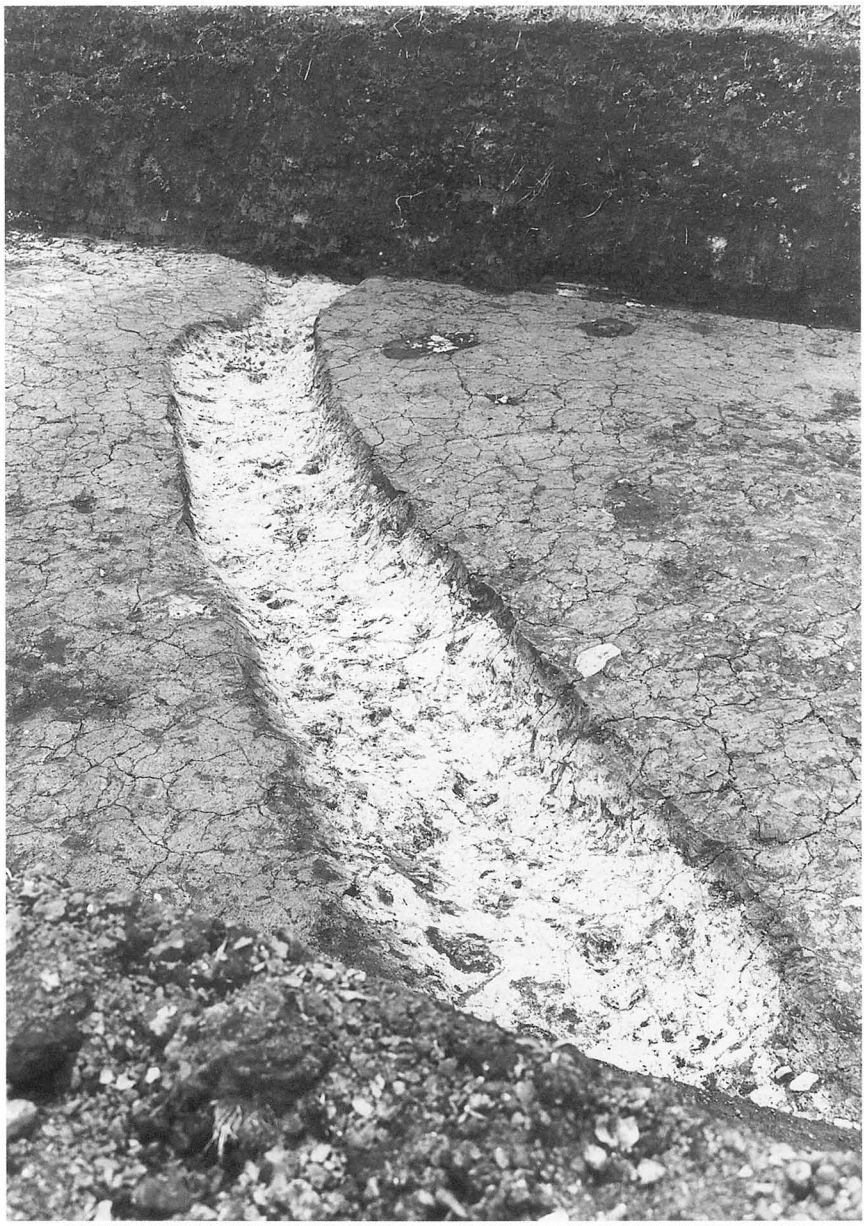
1．10号溝跡



2．11号溝跡

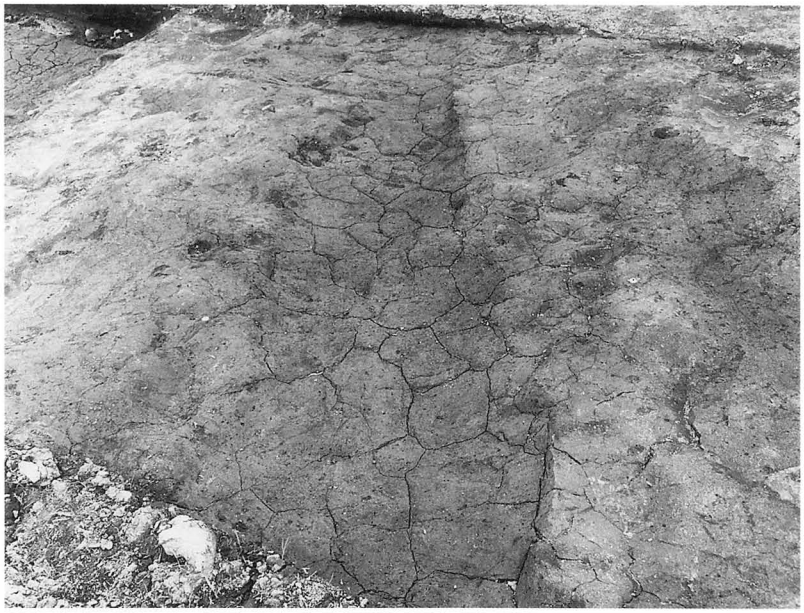
写真図版８　10・11号溝跡

1．12号溝跡



2．13号溝跡

写真図版９　12・13号溝跡



1．14号溝跡

2．15号溝跡

3．17・18号溝跡

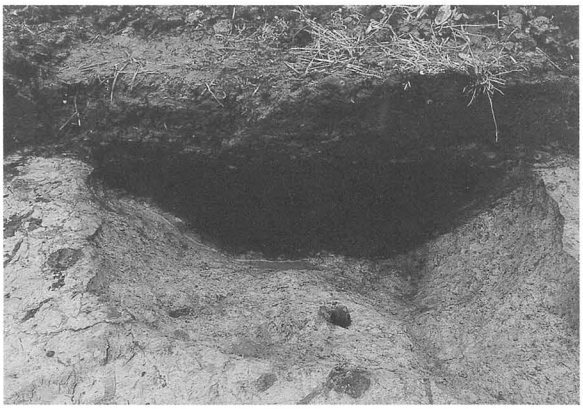
写真図版10　14・15・17・18号溝跡

1．16号溝跡 (1)

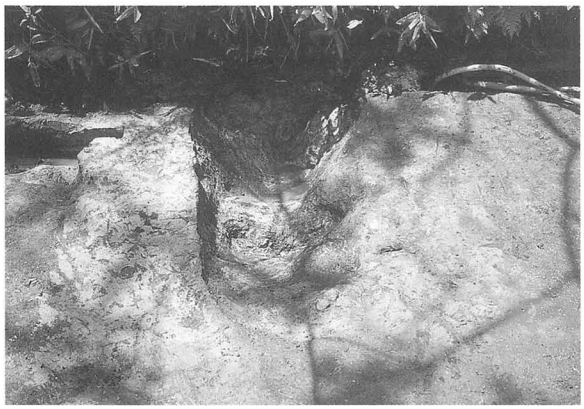
2．16号溝跡 (2)

3．19号溝跡

写真図版11　16・19号溝跡



1号土坑



2号土坑

4・5・6・7号土坑

8号土坑

9号土坑

10・11号土坑

13号土坑

12号土坑

写真図版12　土坑

1．１号井戸跡

2．土器廃棄場To-a検出状況

3．土器廃棄場完掘

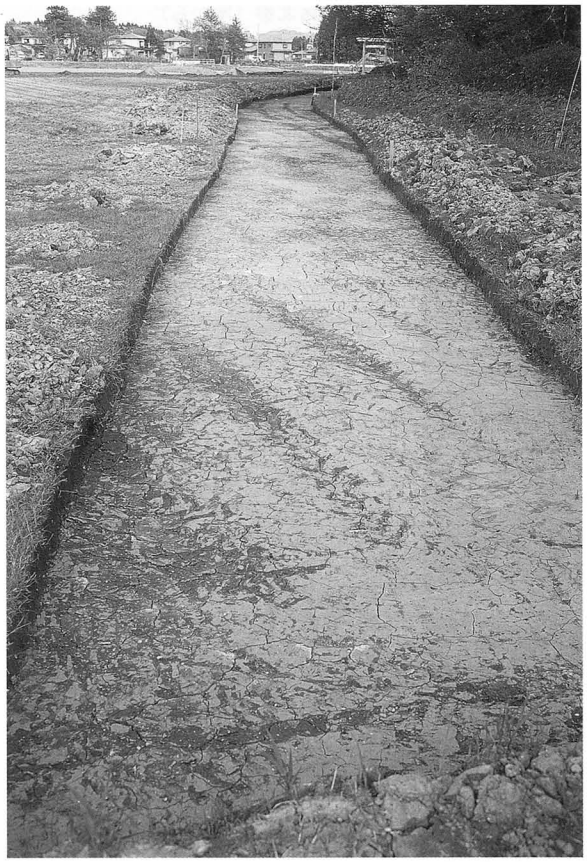
写真図版13　１号井戸跡・土器廃棄場

1．土器廃棄場（南から）

2．土器廃棄場断面（東から）

3．土器廃棄場底面状況（北から）

写真図版14　土器廃棄場



B区　中央部

B区　東部

C　区

F　区

写真図版15　B・C・F区全景

1．Ｄ区北部（南から）

2．Ｄ区北部（北から）

3．Ｄ区中央部（北から）

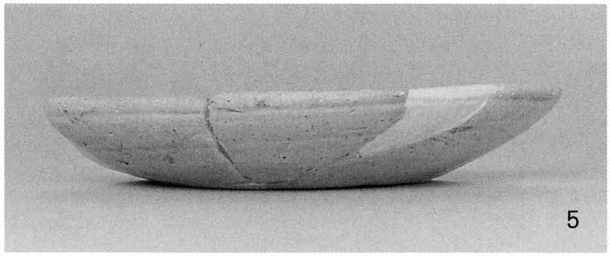
写真図版16　Ｄ区１

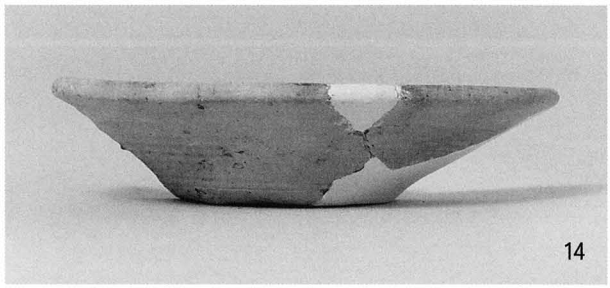
1．Ｄ区中央部（北から）

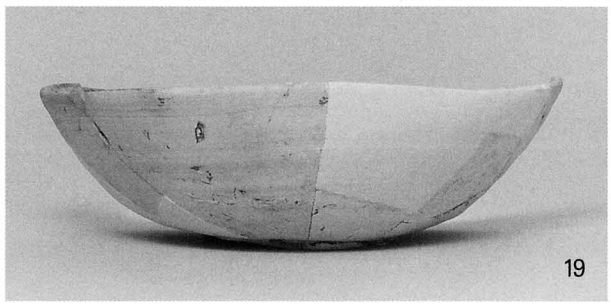
2．Ｄ区南部（北から）

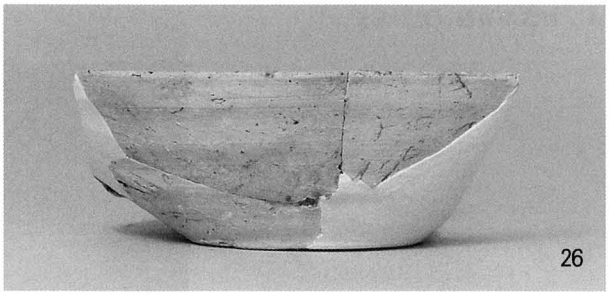
3．Ｄ区南部（北から）

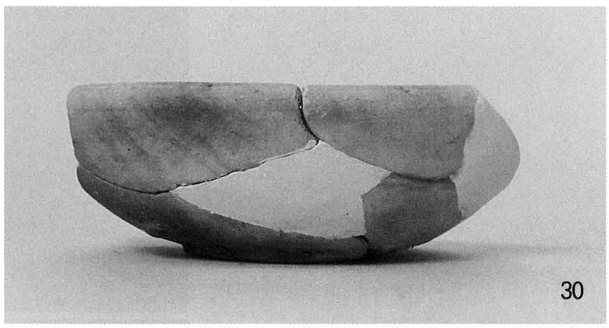
写真図版17　Ｄ区２

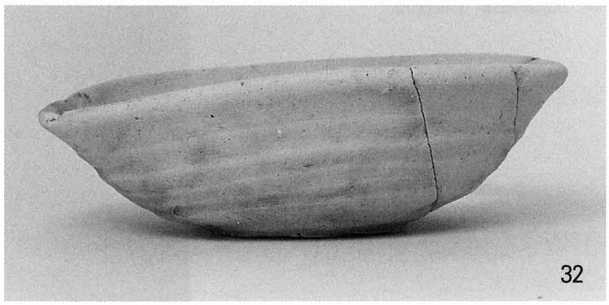






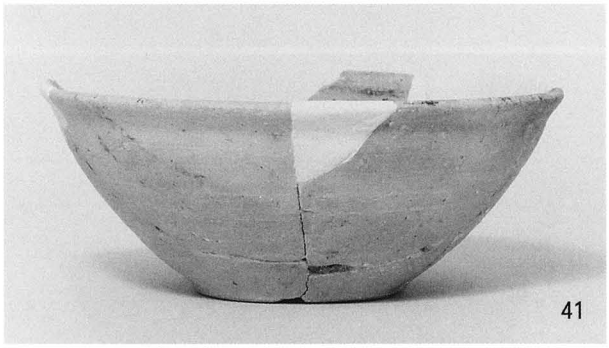






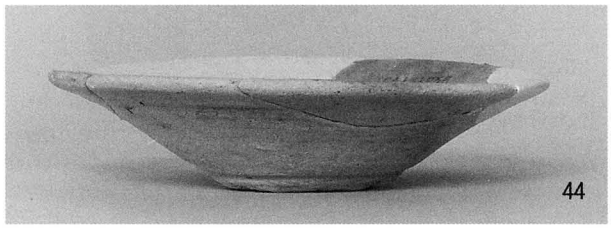
写真図版18　出土土器１

40


41

42

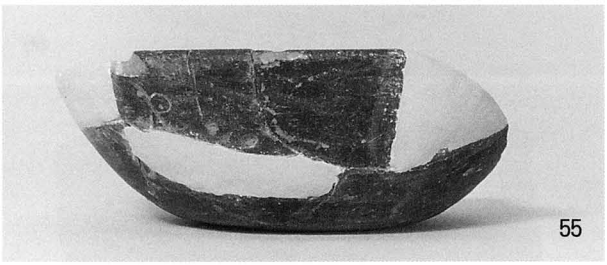
43

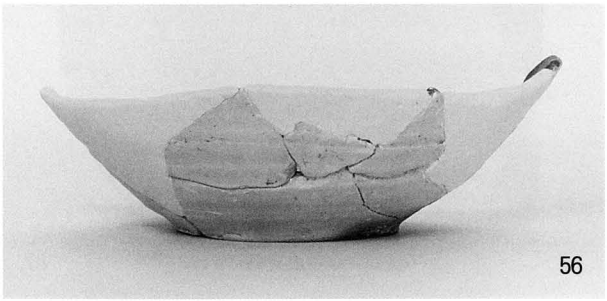

44

45

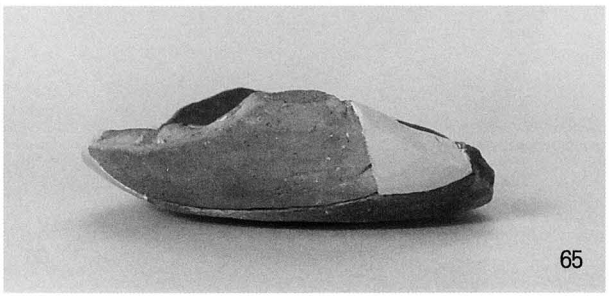
47

48

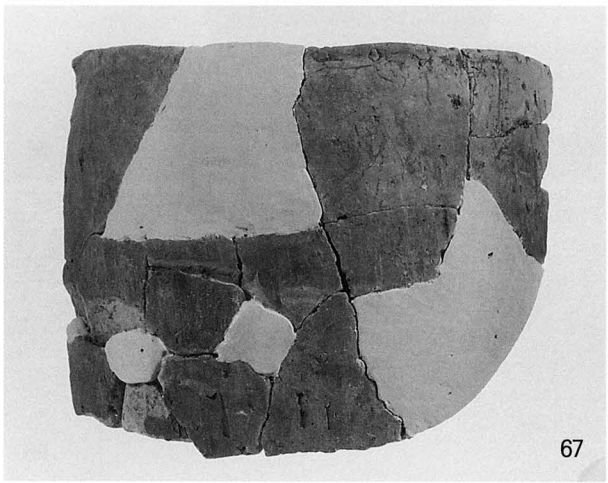

55

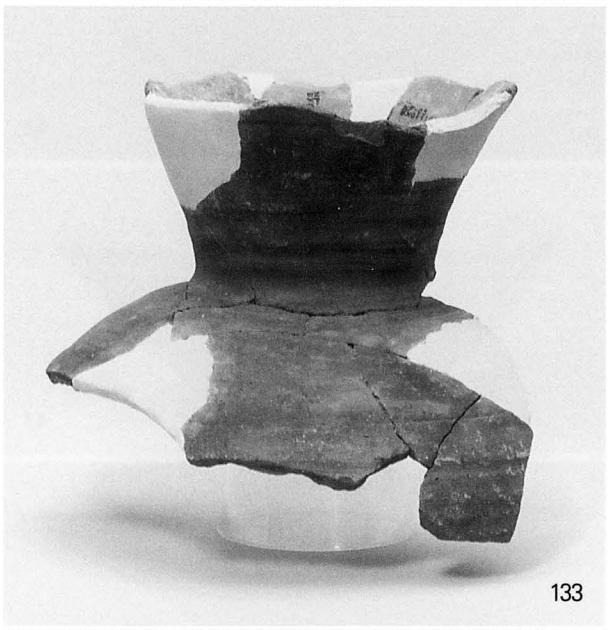

56

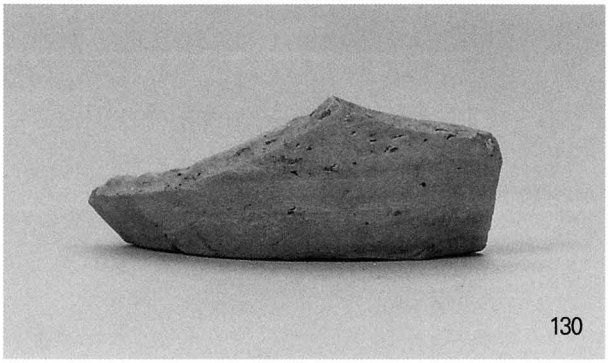
58


65

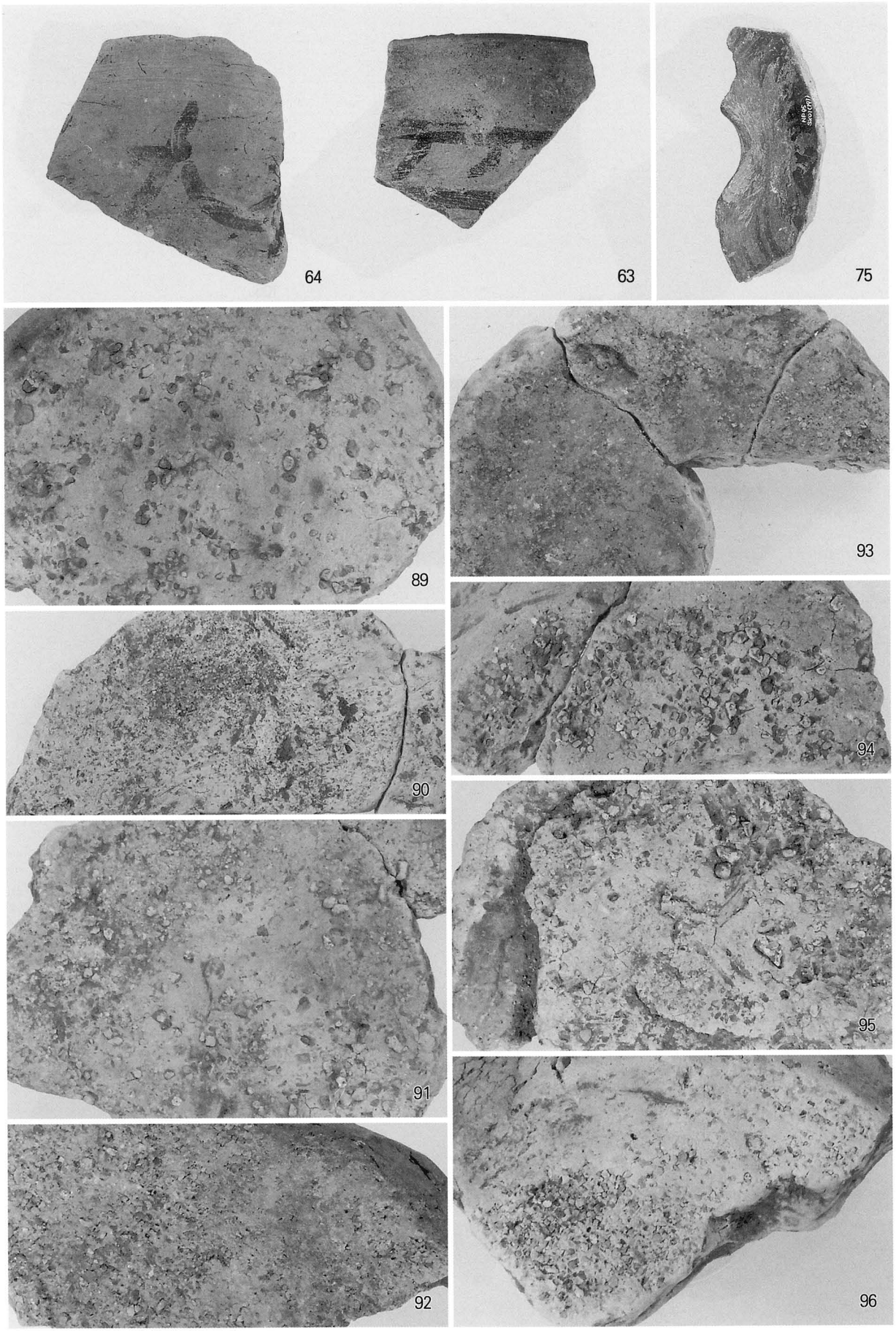
写真図版19　出土土器２



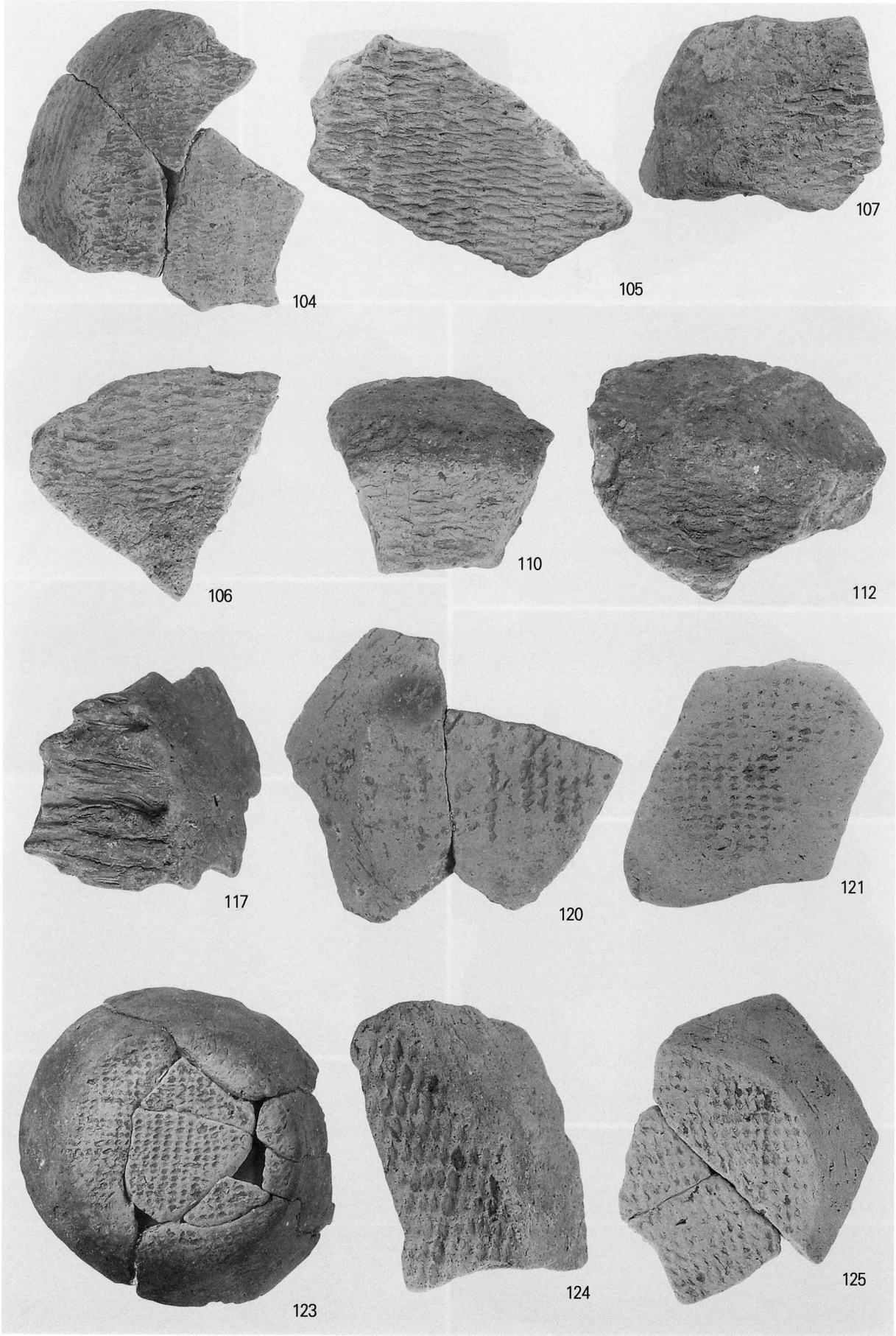




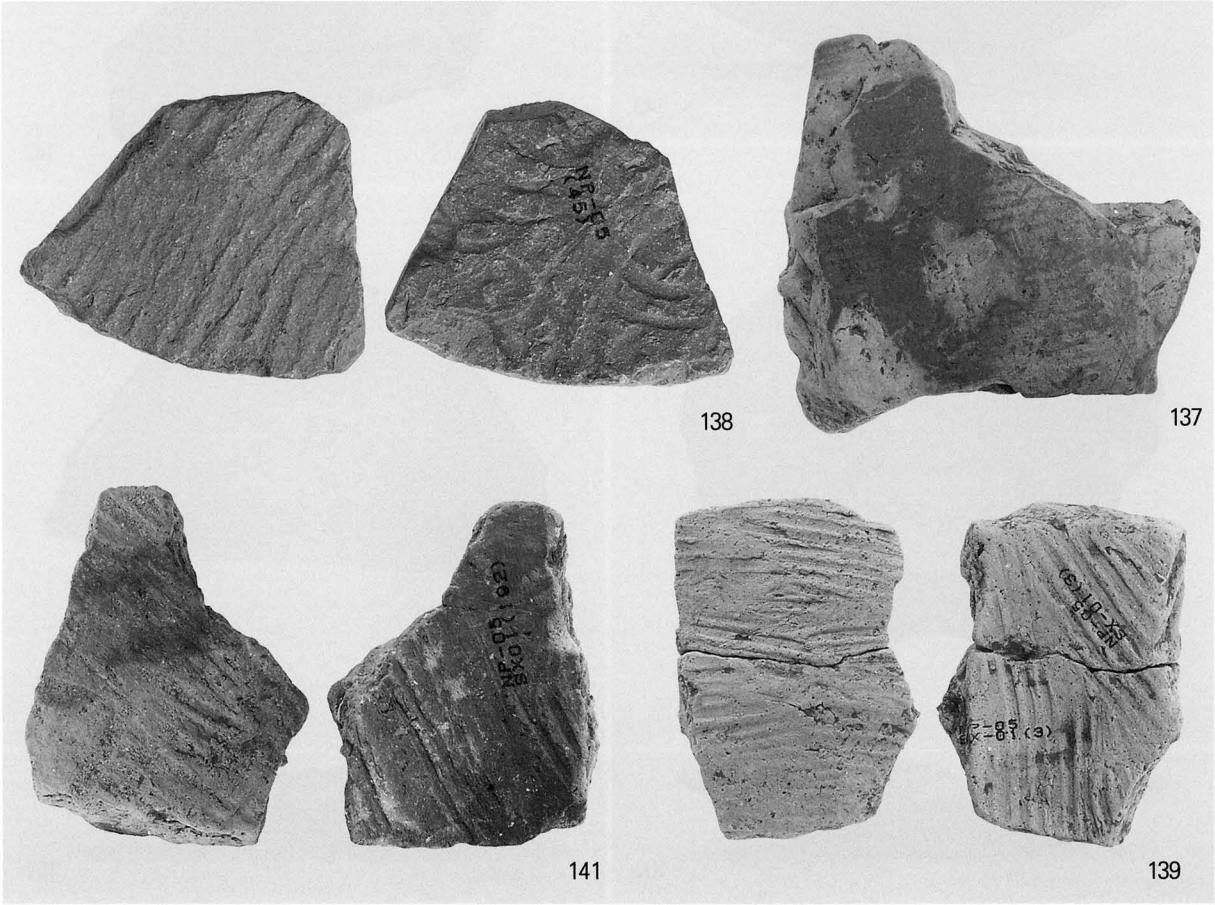
写真図版20　出土土器３



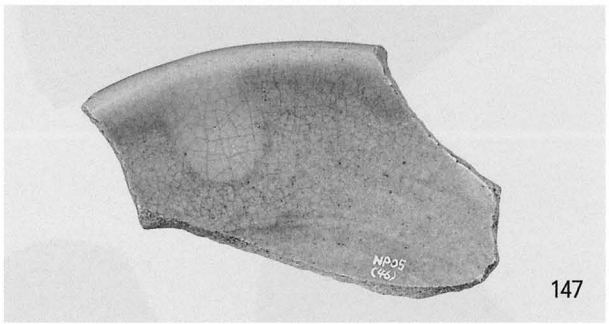
写真図版21　出土土器４

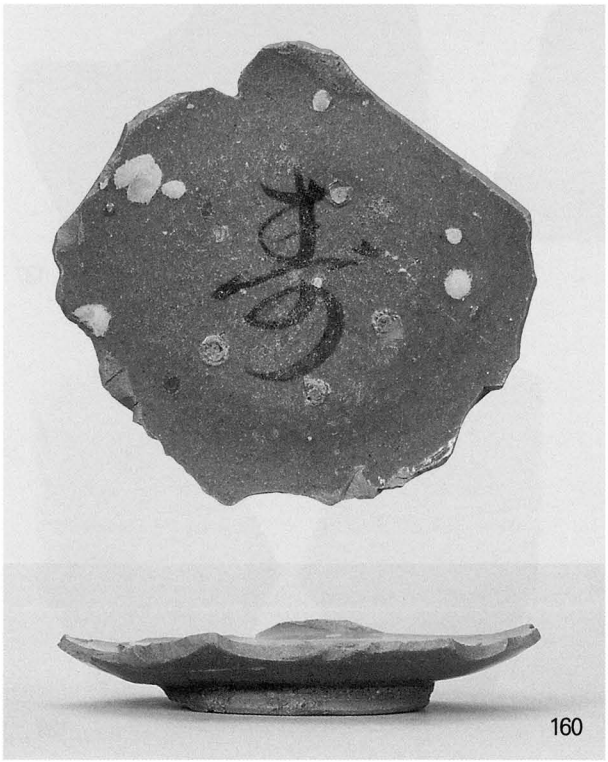


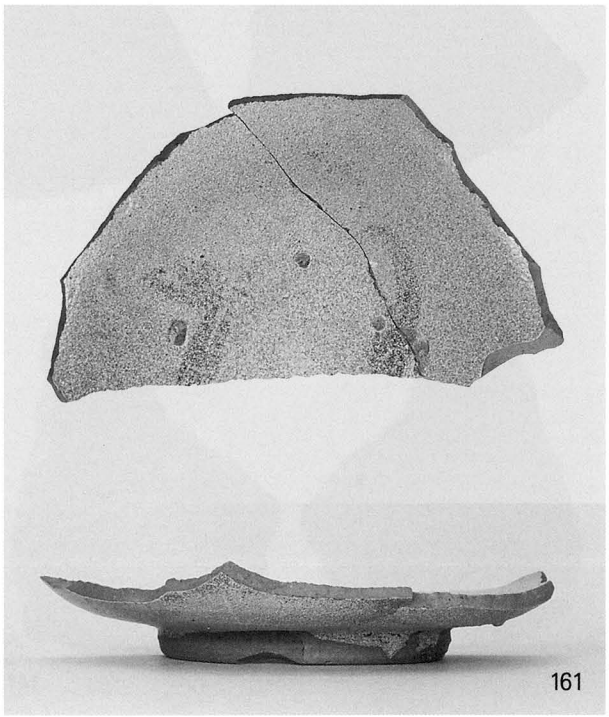
写真図版22　出土土器５



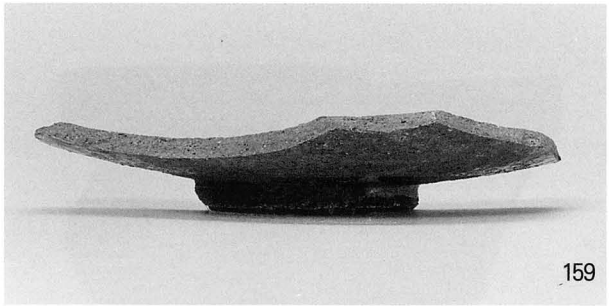
写真図版23　出土土器６

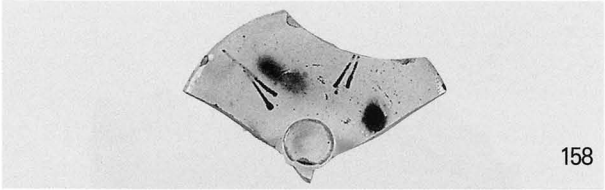


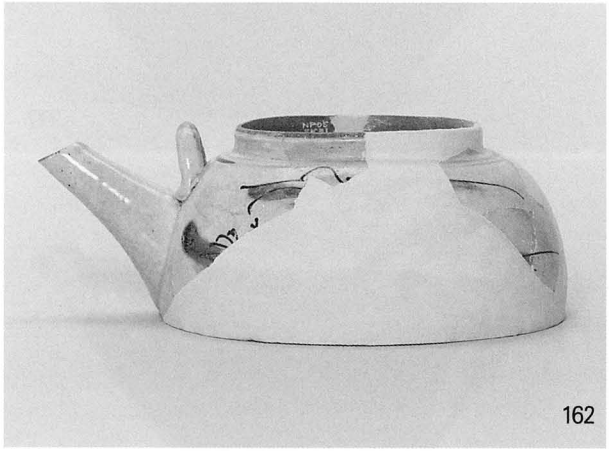




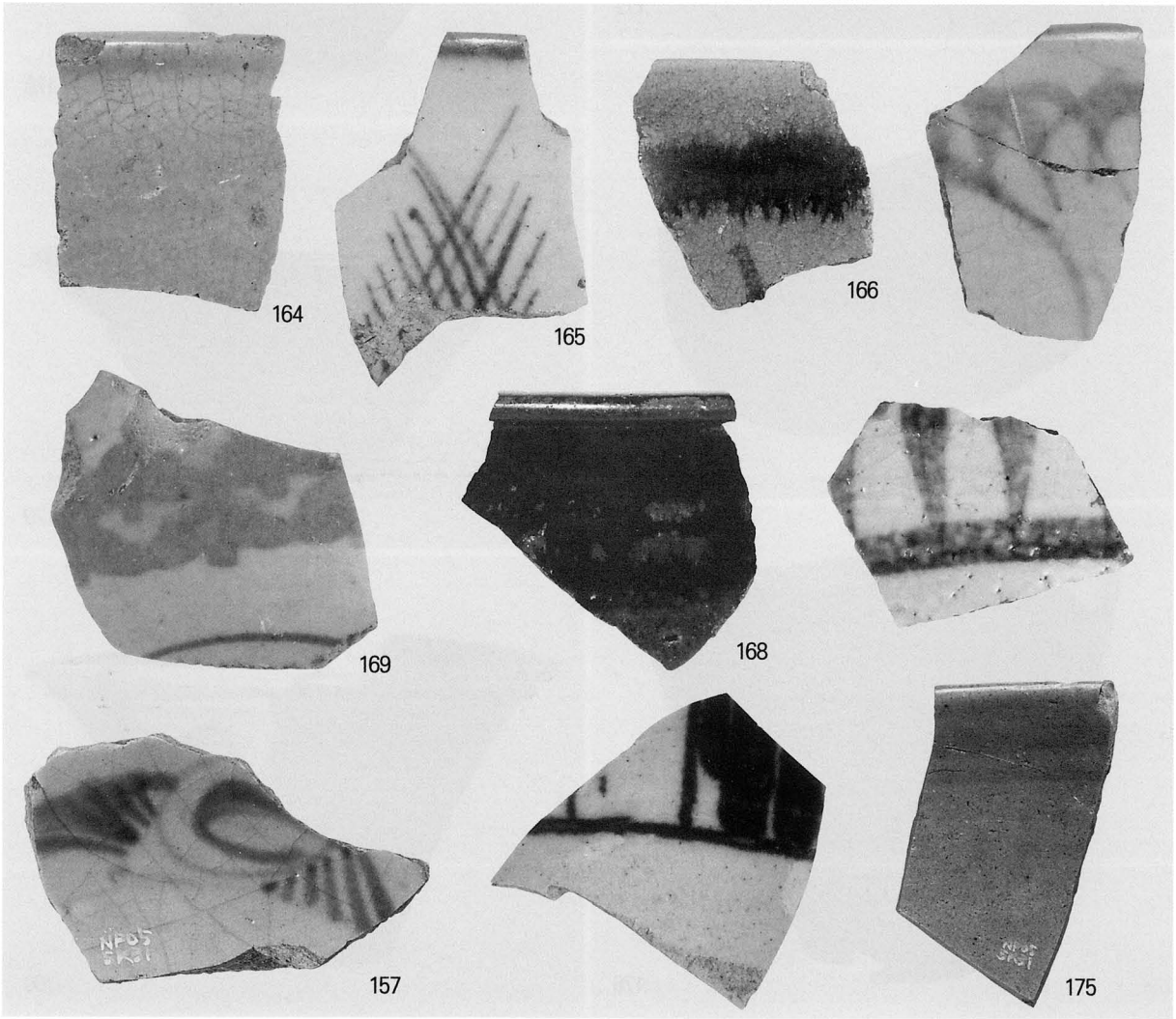
写真図版24　出土陶磁器１


159

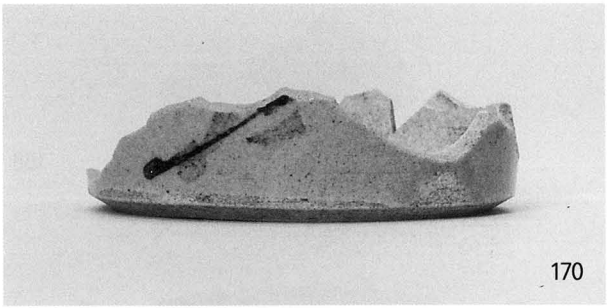

158

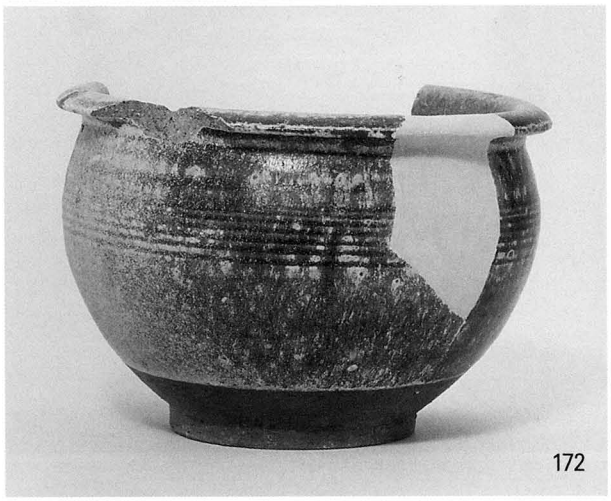

162

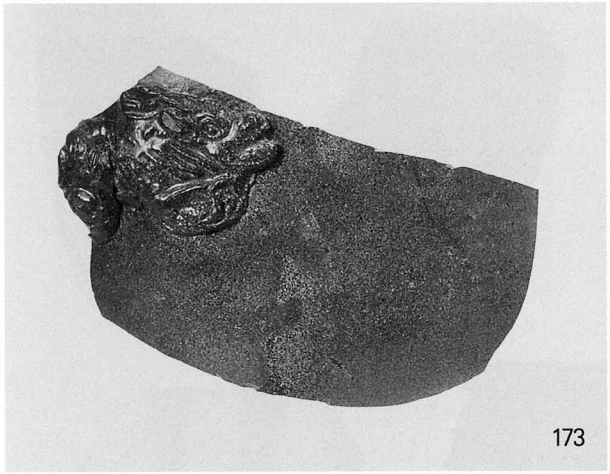
163



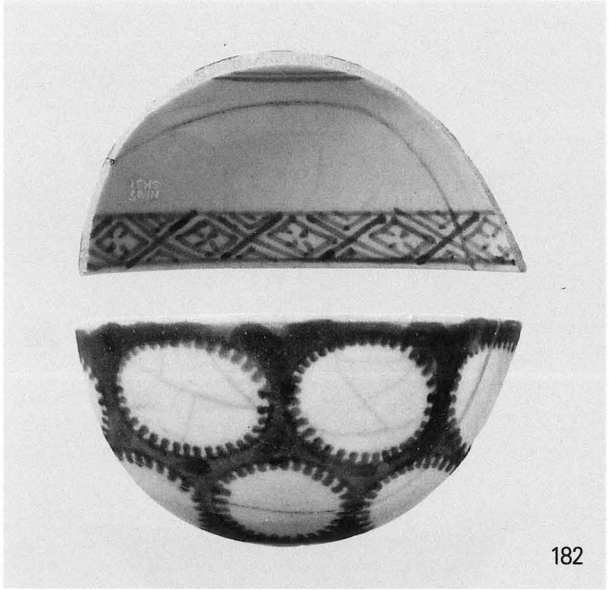
写真図版25　出土陶磁器２

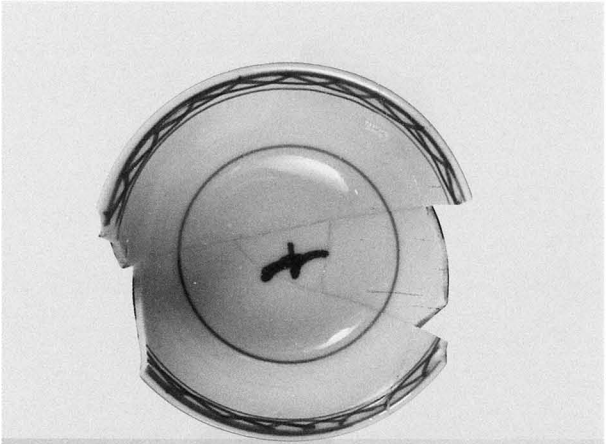


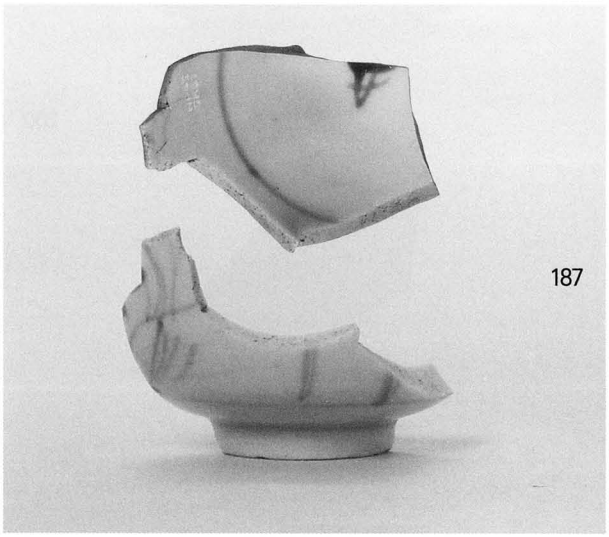


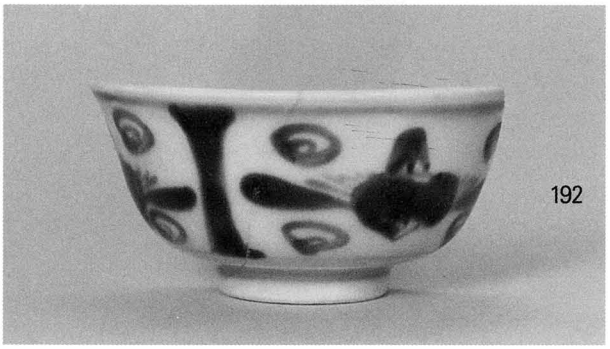


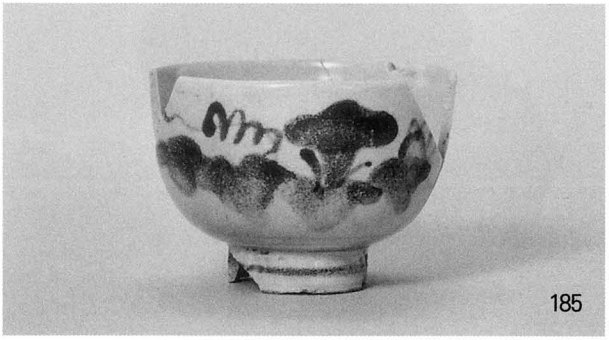
写真図版26　出土陶磁器３

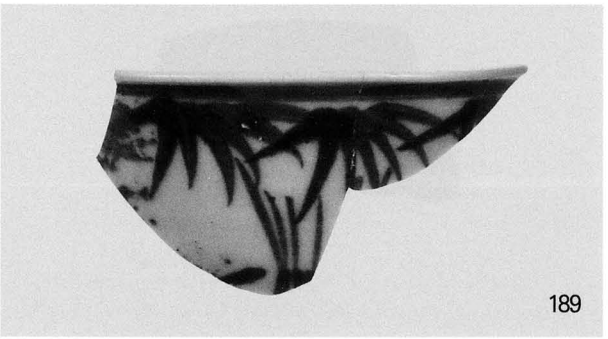




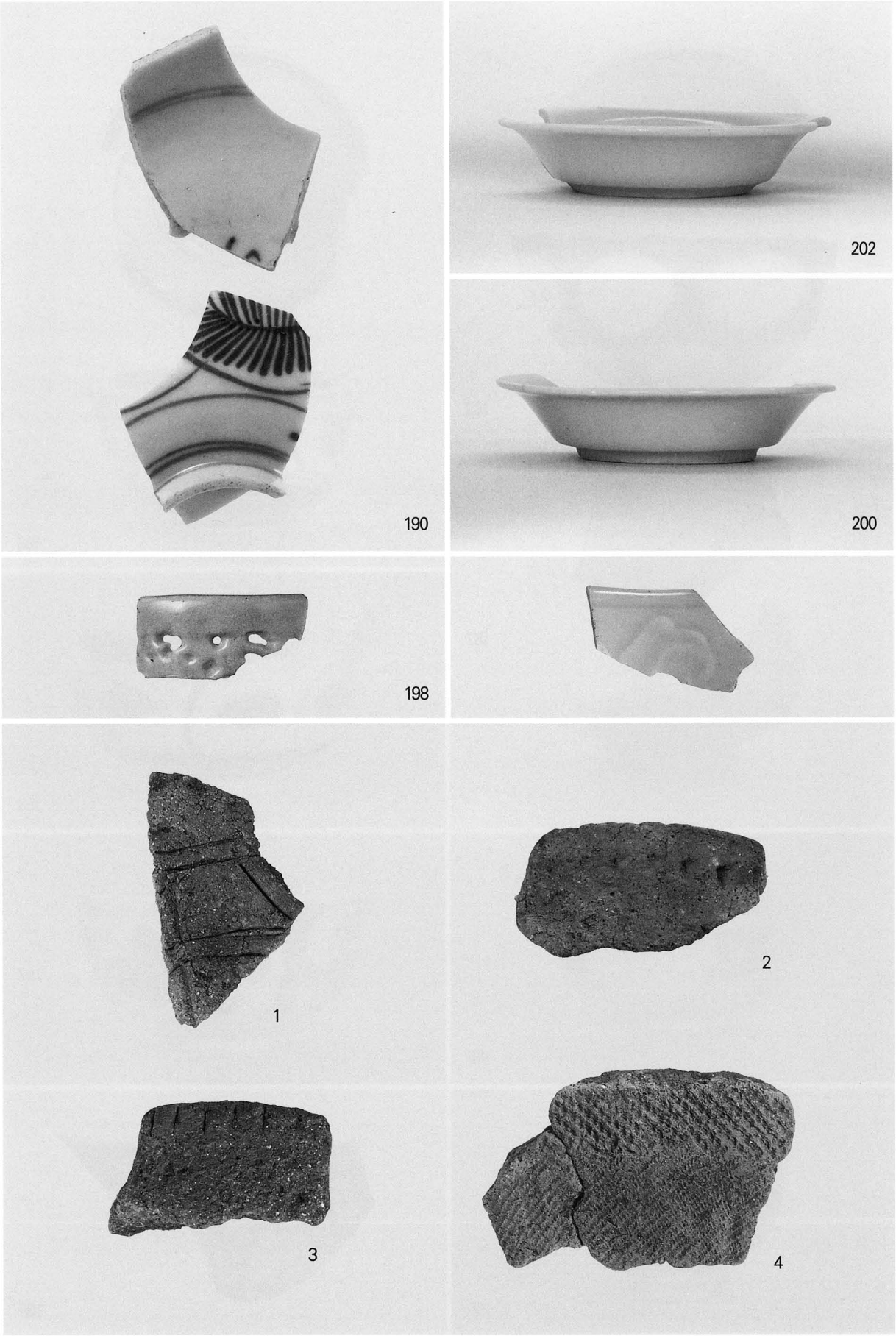




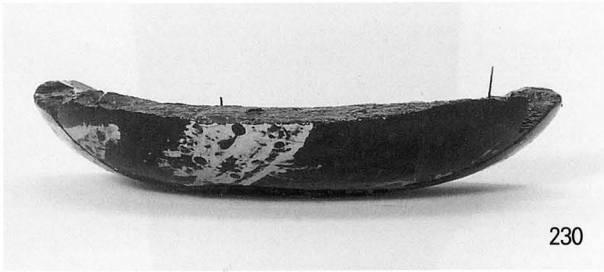


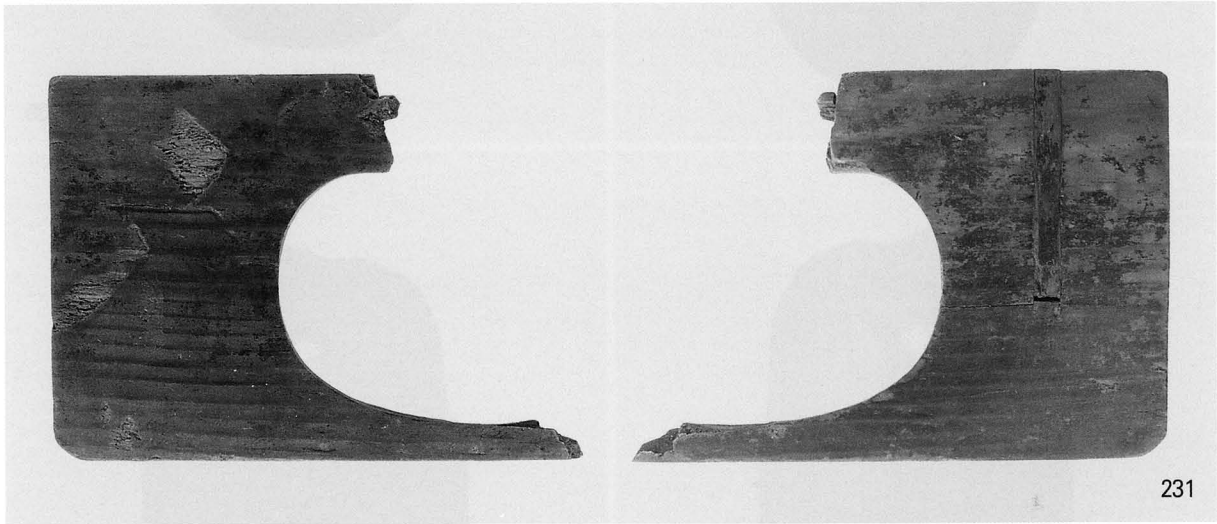


写真図版27　出土陶磁器４



写真図版28　出土陶磁器５・縄文土器



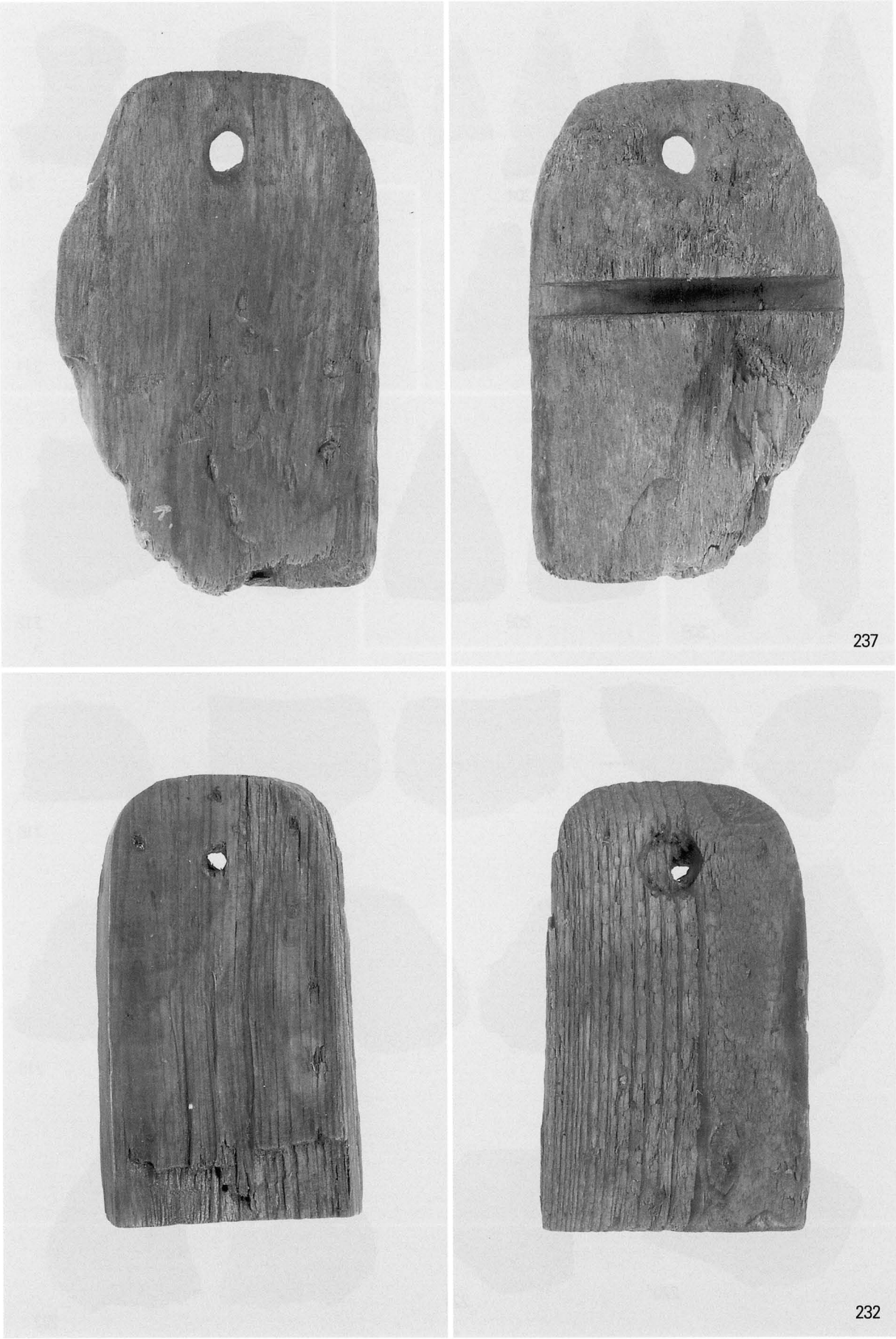


写真図版29　出土木製品１

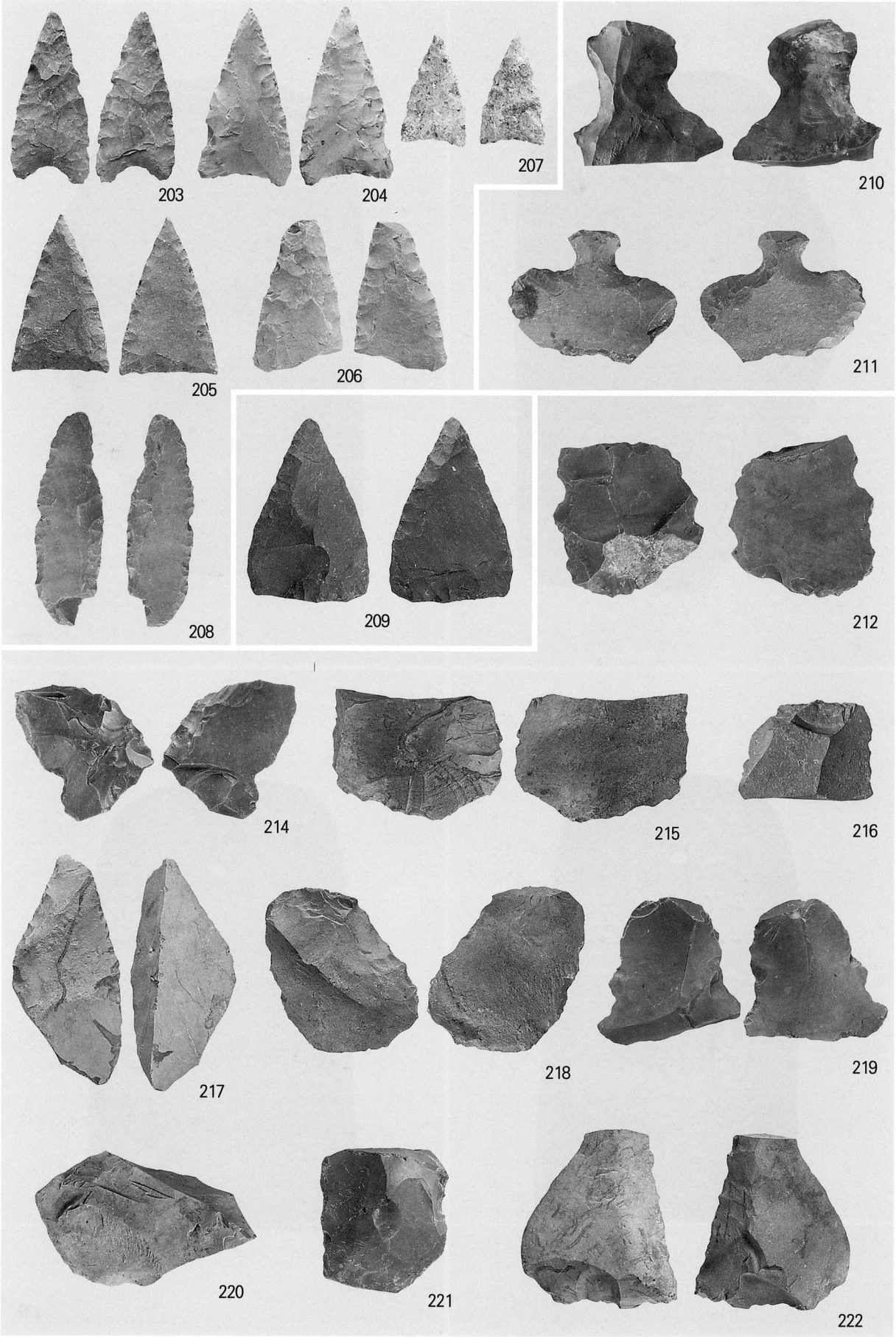
235

236

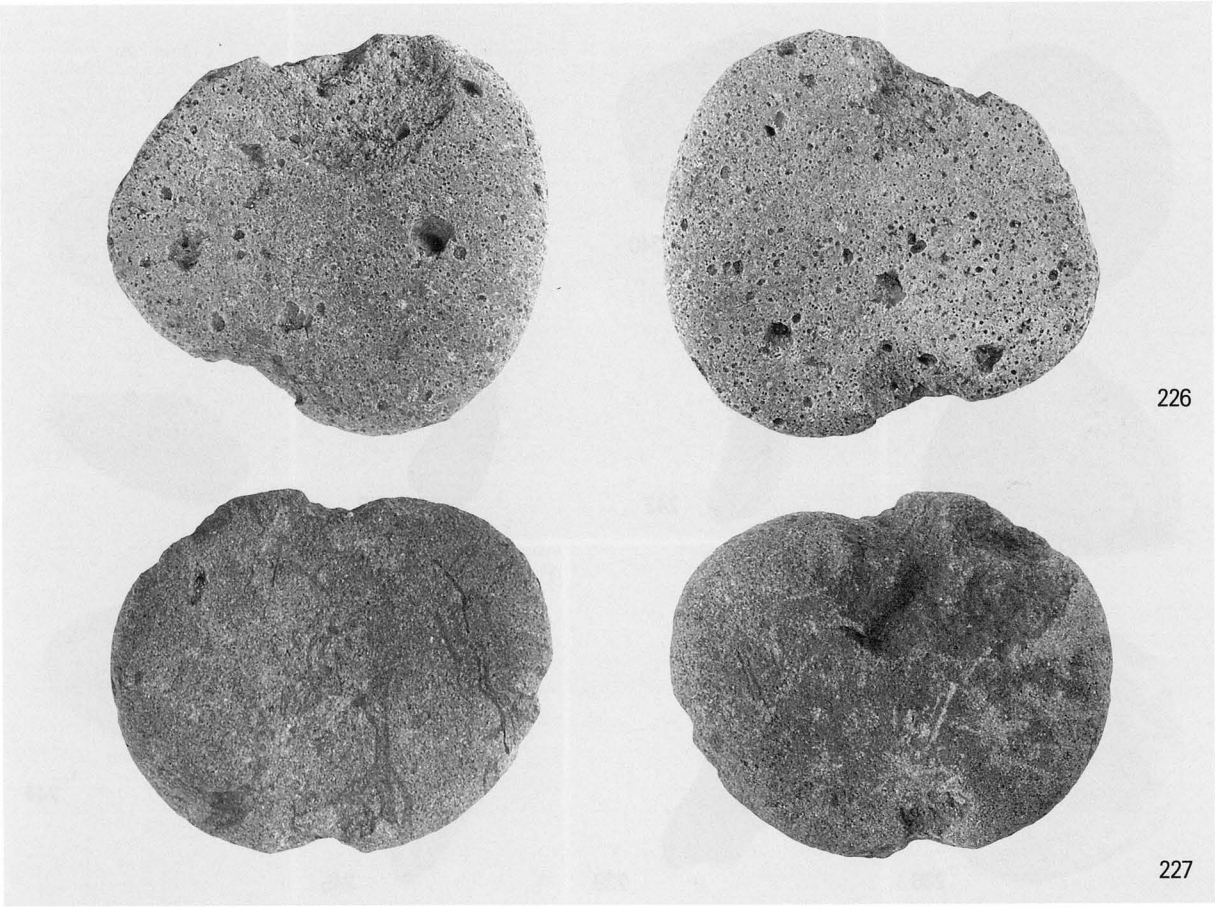
写真図版30　出土木製品２



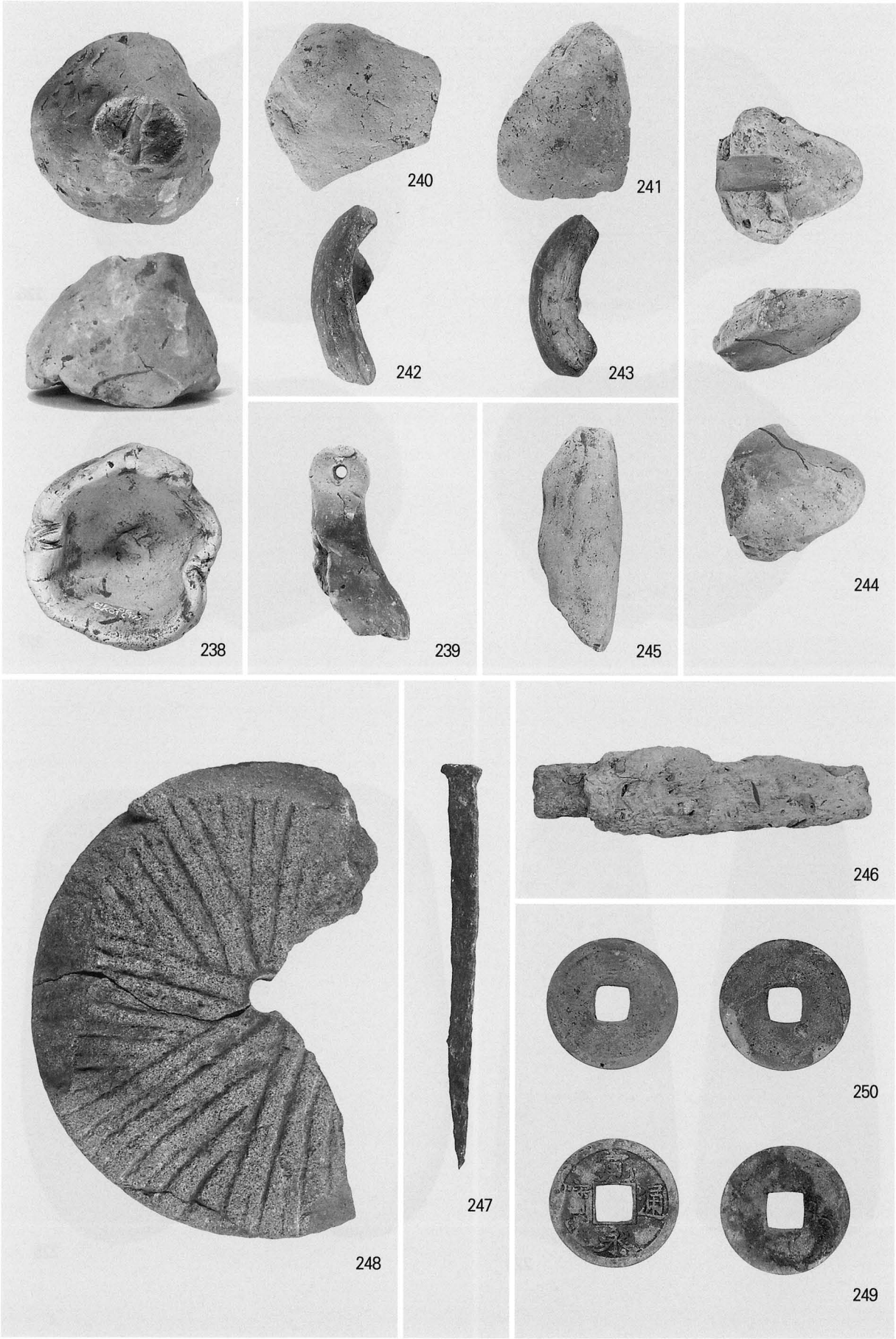
写真図版31　出土木製品３



写真図版32　出土石器１



写真図版33　出土石器２



写真図版34　出土 土・石・金属製品

1．遺跡遠景（南から）

2．遺跡直上

写真図版35　航空写真

1．遺跡状況（南から）

2．遺跡状況（北から）

3．基本層序

写真図版36　遺跡現況・基本層序

1．１号溝跡

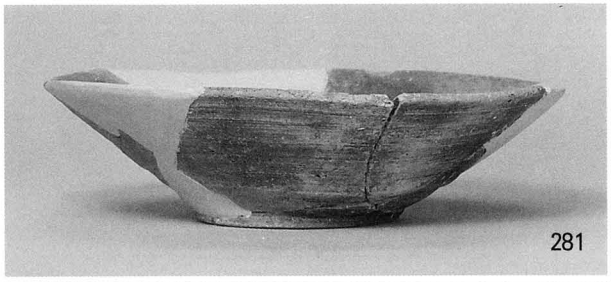
2．１号土坑

3．遺物出土状況

写真図版37　1号溝跡・１号土坑・遺物出土状況

写真図版38　出土土器１

279


281

282

284

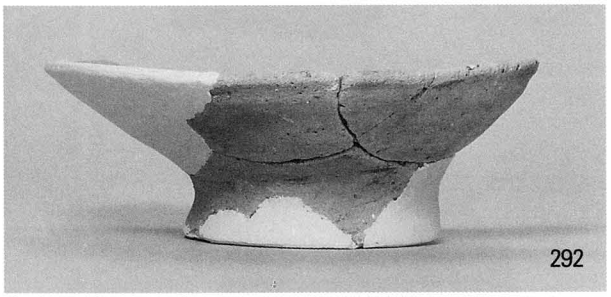
285

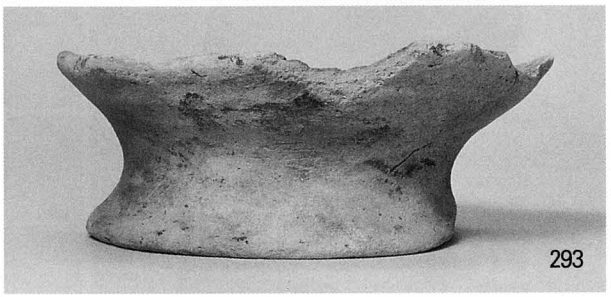
286

287

288

289


292


293

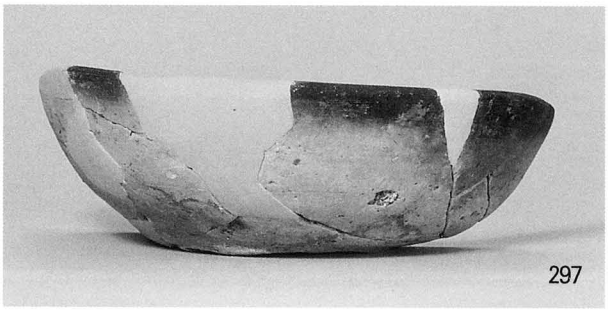
294

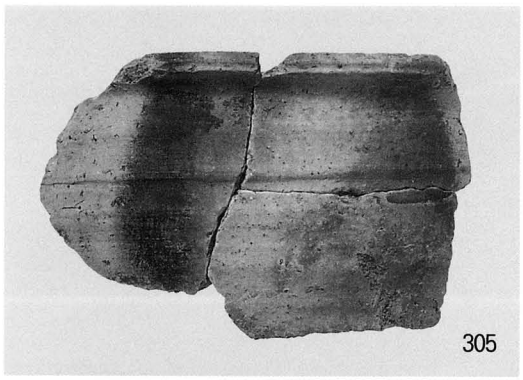
写真図版39　出土土器２

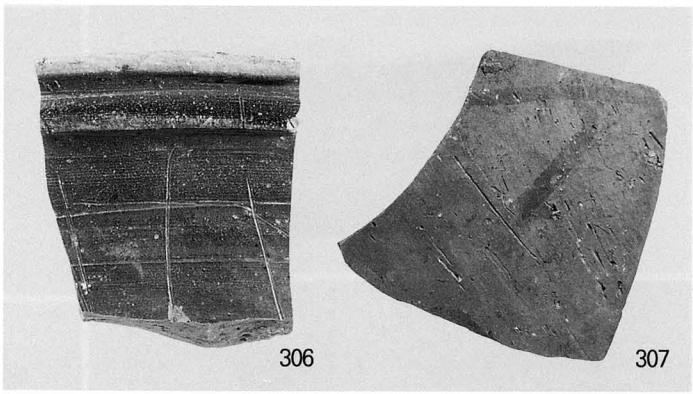
298

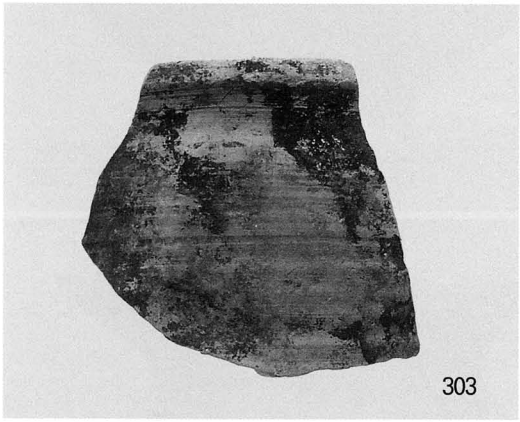
296

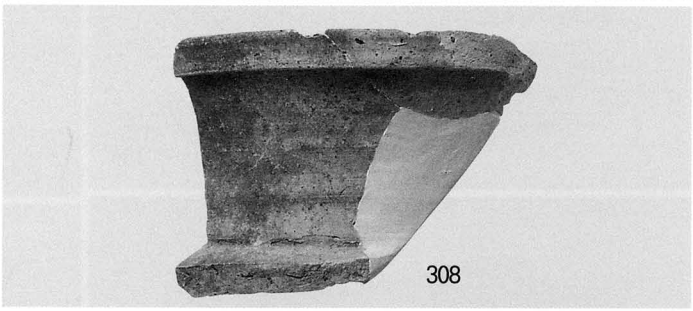
300

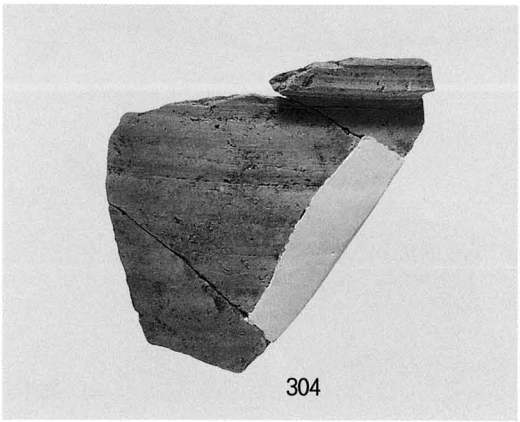

297

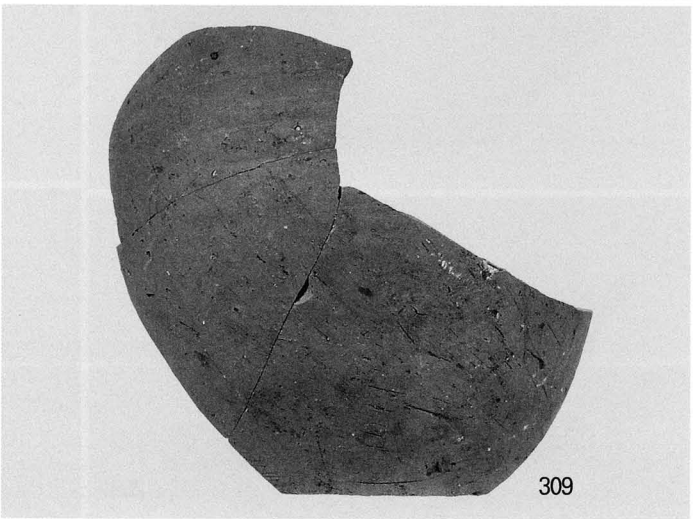

305


306 307

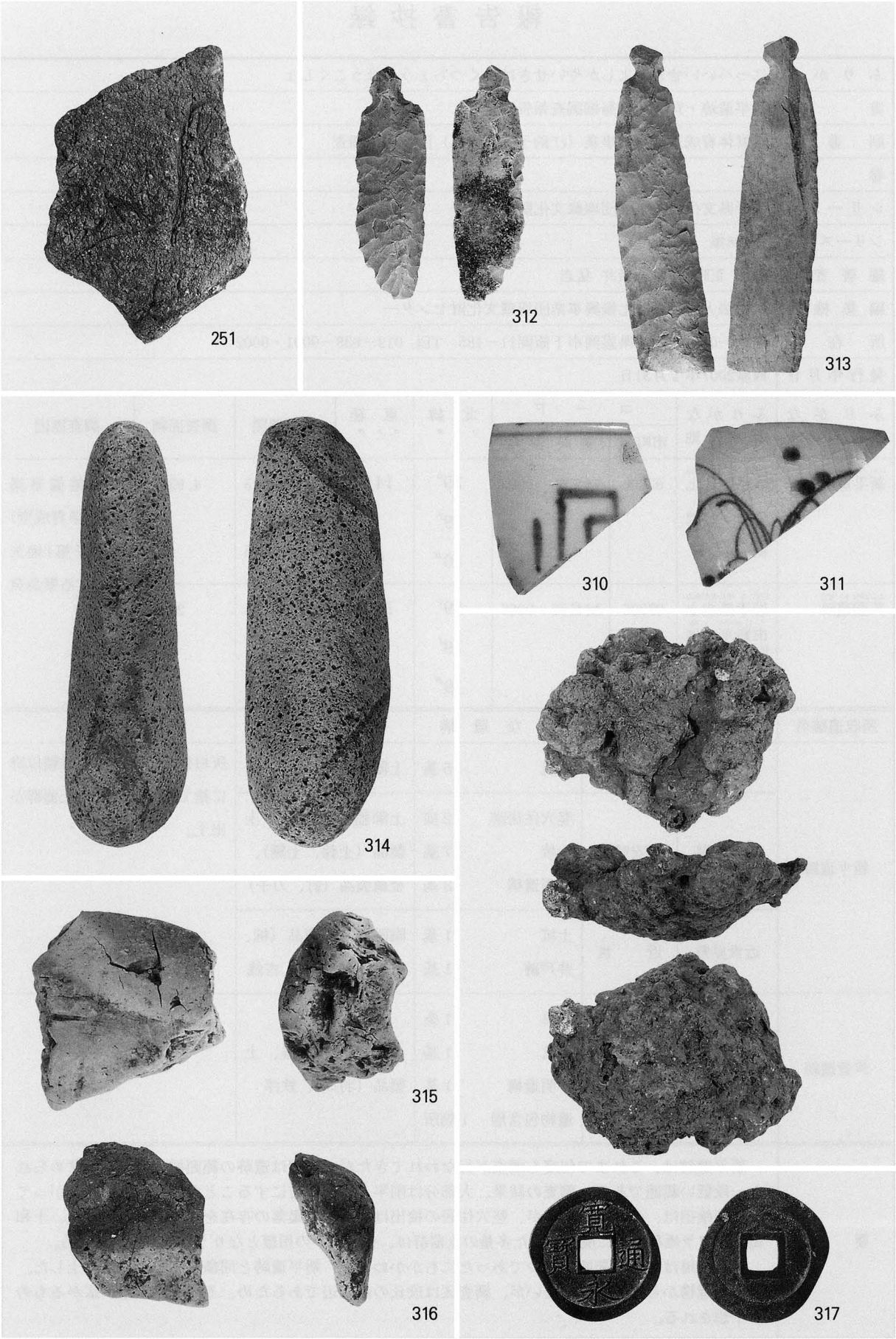

303


308


304


309

写真図版40　出土土器３



写真図版41　出土縄文土器、陶磁器、石器、土・金属製品、鉄滓

報告書抄録

ふりがな	にっぺいいせき・よしがやいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	新平遺跡・芦萱遺跡発掘調査報告書
副書名	経営体育成基盤整備事業（江釣子第１地区）関連発掘調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
シリーズ番号	第498集
編著者名	西澤 正晴（編）、横井 猛志
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11－185　TEL 019－638－9001・9002
発行年月日	西暦2007年１月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
にっぺいいせき 新平遺跡	いわてけんきたかみしにっぺいちわり 岩手県北上市新平２地割	03206	ME55－0062	39° 19′ 10″	141° 3′ 52″	2005.04.13 ～ 2005.07.15	4,934㎡	ほ場整備事業（担い手育成型）江釣子第1地区に関する緊急発掘調査
よしがやいせき 芦萱遺跡	いわてけんきたかみしにっぺいちわりふじさわちわり 岩手県北上市新平４地割・藤沢９地割	03206	ME55－0068	39° 19′ 19″	141° 4′ 15″	2005.07.01 ～ 2005.07.22	200㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
新平遺跡	散布地	縄文時代	土坑　５基	土器、石器	灰白色火山灰(To-a)堆積以降に捨てられた多量の土器群が出土。
	集落跡	平安時代	竪穴住居跡　２棟 土坑　７基 不明遺構　３基	土師器、須恵器、土製品（土鈴、土錘）、金属製品（釘、刀子）	
	近世屋敷	近世	土坑　１基 井戸跡　１基	陶磁器、木製品（椀、下駄、膳）、石臼、古銭	
芦萱遺跡	散布地	平安時代	溝跡　１条 土坑　１基 不明遺構　１基 遺物包含層　１箇所	土師器、須恵器、土製品（羽口）、鉄滓	

要約

新平遺跡は、これまで何度も調査が行なわれてきたが、今回は遺跡の範囲拡大により、含められた一段低い範囲である。調査の結果、大部分は削平と、旧河道にすることがわかった。したがって遺構の検出は、多くなかったが、竪穴住居の検出は、周囲に集落の存在を想定させる。また、十和田ａテフラ堆積以降に廃棄された多量の土器群は、今後編年の指標となりうるべき資料である。

芦萱遺跡は、調査範囲が狭少であったにもかかわらず、新平遺跡と同様多くの土器が出土した。明確な遺構からの出土ではないが、調査区は段丘の最縁辺であるため、その上に集落が広がるものと予想される。

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第498集

新平遺跡・芦萱遺跡発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業（江釣子第１地区）関連発掘調査

印刷　平成19年１月20日
発行　平成19年１月31日

発　行　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185
電話（019）638-9001
FAX（019）638-8563

印　刷　(有)小松茂印刷所
〒020-0025　岩手県盛岡市大沢川原二丁目5-37
電話（019）623-6073

© (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター2006